

第1章 土器とその移動

1. 大隅諸島系土器の編年と位置づけ－共伴関係を中心に－

石堂和博
南種子町教育委員会

ISHIDO Takahiro
Minamitane Town Board of Education

1. はじめに

大隅諸島系土器は、新里貴之によって弥生時代後期～古代併行期の大隅諸島において展開する独自の土器様式の総称として提唱された用語（新里2009）で、幅広突帯・沈線文・充実脚台によって特徴付けられる土器群である。

本稿では、広田遺跡、鳥ノ峯遺跡などの埋葬址における大隅諸島系土器と搬入土器・貝製品などとの共伴関係を中心に、大隅諸島系土器の編年と位置づけについて考察したい。

2. 研究史

大隅諸島系土器の研究は、薩摩式の範疇と捉えられていた輪之尾遺跡、屋久津貝塚出土の在地の甕形土器について、盛園尚孝が、口縁部の肥厚化、特徴的な突帯、窠書文などから大隅諸島に独自の土器型式と捉えたことにはじまる（盛園1955）。これらの資料に対し、盛園は、輪之尾式という型式名を与えている（盛園1961）。また、盛園は、鳥ノ峯遺跡で出土した甕形土器に対して鳥ノ峯式、広田遺跡から出土した甕形土器を広田式と型式設定し、広田式は鳥ノ峯式に後続するものと捉え、在地の甕形土器に型式変化がみられることを指摘した。それらの編年については、弥生時代中期の鳥ノ峯式、広田式、弥生時代後期の輪之尾式と並べたが（盛園1961）、後に鳥ノ峯式のうち、第1次調査出土資料を中期末、第2・3次調査出土資料を弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけなおし、広田遺跡出土の土器（広田式）は、鳥ノ峯式の範疇に含まれるものと捉えなおしている。また、上能野貝塚が輪之尾式と同型式の単純遺跡である点を評価し、以後、輪之尾式にかわり河口の設定した上能野式の呼称を使っている（盛園1987）。

上能野貝塚の発掘を行った河口貞徳は、出土した甕形土器を上能野式と型式設定し、弥生時代後期に位置づけた（河口1973）。

旭慶男は、鳥ノ峯式について、凸帯文を有するⅠ式と凸帯文を有しないⅡ式に細分し、Ⅰ式→Ⅱ式という型式変化を想定した（旭1975）。

中園聡は、屋久島栗生中出土の甕形土器の検討から、広田遺跡下層出土土器を中津野式より新しい段階のものと捉え、古墳時代並行期にあたるとした（中園1986）。また、大隅諸島系土器の編年を示し、甕型土器1型式（高付式並行、弥生後期中葉）、甕型土器2型式（庄内式並行、弥生時代終末期）、甕型土器3型式（布留式並行）、甕型土器4型式（古墳時代並行、6世紀以前）とした（中園1988）。

橋口達也は、鳥ノ峯式をⅠ期（弥生時代後期後半）、Ⅱ期（弥生時代終末期）、Ⅲ期（古墳時代初頭）に細分した（橋口1996）。また、鳥ノ峯遺跡出土土器との比較から広田遺跡出土の甕形土器の一部について古墳時代並行期とする見解を示している。

新里貴之は、大隅諸島における弥生時代中期から古代の在地の甕形土器について、まず、文様・口

縁部形態の属性分析を行うことでA～G類に分類し、型式学的な序列と埋葬遺構における共伴関係からみた先後関係からD類を除く各類型を型式とみなし、I～VII期に時期区分した。新里編年ではIV期（古）は高付式並行、IV期（新）は中津野式並行、V期は東原式以降、V期に後続する時期をVI期、そしてVII期を9世紀以前としている（新里1999）。のちに、新里は、概ねIV期（古）を鳥ノ峯式（古）、IV期（新）を鳥ノ峯式（新）、V期を本村丸田遺跡段階（東原式並行）と椎ノ木遺跡段階（辻堂原式並行）に細分し、VI期を上能野式（笹貫式並行）、VII期が嶽ノ中野B遺跡段階（笹貫式並行）としている（新里2009）。

以上を整理すると、盛園のいう鳥ノ峯式は、中園の甕型土器1～2型式、橋口のI～II期、新里のIV期（鳥ノ峯式古、鳥ノ峯式新）に対応する。また、盛園のいう広田式は、概ね、中園の甕型土器3型式、橋口のIII期、新里のV期（本村丸田遺跡）に対応し、輪之尾式（後に、上能野式）は、河口の上能野式、中園の甕型土器4型式、新里のVI期（上能野式）に概ね対応するとみられる。

大隅諸島系土器の器種は、大型・小型の甕形土器と小型の鉢形土器からなり、壺、高杯などは欠落する。よって、本稿では、鳥ノ峯式、広田式、上能野式の各型式について、埋葬遺構における共伴関係など一括性の高い資料を中心にして、甕形土器により型式設定し、必要に応じて、各型式を細分したい。

3. 鳥ノ峯式土器

鳥ノ峯式は、盛園によって鳥ノ峯遺跡第1次調査の埋葬遺構から出土した土器を標式に設定された。その特徴について、盛園は、甕形土器が殆どで同一器形に統一され、口縁が外方に開き頸部がしまり胴部のやや張ったもので底部は揚げ底、刷け目調整があるものがあり、文様は頸部に三本の平行な沈線のあるものが普通で、これを中心にして重弧文、はりつけの凸帯文のあるもの、としている（盛園

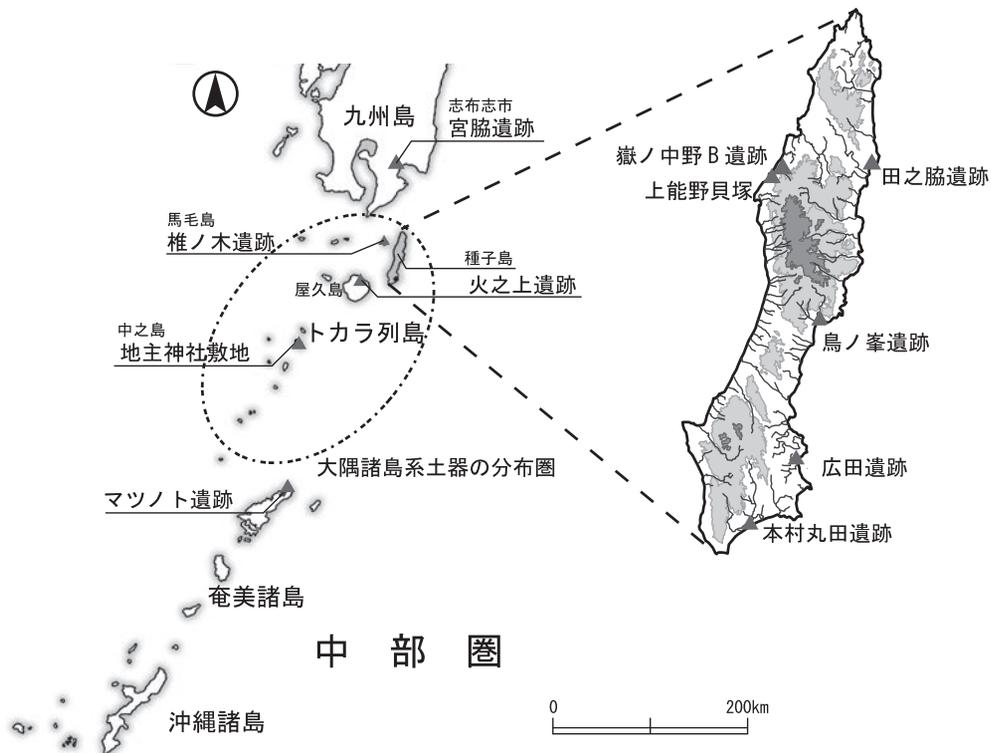


図1 本論で言及する遺跡の位置

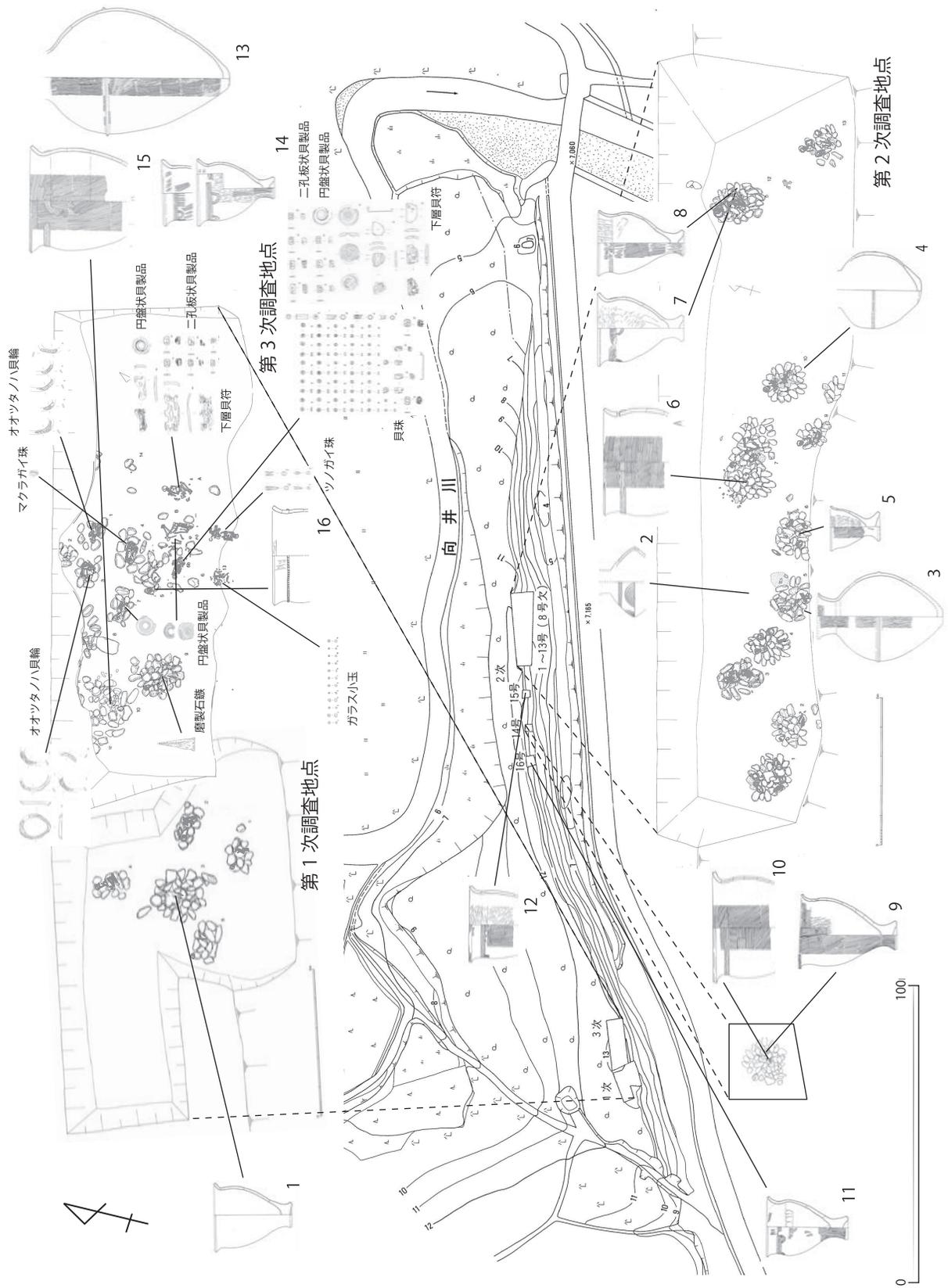


図2 鳥ノ峯遺跡第1～3次調査地点と埋葬遺構に伴う土器の出土状況

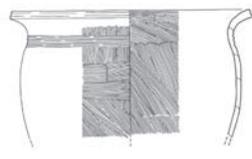
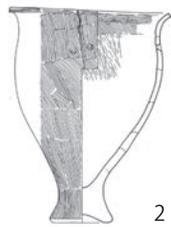
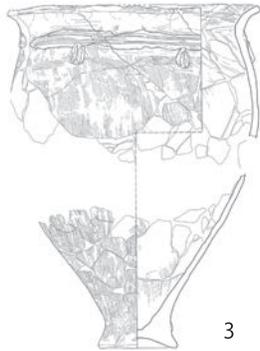
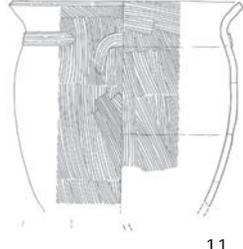
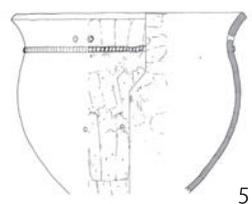
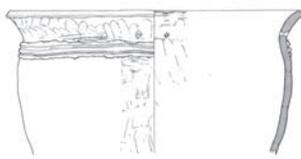
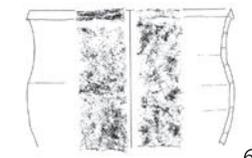
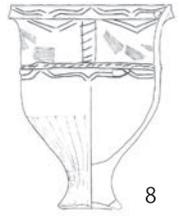
大隅諸島系土器編年表		各型式・段階の土器					
弥生時代後期後半	鳥ノ峯式(古)	 1	 2	鳥ノ峯式(古)	 10		
	弥生時代終末～古墳時代前期前半	鳥ノ峯式(新)	 3		 4	鳥ノ峯式(新)	 11
古墳時代前期後半～後期前半		広田式	 5		広田式		 13
	古墳時代後期後半～8世紀	上能野式(古)	 6	 7		上能野式(古)	
上能野式(中)			 8	上能野式(中)			 17
上能野式(新)		1・2 鳥ノ峯遺跡 3・4・5 広田遺跡 6・8・9 上能野貝塚 7 椎ノ木遺跡	 9		上能野式(新)		10・11・12 鳥ノ峯遺跡 13・14・15・16 広田遺跡 17 上能野貝塚 18 嶽ノ中野 B 遺跡

図3 大隅諸島系土器編年

1961)。橋口は、鳥ノ峯遺跡の土器をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に細分し、その時間幅を弥生時代後期後半～古墳時代初頭とした。新里は、鳥ノ峯遺跡出土土器のうち、中津野式土器と共伴する一群をⅣ期新段階（鳥ノ峯式新段階）と捉え、型式学的な序列からより古いと判断されるⅣ期古段階（鳥ノ峯式古段階）とに細分している（新里1999、2009）。

まず、鳥ノ峯遺跡、広田遺跡北側墓群における在地の甕形土器と埋葬遺構における搬入品、副葬品、貝製装身具との共伴関係並びに埋葬遺構の特徴、墓群の時期から、鳥ノ峯式の編年と位置づけについて検討する。

鳥ノ峯遺跡の墓群は、埋葬遺構に共伴する搬入土器の年代と埋葬遺構・副葬品・装身具の特徴から、より古い段階の鳥ノ峯遺跡第2次調査地点と、より新しい段階の第3次調査地点に大きく分けられる（図2）。第2次調査地点からは、15基の覆石墓と15体の人骨が確認されている。この墓群における搬入土器は、壺が2点知られる。埋葬遺構に伴う供献土器としては、第2次調査10号墓から出土した松木蘭式とみられる壺（図2-4）がある。また、墓域内から河森編年Ⅱ期（松木蘭式並行）、球磨川流域編年の3期（河森1998）の免田式重弧文長頸壺（図2-2）が出土しており、弥生時代後期後半に位置づけられる。但し、搬入土器と在地の土器が埋葬遺構単位で共伴した事例はなく、同時期とみられる墓群に伴うという広い意味での共伴関係となる。この墓群は、平面プラン、積石の配列などの規格性が高い覆石墓、在地の甕型土器・搬入品の壺のどちらかのみ供献、貝製品を伴わないなどの特徴があり、第2次調査地点とは時期差が想定され、搬入土器の年代から弥生時代後期後半を中心とする時期の墓群であることが分かる。こうした古手の特徴を持つ第2次調査14号墓に供献されていた大型の甕形土器（図3-1）と小型の甕形土器（図3-2）及び第2次調査12号墓に供献された小型の甕形土器（図2-7・8）、図2-5の小型の鉢形土器などが、この墓群から出土した免田式重弧文長頸壺、松木蘭式壺と同時期の在地の土器と考えられる。

なお、盛園は、第1次調査3号墓から出土した小型の甕形土器（図4-1）を弥生時代中期末、橋口は鳥ノ峯のもっとも古い段階（橋口編年Ⅰ期）のものとして捉え、図3-1・2、図2-7・8などよりも古く位置づけている。だが、第1次調査地点からは、時期を推定することのできる搬入土器、貝製品等は出土しておらず、墓制等からも第2次調査地点との時期差を明確に示すことはできない。また、本資料は、口縁部と胴部が接合しないなど型式学的な検討も難しく、一段階古くみる根拠に欠ける。

よって、現状で、大隅諸島系土器の中で、共伴関係などから年代を知りうる、もっとも古い一群は、第2次調査地点に伴うこれらの資料であるといえよう。

鳥ノ峯遺跡第3次調査地点の覆石墓は、第2次調査のそれと較べ明らかに平面プラン、積石の配列、選択される石材などの規格性が失われている。供献される搬入土器は中津野式の壺であり、一部の人骨が貝製品を着装するなど、第2次調査地点より新しい時期の墓群といえる。

墓群の東端に位置する3次調査10号墓では、搬入品である中津野式の壺に在地の甕形土器（図2-14・15、図3-11、12）が共伴している。広田遺跡北側墓群北区2号墓でも供献された中津野式新段階の壺に大型・小型の甕形土器（図3-3・4）が共伴する。

この2例では、大型・小型の在地の甕形土器が供献され、搬入品の壺形土器が供献される。広田遺跡北区2号墓の甕形土器（図3-3・4）は、みかけ多条突帯下端に接して長方形の貼付文を施し、その貼付文に数条の沈線（刻み目）を伴うものである。これらの特徴をもつ甕形土器は、田之脇遺跡出土資料や鳥ノ峯遺跡表採品にも類例を見出すことができる。また、前後の段階には認められず、この段階に隆盛するものである可能性が高い。また、鳥ノ峯第3次調査10号墓の大型の甕形土器（図3-11）は、みかけ多条突帯が始点と終点で連結せず、すれ違うなど成川式の影響も看取される。

北区2号墓の埋土から出土した炭化物の年代は、布留1式並行の年代を示す(藤尾2007)。中津野式は、中村編年によれば庄内式に並行する(中村1987)。また、中津野式新段階は、河森編年の鹿児島4期に対応し、河森編年Ⅳ期(本目Ⅳ段階)、布留0~1式並行とされ(河森1999)、北区2号墓は、弥生時代終末期~古墳時代前期前半の時間幅の中で理解が可能である(石堂2012)。

このように、鳥ノ峯遺跡から出土する土器は、後述する広田式と並行する時期の土器群を含めると、共伴関係などから3段階に分けることができる。広田式と並行する土器群を除いた2つの段階について、免田式重弧文長頸壺から時期を伺える第2次調査地点の甕形土器に代表される土器群を鳥ノ峯式古段階、中津野式の壺と共伴する、鳥ノ峯遺跡第3次調査10号墓及び広田遺跡北側墓群北区2号墓に代表される在地の甕形土器(図3-3・4・11・12)の型式を鳥ノ峯式新段階と呼称したい⁽¹⁾。

4. 広田式土器

広田式は、盛園により広田遺跡南側墓群出土の甕形土器を鳥ノ峯式に後続するものとして、設定された型式である(盛園1961)。盛園は、後に、鳥ノ峯式のうち第1次調査出土土器(図2-1)を中期末、第2・3次調査出土土器を弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけなおす過程で、広田遺跡出土の土器(広田式)は、鳥ノ峯式の第2・第3次調査資料の範疇に含まれるもの(橋口編年鳥ノ峯Ⅱ・Ⅲ式)と捉えなおして、以後用いていない。(盛園1987、2003)。しかし、広田式段階の土器は、鳥ノ峯遺跡よりもむしろ広田遺跡に良好な一括資料が存在し、標式となりうる。そこで、まず、盛園が広田式と設定した広田遺跡南側墓群出土土器のうち、出土状況から帰属する時期を求めうる資料について、その編年的な位置づけを考察したい。

広田遺跡南側墓群の時期は、層位により大きく上層期・下層期に分けられる。下層期はさらに、下層タイプi貝符で示される下層期・古段階、下層タイプii貝符で示される下層期・新段階に細分され、下層期・古段階は、弥生時代後期後半~古墳時代前期の時間幅をもつとされる(木下2003)。2004年~2005年に実施した広田遺跡の発掘調査において、筆者らは、下層期・古段階の切り合い関係をもつ埋葬遺構の層位的な発掘成果から、下層期・古段階を古相と新相に細分した。その時期については、広田遺跡下層期・古段階古相を弥生時代終末期~古墳時代前期、下層期・古段階新相を古墳時代前期~中期とした(石堂2012)。

広田遺跡南側墓群では、埋葬遺構が重層的に形成されているため、より新しい時期の造墓行為によって、本来埋葬遺構に供献されていたとみられる土器が、広い範囲に散乱するような出土状況となっている、と認識されている(中村2003など)ため、埋葬遺構における他の遺物との共伴を根拠に時期を決めることが難しいとされてきた。

図3-5は、大型の甕形土器で、その出土状況は、AⅣ地区、AⅤ地区、DⅠ地区の石積、DⅠ地区5号人骨周辺にかけて破片が散在するものであった。このうち、DⅠ地区5号人骨からは、積み石の間や直下から土器が計38点出土したことが報告されている。DⅠ地区5号人骨は、規格性の失われた覆石墓を伴う埋葬遺構で、図3-5は覆石墓を構成する積み石の間や直下から出土した可能性が高く、破碎された後に供献された土器であった可能性がある。盛園は、広田遺跡の埋葬に伴う土器の出土状況について、「すでに割って捨て、わずかな小片を散布した」ものとする見方を示している(盛園1987)。

こうした破碎土器供献について、埋葬遺構の重複がなく、埋葬段階の様相がより明らかな鳥ノ峯遺跡からみてみよう。図3-5は、特徴的な1条刻み目突帯が巡るもので、類似する資料として、鳥ノ峯遺跡第3次調査5号墓に供献された甕形土器(図2-16)が知られる。図2-16は、報告者により、

「破碎されて供献されたような状態で出土しており、石組の周辺に小片として散在する（橋口1996）」といった出土状況であったことが指摘されている。この土器を観察すると、接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが認められる。第3次調査5号墓では、覆石墓上での燻火の痕跡が確認されていることから、破碎供献後に、一部の破片のみが燻火によって受熱したと考えられ、この段階に破碎土器供献の習慣があったことを示唆する。また、第2次調査7号墓に供献された在地の甕形土器（図2-6）にも、同じように接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが明瞭に認められ、破碎土器供献の可能性が高い⁽²⁾。広田遺跡出土土器のほとんどが破片資料で、広く散在するかのような出土状況であったことは、重層的に埋葬遺構が形成されたことにも一因はあろうが、鳥ノ峯遺跡にみられるように広田遺跡下層期・古段階の時期に、埋葬習俗として破碎土器供献の習俗が存在したことを示唆する⁽³⁾。

図3-5、図2-16に特徴的な1条刻み目突帯は、大隅諸島系土器の系譜にはなく、中村は、南九州の後期以降の壺・甕に認められる1条刻み目突帯の属性を取り込んだものとみている（中村2003）。松崎は、成川式において、甕形土器に刻み目突帯が出現する時期は、東原式段階と指摘し、辻堂原式段階では、過半数の甕に施される（松崎2014）ことを指摘している。大隅諸島で1条刻み目突帯が施される在地の甕形土器は東原式の影響のもとに成立した可能性が高く、その出現する時期は、南九州・東原式に並行する時期とみられる。なお、1条刻み目突帯を有する甕形土器は、本村丸田遺跡などからも出土していて、新里による本村丸田遺跡段階は、これらの土器を指すとみられ、鳥ノ峯遺跡新段階に後続する型式として位置づけられている（新里2009）。

図3-5が供献されたDI地区5号人骨の上部構造は、覆石墓である。覆石墓は、広田遺跡南側墓群の墓制としては古い段階のもので、下層期・古段階古相に特徴的なものである。DI地区5号人骨は、地山を掘り込み、墓坑を形成しているが埋土は新鮮砂層であり、下層期・古段階古相の中でも時期的に新相に近いものとみられる。

図3-15は、広田遺跡南側墓群のAV地区、AVII地区、A地区11号人骨上、DI地区の石囲中、DIV地区6号人骨、DIV地区にかけて破片が散在していた土器である。図3-5、図2-6と同じく胴部下半がなく破碎土器供献の可能性がある。A地区11号人骨及びDIV地区6号は、共に規格性の失われた覆石墓であり、報告文によると、A地区11号人骨からは石組構造の中から土器片5点が出土している。DVI地区6号人骨からは土器片1点が伴出しているが出土状況の記載はない。A地区11号人骨、DVI地区6号人骨は、いずれも規格性の失われた覆石墓をもち、覆石墓や装着されていた貝製品から、下層期・古段階古相にあたるものの、DI地区5号人骨に伴う土器片は38点を数え、出土状況からも同遺構に伴う可能性が高いことに対し、A地区11号人骨に伴うものは土器片5点であり、本遺構に伴うものかどうか注意を要する。

図3-13は、DII地区、DIII地区、DIII地区2号人骨の直上で出土したものである。DIII地区2号人骨の上部構造は配石墓で、下層タイプiの貝符とガラス小玉などを装着する。装着していたガラス小玉はBDII型に分類され（大賀2003）古墳時代中期前半を中心とする時期に比定され、下層期・古段階新相にあたる。DIII地区2号人骨における土器の出土状況については記載がなく、図3-13が埋葬遺構に伴うものであるかは注意を要するものの、DII地区、DIII地区、DIII地区2号人骨と散在する出土状況は、破碎土器供献の結果とみられ、図3-13はDIII地区2号人骨に伴うものである可能性が高い。

このように広田遺跡南側墓群の土器のうち、覆石墓・配石墓に供献されていたとみられる一群は、広田遺跡下層期古段階古相の中でも新しい段階から新相にかけての時期となる。表面採集品を含めて、

広田遺跡南側墓群では中津野式新段階（布留0～1式並行）の壺の供献習俗が認められないこと、DⅠ地区5号人骨は、地山を掘り込み墓坑とするものの、埋土は新鮮砂層であり、下層期・古段階古相の中でも新しい段階と考えられること、下層期古段階新相のDⅢ地区2号人骨に伴うガラス小玉の時期が、古墳時代中期前半とされることから、これらは、古墳時代前期後半から中期前半の時間幅で理解可能であろう。

なお、広田遺跡南側墓群では、下層期・新段階や上層期における土器供献の習俗は確認されていないため、下層期・新段階に相当する時期の大隅諸島系土器の様相について、共伴関係により推し量ることが現状では難しい。図3-16は、広田遺跡南側墓群では数少ない⁽⁴⁾小型の甕形土器であり、中園編年の3型式、新里編年のⅤ期にあたる。広田遺跡南側墓群A-Ⅰ地区から出土しているが、出土状況の記載はなく、出土層位も不明である。口縁部の形態は、広田式に近いものの、縦位2条の細沈線文の間に横位の沈線文が連続し施されるその文様は、上層貝符との関連性が認められる。類例がほとんどなく、明確な位置づけは困難であるが、これらの属性から、上能野式と広田式の間（山野編年7類並行）に位置づけられる可能性が高い。

このように、広田式は、広田遺跡・下層期段階にほぼ並行し、下層貝符との共時性が認められる。

5. 上能野式土器

上能野式は、河口によって、上能野貝塚出土の甕形土器を標式に設定された型式で、次の特徴をもつものとされる。中形の釣鐘形の甕形土器、上げ底の充実した脚台、口縁部は肥厚して断面三角形で、文様は篋書きによって、二並行線、山形文とその変形文などが認められ、幅の狭い凸帯を有し、刷毛目調整が施される（河口1973）。なお、盛園による輪之尾式は、口縁部の肥厚化、特徴的な突帯、篋書文などから設定したもので、河口の上能野式の範疇で理解可能である。

上能野貝塚は、河口による概報のみで、正式な報告がされていなかったが、2019年に西之表市教育委員会により正式報告がなされた。従来、上能野貝塚出土の土器は、河口により、「単一型式に限られる」とされてきたが、上能野貝塚出土土器の口縁部の形態は、上能野式・古段階、上能野式・中段階、上能野式新段階の3段階に細分が可能である（石堂2015、図4）。上能野式・古段階は、口唇部の内外面を被うように粘土帯を貼り付けることで、意識的に口唇部を肥厚化させ、内面には、貼り付けた粘土帯を調整等で隠そうともせず、その貼り付け痕が明瞭に認められる。上能野式・中段階では、口縁部外面に粘土帯を貼り付けることで肥厚化させ、断面は三角形を呈する。上能野式・新段階では、口縁部端部に明瞭な平坦面をつくりだし、断面が台形状を呈する。その平坦面に列点文を施すものなどもあり、口縁部はまっすぐ立ち上がる点も特徴的である。

なお、大隅諸島系土器の中に、こうした三段階の口縁部形態の変遷が認められることは、新里により指摘がなされている（新里1999、2009）。新里の椎ノ木遺跡段階が上能野式古段階、上能野式が上能野式中段階、嶽ノ中野B遺跡段階が、上能野式新段階にあたる。また、川口は、大隅諸島系土器について口縁部の形態からⅠ～Ⅴ類に分け、上能野式をⅢ～Ⅴ類に対応させた。その上で上能野式の影響が認められる大隅半島の笹貫式、奄美大島の兼久式の年代観から、川口分類Ⅳ類（上能野式中段階）を6世紀末～7世紀中頃、川口分類Ⅴ類（上能野式新段階）を7世紀中頃から9世紀前

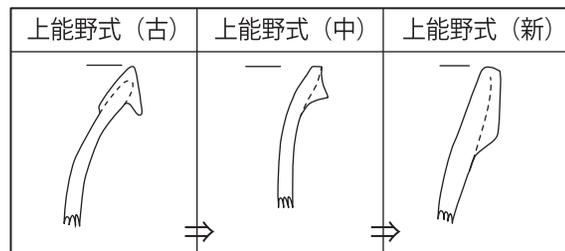


図4 上能野式の型式変化

半とした（川口2019）。

盛園は、土器の型式を根拠に、鳥ノ峯式→広田式→輪之尾式（上能野式）の変遷を想定し（盛園1961）、河口もまた、上能野式を鳥ノ峯式に後続する時期としている（河口1973）。上能野貝塚は、上能野式の単純遺跡で上層タイプの貝符（以下、上層貝符）、広田遺跡・上層期に特有のゴホウラ貝釧である突起型ゴホウラ貝釧と包含層内で共伴していることから、上層貝符との共時性が認められる。

上能野貝塚では、型式学的に認められる古・中・新の各段階の時期について、層位的な、または共伴関係によって推し量ることは難しい。そこで、馬毛島椎ノ木遺跡出土の上能野式について検討したい。

先述したとおり、大隅諸島において葬送に伴う土器供献の習慣が確認されているのは、広田遺跡下層期・古段階までであり、下層期・新段階以降で明確なものは知られていない。椎ノ木遺跡出土の土器（図3-7）は、口縁部の形態から、上能野式古段階にあたる。椎ノ木遺跡の埋葬遺構は、貝塚とみられる包含層の下部で検出されており、埋葬遺構に伴う可能性があるとして報告された土器は破片2点だけで、大部分は、埋葬遺構以後に形成された貝塚層に伴い出土している。つまり、椎ノ木遺跡出土の土器は、層位的に埋葬人骨より新しいとみてよい。椎ノ木遺跡の埋葬人骨が装着していた貝製品は、その組成から広田遺跡下層期古段階新相～下層期新段階に位置づけることが可能である。よって、上能野式・古段階は、広田遺跡下層期段階（≒広田式）より層位的に新しいと考えられる⁵⁾。種子島の弥生時代中期～古墳時代併行期の在地の甕形土器は、南九州の同時期の甕形土器の形態変化と同様に、口縁部が徐々にたちあがる方向へ型式変化をすることが指摘されている（中園1988、新里1999など）。また、広田式にあたる図3-15・16からは、口唇部を拡張させる変化がみられ、上能野式・古段階、中段階、新段階へと口縁部の肥厚化へ向かう型式変化が看取されることと矛盾せず、上能野式は、古→中→新と型式変化するとみられる。

6. 大隅諸島系土器の編年

本稿では、主に埋葬遺構に伴う共伴関係及び一定の一括性の認められる資料から、大隅諸島系土器の編年について検討を行った。表1はこれらをまとめたものである。

大隅諸島系土器のもっとも古い段階は、鳥ノ峯式古段階とした、弥生時代後期後半の免田式重弧文長頸壺、松木菌式壺に伴う墓群に供献された土器群を標式とする。この段階では、頸部から口縁部の屈曲が強く、口縁部最大径が、胴部最大径を上回り、胴部の屈曲がゆるやかで、全体に縦に長くスマートな印象を与える。

鳥ノ峯式新段階は、弥生時代終末～古墳時代前期前半の中津野式の壺と共伴する一群を標式とする型式である。みかけ多条突帯下端に接して長方形の貼付文を施し、その貼付文に数条の沈線（刻み目）を伴うものは、この段階に属し、胴部の張り出しが強くなり、胴部最大径より、口縁部最大径が大きくなるものもある。

広田式は、広田遺跡南側墓群出土の甕形土器を標式とするが、狭義の広田式は、下層期・古段階古相の新しい段階から新相にかけての埋葬遺構に共伴する甕形土器を標式とし、下層タイプi貝符と共時性をもつ。一条刻目突帯を有するものがあり、口縁部最大径より胴部最大径が膨らむものが多く、横長で寸胴な印象にかわる。その時期は、古墳時代前期後半から中期前半に位置づけられる。

下層期・新段階の埋葬遺構に土器が共伴する事例はなく、この段階の大隅諸島系土器の様相は判然としないが、上層貝符類似文が施され、下層期・新段階の中でも、もっとも新しい段階と並行する時期のものとみられる小型の甕形土器が知られ、広義の広田式はこの段階までを含む。下層期・新段階

表1 大隅諸島の土器編年表

年代AD	時期区分		土器型式 (本論)	大隅諸島の 埋葬遺構の編年 (木下2003, 石堂2012)		共伴 遺物	南九州の 土器型式	土器型式 (新里2009)	
250	弥生時代	後期 後半	鳥ノ峯式 古段階	鳥ノ峯遺跡 第2次調査		免田式	松木菌式・高 付式	鳥ノ峯式 (古)	
		終末期	鳥ノ峯式 新段階	広田遺跡 北側墓群 段階	鳥ノ峯遺跡 第3次調査	中津野式	中津野式	鳥ノ峯式 (新)	
300	古墳時代	前期		広田式	広田遺跡 下層期 古段階	鳥ノ峯遺跡 第3次調査	下層タイプ i 貝符	東原式	本村丸田 遺跡
			400						450
500	後期	移行期	広田遺跡 上層期	上層タイプ 貝符	笹貫式古段階	上能野式			
600	古代	上能野式 古段階				上能野式 中段階	上能野式 新段階	笹貫式新段階	嶽ノ中野B 遺跡
		700							

※南九州の土器型式については、中村1987を基に、近年の成川式土器研究の成果をとりいれ参考として示した。

の年代については、列点文を有するゴホウラ貝釧で時間的な定点をおさえられる。広田遺跡出土の列点文ゴホウラ貝釧は、E3号人骨、E X地区2号人骨に伴う。E3号人骨からは下層タイプiiの貝符に類似する文様が施されるイモガイ貝釧が伴い、下層期・新段階の埋葬遺構であることがわかる。列点文を有するゴホウラ貝釧は、岡山県牛塚古墳・大分県世利門古墳・熊本県伝左山古墳などに類例がある。牛塚古墳の墳頂付近からは、川西編年IV群古相(TK73-216型式並行)の円筒埴輪が出土している。また、世利門古墳は、出土鉄器から橋本によりTK73型式前後(橋本2018)とされる。このことから、下層期・新段階はTK73-216型式段階(古墳時代中期中葉)に時間的な定点が与えられる。また、列点文ゴホウラ貝釧とゴホウラ円型狭型・広型が共伴するE X地区2号人骨は、木下によって下層期・新段階でも新しい時期に位置づけられていて(木下2014)、この段階(≒山野編年6類)まで列点文を施文する風習が残るとみられる。また、木下は、TK23型式期を中心とする時期とされる熊本県伝左山古墳で列点文ゴホウラ貝釧とより新しい繁根木型ゴホウラ貝釧が共に出土することから、列点文ゴホウラ貝釧の上限をTK23型式頃(古墳時代中期後葉)とみていて、肯首される(木下

2014)。また、山野は、下層期・新段階と上層期の間に、移行期が存在することを指摘している（山野2012、山野2019）。図3-16（中園編年3型式、新里編年V期）は、共伴関係から論ずることは難しく、本論においては段階分けを行っていないが、型式学的には分類が可能であり、山野編年7類に並行する時期に位置づけられるとみている。この移行期の年代幅をどれくらいみるかは根拠に欠けるものの、移行期を含めた下層期・新段階の下限は、沖縄諸島で、開元通宝に伴い上層貝符が出土することを考えれば、古墳時代後期前半頃とみられ、移行期段階の一群を含む広義の広田式の下限も同時期と考えられる。

上能野式は、広田遺跡・下層期より層位的に新しく、上能野式の単純遺跡である上能野貝塚における上層貝符・ゴホウラ突起型との共伴関係と上層貝符の文様との類似性から、広田遺跡上層期に並行する時期に位置づけられる。

上能野式は、上能野貝塚出土土器の口縁部形態の型式学的検討から、上能野式古段階→上能野式中段階→上能野式新段階へと変遷することが想定される。上能野式の各段階における共伴例は知られていないため、その時期を推し量ることは難しいが、川口によって、志布志市宮脇遺跡出土の縦位の貼付文を有する甕形土器の口縁片について、上能野式との関連性が指摘されている（川口2019）。川口・相美が指摘するように、縦位の貼付文は、現状では、九州島に類例はなく、上能野式ないしは兼久式の影響によるものと理解される。この資料は、相美編年（相美2014）の6世紀末～8世紀の笹貫式に伴うものとされ、縦位の貼付文は、上能野式中段階以降の特徴であることから、上能野式中～新段階は、6世紀末～8世紀の時間幅で理解することが可能である。なお、広田遺跡からは、出土地点は不明だが、大賀によりBWIV型に分類されたガラス小玉が出土していて、TK209型式段階前後のものとされている（大賀2003）。このガラス玉の存在は、広田遺跡上層期が少なくとも6世紀末～7世紀初頭前後の年代を含むことを示しており、矛盾しない。

大隅諸島は、8世紀初頭の多禰国の設置により律令体制に取り込まれ、西之表市大田遺跡では、8世紀後半の須恵器が出土している。律令制が浸透する中で段階的に律令的な土器様式が主体となっていくとみられ、上能野式の下限は8世紀を含むと考えられる。

7. 結語

以上の検討から、埋葬遺構における共伴関係を中心に大隅諸島系土器の編年と位置付けを行った。大隅諸島系土器の特徴と編年をまとめると、以下のようになる。

- ・大隅諸島系土器は、南九州の土器型式との共通性よりも、その独自性が強くなる弥生時代後期以降の大隅諸島の土器様式をさし、大型・小型の甕形土器と小型の鉢からなり、壺・高杯などの器種が欠落する点に特徴がある。

- ・大隅諸島系土器は、鳥ノ峯式、広田式、上能野式に大別され、鳥ノ峯式は、覆石墓制、広田式は、下層貝符（広田遺跡・下層期）、上能野式は上層貝符（広田遺跡・上層期）との共時性が認められる。それぞれの型式は、共伴関係と型式学的検討によって、下記の細分が可能である。

- ・鳥ノ峯式古段階（弥生時代後期後半）
- ・鳥ノ峯式新段階（弥生時代終末期～古墳時代前期前半）
- ・広田式（古墳時代前期後半～後期前半）
- ・上能野式古段階（古墳時代後期後半～6世紀末）
- ・上能野式中・新段階（6世紀末～8世紀）

本稿では、共伴関係を中心として甕形土器の型式変遷に力点を置いたため、型式学的な検討と様式

第Ⅱ部

論的な議論が充分行えていない。特に、広田式は下層貝符、上能野式は上層貝符との共時性が認められ、後者においては、文様における共通性が伺えるだけでなく、兼久式など他地域との並行関係を考えるうえでも、型式学的な議論が深まることが期待されている。今後の課題としたい。

註

- (1) 私は、これまでの論考（石堂2015・2019）で、広田遺跡北側墓群段階を広田式古段階、広田遺跡南側墓群段階を広田式新段階と呼称してきた。しかし、広田遺跡北側墓群は、2004-5年の発掘によって新たに発見された墓群であり、盛園が鳥ノ峯式、広田式を設定した当時は存在していない。盛園のいう広田式は、広田遺跡南側墓群資料をさし、広田式新段階、古段階という呼称は、広田遺跡南側墓群出土土器の細分と誤解されかねない。また、広田式古段階の土器は、鳥ノ峯遺跡第3次調査地点にも見出せ、学史的にも、それらの土器に対する編年的な位置づけが議論されてきた（橋口編年Ⅱ期など）。よって、本論より広田遺跡古段階を鳥ノ峯遺跡新段階と呼び変え、広田式新段階を広田式と呼称したい。
- (2) 第2次調査7号墓に供献された在地の甕形土器（図2-6）は、胴部下半を欠き、接合しあう破片の接合面を境にして、受熱による色調の違いが明瞭に観察される。この埋葬遺構からは、明瞭な燂火の痕跡は報告されていないものの、焼骨が確認されており、同様に破碎土器供献された後に、一部の土器片が受熱したものと考えられる。また、口縁部の立ち上がりが緩く、口縁部最大径より胴部最大径のほうが大きいなど、型式学的に図3-5などの広田式段階のものに類似する。第2次調査7号墓は、第2次調査地点の他の覆石墓と異なり、覆石墓の規格性が失われており、シャコ貝が置かれるなど様相が異なる。これらのことから、第2次調査7号墓は第2次調査地点の中でも例外的に広田式の時期の埋葬遺構である可能性が高く、図2-6は広田式に相当するとみられる。
- (3) 鳥ノ峯遺跡第3次調査地点は、中津野式壺を伴い、立石を伴う覆石墓、貝製装身具を伴わない等に特徴づけられる第3次調査10号墓を中心とし展開する墓群と、搬入土器の供献習俗がなく、広田遺跡南側墓群と共通する破碎土器供献の習俗、貝製装身具の着装が認められる第3次調査5号墓を中心とし展開する墓群とが、時期を異にし存在するとみられる。
- (4) 他に、広田遺跡南側墓群における数少ない小型の甕形土器として図3-14が知られる。図3-14は表面採集品であり、共伴関係から時期を伺うことが困難である。ここでは、広田遺跡南側墓群における出土土器がほぼ広田式に限定されることと、胴部の膨らみが弱く、直線的となる器形から伺える上能野式の小型甕への型式学的な連続性を重視し、広田式に位置づけている。なお、同資料は、新里編年では鳥ノ峯式古段階に位置づけられていて、型式学的な検討からは、口縁部の屈曲度合の変化の方向性や土器の持つ胎土、調整などの雰囲気から、鳥ノ峯式古段階として捉える解釈もなりたつ。
- (5) これまでの論考（石堂2015、2019）では、椎ノ木遺跡出土土器を埋葬遺構に供献された土器と捉えていたため、下層期・新段階に並行する時期に位置づけていたが、訂正したい。

文献

- 旭慶男 1975「種子島における弥生式土器」『鹿児島大学考古学研究会紀要1』pp.1-19
- 石堂和博 2010「南西諸島の貝文化と海人－種子島広田遺跡を中心に－」『よくわかる考古学』pp.194-197
- 石堂和博 2012「種子島広田遺跡における葬制」『沖縄考古学会研究発表会発表要旨』pp.15-21
- 石堂和博 2015「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度 第6回 奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』奄美考古学会
- 石堂和博 2019「古墳時代後期並行期から8世紀における大隅諸島と九州本土及び奄美、沖縄諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.99-110 奄美考古学会
- 河口貞徳 1973「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古7』pp.59-68 鹿児島考古学会

- 川口雅之 2019「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.83-95 奄美考古学会
- 河森一浩 1998「免田式土器の再検討」『肥後考古』11 pp.13-25 肥後考古学会
- 河森一浩 1999「重弧文土器の終焉－中・南九州における古墳時代初頭前後の一動向－」『文化学年報48』 pp.59-83
- 木下尚子 2003「広田遺跡出土土器の編年」『広田遺跡』 pp.297-299 広田遺跡学術調査研究会
- 木下尚子 2014「繁根木型貝釧考－伝左山古墳出土貝釧紹介と繁根木型貝釧の成立－」『考古学雑誌98-4』 pp.222-253
- 木下尚子 2019「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』 pp.162-164 奄美考古学会
- 熊本大学文学部考古学研究室 1980『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告 6
- 相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕型土器を中心に－」『Archaeology from the south II 新田栄治先生退職記念論集』 pp.221-238
- 志布志町教育委員会 2001『宮脇遺跡』
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究11』 pp.81-87 人類史研究会
- 新里貴之 2009「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』 pp.148-154 同成社
- 新里貴之 2015「南西諸島の土器と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』 pp.31-38
- 中園聡 1986「屋久町栗生出土の遺物について（2）－種子島広田遺跡の年代をめぐって－」 pp.1-6. 『鹿大考古学会会報第2号』
- 中園聡 1988「土器様式の動態 古墳の南限付近を対象として」『人類史研究7』
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古第6号』 pp.57-73
- 中村直子 2003「広田遺跡出土土器の位置づけ」『広田遺跡』 広田遺跡学術調査研究会 pp.301-308
- 中村直子 2004「貝符に類似する土器文様の検討」『東南アジア考古学会研究報告 第2号 島嶼地域の諸相』 pp.19-30
- 西之表市教育委員会 1995『嶽ノ中野B遺跡』
- 西之表市教育委員会 2019『内城址・上能野貝塚 西之表市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報』
- 橋口達也 1996『中種子町埋蔵文化財調査報告書（2）種子島鳥ノ峯遺跡』
- 橋口尚武 1992「種子島の考古学的研究 - その基礎資料（1）」『乙益重隆先生古稀記念論文集九州上代文化論集』
- 橋本達也 2018「古墳と南島社会－古墳時代における南の境界域の実相・広域交流・民族形成－」『国立歴史民俗博物館研究報告第211集』 pp.411-446
- 南種子町教育委員会 1986『本村丸田遺跡』
- 肥塚隆保・隆幡順子・大賀克彦・矢持久民枝「広田遺跡出土玉類の考古科学的調査」『広田遺跡』 広田遺跡学術調査研究会 pp.372-375
- 藤尾慎一郎・遠部慎 2007「鹿児島県南種子町広田遺跡出土炭化物の炭素14年代測定」『広田遺跡』 pp.199-207
- 松崎大嗣 2014「成川式土器と土師器の折衷型－指宿市敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」 pp.205-220 『新田栄治先生退職記念論文集』
- 盛園尚孝 1955「鹿児島県熊毛諸島の弥生文化」『古代学研究12』 pp.385-393
- 盛園尚孝 1961「種子島中種子町に発見された覆石墓について」『種子島民俗13』 pp.25-30
- 盛園尚孝 1987「熊毛諸島の先史時代」『南種子町郷土誌』南種子町 pp.435-441
- 盛園尚孝 2003「広田遺跡出土土器の編年」『広田遺跡』 広田遺跡学術調査研究会 pp.297-299
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化第63巻第4号』 pp.476-496
- 山野ケン陽次郎 2019「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』 pp.169-184

2. 奄美・沖縄地域における種子島の文化的影響 － 3～7世紀の土器を中心に－

具志堅清大
沖縄県立埋蔵文化財センター

GUSHIKEN Seita
Okinawa Prefectural Archeological Center

1. はじめに

貝塚時代後期前半（弥生時代並行期～古墳時代並行期）の沖縄諸島には、九州弥生地域との「南海産貝交易（木下1989）」によって九州本土や奄美群島から多数の搬入土器がもたらされている。九州弥生土器は弥生時代中期頃に搬入量のピークを迎え、後期以降は減少傾向となる。奄美産土器は弥生時代後期から古墳時代並行期は増加傾向となり、交易集団の主流が九州の集団から奄美の集団に置き換わる状況がこれまでの研究により指摘されている（新里2000b・2009・2015、安座間2000、中園2000、中村2013など）。

弥生時代終末期以降、種子島広田遺跡では貝製装身具が発達し、貝製品の素材貝類の選択と、南西諸島における広田遺跡に関連する貝製品の広がりからは、広田遺跡の上層タイプ貝符の時期に沖縄諸島と広田遺跡の関わりが密接になったと指摘されているが（木下2003）、これまでに沖縄諸島における大隅諸島産土器の明確な出土事例がほとんど知られていないため、当該時期の南西諸島の並行関係や交流様相が捉えにくい要因となっている。

以前に筆者らは、伊江島具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について、大隅諸島産の可能性あることを報告している（具志堅・石堂2017）。また、近年鹿児島大隅半島及び奄美地域において上能野式土器類似資料が確認されており注目される（川口2019）。

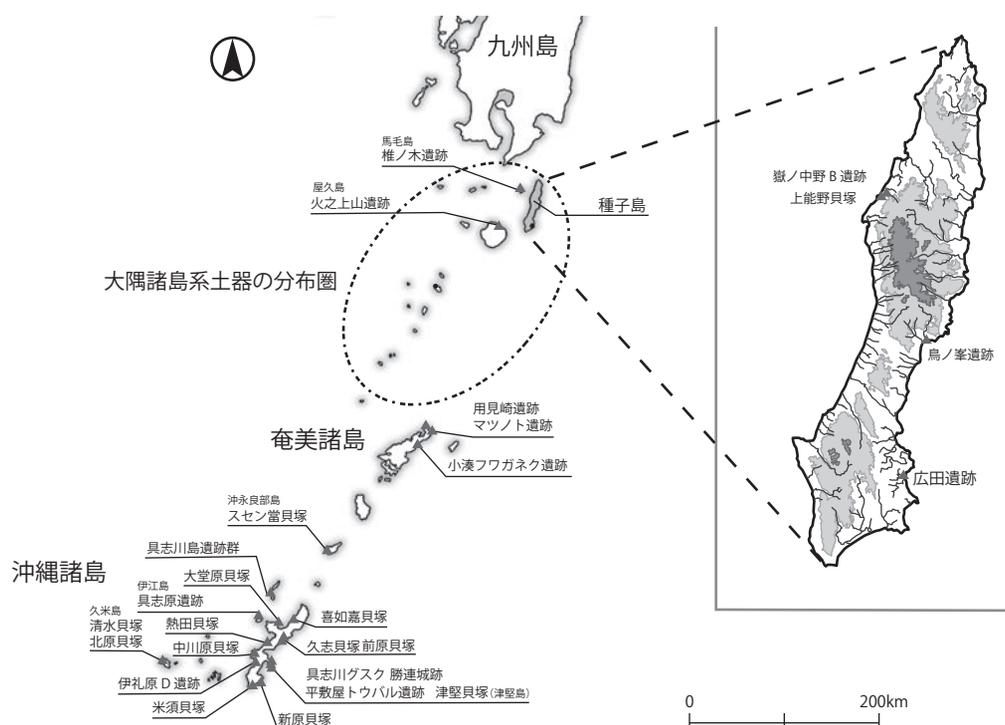


図1 本章で言及する遺跡の位置

本稿では、奄美・沖縄地域で出土する種子島広田遺跡関連土器資料（図1）を基に、当該時期の広田遺跡と奄美・沖縄地域との交流様相について整理し問題提起したい。

2. 3～7世紀の大隅諸島と奄美・沖縄の土器様相について

大隅諸島の在地土器は、縄文時代から弥生時代並行期は南九州の土器文化圏とほぼ同一で、土器型式も強い影響を受けている。

表1 南九州～沖縄諸島の土器並行関係（新里貴之2009）

弥生時代後期後半～古代並行期は大隅諸島独自の土器型式が成立することで理解されている（中園1988、新里1999など）。近年、石堂和博により当該時期の在地土器様相の整理がなされ、鳥ノ峯式・広田式・上能野式の編年的位置づけが示されている。広田遺跡においては、下層期では広田式段

時代	南九州	大隅	奄美	沖縄	貝塚時代	
縄文	晩期	入佐式 黒川式	字宿上層式	字佐浜式	前V期	
	早期	刻目突帯文				I 仲原式
弥生	前期	高橋Ⅰ・Ⅱ式 ⇒?	II 阿波連浦下層式	後期前半		
	中期	入来Ⅰ式	3 サウチ		III 浜屋原式	
		入来Ⅱ式	4 イヤンヤ洞穴			↓?
		山ノ口式	5 長浜金久第Ⅳ			IV 大当原式
	後期	松木圃式 高付式	6 宇宿港		V アカジャンガー式	
	終末期	中津野式	7 泉川			VI フェンサ下層式
	古墳	前期	東原式 本村丸田		8 スセン當式	後期後半
中期		辻堂原式 椎ノ木	9 兼久式			
後期		笹貫式 上能野式				
古代		嶽野中野 B				
		土師器	xii 土師器			

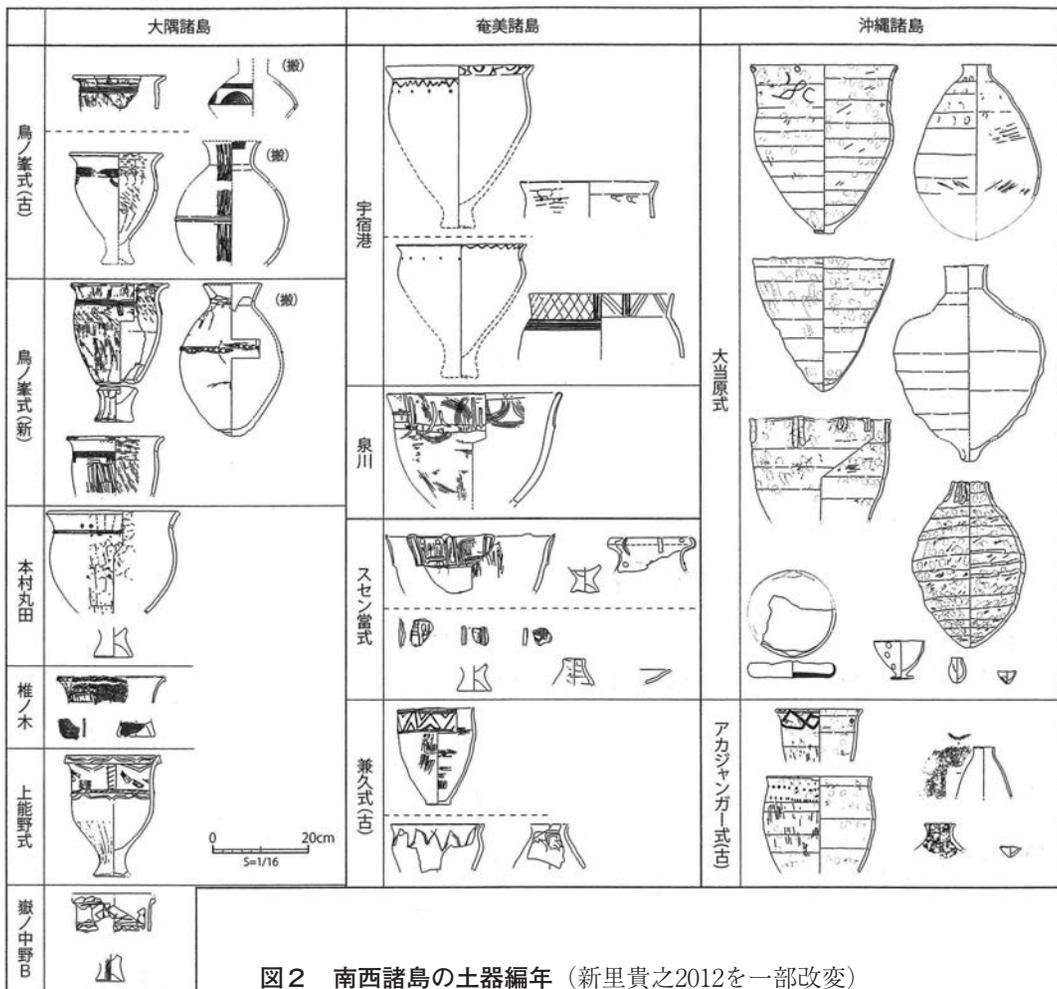


図2 南西諸島の土器編年（新里貴之2012を一部改変）

階、上層期は上能野式段階にそれぞれ位置付けられている（石堂2015・2019・本書石堂論文）。

これらに並行する奄美群島の土器としてスセン當式・兼久式土器、沖縄諸島においては大当原式・アカジャンガー式が挙げられる。当該時期の南西諸島は、九州産土師器・須恵器が殆ど見られないことから、各島嶼における在地土器の型式学的な先後関係を基に位置づけがなされ、明確な並行関係は把握できていない状況である（新里1999・2009・2012・2015、表1・図2）⁽¹⁾。

3. 奄美・沖縄地域で出土する種子島広田遺跡関連土器資料について

3.1. 沖縄諸島出土の大隅諸島系土器類似資料

大隅諸島系土器が沖縄諸島にどの程度搬入されているのかを把握するため、並行関係にある沖縄貝塚時代後期遺跡出土資料の確認を行ったところ、僅かに大隅諸島産の可能性のある資料を確認したため紹介する（図3-1～4）。

1は中川原貝塚出土資料で、弥生中期中葉（入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式段階）の模倣土器として、胎土・色調が大隅諸島のと報告されている資料である。甕形土器の口縁部で、赤褐色の砂質で多量の雲母を含む胎土の特徴は、大隅諸島の胎土によく似ている印象を受けるものである。

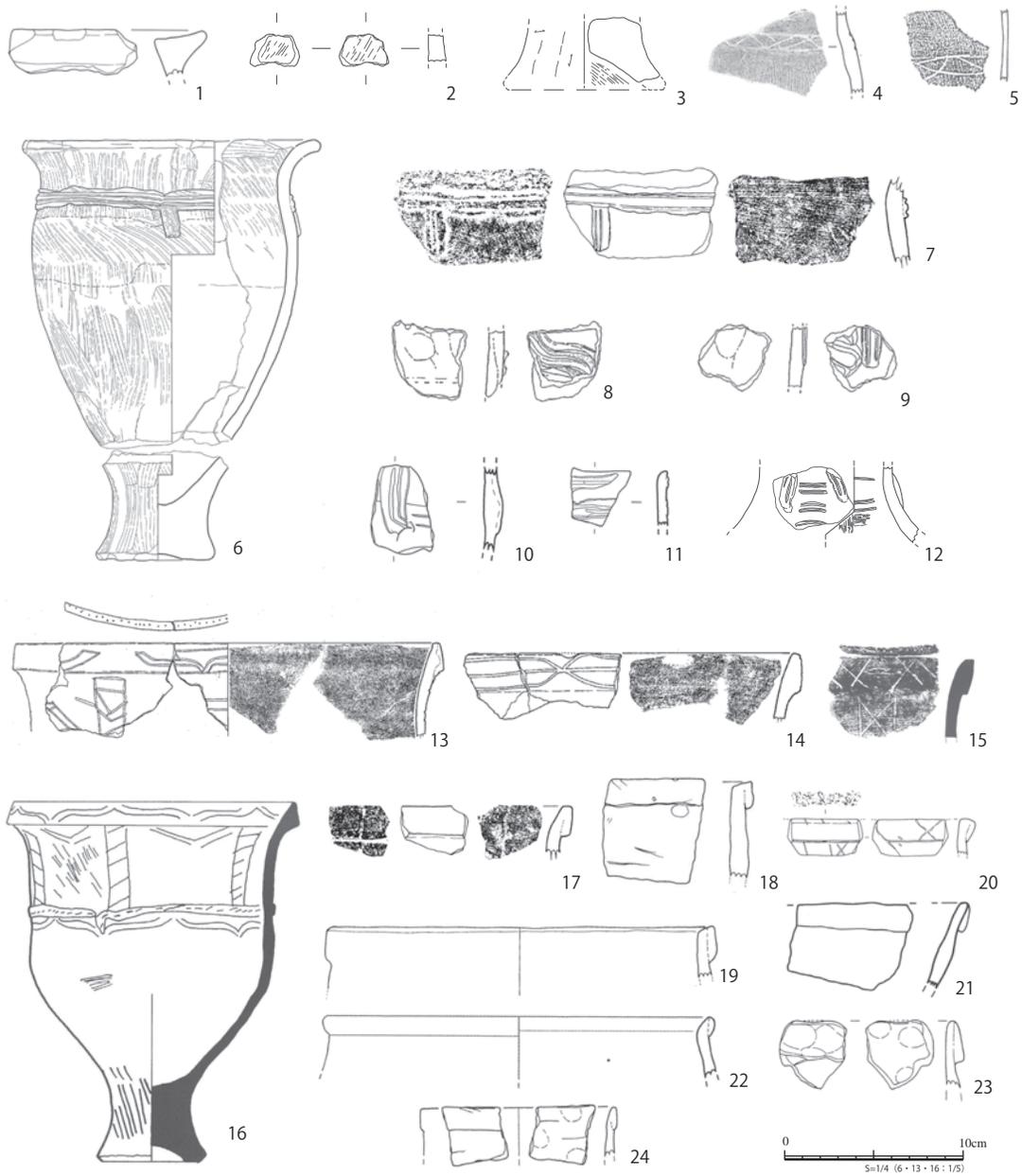
図3-2・3は具志原貝塚出土資料で、弥生時代後期後半～古墳時代並行期に位置付けられる大隅諸島の甕形土器に胎土や形態が類似する。同図2の胴部は内外面に粗い刷毛目状の調整痕が認められる。内面は煤により黒色を呈している。同図3の脚部は、以前に大隅諸島産の可能性のあるものとして紹介した資料である（具志堅・石堂2017）。外面は刷毛目状調整後に、入念にナデ消しを行っている。脚部内面は、指おさえと粗い刷毛目状調整が認められる。同図2・3は胎土の特徴から同一個体とみられる。黄橙色で多量の雲母を含む胎土の特徴から、搬入土器と考えられる。

図3-4は、北原貝塚出土の甕形とみられる胴部片で、上能野式に類似する資料である。外面の並行沈線内に弧状・V字状の沈線の一部重複させながら単位事に施すもので、大隅諸島の在地土器文様「相交弧文（新里1999）」に類似する。類例は馬毛島椎ノ木遺跡出土資料（図3-5）にみられる（熊本大学文学部考古学研究室1980）。外面下部には、刷毛目状の調整痕が見られる。内面は指おさえによる指頭痕が残る。多量の雲母を含む胎土の特徴から搬入土器と考えられる。このような文様は奄美・沖縄の在地土器にみられないもので、兼久式・アカジャンガー式では基本的に鋸歯状あるいは波状の文様を横位で連続的あるいは一筆書き的に施文することが多い。当該資料と椎ノ木遺跡出土資料はどちらも破片資料で文様モチーフ全体を窺えるものではないが、単位毎に施すか、連続的に施すかという文様意匠の観点からも、奄美・沖縄在地土器の文様と区別出来るものといえ、大隅諸島産の可能性を指摘できる。

3.1.1. 大隅諸島系土器類似資料の位置づけ

中川原貝塚出土資料（図3-1）は大隅諸島土器胎土への類縁性を感じるものの、南九州の土器様式に含まれることと大隅諸島・南九州大隅半島産ともに胎土に雲母が混入される特徴があるため、区別することは非常に難しい。具志原貝塚出土資料（同図2・3）も胎土の雰囲気が大隅諸島産のものに類似するものの、口縁部形態や文様属性といった型式学的観点からの判断は困難である。そのため、今回の研究では具志原貝塚出土資料（同図2・3）の中性子放射化分析による産地同定を行ったが、沖縄在地土器とは異なることは明らかであるものの、大隅諸島産かどうかまでは断定することは出来なかった（本書第I部第2章）。

北原貝塚出土資料（図3-4）は、文様および胎土の特徴から大隅諸島産の可能性を指摘できるもので、当該資料は、遺構内一括資料として尖底・くびれ平底土器と共伴しているとされるが、調査報



1：中川原貝塚、2・3・23：具志原貝塚、4・20：北原貝塚、5：馬毛島椎ノ木遺跡、6：広田遺跡、7・17：火之上山遺跡、
8・9：スセン當貝塚、10・11・22：前原貝塚、12・21：平敷屋トウバル遺跡、13・14：嶽ノ中野B遺跡、
15：西之表市国上、16：上能野貝塚、18・19マツノト遺跡、24：勝連城跡

図3 南島における広田遺跡関連土器資料

告書が刊行されていないことから出土状況の詳細については不明であるものの、概ね大当原式～アカジャンガー式の過渡期段階に位置づけられる。また椎ノ木遺跡出土資料は、上能野式の古段階に位置づけられている（石堂2015・2019・本書石堂論文）。このことは、大当原式～アカジャンガー式の尖底・くびれ平底土器過渡期段階と上能野式の古段階が並行関係にあると捉えることができるが、上能野式は不明瞭な点が多く編年の位置付けも定まっていないことと、類例が乏しい状況ではあるため断言はできない。しかし、今後大隅諸島と沖縄諸島の並行関係を探る上では重要な検討資料の一つとなり得よう。

3.2. 土器制作技法から見る大隅諸島と奄美・沖縄諸島の技術交流について

奄美地域においては、すでに川口雅之によりマツノト遺跡出土資料に上能野式の影響を受けたとされる資料が見出されている（川口2019）。沖縄諸島においても大隅諸島産在地土器の影響を受けたと考えられる沖縄在地土器が僅かに認められたため紹介する（図3-6～24）。

3.2.1. 鳥ノ峯式・広田式関連資料

大隅諸島の弥生後期後半～古墳時代前半期に位置付けられている鳥ノ峯式・広田式（石堂2015・2019）には、みかけ多条突帯（中園1988）と呼称される幅広粘土帯に沈線文を施すことによって多条突帯にみえるような効果をあげる特徴的な文様がみられる（図3-6・7）。みかけ多条突帯に類似する資料が沖永良部島スセン當貝塚出土土器資料にみられることが新里貴之により指摘されている（新里2000a）。

図3-8・9はスセン當貝塚出土の胴部片で、8はS字状幅広粘土帯の中央を窪ませることにより二条併走効果を得ている。同図9は縦位幅広粘土帯に沈線を施し多条突帯に見せかけている。鳥ノ峯式や広田式と文様パターンは異なるものの、施文技法が類似しており島嶼間で情報共有・交流があったことが窺える資料である。新里貴之は、当該時期における大隅諸島地域～奄美地域の関係性が土器に表象した事例としている（新里2000a）。いずれも新里貴之によるスセン當式土器編年Ⅱb段階、つまりスセン當式新段階に位置付けられる。

沖縄諸島においては前原貝塚（図3-10・11）や平敷屋トウバル遺跡（同図12）に類例が認められた。同図10は胴部に縦位幅広突帯を貼り付け、その上に沈線を施し多条突帯に見せかけるもので同図9に類縁性を感じる資料である。同図11は口縁部に横位の幅広突帯を貼り付け、その上に沈線を施すものでみかけ多条突帯に類似する。同図12は壺型胴部片で突帯上に沈線が施されている。これらは、いずれも胎土は沖縄在地的なものでスセン當式の模倣あるいは影響を受けたものと考えられる。奄美群島の在地土器において、みかけ多条突帯は非在地的な属性といえることから、大隅諸島在地土器の属性要素が、奄美群島を経由し、間接的に沖縄諸島在地土器の属性要素に取り込まれたものと捉えることができる。

3.2.2. 上能野式関連資料

上能野式は大隅諸島の甕形在地土器で、古墳時代に位置付けられているものの年代的位置付けおよび存続年代については明確ではない（石堂2015・2019）。川口雅之は南九州および奄美における上能野式類似資料として外面口縁部に粘土帯を貼り付け、口縁部を肥厚させる資料を見出し、このような制作技法を南九州在地土器および奄美の兼久式にはみられないものとし、上能野式あるいはその影響を受けた資料と述べている（川口2019）。

川口によると、マツノト遺跡出土資料（図3-18・19）は、口縁部外面に粘土帯を貼り付けることにより断面方形状に肥厚させている。胎土は在地的であることから、兼久式に上能野式の製作技法を

取り入れて制作された土器と指摘されている。

沖縄諸島における類例として、北原貝塚出土資料（図3-20）がある。甕形土器の口縁部片で上能野式の文様モチーフに類似する資料である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け方形状に肥厚させ、外面肥厚部下に横位沈線、その下に縦位の平行沈線文+「X」字状文様を施す。内面も横位沈線と「X」字状文様を施す。口唇部には刻目が施される。口縁肥厚部外面にも斜沈線のような痕跡がみられるが判然としない。胎土は、灰色の泥質で沖縄在地土器である。

上能野式は口縁部外面に粘土帯を貼付けし、断面三角形・あるいは方形状に肥厚させることが特徴であるが、当該資料の肥厚口縁部のつくりは沖縄在地的で上能野式のものとは異なる。一方で小片のため判然としないものの、上能野式の文様モチーフ（図3-13~16）に類似する（河口1973、旭1975）。上能野式の文様モチーフを模倣、あるいは影響を受けた沖縄在地土器と考えられる。

このほか、大当原式~アカジャンガー式出土遺跡において、まれに口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付け、断面三角形あるいは方形状に肥厚させるものがあり、類例として具志原貝塚、前原貝塚、平敷屋トウバル遺跡、勝連城跡（四の曲輪北区）などがあげられる（図3-21~24）。具志原貝塚では粘土帯を内面に貼り付け肥厚させているものもみられる。

大当原式は、造りが粗造で粘土帯接合痕が明瞭な土器から、厚さが均一でナデは比較的徹底した土器への型式変化が示されており（宮城2009）、基本的に舌状口縁で、無文主体の土器であるが、新段階には有文資料が増加する傾向が指摘されている。後続するアカジャンガー式との過渡期段階、すなわち尖底・平底両土器群の中間的な土器（宮城・安座間2013）の時期には大当原式・アカジャンガー式両型式の特徴を持つもので、口唇部を平坦にして刻目を施すものが多くみられるようになる。口唇部が平坦に意識して整形されることによって断面方形状・口縁部端部が内面・外面にはみ出すものや、口縁部に粘土帯を継ぎ足し・貼り付けることによって肥厚させるものもみられる。これらは、典型的なアカジャンガー式とされる資料においても認められるもので尖底・平底土器の過渡的段階からアカジャンガー式に認められる。このように、口縁部に粘土帯を継ぎ足し・貼り付けにより肥厚させる例は、当該時期の沖縄在地的な土器制作技法に一般的にみられるものである。

今回取り上げた資料図3-21~24は、在地土器の中でも「粘土帯貼付により肥厚させる」という意匠がとりわけ強く感じるものである。沖縄在地的な土器制作技法の変化・変遷の中で生じたものとも考えられることから、上能野式の直接的な影響があったということまでは現時点では言及できないが、このように、口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させるという土器制作技法は、ほぼ同時期の大隅諸島から奄美・沖縄地域に認められる。

4. 貝符に類似する土器文様について

広田遺跡を代表する遺物の一つとして貝符が挙げられるが、貝符に類似する土器文様（以下、貝符類似文様）が奄美・沖縄地域の在地土器にみられることが先学により指摘されている。貝符類似文様をもとに、貝符が在地土器に与える影響について検討したい。

4.1. 先行研究

貝符は琉球列島において、種子島広田遺跡を中心に奄美群島や沖縄諸島まで出土しているが、広田上層タイプの貝符は、広田下層タイプの貝符と比較すると広い範囲で出土しており出土量も多い。先学の研究による貝符文様の分類・編年案（木下1987・矢持2003・山野2019）によると、広田上層タイプの貝符は、基本的には眼をイメージさせる文様を軸として複雑なものから単純なものへと簡素化する型式変化の方向性が示されている。

広田上層タイプの貝符は、奄美群島においてはマツノト遺跡や用見崎遺跡の調査により兼久式土器と共伴することで知られており、中山清美は広田上層タイプ貝符が兼久式の古いタイプに共伴すること、沈線文土器と貝符文様が類似することを指摘している（中山1992a・b）。高梨修は兼久式土器の編年的考察の中で、貝符と兼久式土器の共伴事例について触れており、フワガネク遺跡第二次調査出土土器→フワガネク遺跡第一次調査・用見崎遺跡出土土器の型式学的変化に伴い、共伴する上層タイプの貝符文様も単純化することを指摘している（高梨2005a・b）。

中村直子は、広田上層タイプ貝符に類似する文様が兼久式土器に見られることに着目し、貝符と土器文様の比較検討を行っている。中村は、広田遺跡の上層タイプ貝符をA～I類と再分類し、型式学的変化と層位学的新旧関係からI～III期に分けた。貝符類似文様は、貝符と全く同一の文様はないものの、60度もしくは120度前後の屈曲部を持つ直線文を多用する点で、G類とした貝符と共通するとし、I期の新段階からII期に増加するとしている。

また、貝符の主文様であるA類文様（双眼をイメージさせる文様）は土器文様にみられず貝符にしか施されていない一方で、G類文様が地理的拡大とともに貝符以外の素材である土器に施されている点、種子島の土器には貝符類似文様が見られないことを挙げ、地理的・質的に周辺部で起こっている現象であることを指摘している（図4）。さらに、土器に貝符類似文が施されるプロセスについて、①オリジナルの文様が存在し、それが貝符や土器に施される場合、②貝符文様そのものが土器に転写される場合、の二通りを想定している（中村2004）。

沖縄諸島における共伴関係については、沖縄後期土器編年の研究が進められていく中で、貝符上層タイプが清水貝塚などの尖底主体遺跡や熱田貝塚など平底主体遺跡の両方で出土することから、尖底から平底への過渡期の遺跡で共伴することで認識され（岸本ほか2000）、その後、広田上層タイプ貝符の集成を行った山野ケン陽次郎は、上層タイプ貝符は尖底土器よりもアカジャンガー式・フェンサ下層式といったくびれ平底土器に主体的に共伴すると指摘している（山野2010）。

安座間充は、アカジャンガー式土器の編年的考察の中で、沖縄諸島における兼久式類似土器および貝符類似文様資料を見出している。沈線による幾何学的・直線的な文様が施された資料について、アカジャンガー式土器有文資料全体では割合的に多くないと述べ、貝符類似文様が沖縄在地土器にみられることを指摘している（安座間2017・2019）。

これまでの研究によって、広田上層タイプ貝符は、奄美群島では兼久式、沖縄諸島においては大当原式～アカジャンガー式出土遺跡に共伴することで知られる。そして、共伴する在地土器には貝符類似文様がみられるということが指摘されている。

4.2. 貝符類似文様の定義

続いて、貝符類似文様の定義について整理したい。中村直子は、貝符類似文様の共通点を下記のよう提示している（中村2004）。

- a：直線的な文様。
- b：60度もしくは120度前後の角を持つモチーフ。
- c：縦方向に伸びる文様。
- d：二重平行沈線文。

上記のうち、cの特徴についてはスセン當式の文様構成から奄美の土器文様の系譜にある可能性を示唆しつつも、このa～dの特徴は前段階の土器文様からは系譜の引けないものとしている。また、土器文様を抽出する上で注意しなければならないことは、①貝符に類似していること、②前段階の土器文様から系譜の引けない文様である、この2点が貝符類似の土器文様の前提条件として挙げられ

る。特に後者②の条件が重要であり、つまり貝符文様に類似するものの、土器の型式変化の流れで系譜の引ける場合、必ずしも貝符から影響を受けたとはいえないということである。

4.3. 奄美・沖縄地域における貝符類似文様出土事例

中村による研究を踏まえ、貝符類似文様の類例収集を行ったところ、基本的にはシャープな沈線が多いが⁽²⁾、幅広沈線によるものもあり、文様は定型化せず、かなりバリエーションに富むことを確認した。また、沈線文のみを主体的文様として施文するものや突帯と沈線を組み合わせるものなど文様構成のパターンが認められた。比較対象とした広田上層タイプ貝符の分類名称は山野分類（山野2016・2019）を用いる（図5）。兼久式の貝符類似文様とともに紹介する（図6～7）。

沈線文主体の土器 沈線による貝符類似文様を施すもの。口縁部外面に描画的あるいは区画的な文様を沈線文主体により施すグループ。

図6-1は有文の大当原式で、外面口縁部に棒状工具で沈線による縦位・横位区画文を施し、区画内に「S」字状文様を施す。同貝塚より出土した広田下層タイプの貝符（同図2）の文様モチーフそのものではないが、一部を模倣した様な印象を受けるもので興味深い資料である。この貝符は攪乱層からの出土のため当該土器との関係は不明であるが、清水貝塚などにおける下層タイプ貝符出土例から、仮に当該土器と共伴関係にあっても違和感はない。このような区画的文様は無文主体の大当原式に少ないながらも認められるもので⁽³⁾、在地的文様に貝符類似文様が付加されたものと考えたい。中村の定義する貝符類似文の概念とは外れるとともに、偶然の一致である可能性もあるが、貝符に類似する文様が土器に施されるという現象について検討する上では興味深い資料である。

図6-3・4はフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器で、山野分類の扇面類・波頂類などの文様モチーフに類似する。

図6-5～9は細沈線あるいは幅広沈線により60度もしくは120度前後の角を持つ描画的文様を施すものである。5は山野分類の扇面類にみられる三角形・菱形文に類似する。同図6～9は山野分類波頂類に類縁性を感じる資料である。同図5・6・10は清水貝塚、7は新原貝塚、同図8～9は北原貝塚出土である。同図10はシャープな沈線文で、報告書において「目」状の構成をなすと指摘されている。文様構成は山野分類双眼・単眼類にも類似するが判然としない。清水貝塚や北原貝塚では他にもシャープな沈線文による資料が見受けられる。

図6-11～13も小片のため判然としないが、貝符文様に近いと感じたため取り上げた。同図11は新原貝塚出土資料で山野分類無角類に近い。同図12は平敷屋トウバル遺跡、同図13で勝連城四の曲輪北区出土資料で山野分類片翼類・波頂類のモチーフに類縁性を感じる。

図6-14は、マツノト遺跡出土資料で、沈線による区画的かつ幾何学的な文様を施すもので、同遺跡出土の上層タイプ貝符（同図15）の文様モチーフに類似するもので興味深い。また、今回は図示できなかったが、マツノト遺跡第2文化層出土土器には沈線文により山野分類波頂類の三角文にかなり類似する資料があり興味深い⁽⁴⁾。

沈線文+突帯貼り付け文の土器 沈線文と突帯貼り付けによる装飾を組み合わせたモチーフのものである。突帯貼り付けについては、近年安座間によりスセン當式・大当原式段階の突帯による装飾的な文様を、後続するくびれ平底土器段階の区画的突帯と区別し、突帯装飾文と提唱されている（安座間2019）。また、刻目突帯を屈曲させるものもあり、兼久式・アカジャンガー式土器によくみる横位の刻目突帯による区画文とは区別できる。

図6-16・17は熱田貝塚出土資料で山野分類波頂類に良く似た文様モチーフを突帯文と組み合わせで施している。

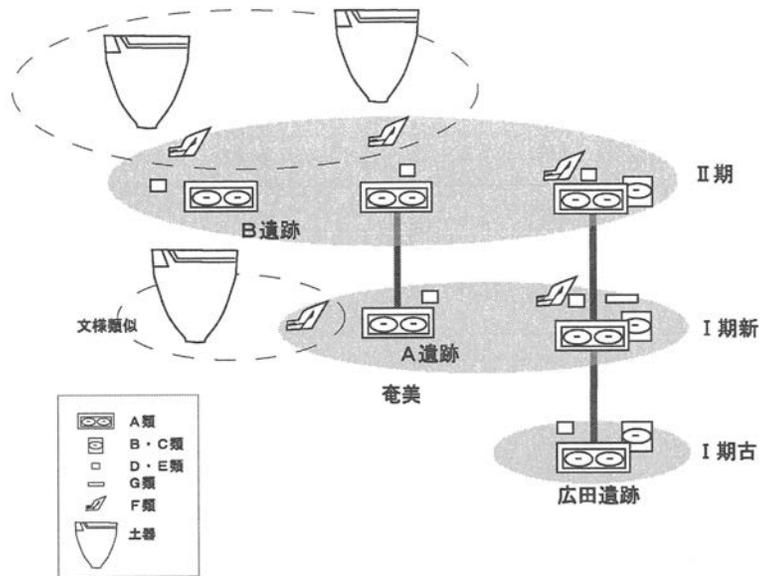


図4 上層タイプ貝符と土器文様の関係 (中村2004)

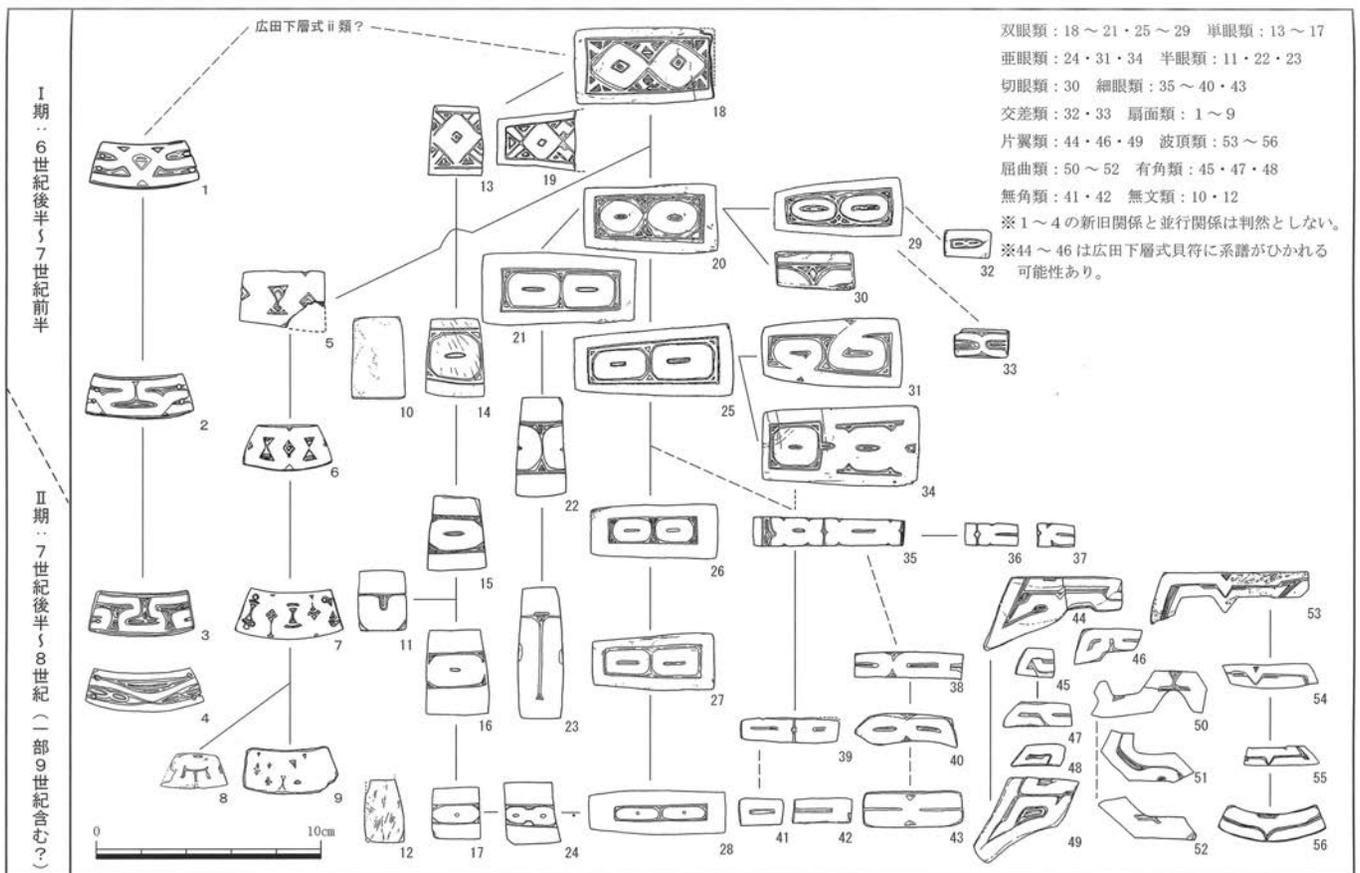


図5 上層タイプ貝符編年図 (山野2019)

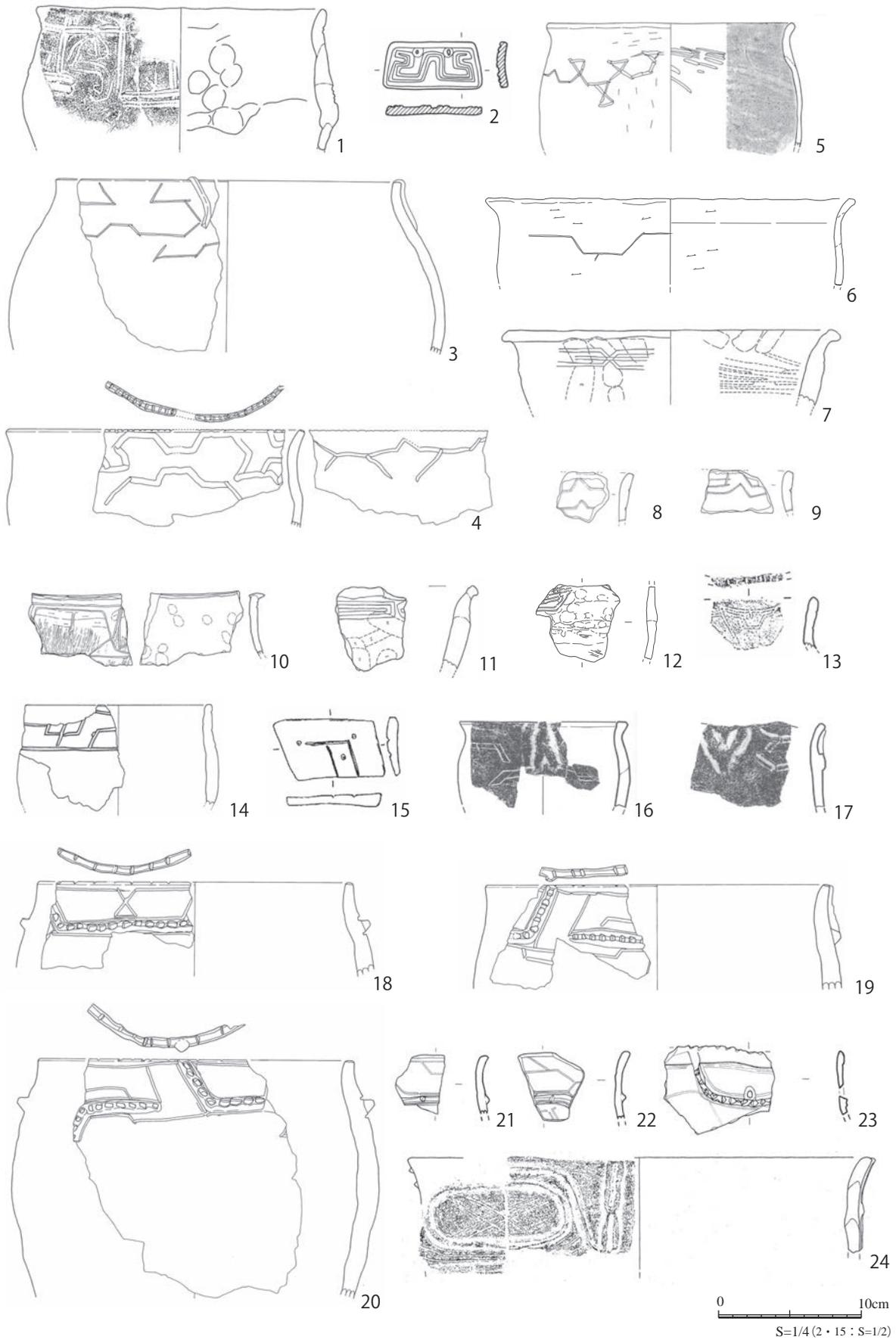
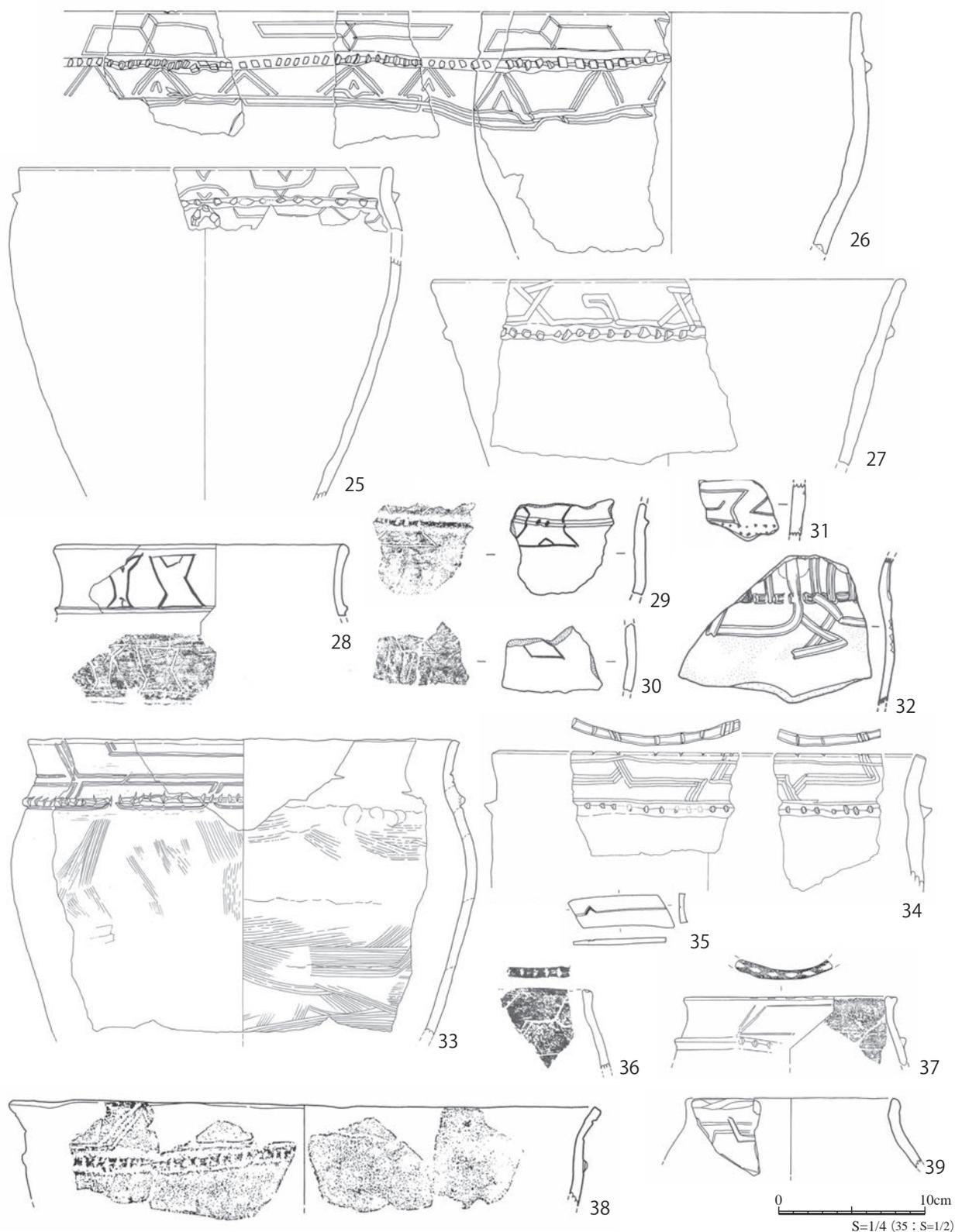


図6 南島の土器における貝符類似文様と貝符 1



1・2・24：大堂原貝塚 3・4・18～20・25～27・34・35：フワガネク遺跡 5・6・10：清水貝塚 7・11：新原貝塚 8・9：北原貝塚
 12：平敷屋トウバル遺跡 13：勝連城跡 14・15：マツノト遺跡 16・17：熱田貝塚 21～23：前原貝塚 28～30：具志川島遺跡群
 31・32：久志貝塚 33：用見崎遺跡 36：米須貝塚 37：伊礼原D遺跡 38：喜如嘉貝塚 39：具志川グスク

図7 南島の土器における貝符類似文様と貝符2

図6-18~20はフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器で、刻目突帯を屈曲させ沈線とともに区画的な文様を施している。18は区画内に菱形文を施すもので山野分類の扇面類、19・20は、山野分類類片翼類・有角類にそれぞれ文様モチーフに類縁性を見出せる。

図6-21・22は、前原貝塚出土資料で刻目突帯とシャープな沈線により区画的文様を施している。小片のため断言はできないが、同図19や20に近い文様モチーフとなる可能性が高い。23は貝符文様には類似しないものの、文様意匠が近似する。大堂原貝塚出土例（同図24）も、突帯装飾と沈線による区画的文様を施し、区画内はシャープな沈線により充填する資料で、貝符類似文様ではないが類縁性を感じる資料として取り上げた。

沈線+横位区画文様の土器 沈線と横位区画文の組み合わせによるもの。区画文は刻目突帯のほか刺突文、横捺刻文がみられる。

図7-25~27はフワガネク遺跡出土土器で、横位の刻目突帯の上下もしくは上のみに沈線による描画的かつ区画的文様を施すものである。同図25は第二次調査（調査区3・12）出土土器で刻み目突帯の上下に山野分類扇面類に良く似た文様モチーフを施す。26・27は第一次調査（調査区11）出土資料である。同図26は山野分類波頂類の三角文を突帯の上下に配する。27は扇面類を簡略化したような文様である。

図7-28~30の具志川島遺跡群表採資料で、突帯文の上下に施される文様は、山野分類扇面類の文様構成を簡略化したような印象を受ける。同図31・32は久志貝塚出土資料で、31は刺突文による区画文と同図28・29に似た文様モチーフを施す。同図32の横捺刻文による区画文下部に幅広沈線で施される文様は、フワガネク遺跡例（同図27）に近似する。

図7-33・34はより簡略化・単純化が進んだ直線的な文様で、中村直子が指摘する60度もしくは120度前後の角を持つモチーフを施すもので山野分類波頂類に類似する。特に同図34のフワガネク遺跡第二次調査（調査区3・12）出土土器は山野分類波頂類（図5-55）に非常に類似するとともに、同調査でも波頂類とみられる上層タイプ貝符（同図35）が出土していることは興味深い。同図33は用見崎遺跡第二次調査出土資料である。これらに類似する沖縄在地土器資料として、喜如嘉貝塚（同図38）、伊礼原D遺跡（同図37）がある。米須貝塚（同図36）、具志川グスク（同図39）出土例は区画文を伴わないものの類例資料として取り上げた。

この他、土器資料ではないが、米須貝塚表採の貝符類似文様が施された土製品がある。山野分類双眼類・単眼類に類縁性を感じる。同貝塚では双眼類の上層タイプ貝符が採集されていることも興味深い（図8）。

5. 貝符類似文様の位置づけ

以上、奄美・沖縄地域における貝符類似文様について提示した。貝符類似文様は、奄美群島の兼久式ではフワガネク遺跡やマツノト遺跡な

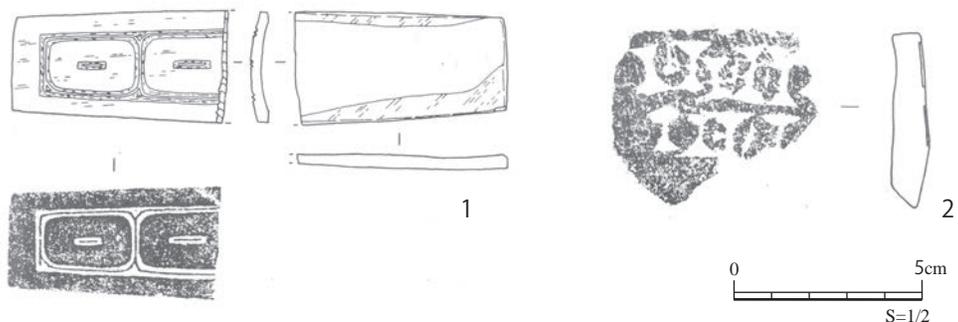


図8 米須貝塚出土の上層タイプ貝符と土製品

ど広田上層タイプ貝符出土遺跡を中心に認められることが中村により指摘されているが、沖縄諸島においても、大当原式～アカジャンガー式段階の広田上層タイプ貝符出土遺跡を中心に認められた。分布の傾向としては、沖縄よりも奄美地域に多い印象を受ける。

一方で、兼久式前段階に位置付けられるスセン當式には、貝符に類似する文様は管見の限りでは認められなかった。奄美地域における貝符類似文様の初現は、現段階では兼久式の前段階（高梨1999など）とされる沈線文のみで構成される土器群に求められる。なお、スセン當式から兼久式に到る型式学的な隔たりがこれまでに指摘されており（新里2000a・2013）、今後の資料増加・奄美地域の土器編年研究によってはスセン當式から兼久式への過渡期に求められる可能性も想定できる。

本稿では、貝符類似文様を文様構成から大きく三つに分類したが、貝符類似文様は在地土器文様の属性要素に組み合わされる場合が多いことから、文様構成も在地土器文様の変遷と連動しているようである。

沈線文主体的文様は、清水貝塚例から大当原式段階を初現とし、沈線文+突帯貼付文様とともに後続するアカジャンガー式との過渡期段階～アカジャンガー式段階までみられる。沈線+横位区画文はアカジャンガー式段階に主体的に認められる。これらは奄美の在地土器にも類似しており、特に沈線+横位区画文としたグループは、貝符文様に類似するだけでなく兼久式にも類似する。

今回取り上げなかったが、兼久式では貝符文様を簡略化・簡素化したような文様モチーフが多数認められる。また、上能野式には貝符文様に直接的に類似しないものの前段階からの系譜が引けない文様もみられることも中村により指摘されており⁽⁵⁾、奄美・沖縄地域の在地土器にも貝符文様に直接的には類似しないものの、前段階からの系譜が引けない文様が認められた。

今回は文様構成のパターンから大まかな分類試案を提示したが、上述した貝符類似文様あるいは影響を受けたと考える文様モチーフを含めるとより細分可能である。奄美・沖縄にみられる貝符類似文様モチーフの類似性は、当該時期の奄美・沖縄の土器様相について考察する手がかりの一つとなり得よう。

6. 結語

奄美・沖縄地域における広田遺跡関連土器資料として、大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器、貝符類似文様を取り上げ、奄美・沖縄地域の在地土器文化に与える影響について検討した。

結論として、大隅諸島系土器の他地域への搬出例が僅かであること、奄美・沖縄在地土器に大隅諸島の在地土器的要素が模倣され取り入れられる事例は認められるが僅かであることから、大隅諸島系土器が奄美・沖縄地域へ与えた影響はかなり低い。これまで奄美・沖縄地域において大隅諸島系土器の出土例が乏しいことから、大隅諸島の土器は島嶼内に留まるものとされ、具体的な並行関係や交流様相については検討することは困難な状況であった。しかし、今回見出すことができた大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器の存在は、少なくとも島嶼間の直接的あるいは間接的な交流・情報共有があったことを示すものである。

一方で、貝符類似文様については、奄美・沖縄地域の在地土器に一定量認められ、特に兼久式に多い印象を受ける。貝符類似文様はそもそも貝符を模倣したのかという問題点も挙げられるが、貝符類似文様が奄美・沖縄の在地土器に取り入れられる事例がこのように認められるということは、貝符あるいは貝符に類似する文様モチーフが奄美・沖縄人にそれだけのインパクトを与え、影響力を持っていたのであろう。大隅諸島系土器類似資料あるいはその影響を受けた土器の分布と比較すると対照的

であることを指摘できる。

また、貝符類似文様は奄美の在地土器にも類似することを指摘したが、これまでに兼久式とアカジャンガー式は型式学的に類似することで知られ、兼久式・アカジャンガー式が成立する背景として、奄美・沖縄両地域の在地土器が相互に影響（技術的交流）を受けて型式学的に近くなったことによる可能性が指摘されている（安座間2016・2019・川口2019）。南島における上層タイプ貝符の広がり
と貝符類似文様は、当該時期の島嶼間交流の様相を特に表しているように見える。広田遺跡における貝製品素材の需要により、大隅諸島と素材供給地である沖縄諸島の関係が強くなり、その中間に位置する奄美群島が仲介者として島嶼間の交流・情報伝達の役割を担ったことによって、相互の土器様相に影響をもたらした貝符類似文様が出現した可能性がある。このことは、奄美・沖縄両地域におけるくびれ平底土器様式の成立にも関係する可能性があるが、くびれ平底土器様式の前段階に位置づけられているスセン當式と大当原式の分析を踏まえた上での検討も必要であり、今後の課題としたい。

本稿執筆・資料調査においては、下記の方々・機関にご協力・ご助言いただいた。記して感謝申し上げます。

稲垣友裕、太田菜摘美、沖田純一郎、新里貴之、島袋春美、菅原広史、瑞慶覧長順、砂川暁洸、田里一寿、玉榮飛道、中島徹也、松原哲志、南勇輔、宮城弘樹、横尾昌樹、伊江村教育委員会、浦添市教育委員会、うるま市教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センター、久米島博物館、宜野座村立博物館、北谷町教育委員会、中種子町教育委員会、名護市教育委員会、西之表市教育委員会、広田遺跡ミュージアム、読谷村教育委員会

注

- (1) 南西諸島の土器並行関係について、新里貴之2015論考において、表1（新里2009）の大隅諸島と奄美群島の間が空白となり離れていることは、両地域の交差年代を取ることができないことを示すとともに、図2（新里2012）の横線は並行関係を示しているものではないことを補足している。
- (2) 貝符類似文様のシャープな沈線文は、上層タイプ貝符の線刻に類似することから、同様な工具を用いた可能性も考えられる。
- (3) 伊礼原D遺跡（北谷町教委2013第35集）、伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡（北谷町教委2014第36集）、平敷屋トウバル遺跡（沖縄県教委1996第125集：報告書第26図10）等。
- (4) 既に中山清美氏によって貝符類似文様が指摘されている資料で、当該土器群について検討する上では欠かせない資料であるが、報告書では未掲載となっている。中山清美1992b 30頁。
- (5) 中村直子は、広田上層タイプ貝符と同時期にある上能野式の文様に、貝符文様に直接的に類似すると説明できないが、シャープで前段階から系譜の引けない文様がみられることを指摘している。これは貝符文様が上能野式の土器文様に与えた影響について示唆するものとみられる。また、熱田貝塚出土資料（図6-16）や新原貝塚出土資料（図6-7）の文様モチーフは上能野式（図3-13・14）にも類似するようにもみえる。

文献

- 旭慶男 1975「種子島における弥生式土器」『旭慶男君著作集』、pp.11-101、旭慶男君著作集刊行会
- 安座間 充 2000「琉球弧からみた弥生時代併行期の九州との交流様相－当該期搬入土器群および「弥生系土器」の再検証を中心に－」『地域文化論叢』第3号、pp.1-46、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
- 安座間充 2014「貝塚時代後1期・沖縄諸島の土器動態」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先

- 史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集、pp.157-172、六一書房
- 安座 充 2016「貝塚時代後期・沖縄諸島の土器様式変化をめぐる理解」『廣友会誌 高宮廣衛先生追悼号』第9号、pp.44-53、廣友会
- 安座間充 2017「アカジャンガー式の編年的考察」『奄美・沖縄における貝塚時代後期土器の編年』平成29年度奄美考古学会沖縄大会資料集、pp.20-37、平成29年度奄美考古学会沖縄大会実行委員会
- 安座間充 2019「沖縄出土の兼久式土器・類似土器－付 アカジャンガー式土器出土遺跡集成－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.111-121、奄美考古学会
- 奄美考古学会 2016『奄美考古』第8号兼久式土器特集号（資料編）
- 奄美市教育委員会 2007『小湊フワガネク遺跡群Ⅱ 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』奄美市文化財調査報告書一
- 石堂和博 2014「大隅諸島の先史文化にみられる生業の特徴と変遷」『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集、pp.159-170、六一書房
- 石堂和博 2015「古墳時代後期並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期並行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度 第6回 奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』
- 石堂和博 2019「古墳時代後期並行期から8世紀における大隅諸島と九州本土及び奄美、沖縄諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.99-110、奄美考古学会
- 伊是名村教育委員会 1977『具志川島遺跡群 第一次発掘調査報告書』伊是名村文化財調査報告書 第1集
- 糸満市教育委員会 1985『米須貝塚－範囲確認調査報告書－』糸満市文化財調査報告書第5集
- うるま市教育委員会 2006『具志川グスクⅠ－発掘調査報告概報－』うるま市文化財調査報告書第4集
- うるま市教育委員会 2011『勝連城跡－四の曲輪北区発掘調査報告書－』うるま市文化財調査報告書第14集
- 沖縄県教育委員会 1979『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書－国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第23集
- 沖縄県教育委員会 1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集
- 沖縄県教育委員会 1992『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第106集
- 沖縄県教育委員会 1994『喜如嘉貝塚－国道58号改修工事に係る緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第114集
- 沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第125集
- 沖縄県教育委員会 1997『伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第130集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996『火ノ上山遺跡 宮之浦港改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（17）
- 笠利町教育委員会 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28集
- 河口貞徳 1973「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古』第7号、pp.59-68、鹿児島考古学会
- 川口雅之 2019「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.83-97、奄美考古学会
- 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化』上巻、pp.131-152、高宮廣衛先生古希記念論集
- 宜野座村教育委員会 2005『前原貝塚－村道サー原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』宜野座村

第Ⅱ部

乃文化財17集

- 木下尚子 1987「貝符」『弥生文化の研究』第8巻、pp.198-206、雄山閣
- 木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学－横山浩一先生退官記念論文集－』、pp.203-249、横山浩一先生退官記念事業会
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版
- 木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島 広田遺跡（本文編）』、pp.329-366、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 木下尚子 2019「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.149-167、奄美考古学会
- 具志川村教育委員会 1989『清水貝塚 発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集
- 具志堅清大・石堂和博 2017「伊江島具志原貝塚出土の甕形土器脚部資料について」『南島考古』第36号、pp.161-168、沖縄考古学会
- 熊本大学文学部考古学研究室 1980『馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡－』研究室活動報告6
- 熊本大学文学部考古学研究室 1995『用見崎遺跡』研究室活動報告31
- 桑原久男ほか 2003『種子島 広田遺跡』、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第11号、pp.75-106、人類史研究会
- 新里貴之 2000a「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』上巻、pp.153-173、高宮廣衛先生古希記念論集
- 新里貴之 2000b「九州・南西諸島における弥生時代・並行期の土器移動について－基礎的作業－」『大河』第7号、pp.237-257、大河同人
- 新里貴之 2009「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭』、pp.148-164、同成社
- 新里貴之 2012「貝塚時代後期文化と古墳文化」『古墳時代の考古学 7 内外の交流と時代の潮流』、pp.146-158、同成社
- 新里貴之 2013「ナガラ原東貝塚出土のスセン當類似土器について」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.248-258、熊本大学文学部
- 新里貴之 2015「南西諸島の土器と成川式土器」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』、pp.31-38、鹿児島大学総合研究博物館
- 高梨修 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』、pp.19-40、名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005a「小湊フワガネク遺跡群第一次調査・第二次調査出土土器の分類と編年」『小湊フワガネク遺跡群 I 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書七
- 高梨修 2005b『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史シリーズ⑩ 同成社
- 北谷町教育委員会 2013『伊礼原 D 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度）－』北谷町文化財調査報告書第35集
- 北谷町教育委員会 2014『伊礼原遺跡（国指定外） 伊礼原 A 遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・20・24年度）－』北谷町文化財調査報告書第36集
- 北谷町教育委員会 2017『伊礼原 D 遺跡 平安山原 A 遺跡－桑江伊平地区現状回復事業に伴う発掘調査事業（平成18年度）－』北谷町文化財調査報告書第41集
- 友寄英一郎・高宮廣衛 1968「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』社会篇第12号、pp.37-76、琉球大学法文学部

- 友寄英一郎 1970「沖縄出土の弥生土器」『琉球大学法文学部紀要社会篇』第14号、pp.47-55、琉球大学法文学部
- 仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第25号、pp.59-79、読谷村歴史民俗資料館
- 中園聡 1988「土器様式の動態－古墳の南限付近を対象として－」『人類史研究』第7号、pp.31-69、人類史研究会
- 中園聡 2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器一様式の同定と解釈－」『琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛先生古希記念論集、pp.111-130、高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 中山清美 1992a「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』、pp.165-173、南日本文化研究所叢書
- 中山清美 1992b「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号、pp.15-38、奄美考古学会
- 中村直子 2004「貝符に類似する土器文様の検討」『島嶼地域の諸相』東南アジア考古学会研究報告第2号、pp.19-30、東南アジア考古学会
- 中村直子 2013「ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究』、pp.259-268、熊本大学文学部
- 名護市教育委員会 1980『久志貝塚緊急発掘調査概報』名護市文化財調査報告書－2
- 名護市教育委員会 2005『大堂原貝塚－古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書－』名護市文化財調査報告書第17集
- 名瀬市教育委員会 2005『小湊フワガネク遺跡群Ⅰ 学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書七
- 南城市教育委員会 2011『市内遺跡発掘調査報告書－新原貝塚・知名グスク－』南城市文化財調査報告書第10集
- 西之表市教育委員会 1995『嶽ノ中野B遺跡 農農道整備事業（能野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（8）
- 西之表市教育委員会 2019『内城址・上能野貝塚 西之表市埋蔵文化財発掘調査概報 市内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査概報』
- 南種子町教育委員会 2007『広田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）
- 宮城弘樹 2000「貝塚時代後期土器の研究（Ⅱ）－後期遺跡の集成－」『南島考古』第19号、pp.45-62、沖縄考古学会
- 宮城弘樹 2009「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅳ）－大当原式土器とその概念整理－」『廣友会会誌』第5号、pp.19-34 廣友会
- 宮城弘樹 2013「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅴ）－アカジャンガー式土器の概念整理－」『廣友会会誌』第6号、pp.11-20 廣友会
- 宮城弘樹・安座間充 2013「沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.231-247、熊本大学文学部
- 山野ケン陽次郎 2010「広田上層タイプ貝符に関する一考察」『南島考古』第29号、pp.33-50、沖縄考古学会
- 山野ケン陽次郎 2013「ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄諸島』pp.278-294、熊本大学文学部
- 山野ケン陽次郎 2016「兼久式土器に共伴する貝製品の年代と変遷」『第8回奄美考古学会発表資料』奄美考古学会
- 山野ケン陽次郎 2019「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』、pp.169-184、奄美考古学会
- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『種子島 広田遺跡（本文編）』、pp.311-328、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 興嶺友紀也 2019「貝塚時代後2期における広域土器編年の設定」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』

図出典

図3 1 (中川原貝塚：仲宗根ほか2001)、2・3 (具志原貝塚：沖縄県教育委員会1985、具志堅原図)、4・20 (北原貝塚：沖縄県教育委員会1992)、5 (馬毛島椎ノ木遺跡：熊本大学文学部考古学研究室1980)、6 (広田遺跡：南種子町教育委員会2007)、7・17 (火之上山遺跡：鹿児島県立埋蔵文化財センター1996)、8・9 (スセン當貝塚：新里貴之2000a)、10・11・22 (前原貝塚：宜野座村教育委員会2005)、12・21 (平敷屋トウバル遺跡：沖縄県教育委員会1996、12は第19図12・具志堅原図)、13・14 (嶽ノ中野B遺跡：西之表市教育委員会1995)、15 (西之表市国上：旭1975)、16 (上能野貝塚：旭1975)、18・19 (マツノト遺跡：笠利町教育委員会2006)、23：(具志原貝塚：沖縄県教育委員会1997)、24 (勝連城跡：うるま市教育委員会2011)

図6・7 1・2・24 (大堂原貝塚：名護市教育委員会2005)、3・4・18～20・25～27・34・35 (フワガネク遺跡：名瀬市教育委員会2003、35は奄美市教育委員会2007)、5・6・10 (清水貝塚：具志川村教育委員会1989、6は報告書未掲載資料、具志堅原図)、7・11 (新原貝塚：南城市教育委員会2011)、8・9 (北原貝塚：沖縄県教育委員会1992)、12 (平敷屋トウバル遺跡：沖縄県教育委員会1996、第29図21・具志堅原図)、13 (勝連城跡：うるま市教育委員会2011)、14・15：(マツノト遺跡：笠利町教育委員会2006、15は木下尚子2019)、16・17 (熱田貝塚：沖縄県教育委員会1979)、21～23：(前原貝塚：宜野座村教育委員会2005)、28～30 (具志川島遺跡群：伊是名村教育委員会1977)、31・32 (久志貝塚：名護市教育委員会1980)、33 (用見崎遺跡：熊本大学文学部考古学研究室1995)、36 (米須貝塚：糸満市教育委員会1985)、37 (伊礼原D遺跡：北谷町教育委員会2017)、38 (喜如嘉貝塚：沖縄県教育委員会1994)、39 (具志川グスク：うるま市教育委員会2006)

図8 1・2 (米須貝塚：糸満市教育委員会1985)

第2章 貝製品の彫刻技術

1. 広田下層式貝符の彫刻技術に関する研究

山野ケン陽次郎

YAMANO Kenyojiro

熊本大学埋蔵文化財調査センター

Kumamoto University Research Center for Buried Cultural Properties

比嘉保信

HIGA Yasunobu

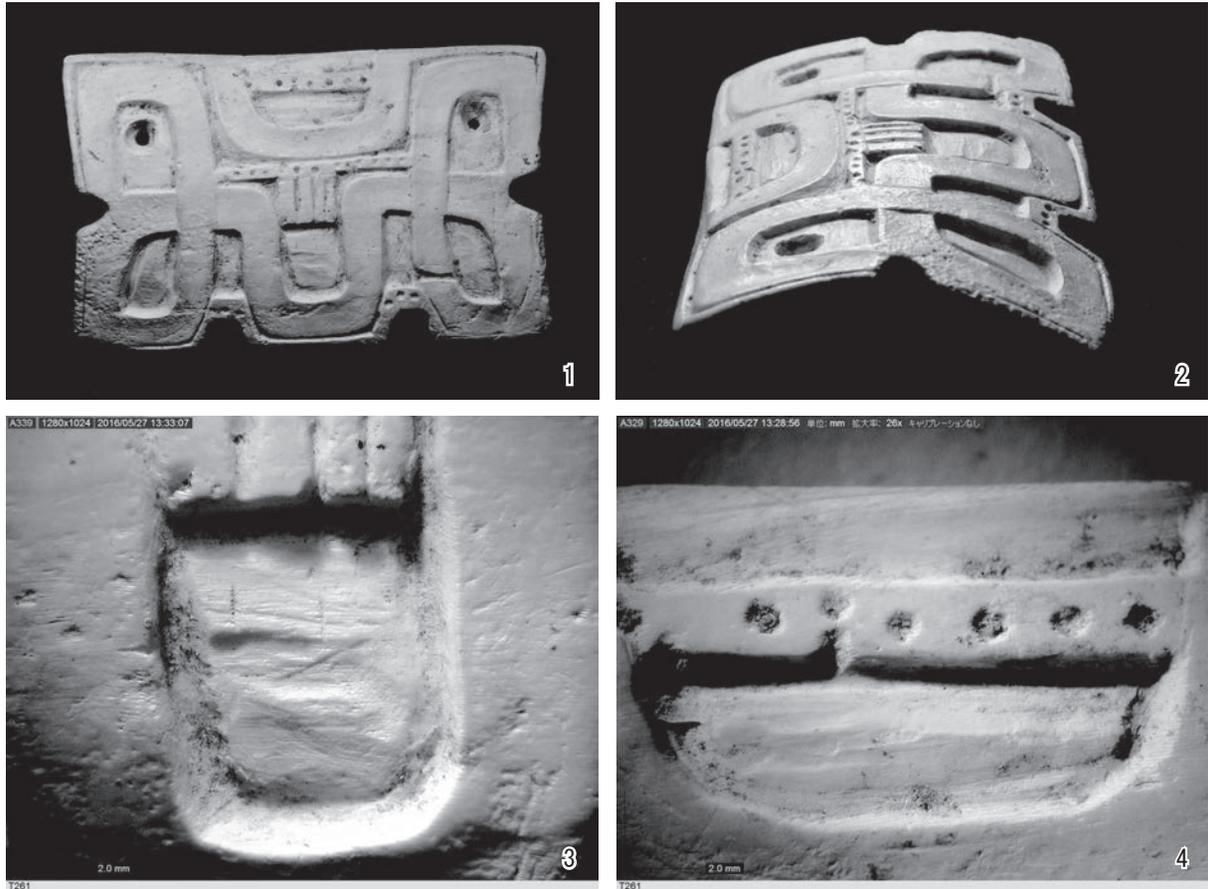
はじめに

琉球列島¹⁾は日本列島の南側に連なる約1,100kmの弧状列島である。その最北端に位置する種子島は九州島から40km程の距離で海を隔てて隣接しており、旧石器時代以降、九州先史文化の影響を受けてきた。そんな中で南種子町広田遺跡の出現は、種子島だけでなく琉球列島史において一つの画期といえるだろう。広田遺跡は種子島南東部広田海岸の海岸砂丘上に立地する古墳時代を主とする埋葬地である（桑原編2003）。埋葬人骨には奄美や沖縄地域で産出する貝類を用いた様々な貝製装身具が伴うだけでなく、九州在地の土器やガラス玉などの搬入品も出土する。そのため広田遺跡は奄美群島・沖縄諸島や九州島以北の古墳築造地域との交流・交易関係について議論する上で極めて重要である（山野2012、中村2014、橋本2018他）。本稿で論じる「貝符」は広田遺跡で最も代表的な貝製品である。貝符の表面には精緻な彫刻文様が施されており、1950年代の発見当初から全国的な注目を浴び、これまでに様々な研究者によって起源論や型式学的研究が展開されてきた（矢持2003、山野2019他）。しかし、その彫刻技術に関する研究は、単純な観察も含めて、既往の研究ではほとんど実施されてこなかった。近年、貝符の彫刻に鉄製工具が用いられたという見解が示されている（山野2010）。古墳時代、種子島では鉄生産の明確な痕跡は確認されておらず、鉄製工具の有無の問題は、九州島以北の古墳築造地域との交流・交易内容を復元する上で重要な課題といえる。本稿では広田下層式貝符²⁾の彫刻技術に関する研究を実施する。

通常、製作技術の復元はその完成品だけでは困難で、生産地から出土する製作途上品や失敗品を含む残欠品、製作に使用したと考えられる加工工具の存在によって実証性が高い分析が可能となる。広田遺跡は消費地であり生産遺跡ではないため、これら資料を欠いている。本稿ではこの資料的制約を前提として研究を進めた。本研究が嚆矢となり、製作技術的研究が進展することを期待する。

1. 研究の目的と方法

本稿では、種子島南種子町広田遺跡で出土する広田下層式貝符を対象とし、貝符表面に刻まれた文様の彫刻技術の復元を目的とする。研究方法として、第一に広田下層式貝符の彫刻痕跡を肉眼やデジタルマイクロスコープで観察し、その技術的特徴を明らかにする。次に鉄製工具や石製工具を用いて、実物を基にした貝符のレプリカを作成することで、観察結果と合わせて工具の刃部形態や素材について考察する。最後に種子島、奄美群島、沖縄諸島において出土した広田下層式貝符を集成し、技術的観点から比較をおこなう。以上の作業を経て、貝符の彫刻技術の一部を明らかにし、琉球列島史において彫刻の施された広田下層式貝符が出現する意味と背景を考察したい。



1・2はマイクロレンズによる接写撮影、3・4はデジタルマイクロスコープによる撮影（貝符はT261）

図1 デジタルカメラとUSBデジタルマイクロスコープDinoLite-edgeによる貝符彫刻痕の記録

2. 調査と記録方法

2.1 調査経緯

本研究にあたり、2017年から2019年度にかけて、南種子町広田遺跡で出土した広田下層式貝符と、琉球列島で出土する広田下層式貝符および関連資料の調査を実施した。また、同時に広田遺跡出土貝符のレプリカ作成を実施している。調査日程は以下の通りである。なお、遺物に関する調査、分析は山野が実施し、貝符のレプリカ作成については比嘉が担当した。

2017年6月3・4日 於：広田遺跡ミュージアム、南種子町教育委員会

・科学研究費メンバーとの研究会開催。山野と比嘉による今後の方針等打ち合わせ実施。

2017年7月29・30日 於：鹿児島県歴史資料センター黎明館

・広田遺跡出土貝符88点について、デジタルマイクロスコープVHX-5000で3D計測を実施。

2017年10月19日 於：鹿児島県歴史資料センター黎明館

・広田遺跡出土貝符3点をUSBデジタルマイクロスコープDinoLite-Edgeで動画撮影。

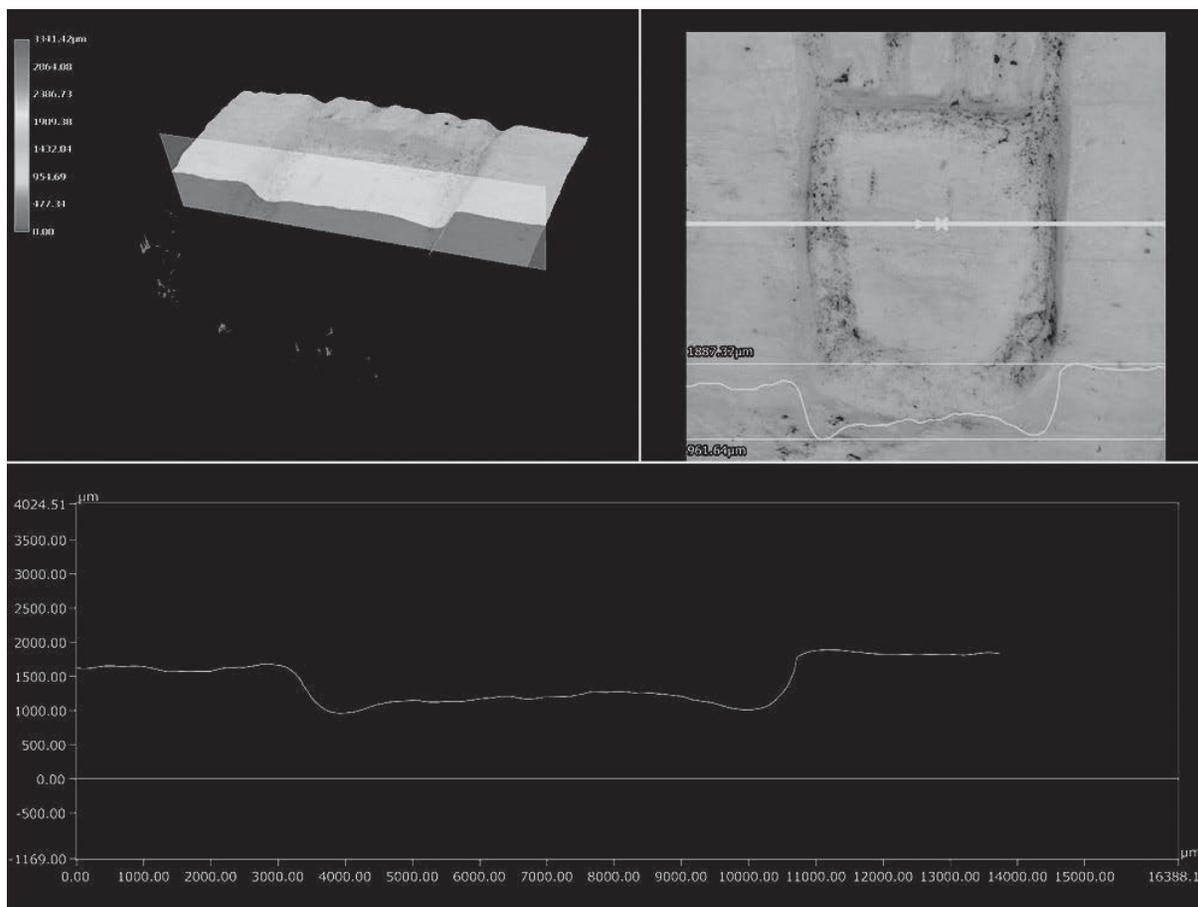
2017年11月17日 於：沖縄県立博物館・美術館

・清水貝塚出土貝符を観察。山野と比嘉で記録方法など今後の研究方針等の打ち合わせ実施。

2018年6月5日 於：熊本大学文学部

・科学研究費メンバーとの研究会開催。

2019年5月13～15日 於：那覇市教育委員会・北谷町教育委員会



左上は斜め俯瞰3D画像データ、右上は俯瞰3D画像データ、下は3Dプロファイル測定データ (T261)

図2 デジタルマイクロスコープ VHX-5000による貝符彫刻痕の記録

- ・鏡水箕隅原C遺跡、平安山原B遺跡出土貝符の実測、USB デジタルマイクロスコープ DinoLite-Edge での観察、記録を実施。

2019年5月30日 於：熊本大学理学部

- ・デジタルマイクロスコープ VHX-5000で広田遺跡出土貝符の3D計測データを整理、解析。

2019年12月11日 於：鹿児島県立埋蔵文化財センター

- ・屋嶋遺跡出土貝符の USB デジタルマイクロスコープ DinoLite-Edge による観察、記録を実施。

2019年12月12・13日 於：鹿児島県歴史資料センター黎明館

- ・広田遺跡出土貝符の USB デジタルマイクロスコープ DinoLite-Edge、マイクロレンズによる写真撮影記録を実施。

2.2 デジタルマイクロスコープ等による観察記録方法

貝符の彫刻痕の観察には、ルーペを用いた肉眼観察に加え、マイクロレンズを装着したデジタルカメラ、接写と計測が可能な USB デジタルマイクロスコープ、3D計測の可能なデジタルマイクロスコープを使用した。マイクロレンズを用いたデジタルカメラによる記録では、貝符の正面写真に加え、彫刻加工痕が明瞭になるよう光源の設置位置を変更しながら、貝符の側面や斜め俯瞰方向からの接写撮影を実施した(図1-1・2)。本記録によって貝符の全形や質感、立体感を示すことが可能である。また、株式会社オプトサイエンスの USB デジタルマイクロスコープ DinoLite-Edge を使用し、資料の彫刻痕の記録と観察を目的とする拡大写真撮影を実施した(図1-3・4)。本機器は計測機

能や深度合成機能を有しており、貝符の彫刻痕跡についてその詳細をスケール付きで示すことが可能である³⁾。加えて、株式会社キーエンスのデジタルマイクロスコープVHX-5000を使用し、3D計測を実施した(図2)。本機器では3Dプロファイル測定データを用いて、貝符彫刻の断面形状を記録することができる。これによりこれまで知り得なかった加工痕の詳細な断面形態を可視化することが可能となった。本機器では彫刻の深さや幅を計測し、数値化することができた⁴⁾。

3. 広田下層式貝符の彫刻痕に関する分析

3.1 彫刻痕の名称と種類

広田遺跡出土の広田下層式貝符を上記方法で観察したところ、複数の特徴的な彫刻痕を確認することができた(図3)。広田下層式貝符は、大型イモガイ科の仲間であるアンボンクロザメ *Conus litteratus* やクロフモドキ *Conus Leopardus* など白色の巻貝を素材としている。これらイモガイ科原貝の体層から板状の素材を切り取り、研磨や抉りを施して外形を整える。とくに貝符表面の研磨は徹底しており、アンボンクロザメやクロフモドキに特徴的な黒色斑点模様が貝符表面に残存することはごく稀である。この表面側を彫刻工具によって削ることで陽刻の文様が浮かびあがる。本稿では図3に示したとおり、文様を構成する浮き出た部分を「文様帯」と呼び、このうち帯の幅が比較的広く、貝符の四隅に展開し、主体的文様を構成する文様帯を「主文様帯」と呼び、主文様帯に比較して帯幅が狭く、主文様帯の間を充填するような文様帯を「副文様帯」と呼称する。また、彫刻により彫られて下がった部分を「彫刻痕」と呼び、このうち工具の先端形状が復元できるような一動作分の加工痕跡を「単一彫刻痕」と仮称する。貝符の彫刻痕には、大きく分けて以下の5つが認められる(図3～5)。各彫刻痕は同時に貝符への彫刻技法を表している。

線彫り：幅2mm未満の直線、曲線による線状の彫刻痕。彫刻痕の断面形状がV字あるいはU字状を呈する(図3-左上、図4-5)。

面彫り：幅3mm以上で、線彫りと異なり面的に彫り下げられた彫刻痕。彫刻痕の断面形態が略凹字状を呈する(図2)。面彫り底面には単一彫刻痕が明瞭に確認されることがある。この面彫りの隅部へ明確な稜線を持つ角を設ける彫刻痕を「角出し」と呼ぶ(図3-上中央、図3-1)。文様帯と面彫りとの境を一段彫り下げることによって文様帯を浮き立たせるような彫刻痕を「縁出し」と呼ぶ(図3-上中央、図3-1、図4-6)。

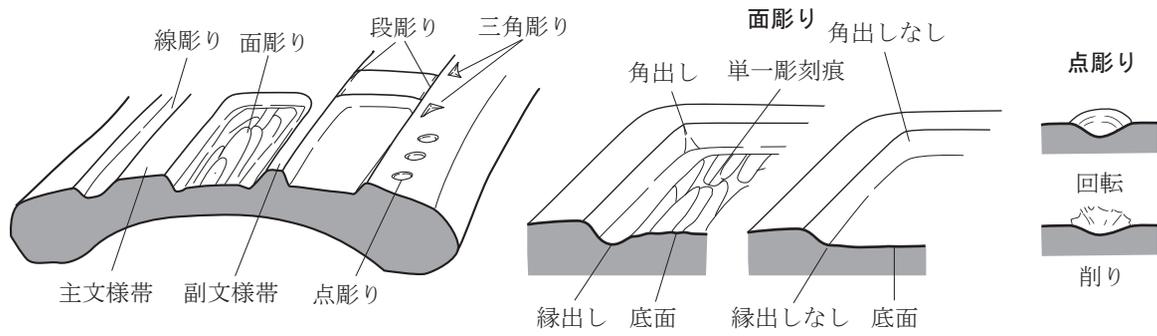
三角彫り：平面三角形の彫刻痕。面彫りと異なり、彫刻範囲は狭く、彫刻痕の底面を持たない(図3-2)。一般的に面彫りよりも彫り方が浅い。

段彫り：文様帯同士が交差する部分において、視覚的に上下に交差するように片側の文様帯表面をわずかに掘り下げた彫刻痕。主文様に多く、副文様にもまれに施される(図5-7)。

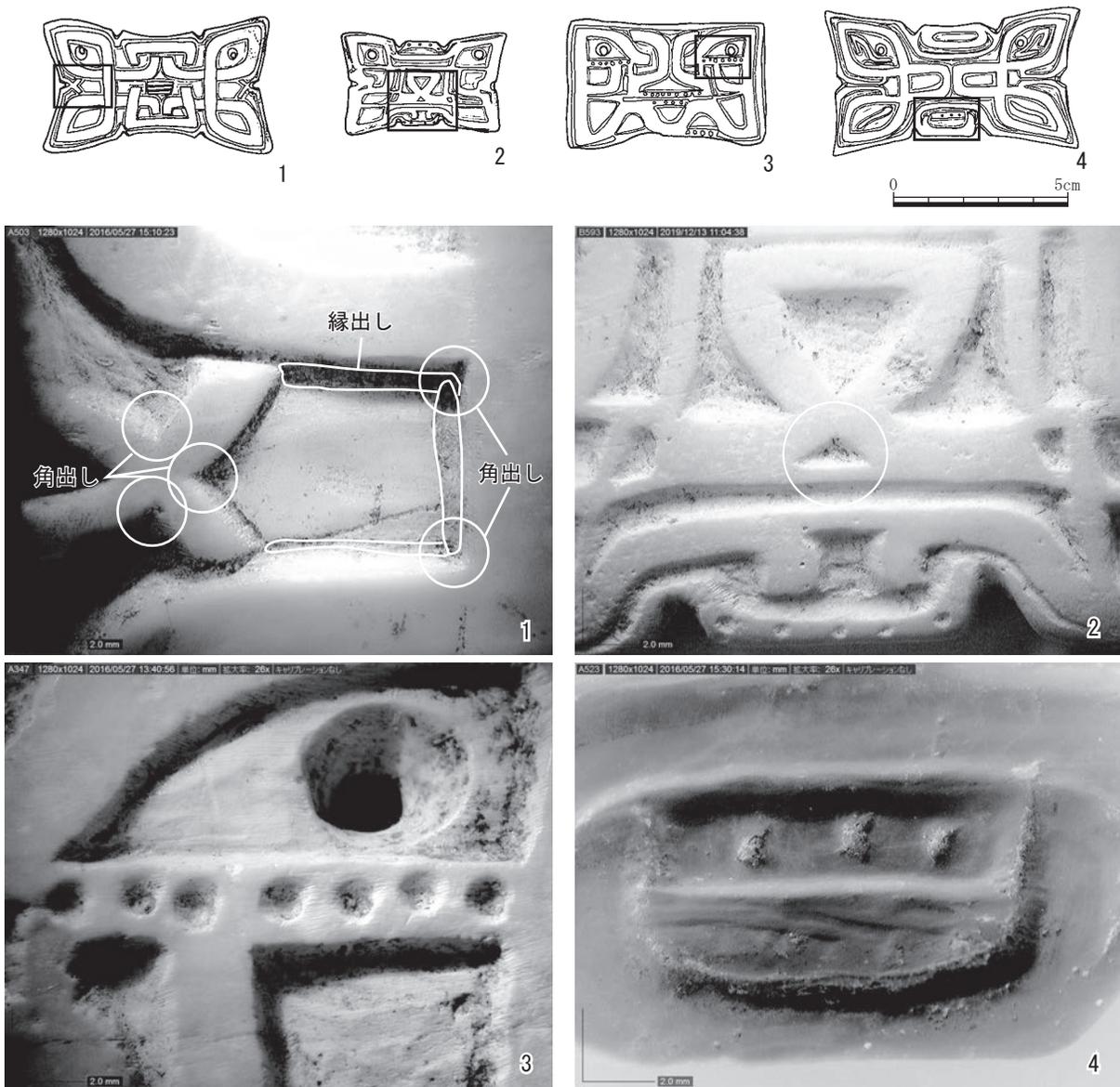
点彫り：直径1～3mm程の円形の彫刻痕(図3-右上)。円形の縁が滑らかで内側に同心円状の線条痕が走る、工具の「回転」による彫刻痕と(図3-3)、縁が粗く多方向から中心に向かって線条痕の走る、工具の「削り」による彫刻痕がある(図3-4)。前者が多く、後者が少ない。

3.2 彫刻痕の変遷

広田遺跡出土の広田下層式貝符には、上記の彫刻技法を組み合わせることによって文様が構成されている。主たる彫刻技法は線彫りと面彫りで、これに三角彫り、段彫り、点彫りが加わる。今回、観察できた広田下層式貝符55点について上記彫刻方法の有無を表にまとめた(表1)。表では各貝符について、山野が広田遺跡の埋葬遺構を、埋葬方法、埋葬施設、共伴遺物を分析して設定した広田遺跡下層埋葬段階に比定して古い段階から表記している(山野2012)。また、広田下層式貝符は外形が略

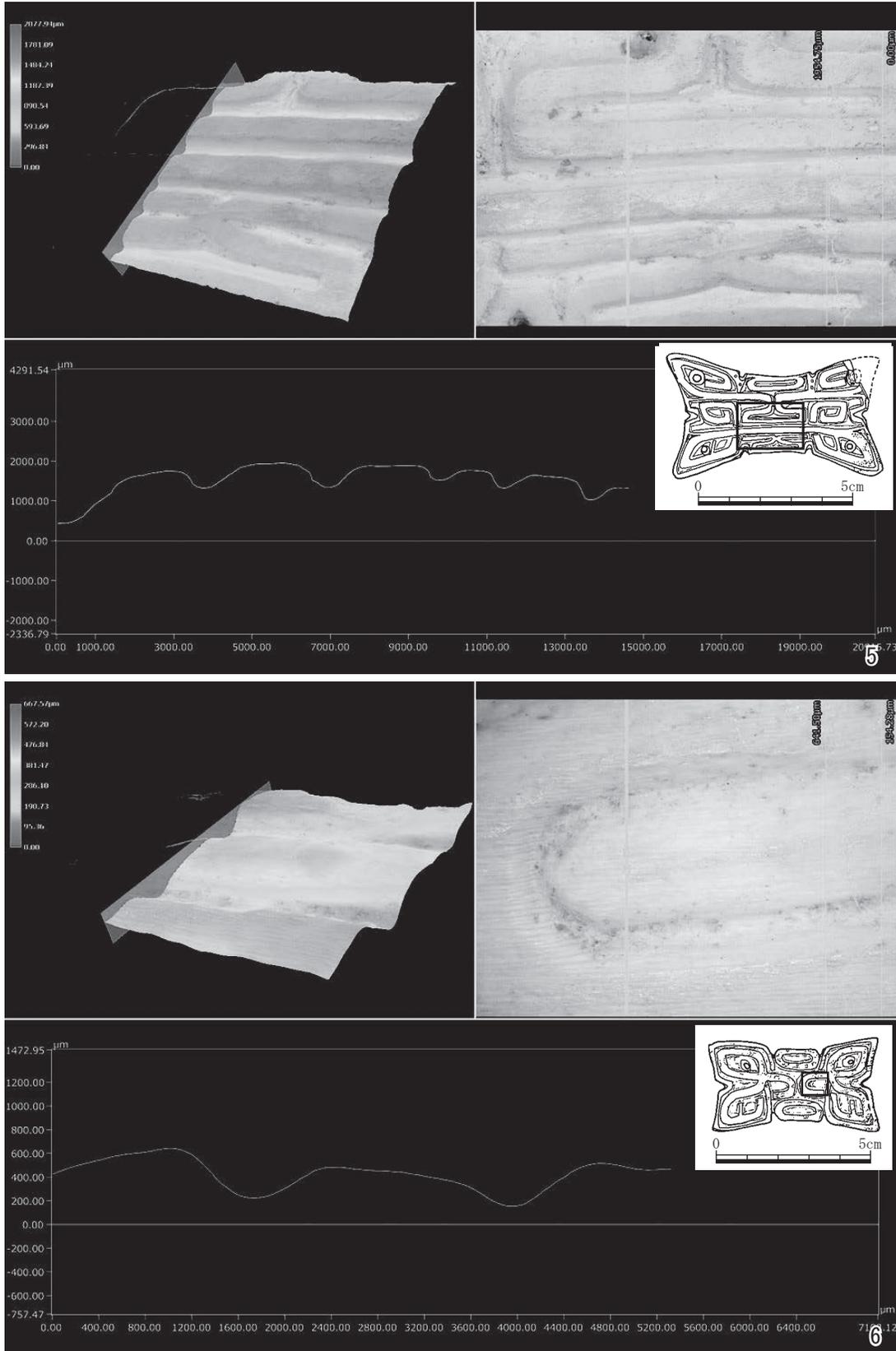


貝符にみられる文様帯と彫刻痕（彫刻技法）の名称と模式図



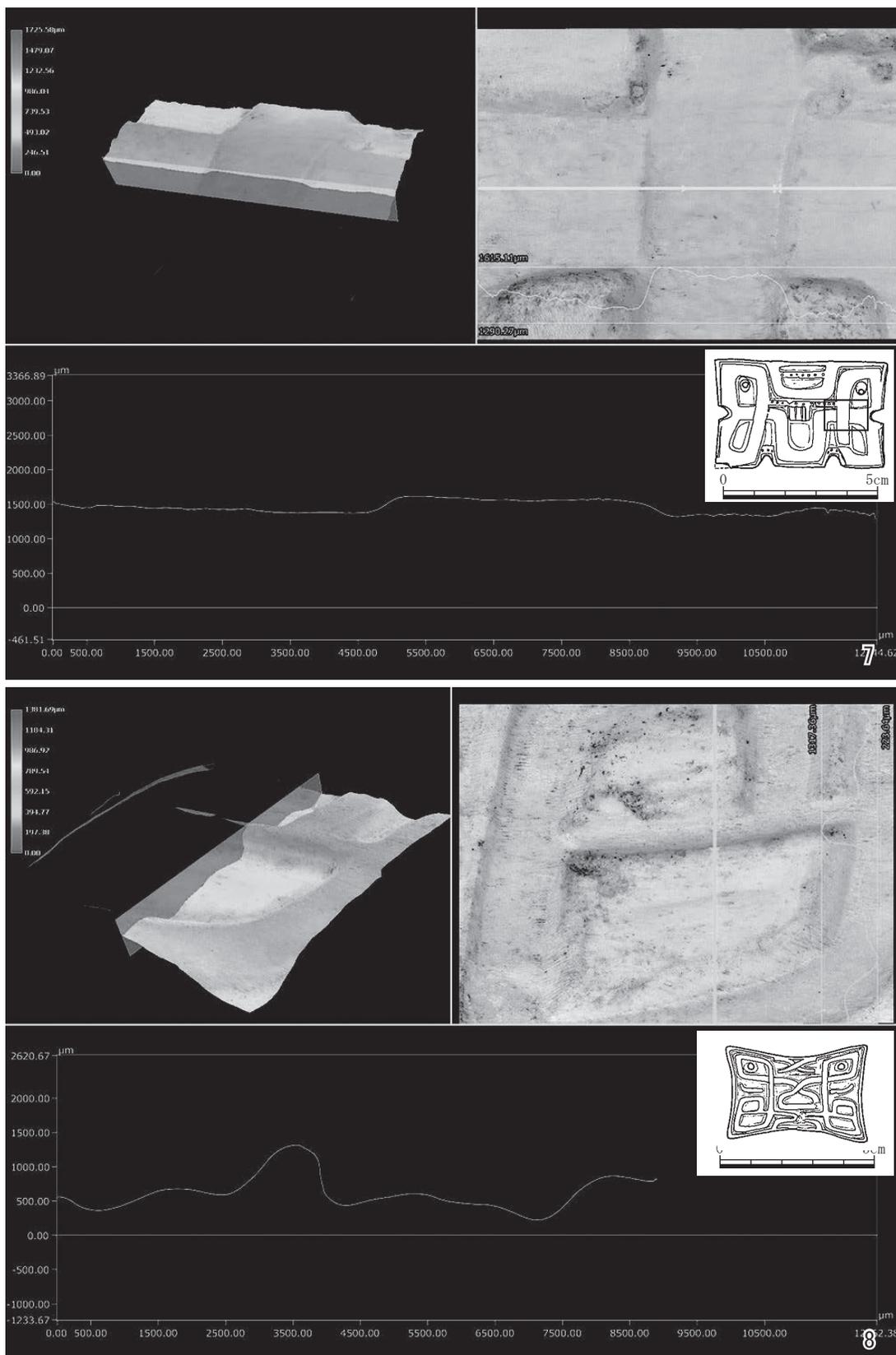
1 (T366) : 角出しと縁出し 2 (T171) : 三角彫り 3 (T263) : 点彫り (回転) 4 (T368) : 点彫り (削り)
※いずれも USB デジタルマイクロスコープ DinoLite-Edge による撮影。4 のみネガ画像。

図3 貝符にみられる彫刻痕 1



5 (T168) : 線彫り 6 (T169) : 面彫り・縁出し ※いずれも VHX-5000 による 3D 計測画像

図4 貝符に見られる彫刻痕2



7 (T261) : 段彫り 8 (T171) : 浮線彫り ※いずれも VHX-5000 による 3D 計測画像

図5 貝符に見られる彫刻痕3

表1 貝符彫刻痕観察表

遺跡	市町村	図番号	分類	埋葬段階	状態	線彫	面彫			三彫	段彫	点彫り		浮彫	備考	
							縁出	縁無	角出			削	回			
広田遺跡	南種子町	T258	I	3~5	△	○	○	△	○	○	△	×	○	×	A地区4・9号人骨	
		T375	I	3	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×	DIV地区1号人骨	
		T376	I	3	○	○	○	○	×	○	×	×	×	○	△	DIV地区1号人骨
		T1	I	4	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	S1号人骨
		T168	I	4	○	○	○	△	○	△	×	×	○	×	×	C地区5号人骨
		T169	I	4	△	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	C地区5号人骨
		T170	I	4	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	C地区5号人骨
		T171	I	4	○	○	○	△	○	○	×	×	○	×	○	C地区5号人骨
		T172	I	4	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	○	C地区5号人骨
		T173	I	4	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×	C地区5号人骨
		T261	I	4	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	×	A地区5号人骨、文様帯凹面
		T262	I	4	○	○	×	○	○	△	×	×	×	×	×	A地区5号人骨
		T263	I	4	○	○	○	×	○	×	×	×	○	△	△	A地区5号人骨
		T264	I	4	○	○	○	△	○	×	○	×	×	×	△	A地区5号人骨
		T265	I	4	○	○	○	△	×	×	○	×	×	×	△	A地区5号人骨
		T266	I	4	△	○	△	△	△	×	×	×	×	○	×	A地区5号人骨
		T377	I	4	△	○	○	△	○	×	×	×	×	×	×	DVII地区1号人骨
		T174	I	5	×	○	○	△	○	×	○	×	○	×	×	C地区11号人骨
		T175	I	5	△	○	○	○	○	△	○	×	×	×	×	C地区11号人骨
		T176	I	5	×	○	○	×	○	○	○	×	○	○	△	C地区11号人骨
		T177	I	5	×	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	C地区11号人骨
		T361	I	5	○	○	△	○	○	×	○	×	×	×	○	DII区4号人骨
		T362	I	5	△	○	○	△	○	×	×	×	×	×	×	DII区4号人骨
		T366	I	5	○	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	DIII地区2号人骨
		T367	I	5	○	○	△	○	○	×	○	×	×	×	△	DIII地区2号人骨
		T368	I	5	○	○	○	△	○	×	×	○	×	×	×	DIII地区2号人骨
		T369	I	5	○	○	△	○	○	×	△	×	×	×	×	DIII地区2号人骨
		T370	I	5	○	○	△	○	○	×	×	×	×	×	×	DIII地区2号人骨
		T371	I	5	○	○	△	○	○	×	○	×	○	×	×	DIII地区2号人骨
		T372	I	5	○	○	×	○	○	×	○	×	○	×	×	DIII地区2号人骨
		T373	I	5	○	○	○	×	○	×	×	△	○	△	△	DIII地区2号人骨
		T374	I	5	○	○	○	×	○	×	×	×	○	×	×	DIII地区2号人骨
		T182	II	6	○	○	○	×	△	×	×	○	×	○	×	C地区12号人骨
		T184	II	6	×	○	△	△	○	×	○	-	-	-	×	C地区12号人骨
		T185	II	6	△	○	○	△	○	×	○	×	×	×	△	C地区13号人骨
		T186	II	6	△	○	○	○	○	×	×	×	×	×	△	C地区13号人骨
		T187	II	6	○	○	○	△	○	×	△	×	×	×	○	C地区13号人骨
		T549	II	6	△	○	△	△	○	×	×	×	×	×	△	C地区13号人骨
		T249	I	6	○	○	×	△	△	×	×	×	×	×	×	A地区1号人骨、彫刻浅い
		T250	II	6	△	○	×	○	△	×	×	×	×	×	×	A地区1号人骨、彫刻浅い
		T251	II	6	○	○	△	○	○	×	△	×	×	×	×	A地区1号人骨
		T252	II	6	○	○	○	△	○	×	×	×	×	×	×	A地区1号人骨
		T253	II	6	○	○	△	○	△	△	×	×	×	×	×	A地区1号人骨
		T254	II	6	△	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	A地区1号人骨、彫刻浅い
		T343	II	6	△	○	×	○	○	×	○	×	×	×	○	A地区7号人骨
		T344	II	6	△	○	○	△	○	×	×	×	○	×	○	A地区7号人骨
		T345	II	6	△	○	△	○	○	×	○	×	×	×	○	A地区7号人骨
		T346	II	6	○	○	△	○	○	×	○	×	○	×	×	A地区7号人骨
		T363	I	6	△	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	DIII地区2号人骨直上集骨
		T364	II	6	○	○	○	×	△	×	×	×	×	○	×	DIII地区2号人骨直上集骨
T365	II	6	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	△	DIII地区2号人骨直上集骨		
T550	II	6	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	△	DIII地区2号人骨直上集骨		
T548	I	6	△	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	EX地区1号人骨、彫刻浅い		
T2	II	7	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	N1号人骨		
T3	II	7	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	N1号人骨		
鳥ノ峰遺跡	中種子町	図11-5	I	3・4	×	△	-	-	-	-	-	-	-	-	橋口編1997	
		図11-6	I	3・4	△	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橋口編1997
		56	I	3・4	△	△	○	-	-	-	-	-	-	-	-	橋口編1997
		59	-	3・4	△	△	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウチ遺跡	奄美市	図11-7	I	-	○	×	○	△	○	○	×	×	×	×	河口他編1978	
屋鈍遺跡	宇検村	図11-13	II	-	△	○	×	△	○	×	×	×	×	×	西園編2009	
具志原貝塚	伊江村	図11-9	I?	-	○	○	△	×	○	×	○	×	×	×	沖縄県編1985	
ナガラ原東貝塚	伊江村	図11-14	II	-	○	○	×	×	×	×	○	×	×	△	新里編2001	
大堂原貝塚	名護市	図11-16	II	-	△	○	×	△	○	×	×	×	×	○	岸本他編2005	
平安山原B遺跡	北谷町	図11-15	II	-	○	○	×	△	×	×	×	×	×	○	島袋春美編2016	
平敷屋トウバル遺跡	うるま市	図11-10	I?	-	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	島袋洋編1996	
安座間原第一遺跡	宜野湾市	図11-12	I?	-	○	○	×	×	×	×	×	×	×	△	高宮・知念編2004	
鏡水箕原C遺跡	那覇市	図11-8	I?	-	×	○	×	○	○	×	○	×	○	×	仲宗根編2011	
古座間味貝塚	座間味村	図11-11	I?	-	△	○	△	×	×	×	△	×	×	×	沖縄県編1982	
清水貝塚	久米島町	図11-17	II	-	○	○	×	△	×	○	×	×	×	○	盛本編1989	
		図11-18	II	-	○	○	×	△	×	△	×	×	×	○	盛本編1989	
		図11-19	II	-	○	○	×	△	×	○	×	×	×	○	盛本編1989	
		図11-20	II	-	○	○	×	△	×	○	×	×	×	○	盛本編1989	
		図11-21	II	-	○	○	×	△	×	○	×	×	×	○	盛本編1989	

四角形のⅠ類から略台形のⅡ類へと時期的に変化するため、その分類も表記した。

分析の結果、面彫り、線彫りはⅠ・Ⅱ類の両者に恒常的に認められ、ほとんど時期差がないことが分かった。ただし、面彫りのうち縁出しが施される資料はⅡ類よりⅠ類の方が多い傾向が確認できる。また、段彫りはⅠ・Ⅱ類の両方に認められるが、これもⅠ類により多い傾向が認められる。点彫りもⅠ類が多いのに対してⅡ類は少ない。とくに第7段階に対応する広田下層式貝符のⅡ類は、今回調査した2点以外に同形状のものが9点存在するが、いずれも点彫りが認められない。広田下層式貝符に後続する広田上層式貝符には、段彫りや点彫りがほぼ認められないことから、これらの有無は時期差を表している可能性がある。三角彫りはⅠ類に多く、Ⅱ類にはほとんど施されていない。しかし、広田上層式貝符には浅い三角彫りが頻繁に施されることから、単純に時期差とはいえない。彫刻痕からみるとⅠ類とⅡ類に明確な差があるわけではなく、時期的変化傾向を持ちながらも、両者が同じ技術体系上にあると捉えることができる。

3.3 単一彫刻痕の観察と彫刻工具刃先形状の復元

次に単一彫刻痕を観察し、彫刻工具刃先の形状について復元する。保存状態の良い貝符を観察すると、面彫り底面に幅0.5～2mm程の独立した単一彫刻痕が確認できることがある。これは製作者が彫刻工具刃先を貝符に押し当てて彫った際の一動作分の彫刻痕である。この単一彫刻痕の形状から大きく分けて3種類の工具刃先形状を想定することができた。すなわち、彫刻工具刃先が丸みを帯びた丸刀、方形の平刀、そして接地面が細い三角刀の3つである(図6)。

丸刀による単一彫刻痕は、幅が広く一定か緩く湾曲し、先端がやや丸みを帯びるか鋭角に尖り、断面は浅いU字状である(図6-①、1)。平刀による単一彫刻痕は、幅が広く一定で、先端が方形か、進行方向で彫刻痕が消失しており、断面はごく浅い凹字状である(図6-②、3)。三角刀は比較的幅が狭く、先端形状が鋭角に尖るか、極細の方形で止まっており、断面形態はV字状である(図6-③、4)。同じ単一彫刻痕形状でも線幅は様々で、工具刃先形状に大小が存在したか、あるいは製作者の彫刻工具への力の入れ方や角度によって変化したと思われる(図6-5・6)⁵⁾。

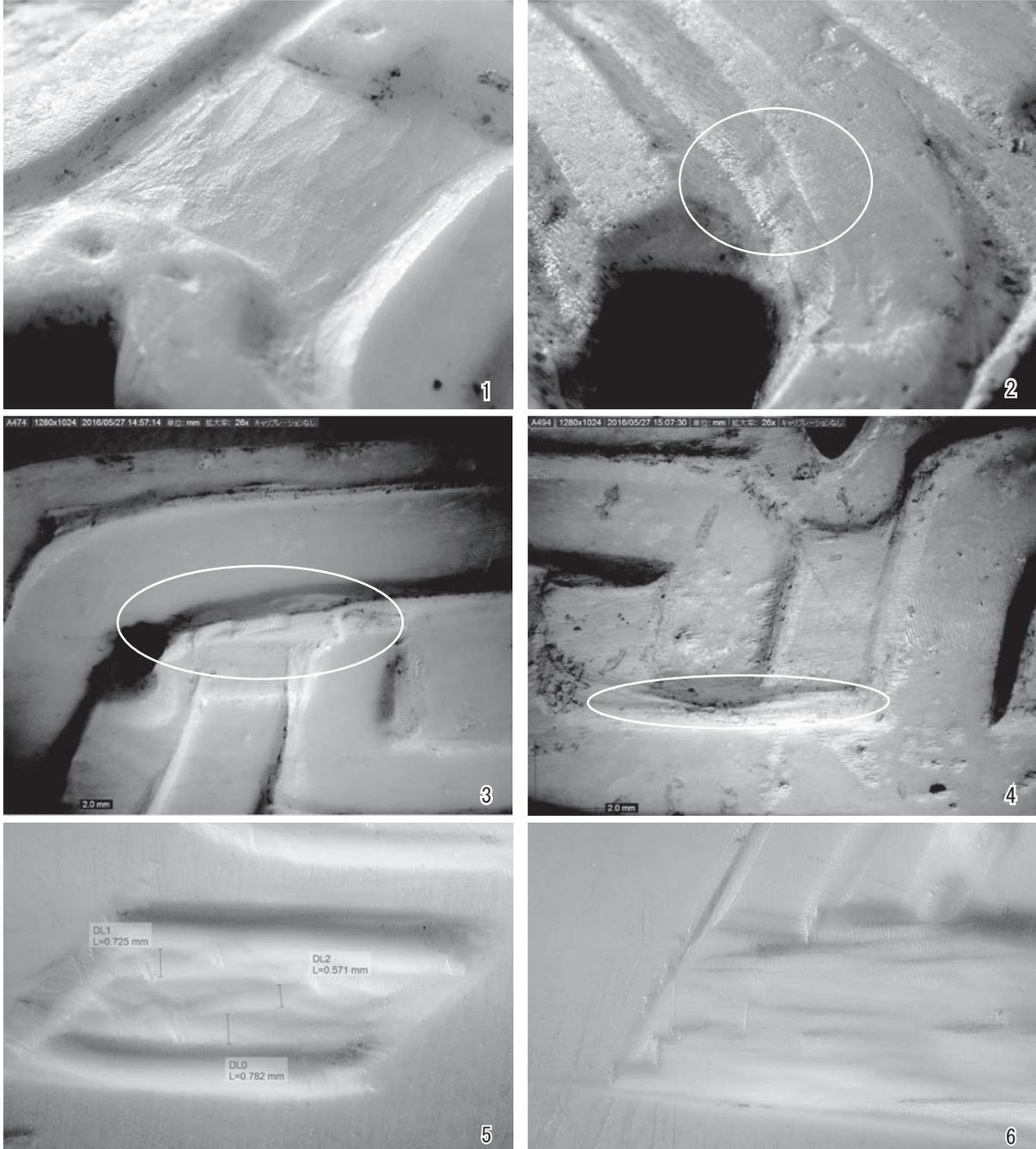
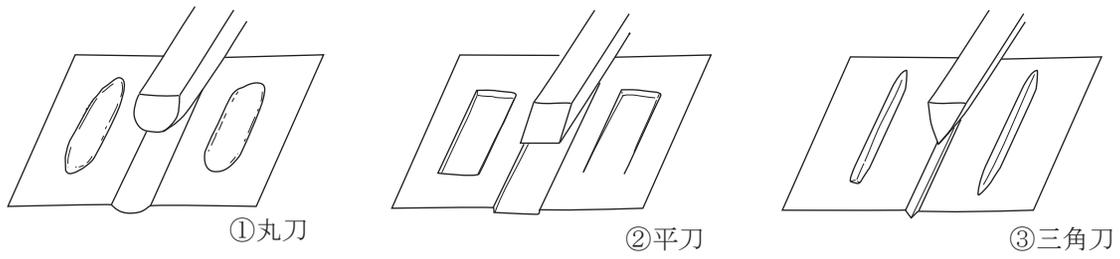
このうち最も頻繁に認められるのが丸刀による単一彫刻痕で、線彫りや面彫り、縁出し、角出し、点彫りなど様々な場面で使用されたとみられる。平刀は面彫りや角出し、段彫りなどに用いられ、三角刀は線彫りや縁出し、三角彫りなどに用いられたと想定できる。また、文様帯側面には平刀の刃先かあるいは丸刀や三角刀の刃部側面をあてて調整加工したとみられる単一彫刻痕が稀に確認できる(図6-2)。広田遺跡では製作過程の資料は存在しないが、製作工程の早い段階には文様位置の下書きが必要と想定できる。下書き後の線彫りには三角刀や丸刀を用いた可能性が高い。

また、ここで注目しておきたいのは単一彫刻痕の彫られた方向である。面彫り底面に見られる単一彫刻痕の長軸方向は、そのほとんどが貝符の外形の長軸方向、言い換えると貝符の素材であるイモガイ科の殻軸の向きと並行して走っている。これは彫刻する際、製作者が工具の刃を動かす方向に統一性があったことを示している。この彫刻方向の統一性の理由は、イモガイ科原貝が円錐形をしているため、貝符の短軸方向に並行して彫ると、貝本来のカーブが原因で刃先が進行方向に向かって抜けやすいためだと考えられる。あるいはイモガイ科の成長線が殻軸方向に無数に走っているため、これに直行するように彫ると工具の刃が引っかかることが理由であろう。

4. 実験

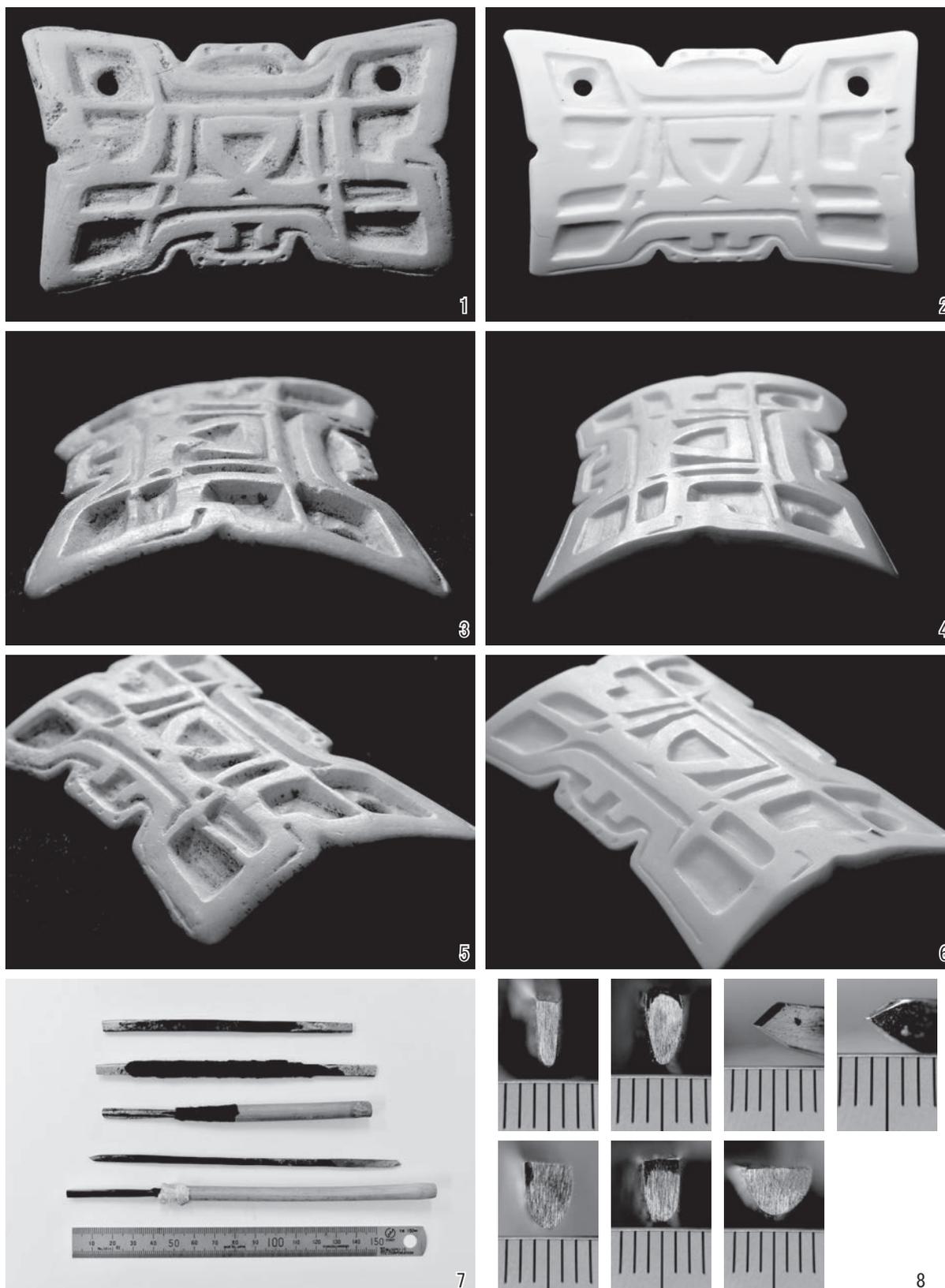
4.1 貝符レプリカの製作実験

広田下層式貝符の彫刻技術を復元することを目的とし、自作の彫刻工具を用いて貝符のレプリカを



1 (T372) : 丸刀による彫刻痕 2 (T168) : 文様帯側面への彫刻痕 3 (T364) : 平刀による彫刻痕
 4 (T366) : 三角刀による彫刻痕 5 (実験) : 鉄製丸刀による彫刻痕 6 (実験) : 鉄製平刀による彫刻痕

図6 貝符の単一彫刻痕と彫刻工具刃先想定図



1・3・5がT171実物、2・4・6が比嘉作成レプリカ、7・8が鉄製工具とその刃先形状

図7 T171とT171レプリと鉄製工具

作成する実験を実施した。本実験は、彫刻工具の作成から彫刻作業にいたるまで、貝符製作経験を十分に積んだ比嘉保信が担当した（比嘉・田里2014）。2017年から2019年までの間にC地区5号人骨に伴った貝符4点（T171を2点、T172、T173を各1点）のレプリカを作成することができた。貝符の製作に際しては、購入したイモガイ科アンボンクロザメを貝符の形状に整形し、表面の斑点模様が消えるまで研磨した後、鉛筆などで文様線を下書き、自作した各工具で彫刻をおこなった⁹⁾。彫刻工具には鉄、鉄石英、瑪瑙、硬質砂岩やサヌカイト、石英などを用いている。彫刻にあたっては工具刃先を整えるために何度も砥石で研ぎ直す工程をはさんだ。以下各実験について詳細を述べる。

4.2 鉄による製作実験

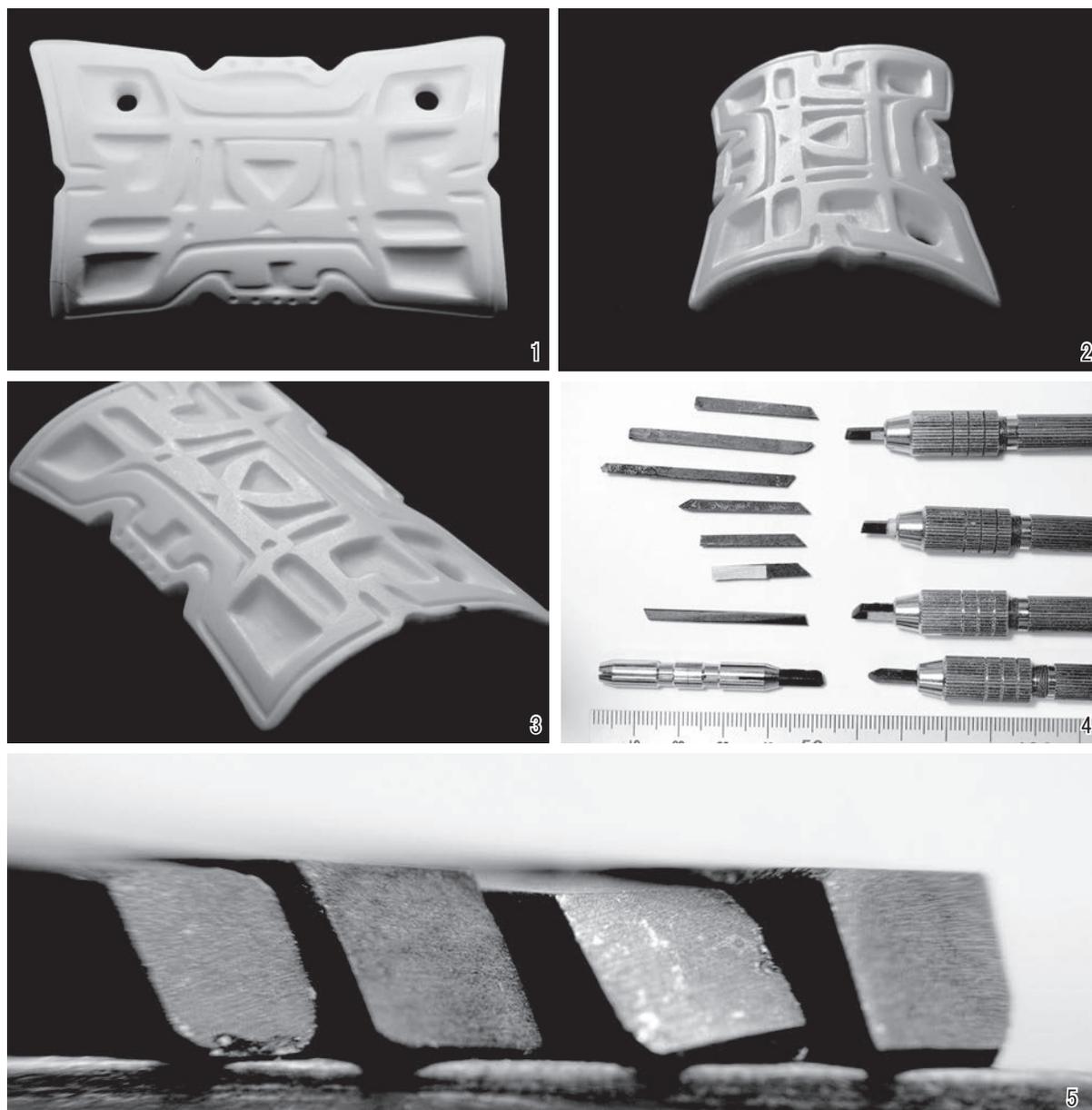
広田遺跡出土貝符のT171について鉄製工具による製作実験を実施した（図7）。鉄製工具として当初は和釘を使用したか、軟鉄であるためか彫刻自体が不可能であった。そこで、金物店でタイル針を購入し、これを焼入れした上で、厚さ2～3mm角の方形に加工した（図7-7）。工具刃先形状を砥石で整形し、サイズや角度の異なる丸刀を5種と三角刀、平刀を各1種用意した（図7-8）。実験の結果、これらの鉄製工具を用いて貝符を作成することができた（図7-2・4・6）。本工具での貝への彫刻は可能だが、やや硬さ不足を感じた。また、彫刻の際に工具刃先を押し進めると、直進性が弱いために引っかかり文様帯の縁が欠けるか乱れることがある。こうした文様帯の欠けや乱れの痕跡は広田遺跡の広田下層式貝符にもよく認められ、共通する特徴といえる。ただしこれは工具刃先の鋭利さや鉄の硬度に関係する可能性があり注意が必要である。

4.3 石材による製作実験

広田遺跡出土貝符のT171について石製工具による製作実験を実施した（図8）。工具の素材として鉱物などを販売する店舗から鉄石英（碧玉）を購入し、擦切りによって断面四角形、厚さ約3mm角の棒を作成し、砥石で刃部整形をおこなった。工具刃先形状は平刀と丸刀を数種類用意した。鉄石英製工具はモース硬度7で、現代の工具鋼を用いても傷のつかない硬い石材である。実験の結果、鉄石英製工具を用いて貝符レプリカを作成することができた（図8-1～3）。本工具での貝への彫刻は容易で順調に進行するが、鉄製工具と比べて進捗が遅い。その原因は刃先の崩れにあり、鋭さを保てないためである。ただし、刃先の鋭さが欠落しても石材自体の硬さにより一定程度継続して削ることが可能という特性が確認できた。一方で、三角彫りについては本石製工具では施せず、鉄製工具を使用して完成させた。これは三角彫りのようにごく小範囲を彫る場合、工具刃先をごく細く整形する必要があるのだが、鉄石英は刃先形状を崩すことなく、目的のサイズに整形することが困難であったためである。

続いて、広田遺跡出土貝符のT173について石製工具による製作実験を実施した（図9）。鉱物を販売する店舗から瑪瑙を入手し素材とした。瑪瑙のモース硬度は6.5～7である。実験の結果、瑪瑙製工具を用いて貝符レプリカを作成することができた（図9-2・4・6）。本特性があるため、細く薄い工具の作成が可能である。ただし、鉄石英と同じように硬い石材ではあるものの、刃先が欠けやすく切れ味を持続することができない。また、鉄製工具や鉄石英製工具と比べて彫刻に多くの時間を要した。

最後に広田遺跡出土貝符のT172について石製工具による製作実験を実施した（図10）。この実験では様々な石材の性格と有用性を知るために、素材として種子島島間産硬質砂岩、砂坂海岸採集砂岩、屋久島産石英、奈良県二上山産サヌカイト、沖縄県本部半島産チャート、北海道白滝産黒曜石を用いた。実験の結果、これら石製工具のみで貝符レプリカを作成することができた（図10-2・4・6）。これらの石材のうち石英については板状や礫状に仕上げたが彫刻に用いるのは難しかった。しかし、



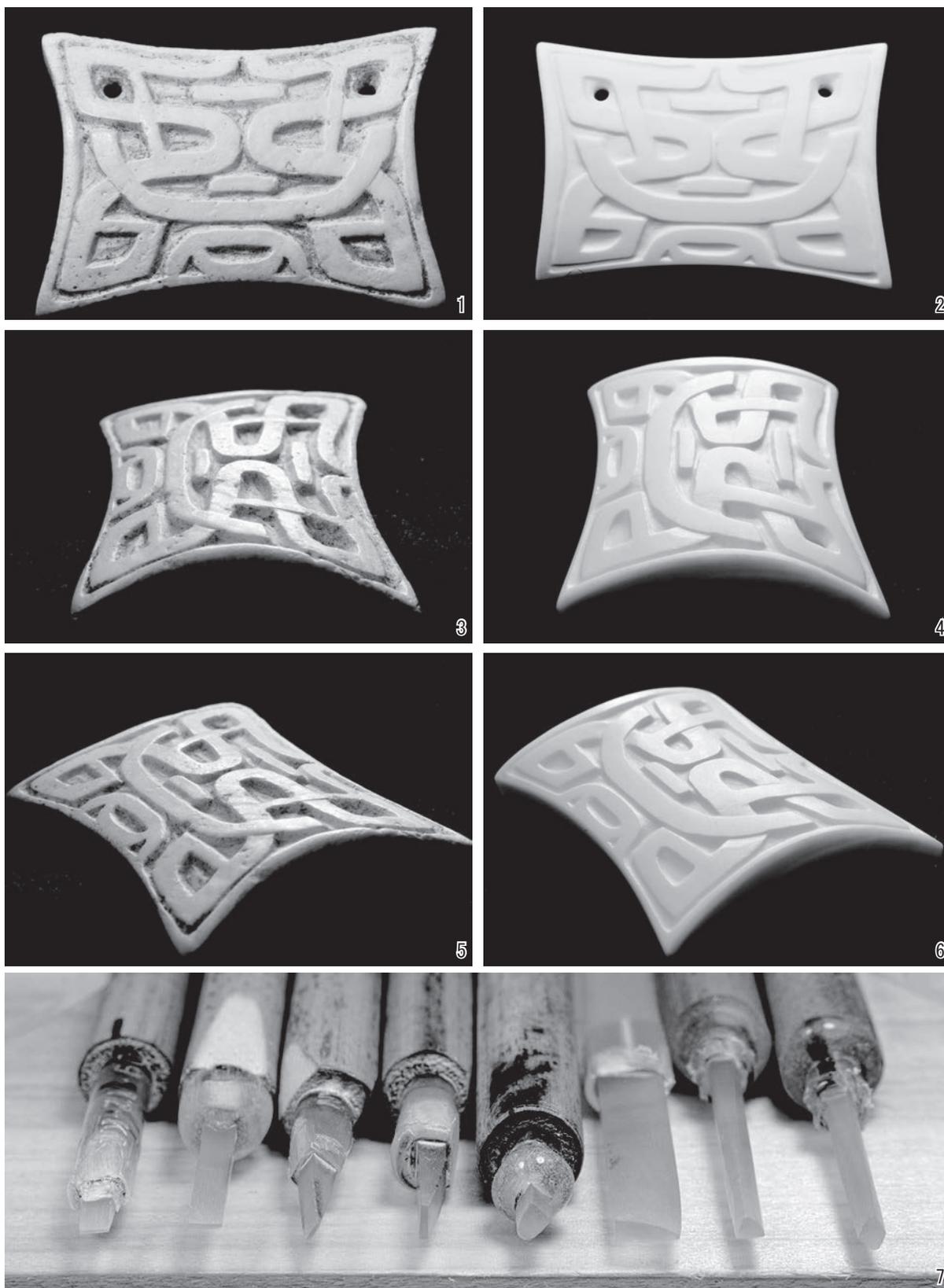
1～3がT171の比嘉作成レプリカ、4・5は鉄石英製工具その刃先形状

図8 T171レプリと鉄石英製工具

その他の硬質砂岩やサヌカイトは板状に加工することで彫刻が可能であった。チャートは礫でも工具としての役割を果たし、その刃先は強固で崩れない。本実験によって、様々な石材での貝へ彫刻が可能であることが明らかとなった。

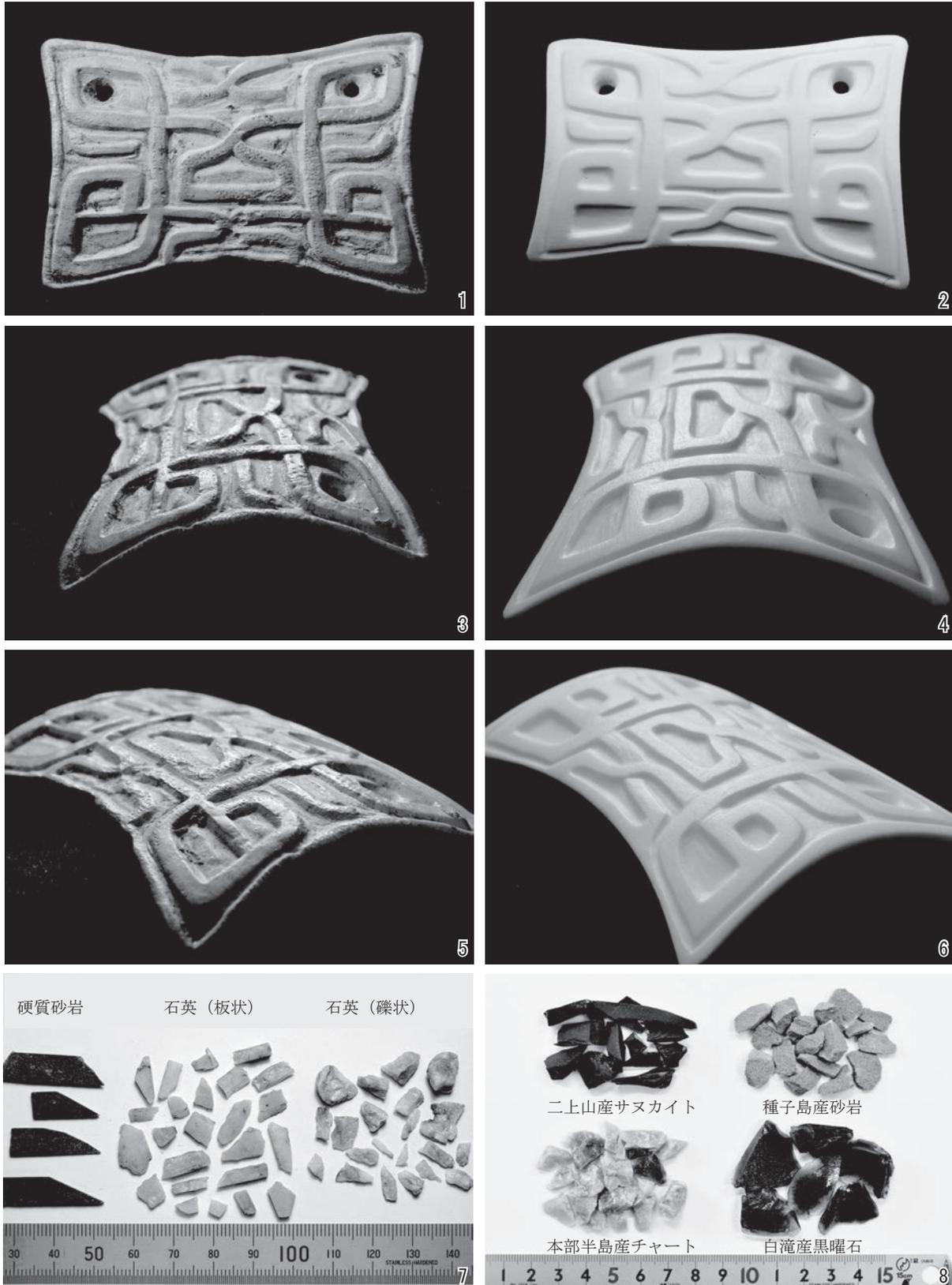
4.4 小結

今回の貝符の製作実験を通して、鉄だけでなく様々な石材を用いることで広田下層式貝符のような文様を彫刻することが可能だと判明した。これまでの研究では実験結果が示されないまま鉄である可能性が指摘されていたため、重要な成果といえる。一方で広田遺跡出土貝符の製作に石製工具を使用したと仮定するといくつかの重要な疑問が生じた。一つは、石製工具について先端を極端に細く整形すると刃先形状が保持できないものがあり、チャートやサヌカイトを除くと三角彫りのような彫刻範囲の極端に狭い文様を彫ることが困難であるという点である。また、今回製作したレプリカと実物と



1・3・5がT173実物、2・4・6が比嘉作成レプリカ、7が瑪瑙製工具の刃先形状

図9 T173とT173レプリカと瑪瑙製工具



1・3・5がT172実物、2・4・6が比嘉作成レプリカ、7・8が硬質砂岩、石英、サヌカイト製工具等

図10 T172とT172レプリカと硬質砂岩など石製工具

を比較して大きく異なる点は、面彫りの角出しや縁出し、単一彫刻痕を明確に認めることができない点である。この点については石製工具による彫刻実験の際に注意して製作したが、実物とレプリカとを比較すると、これら彫刻痕について十分に表現されているとは言い難い（図10-1～6）。角出しや縁出しの表現には、刃先形状を丸刀や平刀に整形して鋭利に研ぐ必要があり、石製工具では表現することが困難な可能性がある。また、実物の貝符の面彫り部には丸刀による幅0.7～1mm程の明確な稜を持った単一彫刻痕が頻繁に確認でき（図6-1）、こうした彫刻痕が石製工具でも可能か見極める必要がある。本実験ではこれらの点について実証できておらず、今後の課題としておきたい。また、一方で鉄製工具も古墳時代に一般的に使用されていた鉄と同じ硬度や炭素量のを容易する必要があるが、本実験ではこうした条件をクリアできていない。現状、広田下層式貝符の彫刻においては鉄製工具の利用、あるいは鉄製工具と石製工具両方の利用があったと考えておきたい。

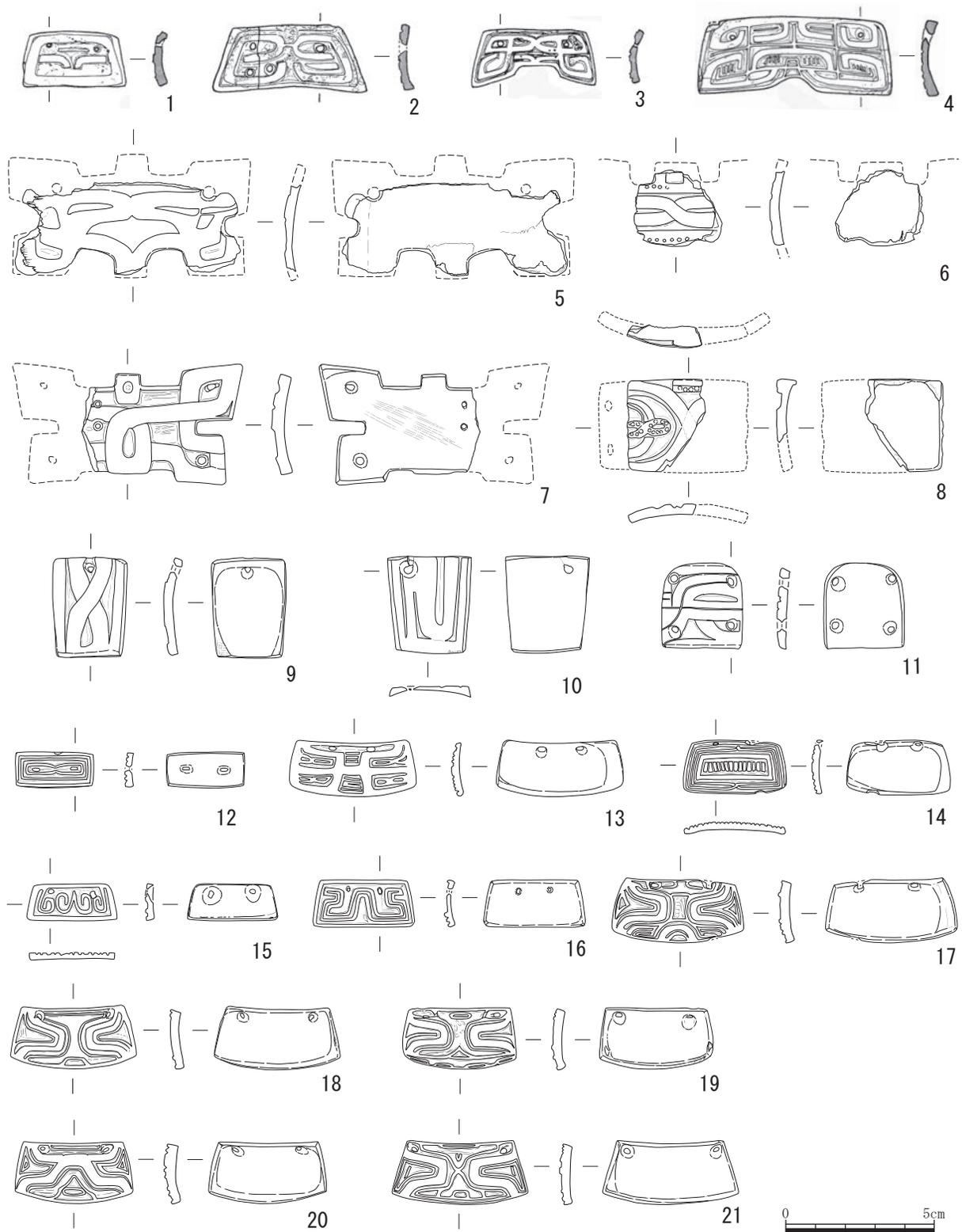
5. 琉球列島に広がる広田下層式貝符

5.1 概略

琉球列島で出土する広田遺跡以外の広田下層式貝符について概略を述べる。種子島や奄美群島、沖縄諸島において、広田下層式貝符に比定できる貝符が12遺跡で19点出土している（表1・図11）。種子島では広田遺跡だけでも100点以上の広田下層式貝符が出土するため、その数量差は著しいものがある。遺跡は沖縄貝塚時代後期の大当原式土器を主体としており、弥生時代後期後半から古墳時代に対応するとみられる。また鳥ノ峯遺跡出土貝符の年代はほぼ広田遺跡の下層埋葬古段階（山野2012の広田下層埋葬3・4段階：古墳時代前期）に対応すると思われる。貝符の外形から分類すると、広田下層式貝符Ⅰ類に形状が類似するものが4点（図11-5～7）、広田下層タイプ貝符Ⅱ類に形状が類似する台形状のものが9点（図11-13～21）、いずれにも該当しない方形のものが5点である（図11-8～12）。このうち鏡水箕隅原C遺跡で出土した貝符は（図11-8）、イモガイ科貝類の螺塔に近い体層部を殻軸に直行するよう横位に使用されており、広田遺跡にみられる一般的な素材使用部位とは異なる。製品の側縁は研磨されているが、文様は半端な位置で途切れており、本来はより大型の製品だったと思われる。Ⅱ類に比定できる資料はいずれもⅠ類と比べて小型でこの点では広田遺跡出土貝符と共通する。しかし、広田遺跡出土貝符のⅡ類の一部が台形下辺に深い抉りを持つか、あるいはやや内湾するのに対し（図11-1～4）、奄美・沖縄諸島の貝符は外湾するか（図11-13・14・17～21）、ほぼ直線のものに限られる（図11-15・16）。貝符の外形からは地域差が認められる点に注意しておきたい。

5.2 彫刻痕の比較検討

これらの資料についても彫刻痕を観察した（表1）。面彫りや線彫りによって彫刻が施されており、丸刀による単一彫刻痕跡はⅠ類・Ⅱ類にかかわらず多くの資料に認められる（図12-3～6）。また、単一彫刻痕の長軸が製品の長軸方向または原貝の殻軸と並行して彫られる点も共通しており、彫刻工具や技法に共通性があることは重要である。一方で面彫り部に縁出しが明確に施されていたのは鳥ノ峯遺跡とサウチ遺跡の2点のみで、縁出しのある資料が少ない傾向にあり、この点で広田遺跡と様相を異にする。広田下層式Ⅰ類に相当する鳥ノ峯遺跡やサウチ遺跡、あるいは鏡水箕隅原C遺跡、具志原貝塚で出土した貝符には、製品中央で交差する主文様帯上に段彫りが施されており（図12-2・5）、点彫りもこのうち3点に確認できた。段彫りや点彫りが少なからず見受けられる点は広田遺跡で出土するⅠ類と類似する。これに対し、広田下層式Ⅱ類中、段彫りが施されているのはナガラ原東貝塚の1点のみであり（図11-14）、点彫りは1例も認められなかった。Ⅱ類に段彫りが少ない傾向は広田



1～4：広田遺跡 5・6：鳥ノ峯遺跡 7：サウチ遺跡 8：鏡水箕隅原C遺跡 9：具志原貝塚
 10：平敷屋トウバル遺跡 11：古座間味貝塚 12：真志喜安座間原第一遺跡 13：屋鈍遺跡
 14：ナガラ原東貝塚 15：平安山原B遺跡 16：大堂原貝塚 17～21：清水貝塚

図11 琉球列島の広田下層式貝符 (S = 1/2)

第Ⅱ部



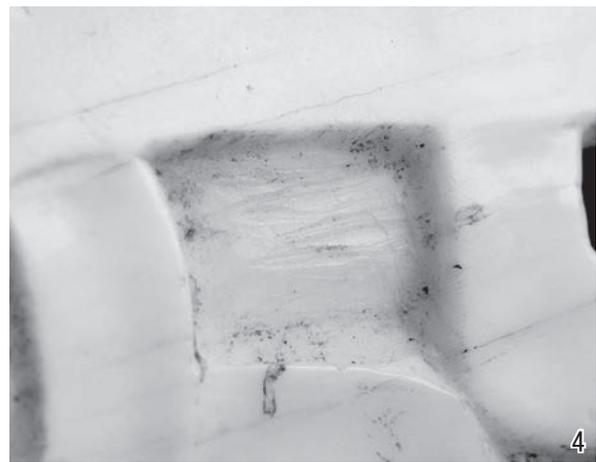
1. 浮線彫り



2. 段彫り



3. 細い丸刀による彫刻痕



4. 細い丸刀彫刻痕と角出し



5. 丸刀による彫刻痕と段彫り



6. 細い丸刀による彫刻痕と浮線彫り

1：平安山原B遺跡 2：鏡水箕隅原C遺跡 3：屋鈍遺跡 4：サウチ遺跡 5：具志原遺跡 6：清水貝塚
※1～3はUSBデジタルマイクロスコープDinoLite-Edgeで撮影、4～6はデジタルカメラで撮影

図12 琉球列島出土広田下層式貝符に見られる彫刻痕

遺跡よりも顕著であり、点彫りが施されない点は広田遺跡下層埋葬中、最も新手である第7段階に伴う貝符の一群（図11-4）と共通しており示唆的である。また、注目したいのはⅡ類のうち、平安山原B遺跡、大堂原貝塚、清水貝塚など幅1mm程度の文様帯を持つ資料である（図11-15・16・17～21）。文様帯幅とほぼ同じか、より深く周囲を彫り下げているため、文様帯がまるで浮いたように表現されている（図12-1・6）。貝符製作を実施した比嘉によると、この幅狭の文様帯を残す技法は失敗もしやすく、技術レベルが高いという。広田遺跡でもこういった加工が稀に確認することができ（図5-8）、ここでは仮に「浮文彫り」と呼んで注目しておきたい。

以上、琉球列島で出土した広田遺跡以外の広田下層式貝符の彫刻痕を確認したところ、広田遺跡との共通点と相違点を確認できた。広田下層式Ⅰ類には縁出しや段彫り、点彫りなど広田遺跡に特徴的な彫刻痕が確認できるため、両地域の貝符彫刻技術が体系的には同じ枠組みで捉えられるだろう。広田下層式Ⅱ類も段彫りの減少傾向や点彫りの消失など、広田遺跡との共通性が垣間見えるが、浮文彫りが主流であるなど、彫刻技法に地域差があると考えられる。

6. 考察

本稿では、広田遺跡で出土する広田下層式貝符の彫刻技術を復元するため、その観察を徹底した上で彫刻痕を分類し、単一彫刻痕の観察や貝符の製作実験によって、彫刻工具の刃先形状や素材について検討した。結果として、丸刀や平刀、三角刀など複数かつ大小の工具が用いられており、素材としては鉄製工具のみあるいは石製工具と鉄製工具の両方を使用した可能性が高いと想定した。また、琉球列島で出土する広田下層式貝符を比較し、広田遺跡の彫刻痕との共通点と相違点を認めることができた。ここで広田下層式貝符に関する彫刻の出現の意味と背景について考えていきたい。

縄文時代から弥生時代並行期の奄美群島・沖縄諸島で出土する貝製品には、石製工具による擦切技法を用いた直線的幾何学文様が施される。これに対し古墳時代並行期以降の広田遺跡の貝符に代表される立体的かつ曲線的な文様の登場は、前時期からの技術革新を示しており、本時期に何らかの技術導入あるいは新たな工具が出現したと想定できる（山野2010a）。山野は以前、広田遺跡の下層埋葬第4段階（古墳時代前期）において彫刻の施される有文具符が出現し、以後隆盛していくことを示した。この際、有文具符の登場背景には九州島以北の古墳築造社会からの鉄製利器の導入を想定している（山野2012）。木下尚子はフワガネク遺跡の鉄器出土状況などから、広田遺跡に埋葬された人々（以下、広田人と呼ぶ）が、広田遺跡の下層・新段階（古墳時代中期並行期）に奄美地域へ南下し、集落に滞在あるいは移住したとし、貝殻入手のための交換品として鉄器や鍛冶技術、様々の鉄素材を想定している（木下2019）。当該時期に奄美大島で本格的鉄生産が開始されていた確証には至らないが⁷⁾、少なくとも広田人の出現や移動と鉄器の存在が無関係とは考えにくく、その背景に古墳築造域との交流を想定しておく必要があるであろう。

種子島と古墳築造域の交流・交易の内容や変遷については、木下が貝製品や馬具を主とする実資料に基づいて論じてきた（木下2003他）。近年では、中村友昭によって九州島以北の古墳築造域における琉球列島産貝製品の消費動向、広田遺跡との対応関係、地域間交流の変遷が示された（中村2014ほか）。これらを受けて橋本達也が年代決定を訂正し、新資料を取り入れながら古墳時代の琉球列島産貝製品の全容を7つの段階に分けて編年図を示している（橋本2018）。広田下層式貝符の出現した古墳時代前期後半（橋本編年のⅡ-1段階）、流通を主導したのは宮崎平野～肝付平野の首長層であったとし、「広田遺跡を代表とする種子島で遺跡が顕在化するのも、この前期後半以降の九州東岸ルートが活性化することと連動するものだろう」と言及している（橋本 ibid : p431）。

古墳時代前期には九州各地で前方後円墳の築造が開始され、首長層の副葬品として鉄製武器・武具や農工具などの鉄器が古墳に埋納される。当該時期、福岡県の博多遺跡群では韃羽口や大量の鍛冶滓、鑄造剥片、粒状滓などの鉄鍛冶関連資料が発見されており、精錬、高温・低温鍛冶などの鍛冶技術が想定でき、鉄鍛冶技術が各段に進展したことが判明している（村上2012）。一方、古墳時代前期の古墳からは、琉球列島産のゴホウラ、オオツタノハ、イモガイ、スイジガイなどの大型巻貝を利用した貝釦が出土しており、非古墳築造域である琉球列島との直接的ないし間接的な交流が確認できる（中村 ibid）。広田遺跡の下層埋葬第2段階（古墳時代前期前半）⁸⁾に在地の土器と共に中津野式土器が出土することは、こうした古墳時代前期に広がり始めた物流ネットワークの中に、琉球列島北端に位置する種子島が内包されていたことを示す。非古墳築造域との繋がりが鉄製工具あるいはその材料となる鉄を種子島に導入させ、広田下層式貝符の彫刻が出現する契機となったのではなかろうか。本稿で述べた通り、広田下層式貝符は広田遺跡で100点を超えるが、奄美・沖縄諸島では20点に満たない。しかし、Ⅰ類からⅡ類、Ⅱ類から広田上層式貝符へと時間が経過するにつれて、その数量が増加している（山野2010b）。本稿では広田遺跡と奄美群島・沖縄諸島の貝符の外形や彫刻技術に地域差を見出すことができた。これら貝符は広田人によって製作されたのではなく、奄美・沖縄人によって地元で製作された可能性がある。広田人が奄美・沖縄人との交流・交易で貝素材と鉄製工具を交換したことで、断続的に鉄製工具が奄美群島から沖縄諸島へ浸透し、貝符の彫刻技術と工具が伝播していったと推測できる。広田遺跡が古墳時代を通して継続して琉球列島産貝製品を大量に消費し得た背景は、古墳築造域である九州島以北と非古墳築造域である琉球列島の物流ネットワークの中心に位置し、両者から物質的恩恵を享受できたことに起因するのかもしれない。

謝辞

拙稿をまとめるにあたり、木下尚子先生には研究方針の相談にご対応頂くともに、日頃から様々なアドバイスを頂きましたことを心より感謝申し上げます。鹿児島県立歴史資料センターの上村俊洋氏、竹森友子氏におかれましてはご多忙にもかかわらず複数回にわたる資料調査に対して丁寧にご対応頂きましたことを心より感謝申し上げます。熊本大学理学部の秋元和實先生、株式会社キーエンスの石博正勝氏におかれましては、デジタルマイクロスコプの借用、使用につきまして多くの便宜を図って頂きましたことを心より御礼申し上げます。また、鉄製工具の焼入れ作業ではカニマン鍛冶工房の知名定順氏にご助力を賜りました。彫刻用の石材の準備、貝符の資料調査において多くの方々と諸機関に親切にご対応頂きました。末尾ながら記して感謝申し上げます。

足立達朗、石堂和博、小脇有希乃、仲宗根啓、山城安生、那覇市教育委員会、北谷町教育委員会、南種子町教育委員会（五十音順敬称略）。

注

- (1) 本論における「琉球列島」は自然地理学的用語で大隅諸島から先島諸島までの弧状列島をさす。本稿では、琉球列島各島嶼について大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、先島諸島の名称を用いる。
- (2) 「広田下層式貝符」は広田遺跡の報告書で連結装身具に対する分類名称として設定された（木下2003）。そのため、広田遺跡の下層埋葬のうち無文や無孔の貝符はこの範疇に含まれないことになる。本稿では広田遺跡下層埋葬遺構に伴う貝符を総称し「広田下層式貝符」の用語を用いることにする（山野2018）。
- (3) DinoLite-Edge のスケール補正は、接続したパソコンの撮影記録画面に表示されたスケール（1 mmまたは2 mm）と実際のスケールを対照し、手動で実施するため、若干の誤差を想定しておく必要がある。
- (4) 本機器の使用にあたっては、借用期間が限られていたため、広田遺跡出土貝符のうち加工痕跡が明瞭なものの中

心に29点について記録を実施した。この際、画像連結作業のため、資料1点の彫刻を計測するのに5分程度の時間を要した。また、色調が純白色に近い資料は、データ計測の際にハレーションが起りやすく、測点データが飛び、使用に耐えるデータを得ることが困難であった。

- (5) 山野は印鑑製作用の鉄製彫刻刀を購入し、丸刀、平刀、三角刀にてイモガイ科体層部への彫刻を実施した。その結果、各刃先と単一彫刻痕が対応することを確認している。
- (6) 比嘉は貝符の整形作業に際し、金切ノコや鉄ヤスリなどの現代の工具だけでなく、種子島在地の石材のみを用いて素材の切り取り、整形、穿孔などの実験を実施している。本実験の成果については稿を改めて報告したい。
- (7) 貝塚時代後期の鉄器を分析した大城は、奄美における鉄器生産の開始時期について「4～5世紀」と「7～8世紀」を想定している（大城2007：p83,89）。これは当時兼久式土器の年代観が定まっていないこととフワガネク遺跡の出土状況などの精査が充分でなかったためと思われる。
- (8) 山野2012では広田遺跡の第2段階を埋葬遺構に共伴する中津野式土器の年代から弥生時代終末期から古墳時代初頭としていたが、近年、久住猛雄により機内や北部九州の土器並行関係が精査され、古墳時代前期前半に位置づけられている。

挿図表出典

図1～図12、表1は全て山野作成。図1～5、図6-1～4、図7-1・3・5、図9-1・3・5、図10-1・3・5は全て広田遺跡出土貝符。鹿児島県歴史資料センター黎明館にて山野が撮影。図3上模式図は山野作成、図3～5の貝符実測図は桑原編2003より一部改変して転載。図6の上図①～③は山野作成。図6-5・6は山野撮影。図7-2・4・6・7は山野撮影、8は比嘉撮影。図8-1～3は山野撮影、4・5は比嘉撮影。図9-2・4・6は山野撮影、7は比嘉撮影。図10-2・4・6は山野撮影、7・8は比嘉撮影。図11-1～4は桑原編2003より一部改変して転載。5～21は各所蔵機関で山野実測、トレース。図12は山野撮影。

引用・参考文献

- 大城 慧 2007「沖縄貝塚時代後期出土の鉄器について」『南島考古』No26 pp.81～96 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会編 1982『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書34 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課編 1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集 沖縄県教育委員会
- 笠利町教育委員会編 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財報告書第28集 笠利町教育委員会
- 河口貞徳・出口浩・本田道輝 1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』12号 pp.1～159 鹿児島県考古学会
- 岸本利枝・真栄田義人・宮里牧・新城司・岸本卓己・比嘉久編 2005『大堂原貝塚』名護市文化財調査報告第17集 名護市教育委員会編
- 木下尚子 2003「7. 貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』pp.329～366 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 木下尚子 2004「種子島の貝製品・貝文化」『考古資料大観12 貝塚後期文化』pp.242～249 小学館
- 木下尚子 2018「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論集－』pp.149～167 奄美考古学会
- 久住猛雄 2015「『土器器』の中の「成川式」土器－中津野式から辻堂原式にかけて」『成川式土器ってなんだ?』pp.67～84 鹿児島大学総合研究博物館
- 桑原久男編 2003『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 島袋春美編 2016『平安山原B・C遺跡』北谷町文化財調査報告書第40集 北谷町教育委員会
- 島袋 洋編 1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会

第Ⅱ部

- 新里亮人編 2001「I ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集 pp.1～70 熊本大学文学部考古学研究室
- 高宮廣衛・知念勇編 2004『考古資料大観12 貝塚後期文化』小学館
- 仲宗根啓編 2011『鏡水箕隅原C遺跡』那覇市文化財調査報告書第87集 那覇市教育委員会
- 中村友昭 2014「琉球列島貝製品からみた地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分大会 pp.91～113 九州前方後円墳研究会
- 西園勝彦編 2009『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(143) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 橋口達也編 1996『鳥ノ峯遺跡』中種子町埋蔵文化財調査報告書(2) 中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団
- 橋本達也 2018「古墳と南島社会－古墳時代における南の境界域の実相・広域交流・民族形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 pp.411～446 国立歴史民俗博物館
- 比嘉保信・田中一寿 2014「現代の道具で作る貝符」『宜野座村立博物館紀要ガラマン』20 pp.1～15 宜野座村教育委員会
- 村上恭通 2012「⑥鉄鍛冶」『時代を支えた生産と技術』古墳時代の考古学5 pp.142～153 同成社
- 盛本 勲編 1989『清水貝塚発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集 沖縄県具志川市教育委員会
- 山野ケン陽次郎 2010a「琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究』8 pp.317～332 熊本大学大学院社会文化科学研究科
- 山野ケン陽次郎 2010b「広田上層タイプ貝符に関する一考察」『南島考古』第29号 pp.33～49 沖縄考古学会
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』第63巻第4号 pp.6～26 古代学協会
- 山野ケン陽次郎 2013「ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ」『ナガラ原東貝塚の研究 5世紀から7世紀前半の沖縄伊江島』 pp.278～294 熊本大学文学部木下研究室
- 山野ケン陽次郎 2019「先史琉球列島における広田上層式貝符の研究」『中山清美と奄美学－中山清美氏追憶論集』 pp.169～184 奄美考古学会
- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『広田遺跡発掘調査報告書』 pp.311～328 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館

第3章 広田人とその移動

1. 広田遺跡出土人骨の再検討

米元史織	YONEMOTO Shiori
九州大学	Kyushu University
高椋浩史	TAKAMUKU Hirofumi
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム	Doigahama site anthropological museum
足立達朗	ADACHI Tatsuro
九州大学	Kyushu University
岩永省三	IWANAGA Shozo
九州大学	Kyushu University
中野伸彦	NAKANO Nobuhiko
九州大学	Kyushu University
小山内康人	OSANAI Yasuhito
九州大学	Kyushu University

1. はじめに

日本列島に生きた人々の多様性やその成立過程を明らかにするために、縄文時代・弥生時代をはじめ数多くの古人骨資料が蓄積され、さまざまな形質人類学的研究がおこなわれてきた。多くの研究が蓄積される中でも、1955年の最初の発見以来、広田遺跡出土人骨は他に類をみない形質を有する人たちとして注目され続けている。

鹿児島県種子島の南東部、太平洋に面した小砂丘上に位置する広田遺跡では、1957年以降3年間にわたって金関丈夫氏・国分直一氏・盛園直孝氏らによって発掘調査が実施され、2003年にはこれらの人骨に関して中橋孝博氏（現・九州大学名誉教授）による詳細な研究報告がなされた（中橋 2003）。その後、2005年、2006年に再度発掘調査が行われ、2007年には出土した15体の人骨についての報告が竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）によってなされた。これらの研究報告に際して、DNA分析や食性分析など、広田遺跡出土人骨に関する数多くの研究がおこなわれてきた（中橋 2003；小池 2003；竹中 2007；篠田 2007；米田 2007）。しかし、これまでの形質人類学的諸研究では計測的特徴に関する言及が多く、個々の個体の遺存状態やストレスマーカーに関する研究は行われてこなかった。今回、幸いにして人骨資料を再検討する機会を得、これまで未検討であった諸項目に関する検討を行った。特に各個体の遺存状態に関しては上層から出土した再葬・集骨も含め記録している。また、広田遺跡の大きな特徴の一つである貝製品をめぐる南島との交易において重要な、ヒトの移動の有無を調べるためにストロンチウム同位体比分析を行った。

人骨の年齢推定は、恥骨結合面は Brooks and Suchy (1990)、耳状面は Lovejoy (1985)、歯牙の咬耗は 栃原 (1957) を用い、性判定には、頭蓋・骨盤について Buikstra and Ubelaker (1994) の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編 1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小

表2 下層出土人骨一覽

調査次	報告書	赤本	層位	埋葬施設	性別	年齢	備考	収納上の表記	性別(新)	年齢(新)	遷存状態	備考	その他の所見	頭蓋	変形	ラムタの過剰感	小孔	陥凹	外傷的な陥凹	CO	LEH
第一次	S1号人骨	S-1	下層	土溝墓	男性?	若年		S1	男性	若年	ほぼ完存		1	無	無	無	無	無	無	無	無
第一次	E1号人骨	E-1	下層	土溝墓	女性	成~熟年		E1	女性	老年	ほぼ完存		1	無	無	無	無	無	無	無	無
第一次	E2号人骨	E-2	下層	土溝墓	男性	不明		E2	男性	成人	上半身のみ										
第一次	E3号人骨	E-3	下層	土溝墓	女性?	成年		E3	不明	成人	一部のみ										
第一次	N1号人骨	N-1-1	下層	土溝墓	男性	若~成年		N-1-1	男性	若年	ほぼ完存		1	無	無	無	無	無	無	無	有
第一次	N1-2	N-1-2	下層	土溝墓	女性?	成年		N-1-2	女性	成年	四肢骨のみ										
								N-1	不明	成人	頭蓋のみ	少なくとも成人3体分		1	有	有	有	1	無	無	有
											頭蓋のみ										
第一次	N2号西側人骨	N-2-W	下層	土溝墓	男性	熟年		N-2-W	男性	熟年	ほぼ完存	他未成人の上顎あり	右大腿骨骨折	2	有	無	有	無	有	有	有
第一次	N2号東側人骨	N-2-E	下層	土溝墓	女性	成年		N-2-E	女性	熟年	全身骨一部		2	無	無	無	無	無	無	有	有
第一次	N3号人骨	N-3	下層	土溝墓	男性	熟年		N3	男性	熟年	頭蓋骨と四肢一部		1	有	有	無	無	1	無	無	無
第一次	N5号人骨	記載なし	下層	土溝墓	男性	熟年		N-5	不明	成人	頭蓋骨のみ		1								無
第二次	C-1	C-1	下層	馬蹄状窪地	男性	熟年		C-1	男性	熟年	頭蓋と四肢の一部		1	有	有	有	有	無	無	無	無
第二次	C-2	C-2	下層	土溝墓	男性	成年		C-2	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1	有	有	有	有	無	無	無	有
第二次	C-3	C-3	下層	土溝墓	女性	成年		C-3	女性	成年	頭蓋と四肢の一部		1	無	無	無	無	無	無	無	有
第二次	C-4	C-4	下層	土溝墓	男性?	熟年		C-4	男性	熟年	頭蓋と四肢の一部		1	有	有	有	有	1	有	有	有
第二次	C-5	C-5	下層	土溝墓	女性	成年		C-5	女性	成年	ほぼ完存	焼骨あり		1	有	有	有	無	1	有	有
第二次	C-6	C-6	下層	土溝墓	男性	熟年		C-6	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1	有	有	有	有	無	1	有	無
第二次	C-7	C-7	下層	土溝墓	女性	成~熟年		C-7	女性	成~熟年	頭蓋と四肢の一部	小児の下顎あり		1	無	無	無	無	無	無	無
第二次	C-8	C-8	下層	土溝墓	男性	熟年		C-8	男性	熟年	ほぼ完存	全身関節成重 度・右寛骨の1 骨折		1	有	有	有	無	無	有	有
第二次	C-10	記載なし	下層					C-10	成人	不明	頭蓋と四肢の一部	焼骨		1							有
第二次	C-11	C-11	下層	土溝墓	女性	成年		C-11	女性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								有
第二次	C-12	C-12	下層	土溝墓	男性	成年		C-12	男性	成年	ほぼ完存			1	有	有	有	無	無	無	有
第二次	C-13	C-13	下層	土溝墓	男性	熟年		CE-13	男性	熟年	頭蓋と四肢の一部		1								有
第二次	C-14	C-14	下層	土溝墓	女性	成年		CE-14	女性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								有
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		CE-14	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1	有	有	有	有	無	無	無	無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部		1								無
第二次	A-4-1	A-4-1	下層	土溝墓	女性?	熟年		A-4-No.1	男性	成年											

(表2 つづき)

調査次	報告書	赤本	層位	埋葬施設	性別	年齢	備考	収葬上の表記	性別(新)	年齢(新)	遺存状態	備考	その他の所見	頭蓋	変形	ラムダの過剰融合	小孔	陥凹	外傷的な陥凹	CO	LEH	
第3次	D I 地区4a号人骨	D-I-4a	下層	土壌墓	女性	成年	成年、熟年の女性 2体、故歯1体、 別の2体の人骨 (D I 地区4a号人 骨、D I 地区の4 b人骨)に重複し てD-I-4の番号が あたえられている	D-I-4a	女性	成年	頭蓋と寛骨			1	無	無	無	1	無	無		
第3次	D I 地区4b号人骨	D-I-4b	下層	土壌墓	女性	若年		D-I-4第2集骨葬下砂層	女性	成年	四肢の一部	少なくとも他1体分あり		1	有	有	有	無	無	有		
第3次	D I 地区5号人骨	D-I-5	下層	覆石タイプ男性	成年	成年		D-I-5	男性	成年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	無	無	有		
第3次	D II 地区3号人骨	D-II-3	下層	土壌墓	女性	成年		D-II-3	女性	成年	ほぼ完存			1	有	有	無	1	無	有		
第3次	D II 地区4号人骨	D-II-4	下層	馬蹄状配石不明	小児	小児		D-II-4	不明	小児	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	無	無	無	有		
第3次	D II 地区5号人骨	D-II-5	下層	土壌墓	男性	成~熟年		D-II-5	男性	成~熟年	ほぼ完存			1	有	有	無	無	有	有		
第3次	D II 地区6号人骨	D-II-6	下層	土壌墓	不明	幼児		D-II-6	不明	幼児	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	有		
第3次	D III 地区1号人骨	D-III-1	下層	箱形石部夕男性	熟年	熟年		D-III-1	男性	熟年	ほぼ完存			1	有	有	有	1	有	有		
第3次	D III 地区2号人骨重上集骨	D-III-1下集下層	下層	女性	成人	成人		D-III-1の下の集骨	女性	成人	下顎と四肢の一部	少なくとも成人1体分		1	有	有	有	有	無	有		
第3次	D III 地区3号人骨	D-III-2	下層	馬蹄状配石男性	成年	成年		D-III-2	男性	成年	ほぼ完存			1	有	有	有	1	有	無		
第3次	D IV 地区1号人骨	D-IV-1	下層	土壌墓	女性	成人		D-IV-1	女性	成人	四肢の一部	部位不明長管骨		1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IV 地区2号、3号人骨	D-IV-2-3	下層	土壌墓	女性	5体分あり		D-IV-2or3	女性	小児	頭蓋のみ	他少なくとも成人4体分		3	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IV 地区4号人骨	D-IV-4	下層	土壌墓	男性	成人		D-IV-4 (4B-4)	男性	成人	頭蓋のみ			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IV 地区5号人骨	D-IV-5	下層	土壌墓	男性	成人		D-IV-5,7	女性?	成人	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IV 地区6号人骨	D-IV-6	下層	覆石タイプ男性	熟年	熟年		D-IV-6	不明	成人	四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IV 地区7号人骨	D-IV-7	下層	土壌墓	女性?	成人		D-IV-7	不明	小児	四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D V 地区1号人骨	D-V-1	下層	土壌墓	不明	乳~幼児		D-V-1	不明	乳児	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D VI 地区1号人骨	D-VI-1	下層	土壌墓	男性	若~成年		D-VI-1	不明	成人	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	D IX 地区1号人骨	D-IX-1	下層	馬蹄状配石男性	成年	成年		D-IX-1	男性	成年	ほぼ完存			1	有	有	有	1	有	有		
第3次	E II 地区1号人骨	E-II-1	下層	土壌墓	男性	成年		E-II-1	男性	成年	頭蓋と四肢の一部	左下腿骨折		1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E II 地区2号人骨	E-II-2	下層	土壌墓	男性	熟年		E-II-2	男性	熟年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E II 地区3号人骨	E-II-3	下層	土壌墓	男性	熟年		E-II-3	不明	不明	頭蓋のみ			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E III 地区1号人骨	E-III-1	下層	土壌墓	女性	不明		E-III-1	女性	若年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	有		
第3次	E III 地区2号人骨	E-III-2	下層	土壌墓	男性?	成年		E-III-2	男性	成年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E IV 地区1号人骨	E-IV-1	下層	土壌墓	女性	成年		E-IV-1	女性	熟年	ほぼ完存			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E IV 地区2号人骨	E-IV-2	下層	土壌墓	女性	成年		E-IV-2	女性	熟年	ほぼ完存			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E IV 地区2号人骨	E-IV-1	下層	土壌墓	男性	成年		E-IV-2orE-IX-1	男性	成年	ほぼ完存			1	有	有	有	1	有	有		
第3次	E X 地区1号人骨	E-X-1	下層	土壌墓	女性	成年		E-X-1	女性	若年~成年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		
第3次	E X 地区2号人骨	E-X-2	下層	土壌墓	女性	成年		E-X-2	女性	成年	頭蓋と四肢の一部			1	有	有	有	有	無	無		

児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。以下にその結果を報告する。

2. 出土人骨残存部位の検討

中橋（2003）において出土人骨の総数153体と報告された。本報告で部位ごとの総数を検討したところ、頭蓋は153体分（内表採などが10体分）、下顎骨は104体分（表採2体分）、四肢骨のなかで最も数が多かったのは左大腿骨で126体分（表採2体分）、反対側の右大腿骨は117体分（表採1体分）であった（表1 本報告書のCD内に表示）。

表1は、種子島広田遺跡2003の第13表を更新して作成した。どの部位に関しても一部のみが残存するのみの場合が多くあることを付記しておく。

人骨に付された遺構番号が発掘記録と照合困難の為見落としもあると考えられるが、下層から出土したと考えられる頭蓋骨は79体分であった（表2）。そのうち性別のわかる個体（表3）は男性28体、女性28体と同数であった。男性のほうがわずかに年齢の高い個体が多いが、この差は年齢不明の女性個体が多いことに起因する可能性がある。未成人は5体のみであり下層人骨のみにおいても中橋（2003）で指摘された未成人骨の少なさは看取される。

3. 頭蓋変形

中橋（2003）において、広田遺跡出土人骨の著しい短頭傾向が指摘され、後頭部が板を当てたように扁平になっていることから、何らかの人工的な頭蓋変形の結果と指摘された。広田遺跡出土人骨の頭蓋骨を観察したところ、観察可能であった頭蓋骨52体分のうち、後頭部が扁平を呈する（左右非対称の変形も含む）頭蓋骨は39体であり、そのうちラムダ縫合における過剰縫合は、48体中32体（67%）にも及んでいた（表1 本報告書のCD内に表示）。頭頂部あるいは後頭部に小孔が確認された個体は22体（観察可能個体51体）であった（表1）。今後、CTや三次元計測器などを用いて意図的な頭蓋変形であったのかを検討していく必要があるが、後頭部の過剰縫合や頭蓋骨（主に頭頂部や後頭部）の小孔や陥凹は頭蓋変形の1つの指標となる可能性がある。

4. ストレスマーカー・外傷

広田遺跡出土人骨の中で最も特徴的であった個体がC地区8号人骨である。この個体の右寛骨腸骨翼部には治癒した骨折痕が確認された。側方からの直達外力によっておき頻度は高い（桜井 1993、鳥巢 1994）。さらに、前頭骨の右側に陥没痕が認められる（馬場 1998）。これは先述した頭蓋変形と関連する可能性のある陥凹とは形態的に異なり、頭蓋骨の陥没骨折の可能性はある。前頭部の陥没骨折は小物体の打撃などによって生じることが多いと指摘されている（萩野・松島 2009）が、陥没の範囲が広く右側に円形状の凹みが確認される。外傷であった場合石鏃のような先端鋭利なものよりも鈍器による外傷が想定される。右寛骨および前頭部の骨折はいずれも治癒している。ほかにも、四肢骨の全関節部で変形性関節症が確認されている。変形性関節症とは、長年にわたる関節への力学的な負荷あるいは機械的ストレスなどによって、骨棘や異常軟骨、最終的には象牙様変化が生じ、関節の変形が進行していくものである（鈴木 2003）。左右の膝蓋骨内側および大腿骨遠位関節面には関節炎

表3 下層人骨性別年齢内訳

	男	女	不明	総計
未成人(乳幼小児含む)			5	5
若年	3	2		5
若年～成年		2		2
成年	12	12		24
成年～熟年	1	1		2
熟年	10	3		13
老年		1		1
成人	2	7	10	19
総計	28	28	15	71

のなかでも最も重度と考えられるエバネーションが確認され、左右上腕骨の遠位にもエバネーションが確認されている。また、頸椎と腰椎に変形性脊椎症の所見を有する。広田遺跡出土人骨は関節部が残存している個体があまり多くはないが、このように重度の関節炎を発症している個体はC地区8号人骨ただ1体である。程度に明確な左右差はなく、右寛骨の外傷が変形性関節症の発症に影響している可能性は低い。全身性の代謝異常の可能性もあるが、身体活動による負荷が同集団の他個体と比べて強かった可能性も考えられる。

N2号西側人骨・C地区4号人骨の後頭骨中央部に陥凹が、A地区8号人骨の前頭骨中央部とC地区5号人骨の前頭骨左側に陥凹が認められた。A地区8号・C地区5号人骨の前頭骨の陥凹は、形状がC地区8号人骨のそれとは異なり陥凹の面積が狭く、左側の創縁が明瞭で深い破裂傷と考えられ、鈍体による作用の結果の可能性も考えられる(石山 1978)。上記5体が何らかの外傷を頭蓋骨に受けた可能性があるが、いずれもよく治癒している。

その他、すでに九大集成において報告されているがD-IX-1号の左下腿骨折、N2号西側人骨の右大腿骨骨折が確認された。N2号西側人骨の右大腿骨骨折は、頻度として最も多い骨体中央部にみられ、横骨折に近い傾斜の緩い斜骨折とみられ(鳥巢 1994)、内転筋により内側に引かれたため内側に湾曲し癒合している。D-IX-1号人骨の左下腿の骨折は、脛・腓合併骨折であり、遠位側に肥厚が認められる。脛骨の遠位に孔が認められ、骨髄炎の発症が指摘される(桜井 1993)。

次に広田遺跡出土人骨の栄養状態・環境的ストレスを検討する(表1)。エナメル質減形成(LEH)は、歯冠に形成される溝状の痕跡である。歯冠が形成される幼少期の栄養障害・胃腸疾患・発疹性高熱疾患(麻疹、水痘、風疹、猩紅熱、ジフテリアなど)・肺炎・結核・内分泌異常などの多様な障害によって起こるエナメル質の形成不全である(Goodman and Rose, 1990; 山本 1988)。クリブラ・オルビタリア(CO)は、眼窩上壁に確認される小孔であり、鉄欠乏性貧血あるいは、巨赤芽球性貧血(ビタミンB12不足)、溶血性貧血などが原因と考えられている代謝性疾患である(Walker et al. 2009; 平田2012)。これらは、個体の栄養状態や所属集団への環境ストレスを示す指標として用いられている。本稿では山本(1988)・Buikstra and Ubelaker(1994)の基準に従い観察を行った。エナメル質減形成は左右下顎の犬歯のどちらかを観察し、観察可能個体48体中23体(48%)、41体中6体(15%)であった。山本(1988)によると縄文時代のエナメル質減形成の頻度は48.1%(13/27)、古墳時代のエナメル質減形成は36.4%(8/22)、クリブラ・オルビタリアは31.3%と18.8%である。資料数を増やして縄文と弥生、すなわち狩猟採集から農耕への移行における同指標の変化を検討したTemple(2010)によると、弥生時代の下顎犬歯のエナメル質減形成の頻度は34.2%(76)、東日本縄文は56.5%(23)、西日本縄文は61.5%(39)であり、クリブラ・オルビタリアは弥生で8.8%(111)、縄文で8.6%(209)と指摘されている。観察者間誤差も大きく、両研究で頻度が異なるが、Temple(2010)のほうが、観察個体の安定性が担保されているため比較の指標とすると、広田遺跡出土人骨は弥生時代と比べるとエナメル質減形成の頻度は高く、縄文時代よりやや低い、あるいは山本(1988)では縄文時代の集団と同程度であると言えよう。クリブラ・オルビタリアに関しては縄文・弥生両集団よりもやや高い傾向にある。下層人骨のみに限定する(表2)とクリブラ・オルビタリアは6/31体で19%、エナメル質減形成に関しては23/40で57.5%であった。このことから、関節炎などの活動による身体への負荷はC地区8号人骨を除いて高くはなく、栄養状態に関してはほかの地域の集団と比較するとやや悪い傾向にあるといえよう。

5. 筋骨格ストレスマーカー

筋骨格ストレスマーカー（Musculoskeletal stress markers、以下 MSMs、Hawkey and Merbs 1995）は、筋や靭帯附着部の発達度を分析しスコア評価することで、発達している部位としていない部位を析出し、生前の身体の動かし方を推定する方法である。この方法は、断面示数や関節炎など骨形態から身体活動やその負荷を推定する方法よりも詳細に身体活動を読み取ることができると期待されている。MSMsが身体活動をあらわしうるかどうかに関しては疑問を呈する論文も多く存在するが、その一定の有効性は米元（2012）によって支持されると考える。

これまでに MSMs を用いて、日本列島出土の古人骨を対象とした身体活動の研究は瀧川（2015）や米元（2016）によってなされている。ここでは、広田・鳥ノ峯遺跡出土人骨の MSMs について簡潔にまとめる。基礎統計量は表4に示した。図1、2に MSMs パターンを示す。広田・鳥ノ峯遺跡から出土した人骨の MSMs パターンは男女共に土井ヶ浜・三国丘陵・福岡平野とは異なる。これら3集団の下肢の MSMs パターンは基本的に類似し、男性では腸腰筋、粗線に附着する筋群、ヒラメ筋にピークを示す。女性では粗線に附着する筋群とヒラメ筋にピークを示す。男女共にヒラメ筋のほうが後脛骨筋と長趾屈筋よりもスコアが高いという傾向がある。広田・鳥ノ峯遺跡から出土した人骨の

表4 MSMs 基礎統計量

部位	響灘沿岸			三国丘陵			福岡平野			広田・鳥ノ峯		
	右側											
	男性											
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D
大円筋と広背筋（上）	28	2.18	0.61	48	2.40	0.64	16	1.75	0.77	19	1.79	0.79
大胸筋（上）	29	2.93	1.00	50	2.86	1.07	16	2.81	1.33	19	2.89	1.29
三角筋（上）	26	2.73	0.45	49	2.57	0.58	17	2.24	0.66	20	2.15	0.67
上腕三頭筋外側頭(上・起)	24	2.08	0.88	25	1.68	0.80	9	1.78	0.97	10	1.50	0.71
上腕筋（尺）	25	2.16	0.47	32	2.31	0.47	12	2.00	0.43	16	2.06	0.25
上腕二頭筋（橈）	26	2.15	0.37	26	2.15	0.54	10	1.80	0.63	15	2.13	0.52
回外筋(尺・起)	25	1.72	0.79	35	2.20	0.80	11	1.64	0.67	16	2.31	0.60
方形回内筋(尺・起)	18	1.72	0.75	29	2.07	0.75	15	1.60	0.74	11	2.00	0.77
円回内（橈）	27	2.33	0.88	34	2.26	0.90	18	1.94	0.80	15	2.00	0.93
腸腰筋（大）	16	2.50	0.52	26	2.50	0.58	9	2.56	0.73	6	1.67	0.82
大殿筋（大）	30	2.33	0.61	42	2.19	0.80	18	1.78	0.73	20	1.75	0.79
粗線(大)	33	2.45	0.67	65	2.72	0.52	37	2.59	0.69	21	2.00	0.55
外側広筋（大・起）	30	2.03	0.81	43	2.00	0.85	21	1.67	0.73	20	1.90	0.45
内側広筋（大・起）	33	2.21	0.65	47	2.13	0.74	27	2.04	0.81	20	1.75	0.55
後脛骨筋と長趾屈筋（脛・起）	29	1.72	0.88	59	1.61	0.72	33	1.58	0.79	19	1.53	0.77
ヒラメ筋（脛・起）	30	2.27	0.74	59	2.34	0.71	32	2.09	0.78	19	1.84	0.90
部位	響灘沿岸			三国丘陵			福岡平野			広田・鳥ノ峯		
	右側											
	女性											
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D
大円筋と広背筋（上）	21	1.90	0.83	17	2.06	0.83	13	1.54	0.52	15	1.47	0.64
大胸筋（上）	21	2.38	0.92	18	2.44	0.62	13	2.46	1.05	16	2.00	0.52
三角筋（上）	22	2.41	0.59	19	2.26	0.81	15	2.13	0.52	18	2.11	0.76
上腕三頭筋外側頭(上・起)	21	1.71	0.85	8	1.88	0.64	9	1.44	0.73	9	1.11	0.33
上腕筋（尺）	21	2.05	0.22	11	1.91	0.30	11	2.27	0.47	15	1.87	0.52
上腕二頭筋（橈）	20	2.00	0.00	9	2.00	0.71	9	2.00	0.00	11	2.00	0.45
回外筋(尺・起)	22	1.59	0.80	8	1.88	0.83	9	1.56	0.53	13	2.00	0.82
方形回内筋(尺・起)	15	2.33	0.72	13	2.54	0.52	8	1.75	0.71	6	2.67	0.52
円回内（橈）	20	1.80	0.77	12	1.75	0.75	11	1.27	0.47	11	1.91	0.70
腸腰筋（大）	18	2.22	0.73	9	1.78	0.67	7	1.86	0.69	8	2.13	0.83
大殿筋（大）	22	2.23	0.69	27	2.04	0.85	11	1.91	0.83	21	1.38	0.50
粗線(大)	23	2.39	0.66	31	2.16	0.82	23	2.35	0.83	22	1.59	0.50
外側広筋（大・起）	22	2.05	0.65	29	1.90	0.77	11	1.55	0.69	22	1.36	0.58
内側広筋（大・起）	22	1.91	0.75	29	1.86	0.79	16	1.44	0.63	22	1.36	0.49
後脛骨筋と長趾屈筋（脛・起）	20	1.45	0.69	29	1.52	0.69	18	1.44	0.78	18	1.44	0.78
ヒラメ筋（脛・起）	20	2.05	0.69	29	1.90	0.77	18	1.83	0.71	18	1.33	0.59

N=個体数、M=平均値、S.D=標準偏差

MSMsは、男女共に上記3集団とは異なるパターンを形成する。MSMs16部位の平均値を変数として、カテゴリカル主成分分析を行った。

MSMsパターンの類似と差異を検討するために、カテゴリカル主成分分析を行った。分析にはIBM社の統計パッケージIBM SPSS Statistics20およびIBM SPSS Categoriesを用いた。表5に主成分負荷量を示した。第1主成分は、固有値が8.45、寄与率が52.78%、第2主成分は固有値が3.03、寄与率が18.94%である。第1主成分は、ほぼすべての部位と正の相関が高く、いわゆるサイズファクターである。第2主成分は、手首の回内外に作用する諸筋（回外筋・方形回内筋・円回内筋）と回外位における最大の屈筋である上腕二頭筋と負の相関が高く、また大円筋と広背筋・大胸筋・三角筋とも負の相関がある。大殿筋以外の下肢の諸筋と正の相関が高い。これは、発達する諸筋の質的な違いを示す軸であるといえる。第1主成分得点を横軸に、第2主成分得点を縦軸に二次元展開し

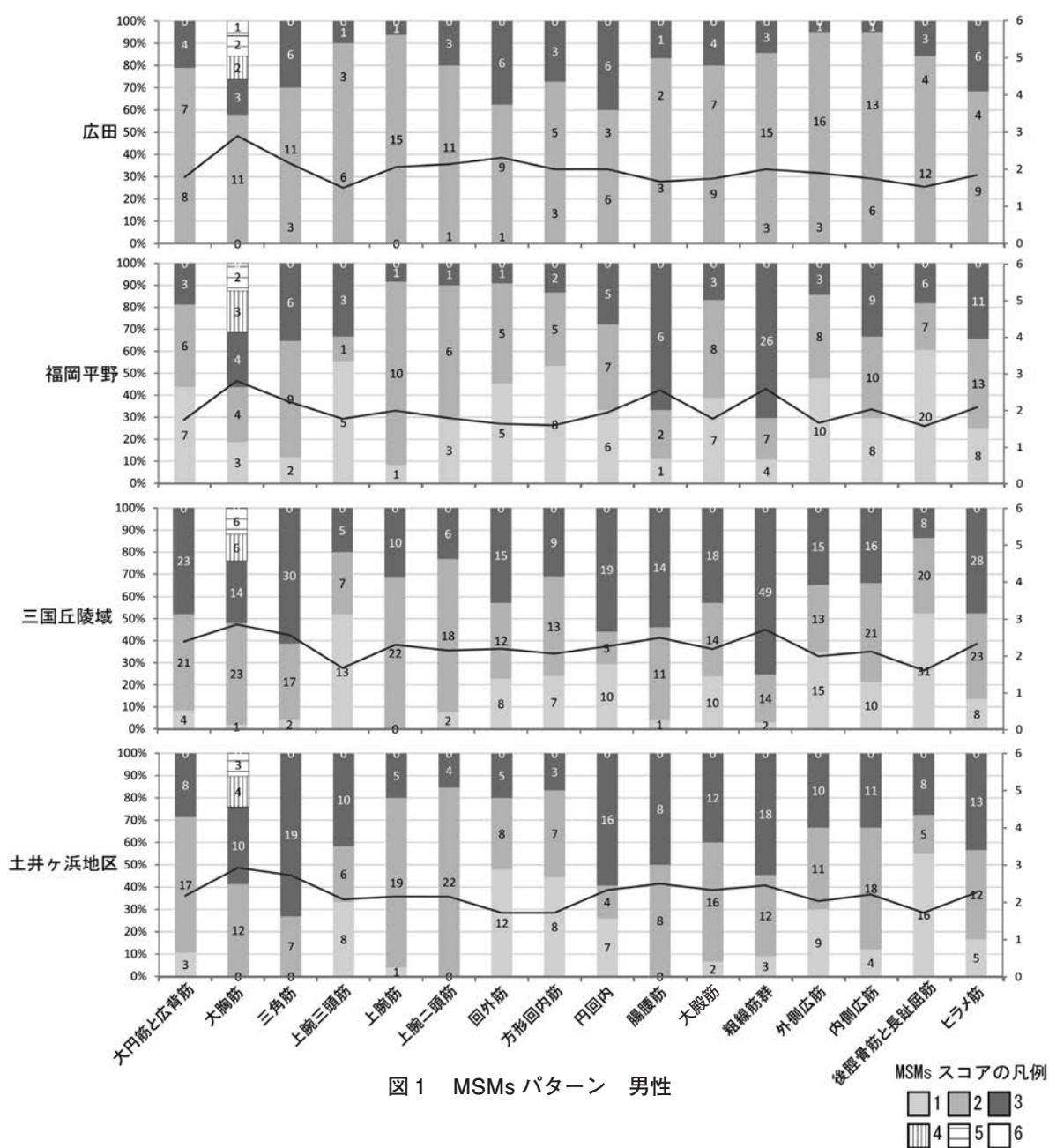


図1 MSMsパターン 男性

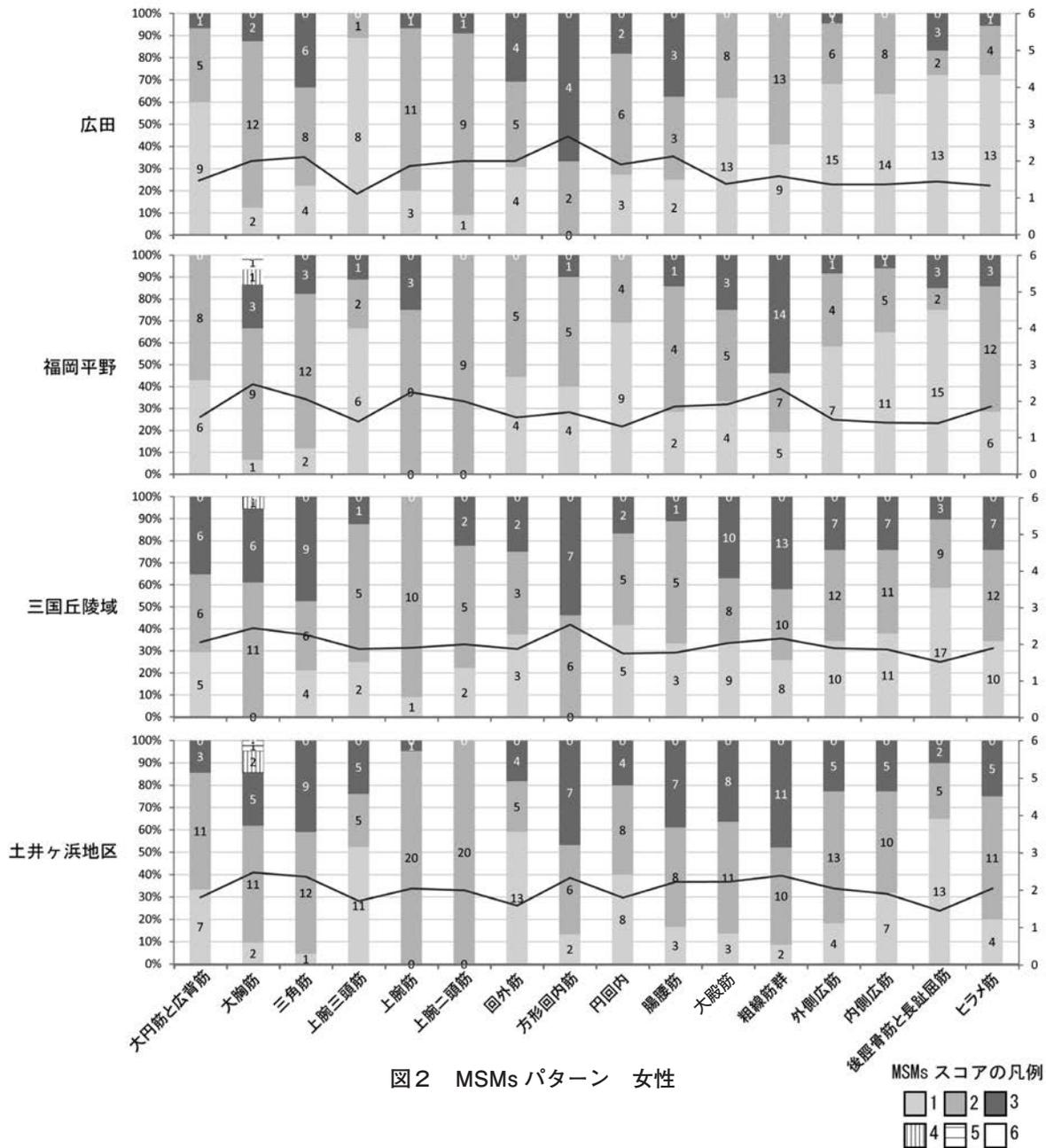


図2 MSMs パターン 女性

た図が図3である。この分析でも、広田・鳥ノ峯は男女共に弥生時代の他の3集団とは離れた位置にプロットされる。全体的にスコアが低く(図3)、縄文時代の各集団や弥生時代の各集団のような負荷の強い労働を必要としていなかった可能性を指摘することができる。このような傾向は、中橋(2003)で検討された四肢骨の形態的特徴の結果と整合的であり、全体的に華奢な傾向にあると言える。さらに、上腕骨と大腿骨の周径の比較から、全体的に華奢であるが、上肢の発達が良好であると指摘されている(中橋2003)。この傾向もMSMsの分析で追認でき(図3)、下肢よりは上肢のMSMsスコアが高い傾向にある。さらに肩関節の内転外転に作用する大胸筋・大円筋と広背筋・三角筋や肘関節の屈曲に作用する上腕筋・上腕二頭筋、中でも特に手首の回内外に作用する諸筋の発達が指摘される。広田遺跡で想定されている生業の中心は漁撈であり、その漁法としては、アオブダイなどの岩礁・珊瑚礁性の特定魚種に集中し、外洋性の外洋魚が稀であるという点(樋泉 2007)

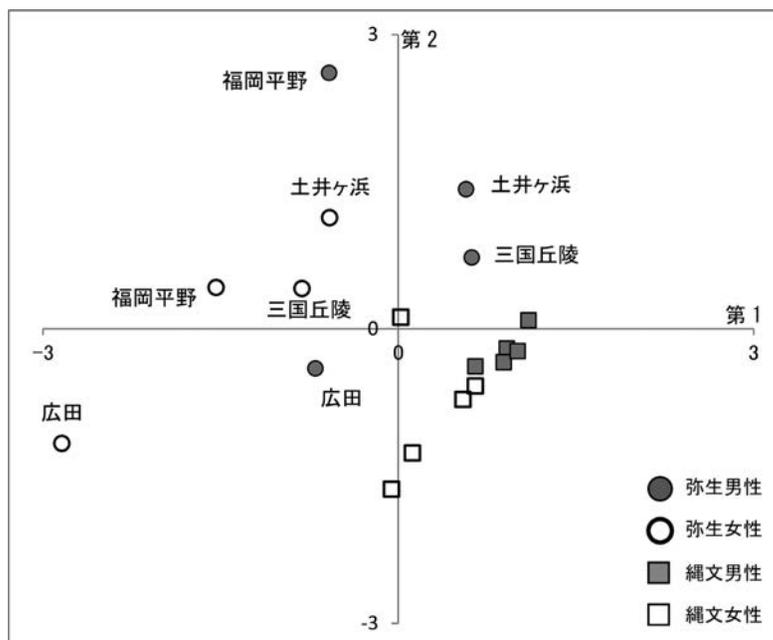


図3 カテゴリカル主成分分析の結果

表5 カテゴリカル主成分負荷量

	主成分負荷量	
	1	2
大円筋と広背筋	0.91	-0.18
大胸筋	0.85	-0.07
三角筋	0.94	-0.12
上腕三頭筋	0.86	0.34
上腕筋	0.84	-0.01
上腕二頭筋	0.60	-0.53
回外筋	0.60	-0.68
方形回内筋	-0.03	-0.85
円回内	0.72	-0.31
腸腰筋	0.24	0.65
大殿筋	0.81	-0.18
粗線筋群	0.88	0.16
外側広筋	0.64	0.37
内側広筋	0.83	0.34
後脛骨筋と長趾屈筋	0.80	0.12
ヒラメ筋	0.28	0.74
固有値	8.45	3.03
累積寄与率(%)	52.78	18.94

から、サンゴ礁を利用した採捕が想定され、外洋への進出はあまり一般的でなかったと考えられる。当該地域では、外洋漁撈活動を行っていた集団程負荷の強い労働が必要であったと考えることは難しく、その結果がMSMsに表れていると考えて大きな矛盾はない。また、MSMsの性差に関してみると、男女間の差は質的というより量的なものであり(図3)、男女の活動の仕方に大きな違いはなかったといえる。このことから、男性や女性の活動区分を必要とするような負荷の強い労働を必要としていなかったことが支持されよう。

6. ストロンチウム同位体比分析

ストロンチウム(元素記号Sr)の同位体比分析は、人の移動や交流、生活・生育圏を明らかにしうる分析方法として近年世界的に注目されている(Bentley 2006; Bentley et al. 2003, 2004; Kusaka 2009, 2011, 2018; Horstwood et al. 2008等)。Srは岩石に比較的多く含まれている元素であり、自然界には主に4つの同位体がある。そのうちの ^{86}Sr と ^{87}Sr の存在量の比を用いて示されるのがSrの同位体比(以下 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$)である。自然界では通常0.7000から0.7200程度の変動を示し、基盤地質の構成鉱物・岩石の生成年代によって異なってくる。一般的には、海洋底の玄武岩は均質で低い $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値(約0.703)を示し、一方、花崗岩は高いRb/Sr比をもつため、相対的に高い $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値(約0.716)を示すと考えられている(Bentley 2006)。新生代の海洋石石灰岩やドロマイトは中間的な0.707から0.709程度の値を示し、これは岩石形成時の海水のSr同位体比である(Hess et al., 1986)。そして、基盤地質中に含まれている $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は、水やその水を摂取する動植物を通して人体、特に歯牙や骨に取り込まれる。中でも歯牙は一度形成されるとリモデリングされないため、歯牙の形成時期である幼少期に生育した場所の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をある程度反映する可能性が指摘されている。すなわち、Aという場所で幼少期を過ごしBに何らかの要因で移入・移住し、B付近で埋葬された人の歯牙の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は、Bで生まれ育った、いわゆる在地の人の歯牙の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値とは異なると考えられている。

世界各地で行われている歯牙のSr同位体比分析の多くは、表面電離型質量分析器を使用しており、歯牙を溶解して分析を行うため、資料の完全な破壊を伴う。そのため、基本的には形態研究で重視さ

表6 ストロンチウム同位体比分析 基礎統計量 広田遺跡

遺跡	埋葬遺構番号	個体略番	性別	年齢	分析歯種	分析対象年齢	Analysis No.	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	StdErr (2σ)	$^{43}\text{Ca}/^{44}\text{Sr}$	Weighted Mean	誤差 (2σ)							
広田	1次調査N1号	N1	男性	若年~成年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.71019	0.00014	1.255	0.71009	0.0002							
							2	0.71033	0.00012	1.225									
							3	0.71004	0.00010	1.183									
							4	0.71010	0.00010	1.124									
							5	0.70988	0.00011	1.095									
	A地区1号	A1	男性	熟年	左下顎中切歯	1-3歳	1	0.70967	0.00014	0.839	0.70979	0.00023							
							2	0.70998	0.00010	0.817									
							3	0.70957	0.00012	0.795									
							4	0.70970	0.00015	0.767									
							5	0.70988	0.00012	0.765									
	A地区7号	A7	女性?	熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70897	0.00026	1.016	0.709040	0.000300							
							2	0.70939	0.00027	1.045									
							3	0.70871	0.00030	1.044									
							4	0.70898	0.00028	1.022									
							5	0.70909	0.00026	1.010									
	A地区9号	A9	男性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70935	0.00019	0.935	0.709260	0.000310							
							2	0.70925	0.00020	0.946									
							3	0.70945	0.00026	0.951									
							4	0.70875	0.00026	0.948									
							5	0.70940	0.00022	0.943									
	A地区10号	A10	女性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70942	0.00022	0.796	0.709140	0.000230							
							2	0.70903	0.00020	0.786									
							3	0.70923	0.00019	0.766									
							4	0.70894	0.00020	0.750									
							5	0.70912	0.00023	0.719									
	A地区11号	A11	男性	熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70867	0.00031	0.921	0.708790	0.000150							
							2	0.70884	0.00032	0.917									
							3	0.71000	0.00027	0.899									
							4	0.70877	0.00029	0.929									
							5	0.70888	0.00028	0.940									
	C地区4号	C4	男性?	熟年	左上顎側切歯	3-5歳	1	0.70926	0.00018	0.658	0.709130	0.000170							
							2	0.70892	0.00017	0.660									
							3	0.70904	0.00015	0.668									
							4	0.70916	0.00015	0.675									
							5	0.70925	0.00015	0.669									
	C地区5号	C5	女性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70905	0.00038	1.040	0.709060	0.000320							
							2	0.70914	0.00023	1.009									
							3	0.70934	0.00022	0.967									
							4	0.70865	0.00024	0.985									
							5	0.70905	0.00022	1.016									
	C地区8号	C8	男性	熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.71002	0.00033	0.899	0.70978	0.00054							
							2	0.70993	0.00027	0.870									
							3	0.70883	0.00049	0.909									
							4	0.70926	0.00031	0.923									
							5	0.70970	0.00029	0.973									
							6	0.71065	0.00039	0.920									
	C地区11号	C11	女性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70892	0.00019	1.082	0.70907	0.00017							
							2	0.70911	0.00024	1.072									
							3	0.70892	0.00021	1.038									
							4	0.70920	0.00018	1.075									
5							0.70916	0.00019	1.088										
C地区12号	C12	男性	成年	右下顎中切歯	1-3歳	1	0.71019	0.00007	0.959	0.71021	0.0001								
						2	0.71031	0.00007	0.934										
						3	0.71026	0.00008	0.924										
						4	0.71019	0.00007	0.893										
						5	0.71010	0.00007	0.872										
D I地区4号b	D1-4b	女性	若年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.71017	0.00010	1.174	0.71011	0.00011								
						2	0.71012	0.00010	1.197										
						3	0.71012	0.00008	1.204										
						4	0.70994	0.00011	1.291										
						5	0.71017	0.00012	1.317										
						D I地区5号	D1-5	男性	成年			左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70935	0.00031	1.321	0.709420	0.000570
														2	0.70895	0.00042	1.453		
														3	0.70879	0.00040	1.482		
														4	0.70948	0.00030	1.463		
														5	0.70999	0.00028	1.436		
右上顎中切歯	2-4歳	6	0.70942	0.00030	1.053														
		7	0.70937	0.00023	1.067														
		8	0.70956	0.00020	1.094														
		9	0.70922	0.00028	1.111														
		10	0.70945	0.00023	1.170														
D II地区4号	D2-4	不明	小児	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70933	0.00023	0.900	0.708970	0.000240								
						2	0.70895	0.00018	0.910										
						3	0.70894	0.00020	0.917										
						4	0.70880	0.00018	0.931										
						5	0.70892	0.00029	0.944										
D II地区5号	D2-5	男性	成年~熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70993	0.00029	1.377	0.709790	0.000260								
						2	0.70965	0.00029	1.372										
						3	0.70952	0.00038	1.362										
						4	0.70959	0.00047	1.369										
						5	0.71000	0.00026	1.343										
D III地区2号	D3-2	男性	成年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70942	0.00024	1.013	0.709360	0.000230								
						2	0.70934	0.00028	1.008										
						3	0.70908	0.00023	0.988										
						4	0.70952	0.00033	0.978										
						5	0.70949	0.00021	0.920										
E II地区2号	E2-2	男性	熟年	右下顎中切歯	1-3歳	1	0.70910	0.00016	0.666	0.709010	0.000140								
						2	0.70893	0.00015	0.661										
						3	0.70915	0.00018	0.677										
						4	0.70889	0.00020	0.684										
						5	0.70894	0.00019	0.692										
E III地区2号	E3-2	男性?	熟年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.71045	0.00010	1.244	0.71029	0.00018								
						2	0.71035	0.00009	1.240										
						3	0.71009	0.00010	1.247										
						4	0.71025	0.00010	1.240										
						5	0.71027	0.00014	1.230										
E IV地区1号	E4-1	女性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70880	0.00018	0.707	0.708675	0.000092								
						2	0.70870	0.00023	0.698										
						3	0.70860	0.00019	0.712										
						4	0.70852	0.00023	0.712										
						5	0.70872	0.00023	0.705										
E IV地区2号	E4-2	男性	成年	右上顎中切歯	2-4歳	1	0.70889	0.00017	0.693	0.708950	0.000110								
						2	0.70884	0.00015	0.686										
						3	0.70901	0.00017	0.689										
						4	0.70900	0.00016	0.677										
						5	0.70906	0.00019	0.680										
北区1号	北区1号	男性	成年	右下顎中切歯	1-3歳	1	0.70912	0.00011	1.058	0.70918	0.00012								
						2	0.70908	0.00011	1.074										
						3	0.70926	0.00016	1.072										
						4	0.70925	0.00015	1.048										
						5	0.70930	0.00013	1.065										

表7 ストロンチウム同位体比分析 基礎統計量 鳥ノ峯・椎ノ木遺跡

遺跡	埋葬遺構番号	個体略番	性別	年齢	分析歯種	分析対象年齢	Analysis No.	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	StdErr (2 σ)	$^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$	Weighted Mean	誤差 (2 σ)
椎ノ木	椎ノ木	椎ノ木	男性	成年	右下顎側切歯	1-3歳	1	0.70953	0.00009	1.053	0.709488	0.000045
							2	0.70941	0.00009	1.071		
							3	0.70953	0.00011	1.094		
							4	0.70949	0.00010	1.129		
							5	0.70949	0.00014	1.196		
鳥ノ峯	2次14号	14	男性	熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70872	0.00014	0.870	0.70886	0.0003
							2	0.70925	0.00018	0.881		
							3	0.70879	0.00021	0.864		
							4	0.70891	0.00024	0.894		
							5	0.70867	0.00023	0.952		
鳥ノ峯	2次7号	7	男性	熟年	右下顎側切歯	1-3歳	1	0.70947	0.00012	1.160	0.70929	0.00016
							2	0.70919	0.00010	1.195		
							3	0.70922	0.00010	1.265		
							4	0.70924	0.00015	1.274		
							5	0.70945	0.00014	1.279		
鳥ノ峯	3次6b号	6b	女性	成年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70920	0.00016	1.344	0.70925	0.00019
							2	0.70928	0.00015	1.354		
							3	0.70939	0.00014	1.290		
							4	0.70932	0.00013	1.202		
							5	0.70899	0.00015	1.181		
鳥ノ峯	3次A号	A	男性	成年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70875	0.00009	0.938	0.70873	0.000074
							2	0.70881	0.00007	0.948		
							3	0.70867	0.00008	0.936		
							4	0.70870	0.00009	0.921		
							5	0.70870	0.00009	0.944		
鳥ノ峯	3次B号	B	女性	成年~熟年	左上顎中切歯	2-4歳	1	0.70944	0.00013	0.851	0.70937	0.00019
							2	0.70936	0.00012	0.835		
							3	0.70930	0.00011	0.834		
							4	0.70921	0.00013	0.835		
							5	0.70967	0.00016	0.870		
鳥ノ峯	3次C号	C	男性	成年	左下顎中切歯	1-3歳	1	0.70974	0.00004	0.580	0.709694	0.00005
							2	0.70964	0.00005	0.571		
							3	0.70967	0.00006	0.553		
							4	0.70969	0.00005	0.567		
							5	0.70970	0.00005	0.568		

れない第3大臼歯を用いて行われており、必然的に第3大臼歯形成年齢である9-13歳程度（Hillson 1996）の間に過ごした居住地・生育圏が研究の焦点となってきた。しかし、Porhaska et al. (2002) で示されたようにレーザー溶出装置を用いた極微小領域は、準非破壊であり、歯冠測定部位を残したままSr同位体比分析ができるため、歯種を選択することが可能となった。さらに、歯冠の測定部位を限定できるため、歯冠形成年齢の早い段階あるいは遅い段階など、測定年齢をより限定することも可能となった。本稿では、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに設置されているレーザー溶出型二重収束型高分解能ICPマルチコレクタ質量分析装置（LA-MC-ICP-MS、レーザー：Analyte G2（エキシマレーザー）、Photon Machines社製；質量分析計：Neptune Plus、Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。

まず、分析前に電子顕微鏡を用いて分析部位の状態の確認を行い、歯牙表面の風化や歯牙表面の曲面はレーザーのフォーカシングに問題となるため歯科用エンジン（円柱形極細ダイヤモンドポイント）によって分析対象とした場所（3mm×7mm程度）の表面研磨を行い、LA-MC-ICP-MSで $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ および $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ の分析を行った。測定部位は、主に推定4歳以下の箇所を測定した。1資料について1回あたり約1.4mmのライン分析を5回行い（表6-8におけるAnalysis No.）、その重み付け平均値（表6-8におけるWeighted mean）をその資料の値とした。対象とした個体は、広田遺跡出土人骨21体22本（表6）、鳥ノ峯遺跡出土人骨6体（表7）、椎ノ木遺跡出土人骨1体（表7）の歯牙である。また在地の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を検討するために動物骨7体の歯牙の分析を行った（表8）。ストロンチウム同位体比分析の結果をそれぞれ表6・7・8に示した。解析には、マイクロソフト社の表計算ソフトExcel用のアドインモジュールであるIsoplot/Ex 3.70（Ludwig 2008）を用いた。

表8 ストロンチウム同位体比分析 基礎統計量 動物骨

動物	個体略番	Analysis No.	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	StdErr (2 σ)	$^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$	Weighted Mean	誤差 (2 σ)
シカ	H1	1	0.70929	0.00005	0.640	0.709385	0.00008
		2	0.70940	0.00006	0.637		
		3	0.70939	0.00005	0.628		
		4	0.70948	0.00006	0.643		
		5	0.70937	0.00006	0.644		
サル	H2	1	0.70970	0.00006	0.651	0.70955	0.00013
		2	0.70957	0.00006	0.659		
		3	0.70960	0.00006	0.660		
		4	0.70944	0.00006	0.659		
		5	0.70948	0.00005	0.659		
シカ	H3	1	0.70916	0.00004	0.415	0.709157	0.000022
		2	0.70912	0.00006	0.419		
		3	0.70916	0.00005	0.422		
		4	0.70919	0.00005	0.421		
		5	0.70915	0.00005	0.414		
シカ?	H4	1	0.70970	0.00005	0.796	0.70959	0.0001
		2	0.70953	0.00006	0.822		
		3	0.70959	0.00007	0.835		
		4	0.70951	0.00008	0.826		
		5	0.70954	0.00007	0.822		
イノシシ?	H5	1	0.70992	0.00006	0.883	0.709869	0.00008
		2	0.70986	0.00006	0.899		
		3	0.70978	0.00008	0.907		
		4	0.70981	0.00007	0.878		
		5	0.70992	0.00006	0.874		
サル	H9	1	0.71011	0.00014	0.861	0.71006	0.00026
		2	0.71033	0.00014	0.850		
		3	0.71007	0.00016	0.769		
		4	0.70979	0.00014	0.736		
		5	0.71001	0.00017	0.708		
サル?	H10	1	0.70951	0.00025	1.591	0.70984	0.00025
		2	0.70977	0.00019	1.597		
		3	0.71009	0.00023	1.580		
		4	0.70995	0.00026	1.574		
		5	0.70990	0.00023	1.580		

$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値の結果を、木下 (2003) を参考に下層期古段階 (弥生時代後期後半～古墳時代前期)・下層期新段階 (古墳時代中期)・上層期 (古墳時代後期) の順に並べた。古段階と新段階のどちらに属するか不明な個体は下層として中間に配置している。動物の歯牙から析出した $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をみると、サルの値はばらつきが大きく、シカの値は概ねまとまっている。野生のニホンジカは基本的には日周行動をとり、メスの行動圏は 1 km 程度、オスの場合はやや広いが全体として 3～5 km 程度と考えられている (川井ほか 2007)。在地の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を確定するのはとても難しく、小動物や家畜を指標とする (Price et al. 2002)、Sr 同位体比の正規分布を仮定し外れ値の分析から移入者を推定する (Wright 2005) など、様々な方法が試されており、今後も検討が必要であるが、現段階ではシカの値を在地の

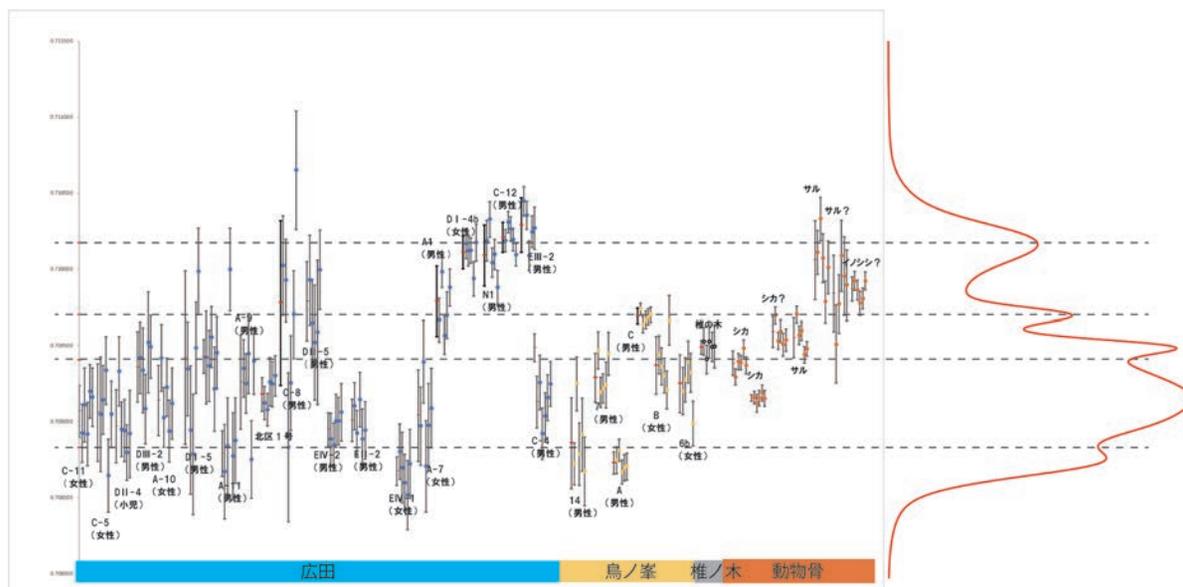


図4 ストロンチウム同位体比と Probability density plot の結果

$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値として採用する。また、Isoplot を用いて確率密度分布 (probability density) の解析を行い、検出されたピーク数に基づいて Unmix age ルーティンを用いて波形分離を行った。その結果、0.70883、0.709406、0.709701、0.710171の 値をピークとする 4つのクラスターが析出された (図4)。この結果に基づいて、在地の値よりも低い重みづけ平均値を示す個体を黄色、在地の範囲に平均値が収まる個体を青、在地の値よりも平均値は高いが一部重複している個体を緑、在地の値よりも平均値が高く誤差もそこから外れる個体を赤として色分けした。これに加え、広田遺跡の重要な特徴として貝製品の副葬が挙げられるため、どのような貝製品を伴うかをわかりやすくするため木下 (2003) の貝製品の分類も付記する (図5)。同様に、山野 (2012) で指摘された7段階区分における $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値も検討した (図6)。②は弥生時代終末期～古墳時代初頭、③は古墳時代初頭から前期前半、④・⑤は古墳時代前期前半から中期前半、⑥・⑦は古墳時代中期前半以降とする (山野 2012)。図5、6においては在地と推定される $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値の幅をうすいグレーで示している。図6をみると、山野 (2012) の第1・2段階に属する北区1号人骨は青に属し、動物骨から推定される在地の同位体比の幅に収まる。墓地形成の初期に属する被葬者が在地の幅に収まることは示唆深い結果である。

図5・6から、下層新段階期 (古墳時代中期以降) で、青に属する個体なくなり、新たに赤に属する個体群が出現することが読み取れる。この赤に属する個体は現段階では鳥ノ峯遺跡・椎ノ木遺跡出土人骨には見られない。また、出土位置や頭位、性別との間に相関は見られない (種子島 広田遺跡 2003 第163図 P272)。一方、下層古段階においては黄色と青と緑の個体が存在する (図5)。椎ノ木や鳥ノ峯の2次調査の7号、3次C、B、6号墓bは青に属し、2次調査の14号、3次Aは黄色に属する。動物骨から推定される在地の範囲内に収まる青の個体群を在地とすると、まさにこの個体群がその後の新段階でなくなるわけであるが、古段階でも新段階でも同じ時期に3つ程度のグループが存在していることがわかる。また、椎ノ木や鳥ノ峯3次C、B、6号墓bは広田遺跡周辺にその出自をもつ個体群の可能性が考えられる。しかし、鳥ノ峯遺跡周辺と広田遺跡周辺で大きく地質が異なるわけではない (シームレス地質図参照 国立研究開発法人産業技術総合研究所 <https://gbank.gsj.jp/seamless/seamless2015/2d/>) ため、鳥ノ峯遺跡周辺から出土した動物の歯牙の検討などを待って結論を出す必要がある。一方、馬毛島椎ノ木遺跡は、種子島の北部の地質と類似しているが広田遺跡

第Ⅱ部

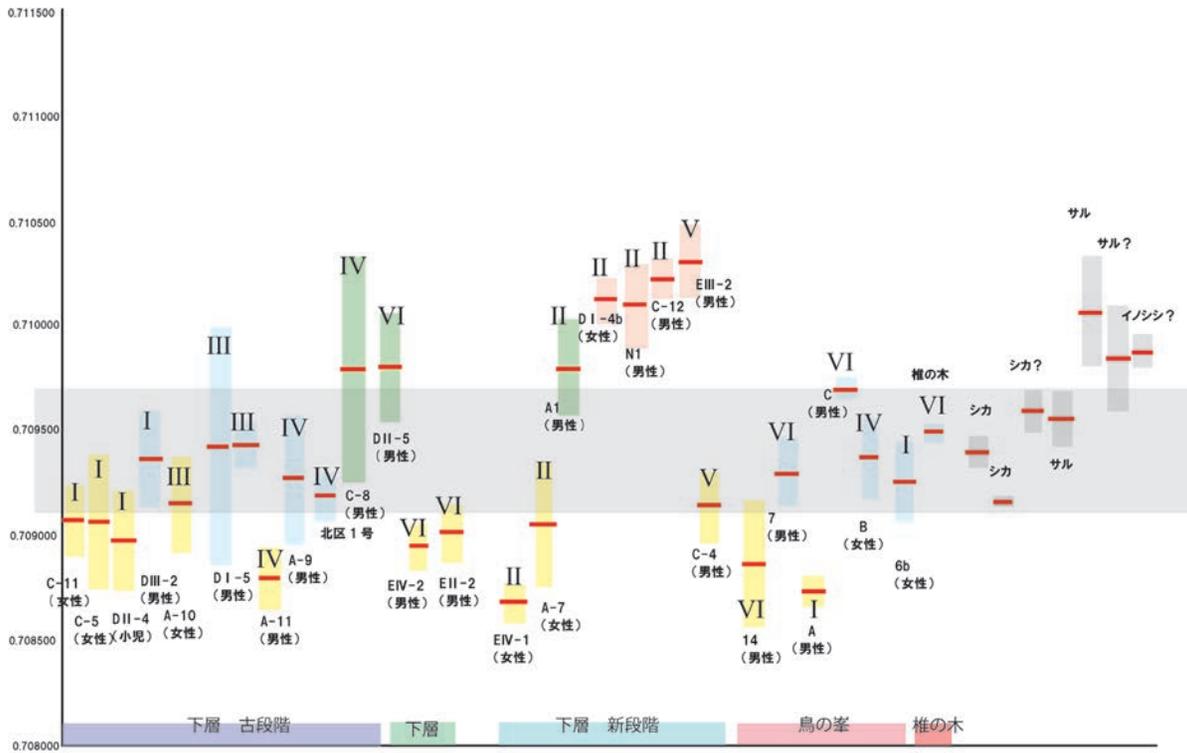


図5 ストロンチウム同位体比と木下 (2003) の段階区分との関係

赤線：Sr 値の重み付け平均値の中央値
ボックス：誤差 (2σ) の幅

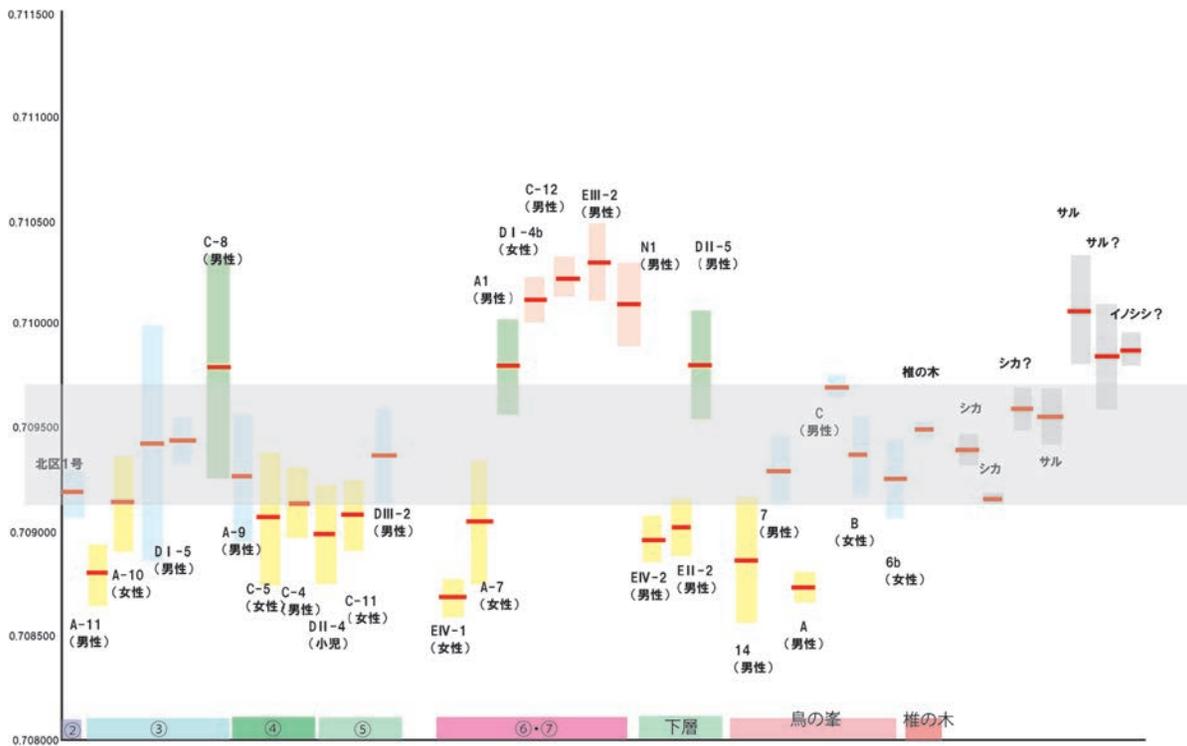


図6 ストロンチウム同位体比と山野 (2012) の段階区分との関係

赤線：Sr 値の重み付け平均値の中央値
ボックス：誤差 (2σ) の幅

周辺とはやや異なる。椎ノ木遺跡出土人骨は、中橋・永井（1980）において形質的に広田遺跡出土人骨と類似していることが指摘されており、本稿での分析と合わせて、広田遺跡出土人骨と強い関連がある、すなわち、広田遺跡周辺で生まれ育った人が椎ノ木遺跡に埋葬された可能性を示唆することができる。

広田遺跡の1つの特徴として指摘されたのが上顎の偏側性抜歯である（中橋 2003）。古段階のうち、黄色の個体群に属する C-5・A-11が RCRI²、青色の個体群に属する A-9・D I -5が LI²LC、緑色の個体群に属する D II -5が LI²LC であり、新段階では、黄色に属する A-7は RI²、赤色の個体群に属する D I -4b、C-12が LI²LC である。無抜歯は、黄色の個体群に属する C-11、EIV-1、青色の個体群に属する D III -2と緑色の個体群に属する C-8である（舟橋 2010）。中でも古段階では青色、青色に属する個体群がない新段階では新しく出現する赤色の個体群が、左側上顎の抜歯を有する点は興味深い。ちなみに、鳥ノ峯では、左側抜歯しか確認されておらず、2次14号（黄色）と3次の A（黄色）が LI²、3次の B・C（ともに青）が LI²LC であり、椎の木は LI²の抜歯が確認される。6号 b（青）は無抜歯である。抜歯の有無を観察できない個体も多いため、あくまで1つの可能性に過ぎないが、広田遺跡周辺において、少なくとも下層期では抜歯形式が出自表示となっていた可能性を指摘することも出来よう。

抜歯形式との相関や、新段階で青色に属する個体群が本当に存在しないのか、など本分析結果については今後、さらに分析個体を増やし検討を続ける必要がある。しかし、現段階においても確定的なことは、新段階において、赤色に属する個体群、すなわち ⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 値が高い個体が新たに出現するという点である。また、下層期を通じて安定的に存在するのは黄色、⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 値が低い個体群、であるという点も重要である。下層新段階は古墳時代中期に比定され、副葬貝類が吐喝喇列島以南に収斂する時期である（木下 2003）。交易相手の拡大あるいは変化によって、婚姻関係をはじめとし、広田遺跡周辺に移入する、あるいは墓地を共有する集団の範囲が変わったことが指摘できよう。副葬貝製品の変化については上層期における沖縄諸島とのかかわりがより深くなることも指摘されている（木下 2003）ため、今後分析個体を増やしていく必要がある。

謝辞

本報告を行うにあたり、広田遺跡ミュージアムの石堂和博氏と小脇有希乃氏には北区1号人骨の歯牙を提供いただきました。改めて厚く御礼申し上げます。ストロンチウム同位体比分析の結果の解釈について熊本大学の木下尚子先生と山野ケン陽次郎氏には考古学的な情報に関する有用なご教示を頂きました。記して心よりお礼申し上げます。

文献

馬場悠男 1998 「考古学と人類学」 同成社

Bentley R.A. 2006 Strontium Isotopes from the Earth to the Archaeological Skeleton: A Review. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 13:135-187

Bentley R.A., Krause R., Price T.D., Kaufmann B. 2003 Human mobility at the early Neolithic settlement of Vaihingen, Germany: evidence from strontium isotope analysis. *Archaeometry*, 45: 471-486.

Bentley R.A., Price T.D., Stephan E. 2004 Determining the 'local' ⁸⁷Sr/⁸⁶Sr range for archaeological skeletons: A case study from Neolithic Europe. *Journal of Archaeological Science*, 31: 365-375.

Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. 1994 Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas :Arkansas Archaeological Survey Report Number44.

第Ⅱ部

- Brooks S. and Suchey J.M. 1990 Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5, 227-238.
- 舟橋京子 2010 「抜歯風習と社会集団」 すいれん舎
- Goodman, A., Rose, J. 1990 Assessment of systemic physiological perturbations from dental enamel hypoplasias and associated histological structures. *Yearbook of Physical Anthropology*, 33:59-110.
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 「日本民族・文化の生成2 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成」 六興出版
- 川井裕史、石塚謙、小林徹哉、神山善寛 2007 野生ニホンジカの日周行動に見られる2つのパターン http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/_files/00017763/h19-5nihonjika.pdf 大阪府環境農林水産総合研究所.
- 木下尚子 2003 貝製装身具からみた広田遺跡 広田遺跡学術調査研究会（代表金関恕）編 「種子島 広田遺跡」 pp.329-366.
- 小池裕子 2003 種子島広田遺跡出土人骨の安定同位体分析について 広田遺跡学術調査研究会（代表金関恕）編 「種子島 広田遺跡」 pp.295-296
- Kusaka S., Ando A., Nakano T., Yumoto T., Ishimaru E., Yoneda M., Hyodo F., Katayama K., 2009 A strontium isotope analysis on the relationship between ritual tooth ablation and migration among the Jomon people in Japan, *Journal of Archaeological Science*. 36: 2289-2297.
- Kusaka S., Nakano T., Yumoto T., Nakatsukasa M. 2011 Strontium isotope evidence of migration and diet in relation to ritual tooth ablation: A case study from the Inariyama Jomon site, Japan. *Journal of Archaeological Science*. 38: 166-174.
- 日下宗一郎 2018 「古人骨を測る 一同位体人類学序説」 京都大学学術出版会.
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. 1985 Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68, 15-28.
- Ludwig K.R. 2008 Isoplot3.70: Geochronological toolkit for Microsoft Excel. Berkeley Geochronology Center Special Publication, 4.
- 中橋孝博 2003 鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨の形質人類学的所見 広田遺跡学術調査研究会（代表金関恕）編 「種子島 広田遺跡」 pp.281-294.
- 中橋孝博・永井昌文 1980 椎ノ木遺跡出土人骨について 馬毛島埋葬址—鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡 西之表市教育委員会、pp.24-34.
- 萩野展広、松島理士 2009 線状骨折・陥没骨折・頭蓋底骨折 福田国彦・丸毛啓史・小川武希編 「骨折の画像診断 改訂版」 羊土社 pp.45-48.
- Hawkey DE and Merbs CF. 1995 Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. *International Journal of Osteoarchaeology*5: 324-338.
- 平田和明 2012 クリブラ・オルビタリア 藤田尚編 「古病理学事典」 70-77.
- Hess J., Bender, M.L., Schilling J 1986 Evolution of the ratio of strontium-87 to strontium-86 in seawater from Cretaceous to Present *Science* 231: 979-984.
- Hillson S. 1996 *Dental Anthropology*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Horstwood M.S.A., Evans J.A., Montgomery J. 2008 Determination of Sr isotopes in calcium phosphates using laser ablation inductively coupled plasma mass spectrometry and their application to archaeological tooth enamel. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 72: 5659-5674.

- 石山昱夫 1973 「法医学ノート」 サイエンス社
- Porhaska T., Latkoczy C., Schultheis G., Teschler-Nicola M., Stingeder G. 2002 Investigation of Sr isotope ratios in prehistoric human bones and teeth using laser ablation ICP-MS and ICP-MS after Rb/Sr separation. *Journal of Analytical Atomic Spectrometry*, 17:887-891.
- 桜井修 1993 骨折、脱臼（上肢、下肢）広畑和志監修 標準整形外科学 pp.570-607
- 篠田謙一 2007 種子島広田遺跡出土人骨の DNA 分析 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）南種子町教育委員会、pp.187-191
- 鈴木隆雄 2003 骨にみる病変 鈴木隆雄編 「骨の事典」 朝倉書店、121-159.
- 竹中正巳 2007 種子島広田遺跡出土の人骨 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）南種子町教育委員会、pp.180-186
- Takigawa W. 2014 Age changes of musculoskeletal stress markers and their inter-period comparisons. *Anthropological Science*, 122:7-22.
- Temple D.H 2010 Patterns of Systemic Stress During the Agricultural Transition in Prehistoric Japan. *American Journal of Physical Anthropology* 142:112-124.
- 樋泉岳二 2007 広田遺跡から採集された脊椎動物遺体 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）南種子町教育委員会、pp. 218-229.
- 鳥巢岳彦 1994 骨盤の骨折と外傷 第7章 骨盤と仙腸関節 天児民和編 神中整形外科学 各論 pp. 707-713.
- 鳥巢岳彦1994 大腿骨幹部骨折 第9章 膝関節と下腿 天児民和編 神中整形外科学 各論 914-922。
- Walker P., Bathurst R., Richman R., Gjerdrum T., and Andrushko V. 2009 The causes of porotic hyperostosis and cribra orbitalia: A reappraisal of the iron - deficiency - anemia hypothesis. *American journal of physical Anthropology*, 139: 109-125.
- Wright L.E., 2005 Identifying immigrants to Tikal, Guatemala: Defining local variability in strontium isotope ratios of human tooth enamel. *Journal of Archaeological science*, 32: 555-566.
- 山本美代子（1988）日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. 人類学雑誌, 96: 417-433.
- 山野ケン陽次郎 2012 種子島広田遺跡の再検討 古代文化, 64-4: 2-26.
- 米田穰 2007 広田遺跡から出土した人骨の同位体分析 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）南種子町教育委員会、pp. 192-197
- 米元史織 2012生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性 *Anthropological Science (Japanese Series)*, 120-1: 15-46.
- Yonemoto S. 2016 Differences in the effects of age on the development of enthesal changes among historical Japanese populations. *American Journal of Physical Anthropology*. DOI: 10.1002/ajpa.22870.
- 米元 史織 2016 筋付着部の発達度からみる弥生時代の身体活動の地域的多様性 考古学は科学か。田中良之先生追悼論文集、上 579-602頁

2. 埋葬と装身習俗から見た広田遺跡 —下層期の3～5世紀を中心に—

木下尚子
熊本大学人文社会科学部

KINOSHITA Naoko
Kumamoto University Faculty of Humanities
and Social Sciences

はじめに

種子島の広田遺跡は、3世紀から7世紀に形成された集団墓地である。墓は海に面した砂丘にあり、沖合には小規模なサンゴ礁が発達している。サンゴの碎片が浜にカルシウム分を補給して砂丘内の骨を保護したことから、人骨とこれに伴う貝製装身具は砂中に良好な状態で保存されてきた。数次にわたる発掘調査で明らかにされた広田人は168体（本書第Ⅱ部第3章による）、伴った装身具は4万5千余点である。人骨の特徴的な形質や抜歯習俗の存在、他に類例をみない貝製装身具の種類や形状は多くの人類学者・考古学者の関心をひき、人の形質や土器の編年、装身具についてさまざまな研究がなされてきた。特色ある形状の貝製品をめぐって、漢以前の文物との関係が議論されてきたことも本遺跡の特徴である（金関1966、中橋・永井1989、松下・内藤1989、新田1991、中園1992、國分1992、1993、矢持2003、木下2003、中村2004）。

広田遺跡は最初の調査（1957～1959年）によって砂丘の南部分の状況が知られていたが、その後、南種子町が遺跡の保護を目的として砂丘全域の分布調査を実施し（2005～2006年）、墓地が砂丘の南北に広く及んでいることを明らかにした。この調査によって数基の墓の埋葬状況が精密に記録され、新たな遺物の発見とともに、その後時期の検討や遺物の個別的・実証的な検討が進んでいる（石堂・徳田・山野2007、石堂2012、山野2010、2011、2012、2013、2014）。

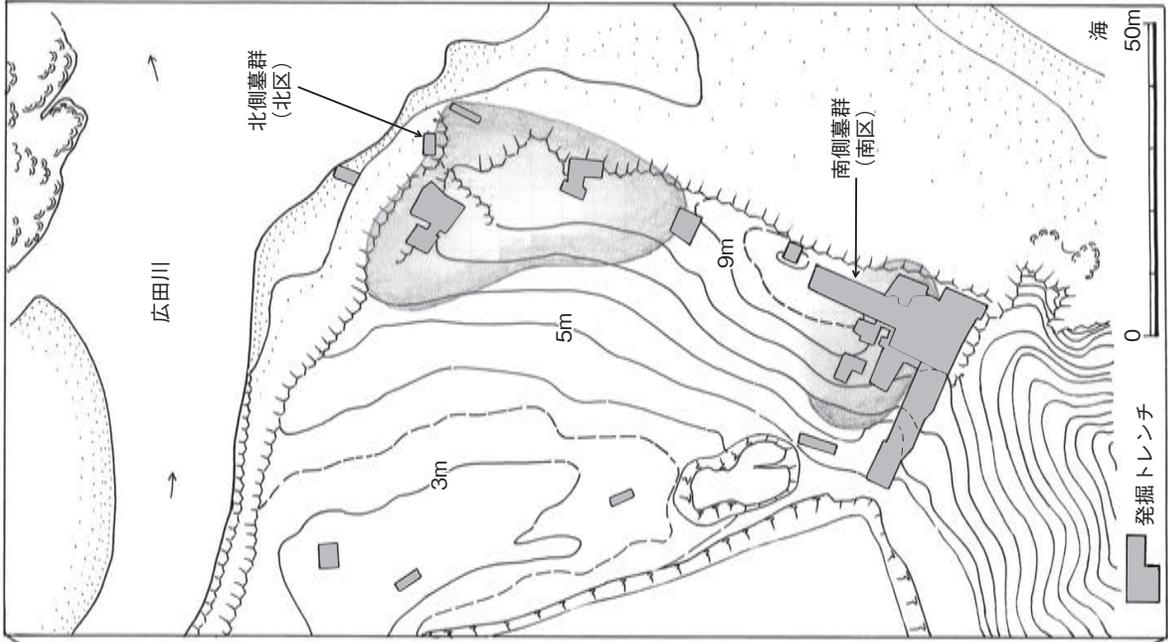
広田遺跡を含む南島⁽¹⁾の埋葬習俗については、新里貴之氏の一連の労作がある（新里2005、2010、2011a、2011b、2012、2013）。新里氏は琉球列島の先史時代人骨出土例を悉皆的に検討して地域ごとの特徴を抽出し、広田遺跡については分析を通して社会の複雑化を読み取っている。装身習俗については、山野ケン陽次郎氏が2005年以降の成果を入れて、広田遺跡の墓の分類と装身具を組み合わせた段階的整理を行い、墓地の時間的変化を具体的に示した。氏の研究によって複雑な内容の広田遺跡の全体像が提示された意味は大きい（山野2012）。

小稿は、これまでの調査と研究成果に拠りながら、広田遺跡の前半期—広田下層期（3～5世紀）—について、その埋葬習俗と装身習俗を論じるものである。同時期の南島との比較を通じて広田遺跡開始期の埋葬習俗の特徴を導き、これをもとに装身習俗登場の背景、広田人の海上移動行為の一端を描くことを目指した。

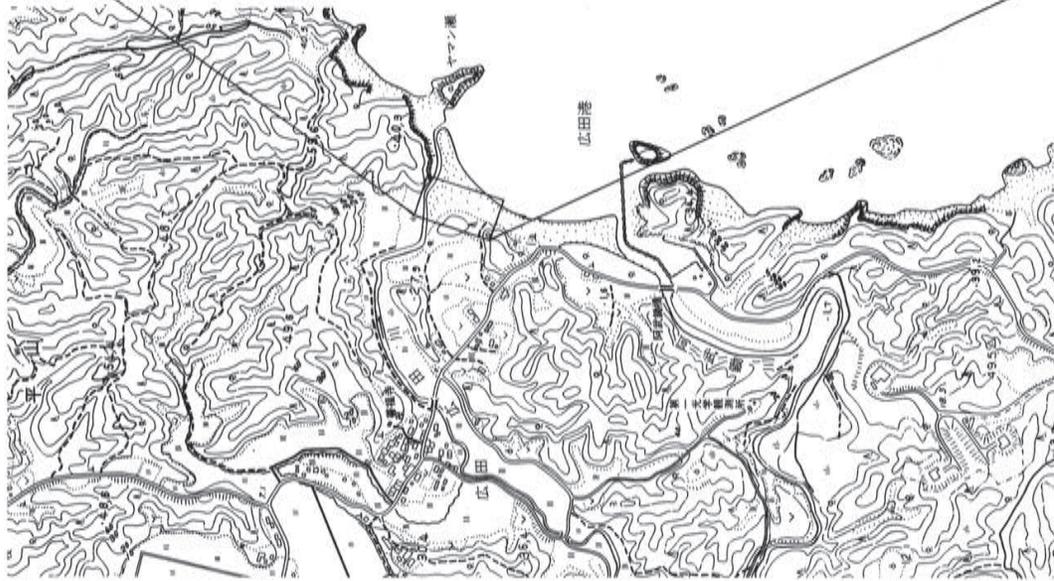
1. 広田遺跡の埋葬

1.1. 遺跡の立地と二つの墓地群

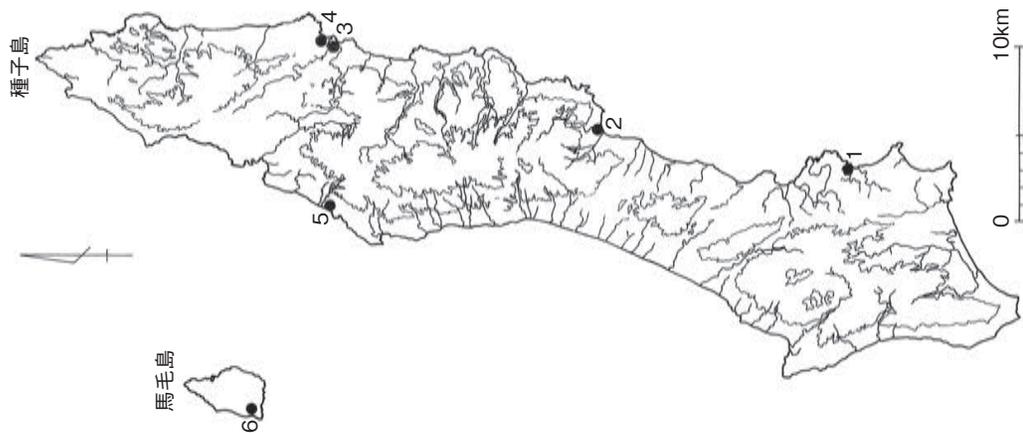
広田遺跡では、6670m²の墓域に合計214基以上の墓の存在が知られる。墓地は遺跡の北を東流する広田川とその河口に続く東側の小さな湾に臨みながら砂丘に沿って南に100m延びている（図1）。南北に長い墓域は、南のグループと北のグループに分かれ、前者は南区にある南側墓群、後者は北区にある北側墓群と呼ばれる。南側墓群はおもに1957～1959年の第1～3次調査で、北側墓群は2005～2006年の第4～5次調査で発掘されたものである。南側墓群に121基以上、北側墓群には地中探査分



③ 広田遺跡の発掘区と二つの墓群



② 広田遺跡の立地



① 広田遺跡と関連遺跡

- 1. 広田、2. 鳥ノ峯、3. 上浅川、
- 4. 田ノ脇、5. 上能野、6. 椎ノ木

図1 広田遺跡の位置、立地、発掘区、墓群 (桑原編2003引用、一部加筆)

を含めて93基以上の墓があるとされる。このうち発掘調査で内容が把握されているものは南側墓群で67基、北側墓群では7基である（徳田2007）。

1.2. 南側墓群と北側墓群

南側墓群と北側墓群の墓の内訳は表1の通りである。南側墓群には土坑墓のほか石を被葬者のまわりに配す配石墓・列石墓・石囲墓⁽²⁾、地上標識をもつ覆石墓、土器棺墓ほか二次葬も多い。これに対して北側墓群ではこれまでのところ覆石墓のみである。

覆石墓では地下の埋葬と対をなす地上の石積みがそのまま残るため、覆石墓の多い北側墓群において墓の切り合いはない。これに対して南側墓群の墓には地上標識のない土坑墓やこれの不明瞭な配石墓が多く、墓はしばしば相互に切り合ったり重なったりしている。また南側墓群の覆石墓では北側墓群のように石積みの明確なもの以外に、1～2個を置くだけの簡略化されたものもある。

このように、北側墓群と南側墓群は、墓の形状や埋葬状況において対照的である。しかし覆石墓の存在を介して相互に共通性をもつとみることができる。

1.3. 時期

広田遺跡で出土した土器は盛園尚孝氏と中村直子氏によって編年され、弥生時代終末期（南九州のなかつの中津野式並行期）から古墳時代後期に至る時期に置かれてきた（盛園2003、中村2003）。その後新里貴之氏による種子島全域の編年案が提示され（新里2009、2012）、石堂和博氏によってこれらを総合した編年案が発表された（石堂2005、2019）。編年では、鳥ノ峯遺跡（中種子町）で確認された種子島の在地土器（鳥ノ峯式）と南九州の土器（中津野式）との供伴事例が鍵で、鳥ノ峯遺跡の土器を整理した橋口達也氏の編年案に依るところが大きい（橋口1996）。

一方広田遺跡では土器を伴う墓が極めて限られており、層位や遺構の切り合い等による先後関係の把握が必ずしも容易でないことから、土器編年とは別に装身具による時期的変遷が示されてきた（木下2003）。

表2はおもに石堂氏による編年案もとに、これに装身具による墓の変遷を対応させ、比較資料として有効な鳥ノ峯遺跡の土器型式を加えて整理したものである⁽³⁾（図2）。

最古型式の土器は北側墓群に集中している。同様の型式は、現在までのところ南

表1 広田遺跡の墓のタイプ別統計

	南側墓群	北側墓群
土坑墓	25	
配石墓・列石墓・石囲墓	9	
覆石墓	17	7
土器棺墓	1	
二次葬	10	
不明	8	
未調査	51+a	86+a
合計	121+a	93+a

表2 広田遺跡の時期区分

時期区分		南九州の土器型式	広田遺跡の土器型式	貝符による時期区分		鳥ノ峯遺跡との対応	
				時期区分	基準の貝符		
弥生時代	後期後半	松木菌式・高付式				鳥ノ峯式 (古) *1 (新) *2	
	終末期	中津野式					
古墳時代	前期	東原式	広田式 (古) *2 (新)	下層期	北側墓群段階		
					古段階	下層タイプ i 貝符	広田式 (新)
	中期	辻堂原式	*3	下層期	新段階	下層タイプ ii 貝符	
					上層期	上層タイプ 貝符	
後期	笹貫(古)	上能野式(古)	上層期	上層タイプ 貝符			

*1：免田式土器供伴 *2：両者はほぼ同じ内容 *3：対応する土器型式未確定
(石堂2012、2019、新里2012を参照して作成)

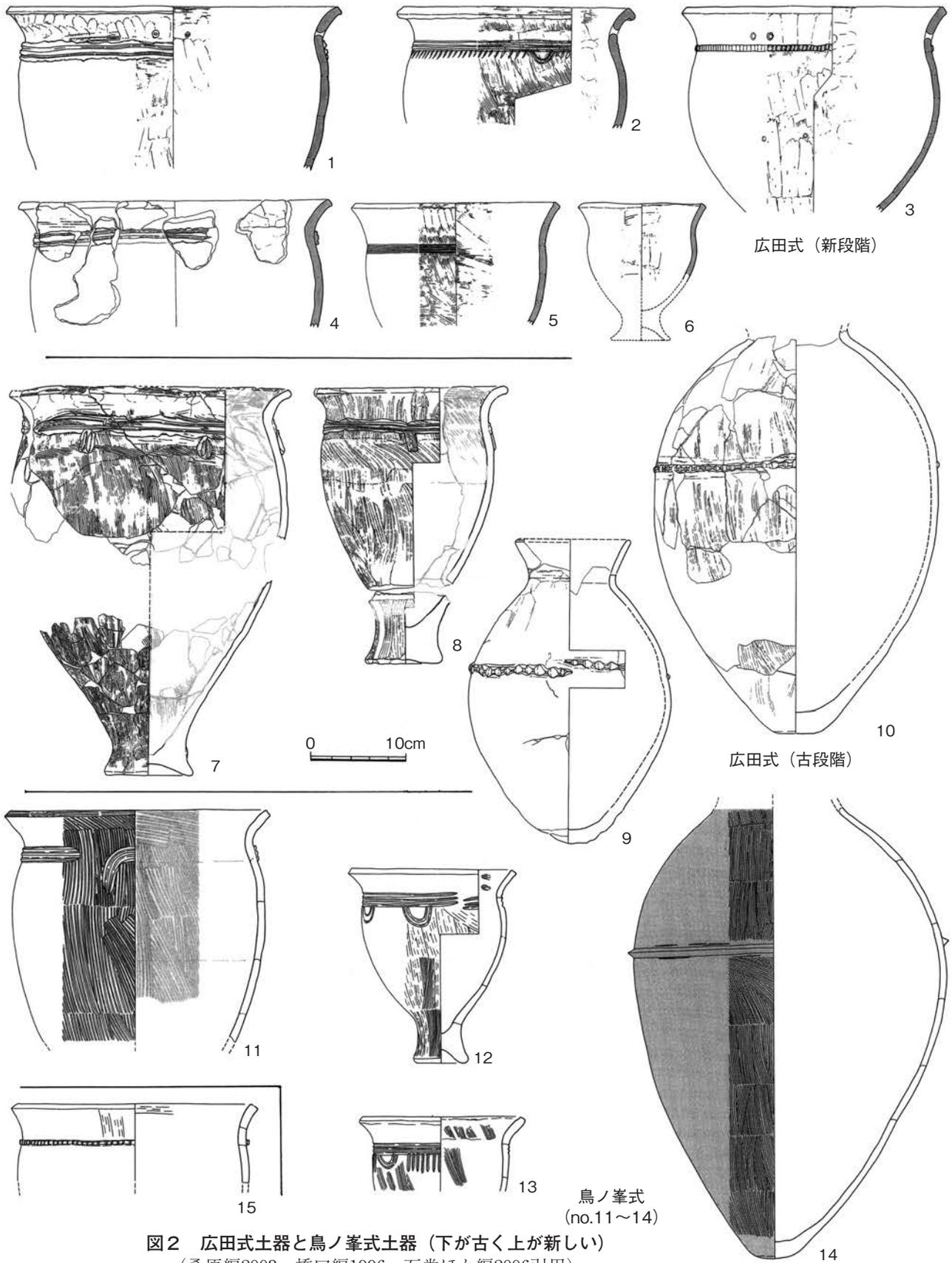


図2 広田式土器と鳥ノ峯式土器（下が古く上が新しい）

（桑原編2003、橋口編1996、石堂ほか編2006引用）

1：広田DⅢ地区2号人骨直上 2：広田A地区11号人骨直上、A地区～D地区、DⅣ地区6号人骨覆石、
 3：広田DⅠ地区5号人骨周辺、DⅠ地区覆石内、4：広田DⅢ地区、5：広田DⅠ地区5号人骨、DⅠ地
 区4号人骨、6：広田DⅠ地区5号人骨、DⅡ地区～DⅢ地区、7-10：広田北地区2号墓一括、11-14：鳥
 ノ峯3次10号墓（西の覆石墓グループ）、15：鳥ノ峯3次5号墓（西の混在グループ）

区でみつかっていなので、現在の資料による限り、広田遺跡は北区で始まったといえる。

1.4. 墓の変遷

広田遺跡の墓の変遷については、墓の形態的分類による移り変わりが南側墓群において論じられてきた（桑原2003、山野2012、石堂2012）⁽⁴⁾。埋葬の先後関係は、墓同士の切り合い関係と層位、形状をもとに導かれたもので、論者によって分類名称や先後の順番に若干の違いはみられるものの、基本的な認識は一致している。

これらを筆者の墓の分類名に置き換えると以下のようになる。

- ・覆石墓⇒配石墓・列石墓⇒石囲墓
- ・土坑墓は全期間通して存在する。

注意しておきたいのは、南側墓群では、この先後関係がすべての墓において必ずしも明確ではない点である。墓の重複・切合いが明らかな場合、あるいは型式的先後関係の明らかな貝符が双方の墓に伴う場合には、これらの新旧を具体的に決めることができるが、こうした決め手を欠く場合では、個別の墓についてそれぞれの時間的位置付けを決めることはきわめて困難である。複雑な様相をみせる南側墓群については、現実には複数タイプの墓が併存しつつ上に示した一定の方向に跛行的に変化してゆく状況であると理解しておきたい。

1.5 埋葬習俗の特徴

広田遺跡の埋葬には、複数タイプの墓が併存する以外に、二次葬、埋葬姿勢、覆石墓の供献土器・副葬品について、以下のような特徴が認められる。

- ・被葬者の埋葬姿勢は墓の種類にかかわらず膝を折りまげる屈肢葬が多く、中には下肢・上肢ともに強く折り曲げるものがある。伸展葬による墓は1例もない。身体の向きは仰臥葬と側臥葬のどちらかで、側臥姿勢の多いことが特徴である。
- ・二次葬が下層期・古段階から見られる。二次葬は以後上層期にかけて増加してゆく⁽⁵⁾。ただしこの葬法は覆石墓には認められない。
- ・北側墓群の覆石墓では、完形の土器を覆石上に供献したり、磨製石鏃を副葬したり、覆石上で火を焚いたりする事例（燔火）がみられる。
- ・南側墓群の覆石墓でも地上に土器を伴ったとみられる事例が多いが、これらの土器は全て破碎されて墓の周囲に散在している。磨製石鏃の副葬や燔火の痕跡は認められない。

これらの特徴は、覆石墓とそれ以外のタイプの墓との違いが、時期差に留まらず、その他の埋葬習俗に及ぶことを推測させる。

1.6. 広田遺跡と鳥ノ峯遺跡の関係

鳥ノ峯遺跡は種子島東海岸に面した砂丘上の墓地で、広田遺跡の北16.5kmにある。東西300mにわたる砂丘の180mの範囲に、これまで34基の覆石墓が確認されている。鳥ノ峯遺跡の一部には広田遺跡の北側墓群、南側墓群それぞれに共通する墓が存在し、また土器も共通の型式をもつため、広田遺跡に連動する面のある遺跡といえる。

鳥ノ峯遺跡の墓地は、東西の位置とその墓の内容によって以下の3グループに分けることができる（図3）。

- ・東のグループ : 砂丘東側にあり、覆石墓のみによって構成される。
- ・西の覆石墓グループ : 砂丘西側にあり、覆石墓のみによって構成される。
- ・西の混在グループ : 砂丘西側にあり、覆石墓と土坑墓によって構成される。

上の3グループは、地上標識、地下の埋葬の状況、二次葬の有無、副葬品・装身具の有無によって

第Ⅱ部

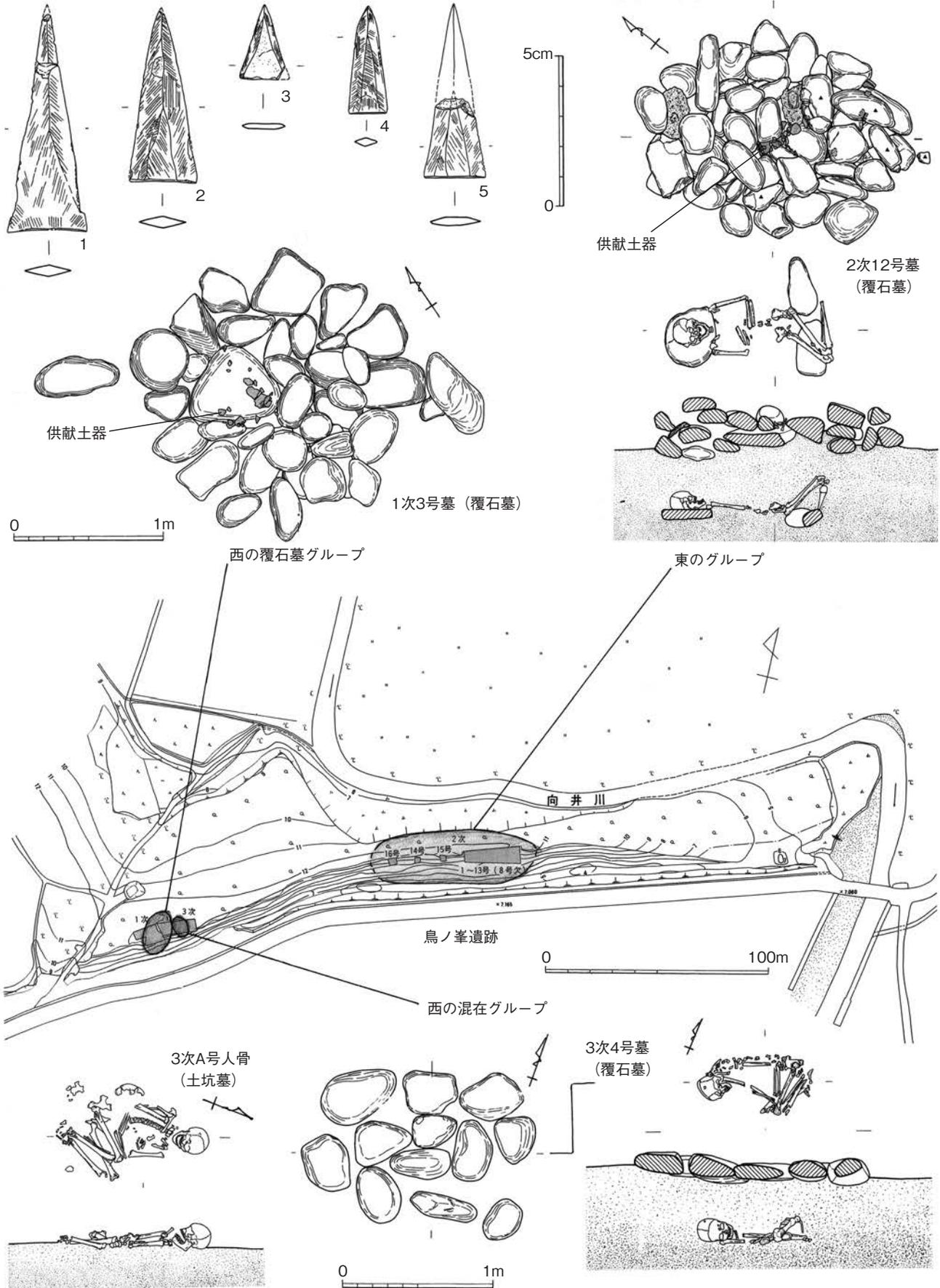


図3 鳥ノ峯遺跡の東のグループ・西のグループと磨製石鏃
 1-5：磨製石鏃（1：西の覆石墓グループ、2-5：東のグループ）

表3 鳥ノ峯遺跡のグループ分類

墓のグループ		基数	地上の標識				地下の埋葬					二次葬		
			覆石	土器供献	燻火	立石	配石をもつ	頭位			姿勢			
								西北	西	南/北	仰臥屈肢		側臥屈肢	
東グループ	覆石墓のみ	15	15	9	4		8	12			15			
西	覆石グループ	覆石墓のみ	10	10	4	1	2		2	3		4	1	
	混在グループ	覆石墓と土坑墓混在	12	6	2				6	4		1	7	1

墓のグループ		副葬品・装身具				時期	備考（調査次）
		磨製石鏃副葬	ヤコウガイ容器	オオツタノハ腕輪	貝符・玉類・貝製装身具		
東グループ	覆石墓のみ	1				鳥ノ峯式（古）	他に磨製石鏃5出土。（第2次調査）
西	覆石グループ	覆石墓のみ				鳥ノ峯式（新）*1	石鏃が人骨に刺さる。（第1次、3次調査）
	混在グループ	覆石墓と土坑墓混在		4	3	7	広田式（新）

*1:鳥ノ峯式(新)は広田式(古)と併行する(表2参照)。

それぞれ異なる特徴をもち、出土する土器による時期も異なっている。これらの要素を整理して表3示した。それぞれに伴う土器の型式から、覆石墓の内容が東グループから西の覆石グループに向かって変化していること、鳥ノ峯遺跡の最後の時期に、広田遺跡と共通する腕輪や装身具が西の混在グループ内に登場していることがわかる。

2. 広田遺跡の構造

2.1. 装身の6類型・2グループ

ここで、広田遺跡で出土した装身具の概要を示しておこう。表4に人骨に伴った装身具を、貝符・腕輪・玉類等に分けて、その出土数・素材とともに示した（図4）。

広田遺跡の装身具は、素材の大部分が貝殻であること、腕輪と連結して使用される同形小型の製品が多いことが特徴である。これらの出土状況を見ると、着装は被葬者によって異なり、貝符や竜佩型貝製垂飾（以下竜佩と表記する。）を多くもつもの、腕輪を多くはめるもの、装身具をまったくもたないものなどがあり、使用に一定のルールがあったことが推測される。

表4 広田遺跡の装身具一覧

分類名称		出土数	素材
腕輪	オオツタノハ腕輪	231	貝殻
	ゴホウラ腕輪	242	
	その他貝の腕輪*	16	
連結式装身具	貝符	下層タイプ	102
		異形タイプ	9
		上層タイプ	472
	竜佩型貝製垂飾	97	貝殻
	二孔板状貝製品	65	
	有孔円盤状貝製品	20	
	玉類	イモガイ珠	
ツノガイ珠		9885	
ノシガイ珠		377	
マクラガイ珠		287	
	ガラス小玉等	51	他
合計		45078	

*イモガイ、オニニシ、ボウシュウボラ

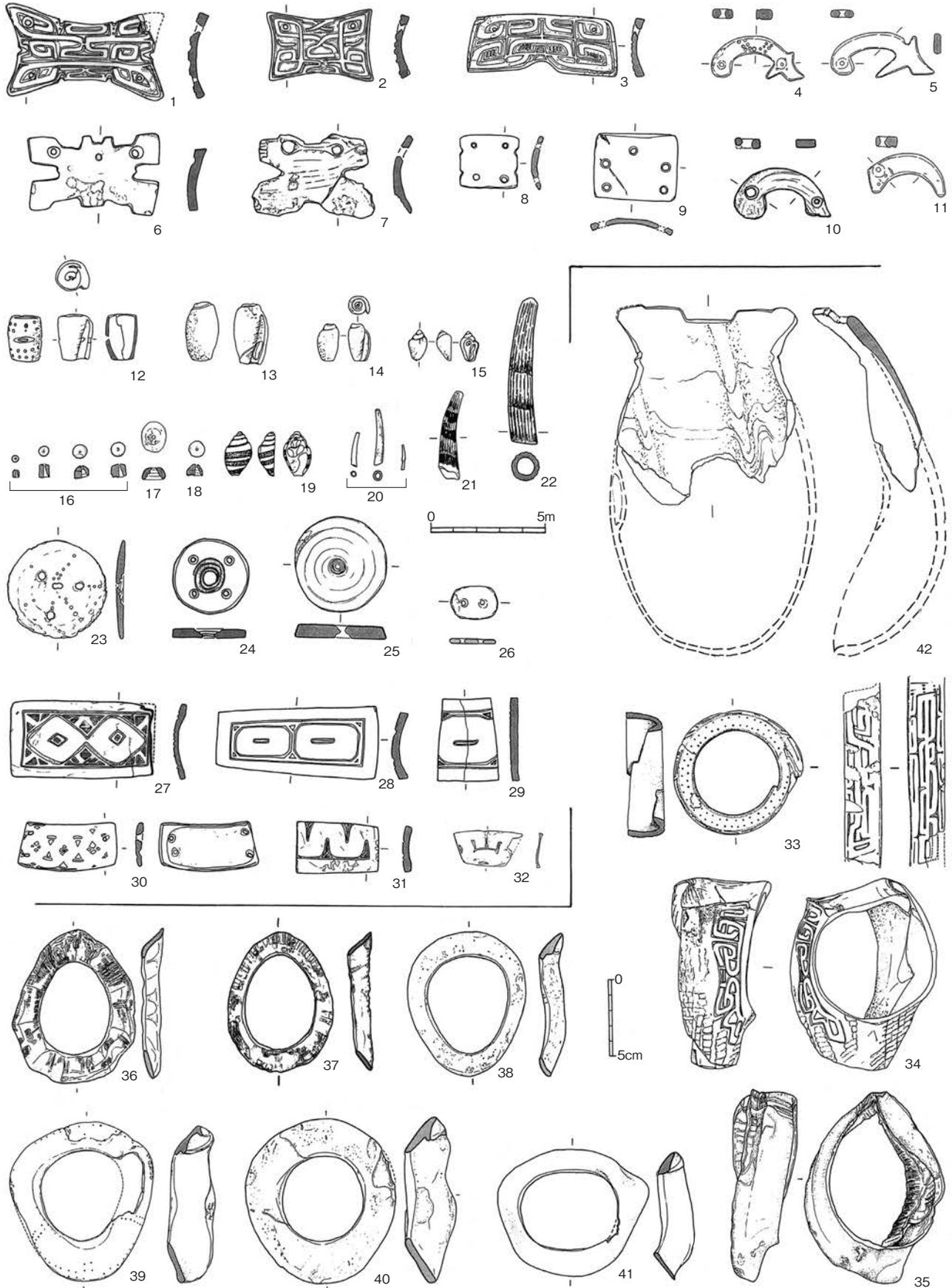


図4 広田遺跡出土貝製装身具、ヤコウガイ容器 (桑原編2003引用、一部加筆。説明は表8下)

筆者は以前、これらを装身状況によって2グループ6類型（下層類型I～VI）に分けた（木下2003）。それは貝符の有無、貝符の種類、腕輪の有無を基準とする分類で、その概要を表5ならびに付図に示す。

この中で、装身具の型式等（貝符の型式、腕輪の型式と種類）で先後関係を把握できるのは、以下の類型である。

- (旧⇒新)
- 下層類型I⇒類型II
- 下層類型IV⇒類型V

このほかに、墓の切り合いや上下に重なる事例が7例あり（表6）⁽⁶⁾、類型間の先後関係を示している。2005年の北側墓群の調査によって、下層類型IVに伴う土器が広田遺跡内で最古段階のものであることが明らかになったので、下層類型IVを他の類型より若干古く置くことができる。

貝符においても腕輪においても、同じ類型内では（下層類型Iと同V）新旧両タイプの併存する複数の事例があるので、類型間の変化（I→II、IV→V）は漸移的であったとみられる。

以上に示した類型、切り合い関係、土器型式、変化の

表5 広田遺跡下層の貝製装身具による分類

装身グループ	下層類型	装身具分類		時期		
		貝符レベルの分類		下層期		
		腕輪レベルの分類		古段階	新段階	
貝符グループ	I	貝符あり	彫刻あり	分類せず	○	
	II		方形（タイプi）			○
	III		台形（タイプii）			
			彫刻なし（異形タイプ）		○	
腕輪グループ	IV	貝符なし		オオツタノハ腕輪	○	
	V			オオツタノハ腕輪＋ゴホウラ腕輪		○
	VI	なし			○	

表6 装身類型別新旧関係

	古い⇒新しい		
	I	II	
貝符の型式	IV	V	
墓の切り合い	IV	VI	
	V	II	
	IV	V	
	III	II	V
	I	V	
	I	II	VI
	VI	VI	

I～VIは装身類型の下層I類～層VI類

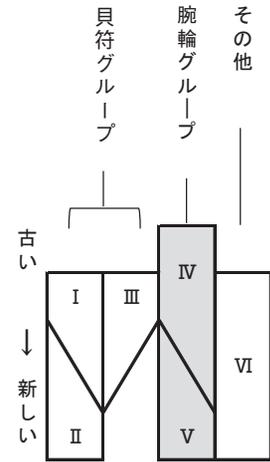


表6付図 類型間の関係模式図

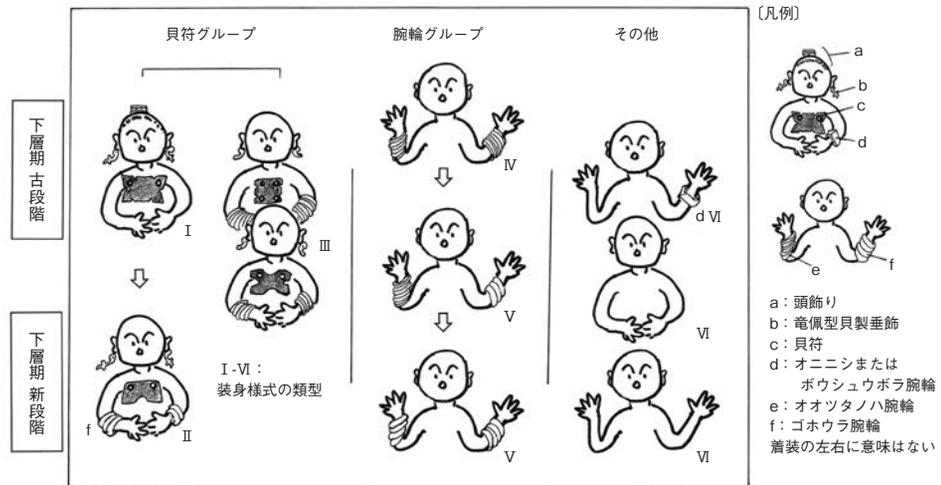


図5 広田遺跡下層期の装身様式分類模式図

表7 広田遺跡（下層）の埋葬一覧

凡例 ○：該当する、出土する ×：該当しない

no.	類型	人骨番号	仰臥葬			側臥葬			埋葬習俗				装身具			備考	
			緩屈肢	下肢強屈	上下強屈	緩屈肢	下肢強屈	上下強屈	二次葬	覆石墓	土坑墓・配石墓・列石墓	供献土器	貝符	亀佩型垂飾	腕輪		マクラガイ珠
1	下層類型Ⅰ	1次S I						○	×	○		○	○		サンゴ底石。上層人骨による攪乱うける。 土器供献。 最古型式の下層具符もつ。 不明 オオツタノハ・ゴホウラ腕輪。 ゴホウラ腕輪。 ゴホウラ腕輪。		
2		D IV 1			不明					○		○	○				
3		D III 2		○						×	○	○	○				
4		D II 4							○	×	○	○	○				
5		D VII 1							○	×	○	○	○				
6		C 5							○	×	○	○	○				
7		A 5									不明	○		○			
8		C 11		○						×	○	○		○			
9		A 4							○	×	○	○		○			
10		E X 1			○					×	○	○		○			
小計 (10)			0	2	1	0	0	5	0	0	9	2	10	6	4	0	
11	下層類型Ⅱ	1次N 2 西							○	×	×		○		○	二次葬。列石。 不明 列石。 オオツタノハ腕輪。 ゴホウラ腕輪。 不明 ゴホウラ腕輪。	
12		A 3									不明		○		○		
13		1次N 1								○	×	×		○			○
14		A 7	○								×	○		○			○
15		C 13							○		×	○		○			○
16		C 12		○							×	○		○			○
17		D III 2 上								○	×	×		○			○
18		D I 4 b				○					○		○		○		○
19		A 1										不明		○			○
20		E IV 1							○		×	○		○			○
21		D I 3								○	×	×		○			○
小計 (11)			1	1	1	0	1	1	4	1	4	1	11	3	9	0	
22	下Ⅲ	A 10				○				○	×			○	○	人骨上部に石1のみ。 「積み石に覆われるようにして出土」	
23		D I 5		○						○	×	○		○	○		
小計 (2)			0	1	0	1	0	0	0	2	0	1	0	2	2	1	
24	下層類型Ⅳ	1次E 1			不明					×	○				○	両腕伸びる。側芽は写真で判断。 下肢不明。頭上に二孔板状貝製品並ぶ。 頭骨なし。仰臥か側臥か判断つかない。 二孔板状貝製品。 小児。 2007年南区4号人骨。焼骨。 A 8号人骨下。 列石。	
25		A 6		不明						×	○				○		
26		1次N 5							○		×				○		
27		E II 3							○		×				○		
28		1次E 2			不明						×	○			○		
29		E II 1			○						×	○			○		
30		A 9		○							×	○			○		
31		1955 崖面			○						×	○			○		
32		C 10							○		×	不明			○		
33		A 11							○		○	×	○		○		
34		C 6		○							○	×			○		
35		C 8				○					×	○			○		
小計 (12)			0	2	2	1	0	1	3	2	7	1	0	0	12	3	
36	下層類型Ⅴ	C 14								×	○			○	○	仰臥か側臥か判定不能。ゴホウラ腕輪に彫刻。 配石。A11号上。 有稜オオツタノハ腕輪1。 不明 合葬。 大きな石があるも関係は不明。 不明	
37		C 3		?						○	×			○	○		
38		C 4								○	×			○	○		
39		A 8			○						×	○		○	○		
40		E X 2								○	×	○		○	○		
41		E III 1								○	×	○		○	○		
42		1次E 3								○	×	○		○	○		
43		E III 2	○								○	×		○	○		
44		1次N 2 東									○	×		○	○		
45		D II 3									×	○		○	○		
46		D IV 4							○		×	不明		○	○		
47		D I 4 a		○							×	○		○	○		
48		A 2									×	不明		○	○		
小計 (13)			1	1	1	0	3	2	1	3	8	0	0	3	13	0	

no.	類型	人骨番号	仰臥葬			側臥葬			埋葬習俗			装身具				備考
			緩屈 肢	下肢 強屈	上下 強屈	緩屈 肢	下肢 強屈	上下 強屈	二次 葬	覆石 墓	土坑墓・ 配石墓・ 列石墓	供献 土器	貝符	竜佩 型垂 飾	腕輪	
49	下 層 類 型 VI	D IV 6					○		○	×	○				○	マクラガイ珠。右腕伸びる。
50		D IV 5						○	○	×			○		○	
51		D IV 2・3							○	×					○	合葬。
52		D III 1		○					×	○			○	○		石冪墓。オニニシ腕輪
53		D II 6	○						×	○						幼児。下肢不明。
54		1次N 3							○	×						頭骨近くで広田式土器片出土。
55		D IX 1					○		×	○						二孔板状貝製品。
56		1次E1/E2間							不明	×						不明。ヤコウガイで覆われる。
57		C 1							○	×				○		左腕のびる。オニニシ腕輪
58		C 2		○					○	×				○		ボウシュウボラ腕輪
59		D II 5		○					×	○						
60		E IV 2		○					×	○						左腕のびる。
61		E II 2							○	×						
62		1次N 4							不明	不明						
63		C 7		○					×	○						両腕伸びる。最古の可能性。
64		C 9			○				○	×					○	2007年南区2号。
65		D IV 7						○	×	×						
66		D V 1							不明	不明						不明。赤色顔料痕跡明らか。
67		1955年小児II							不明	×						穉内。小児。
68		2005年南区1号							○	×						小児。ガラス小玉24
小計 (20)			1	4	1	0	5	0	2	9	6	1	0	2	3	4
69	IV	北区1号墓	不明						○	×				○		下肢不明。有稜オオツタノハ腕輪。磨製石鏃。
70		北区2号墓							○	×	○		-	○	-	人骨は未発掘。
71		北区3号墓	不明						○	×						下肢不明。ツノガイ珠、ノシガイ珠、イモガイ珠。
小計 (3)									3	0	1					

図4の説明 (T,R,B,E,H,K,Yは桑原編2003の遺物記号)

- 1-2：貝符 (下層タイプ i) T168・T172
- 3：貝符 (下層タイプ ii) T2
- 4-5：竜佩型貝製垂飾 R3・R4
- 6-9：貝符 (異形タイプ) T166・T348・T357・T360*
- 10-11：竜佩型貝製垂飾 (異形タイプ) R12・R35
- 12-14：マクラガイ珠 M20・M49・M32
- 15：フトコロガイ珠 B158
- 16：イモガイ珠 (Ⅲ類) B1・B3・B4・B5
- 17：イモガイ珠 (Ⅱ類) B89
- 18：イモガイ珠 (Ⅰ類) B6
- 19：ノシガイ珠 B135
- 20：ツノガイ珠 (マルツノガイ) B136・B118・B8

- 21-22：ツノガイ珠 (ニシキツノガイ) B137・B106
- 23-25：有孔円盤状貝製品 E4・E7・E1
- 26：二孔板状貝製品 H28
- 27-32：貝符 (上層タイプ) T267・T486・T499・T339・T330・T201
- 33：イモガイ腕輪 K23
- 34：オニニシ腕輪 K101
- 35：ボウシュウボラ腕輪 K91
- 36-37：オオツタノハ腕輪 K450・K263
- 38-40：ゴホウラ腕輪 (下層タイプ) K452・K24・K446
- 41：ゴホウラ腕輪 (上層タイプ) K356
- 42：ヤコウガイ容器 Y13

*no.6は異形タイプ内のサウチタイプと仮称 (後述)

漸移性を踏まえ、上にあげた個別の事例を相互に矛盾なく説明できる関係を検討すると、表6付図のような模式図が描ける。

以上から広田遺跡の集団は、特徴的な装身状況によって以下の二つの装身グループに整理される⁽⁷⁾。

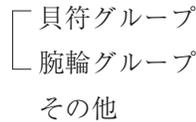


図5はこれらの関係を模式的に示したものである。装身具の着装状況によって分類したⅠからⅥの類型は、装身様式の類別でもある。

2.2. 墓の3タイプ

以上の装身グループと埋葬習俗の関係をみてみよう。表7は六つの類型ごとに、広田遺跡の埋葬習俗の特徴である二次葬、埋葬姿勢、覆石の有無、土器の有無について個別に示したものである⁽⁸⁾。被葬者の姿勢、覆石墓と土坑墓の多寡に注目すると、これらと装身類型との間にゆるやかな傾向を読みとることができる。例えば、類型Ⅰでは側臥葬が土坑墓より多いのに対し、類型Ⅳでは仰臥葬が多くかつ類型Ⅰにない二次葬がみられ、類型Ⅵでは覆石墓が多く二次葬が稀である。装身類型と埋葬習俗との間には一定の相関が予想される。

この関係をみるために、類型ごとに埋葬習俗の諸要素をパーセンテージで表示し、比較のために在地の墓制を示す鳥ノ峯遺跡のデータを加えて整理してみた(表8)⁽⁹⁾。表では関係に強弱をつけて、割合を3段階のトーンで示している。装身類型の母数(墓数)には1から20の幅があるので、パーセンテージの数値には注意が必要であるが、それを差し引いても、これらに以下のような二つの相関するグループのあることがわかる。

- ・覆石墓に仰臥姿勢で埋葬され、墓地上に土器が供献され、燔火が行われ、磨製石鏃が副葬されかつ装身具をほとんどもたないグループ。
- ・土坑墓・配石墓・列石墓・石囲墓に側臥姿勢で埋葬され、しばしば二次葬が行われ、磨製石鏃は副葬されないが、装身具をもつグループ。

これら二つのグループの間に双方の要素をもつ中間的なグループを抽出することができる。以下議論の便宜のために、これらに呼び名をつけておこう。覆石墓で特徴づけられる最初のグループは、鳥ノ峯遺跡の覆石墓に典型例がみられるので「鳥ノ峯タイプの墓」(以後「鳥ノ峯タイプ墓」)、装身具をもつ二番目のグループは広田遺跡で主体的であることから「広田タイプの墓」(以後「広田タイプ墓」)、中間的なグループは上記2タイプを併せた要素をもつことから「混在タイプの墓」(以後「混在タイプ墓」)とよびたい。

3タイプの時期をみると、鳥ノ峯タイプ墓には鳥ノ峯式(古)から鳥ノ峯式(新)の土器が伴い、広田タイプ墓には広田式(新)の土器が伴う。鳥ノ峯タイプ墓が広田タイプ墓に先行することがわかる。混在タイプ墓は二つのタイプの時期にまたがっている。これを広田遺跡に当てはめ、3タイプ墓のキーワードとして示すと、以下のようになる。

- ・鳥ノ峯タイプ墓：覆石墓、仰臥葬、燔火、磨製石鏃
- ・広田タイプ墓：土坑墓・配石墓、側臥葬、腕輪・貝符
- ・混在タイプ墓：覆石墓・土坑墓・配墓、側臥葬、腕輪・貝符

2.3. 広田タイプ墓の登場

鳥ノ峯タイプ墓は、種子島の北半にある田之脇遺跡(盛園1973)、浅川遺跡(鹿児島県立埋蔵文化財センター1998)に同様の墓が知られることから(図1①参照)、種子島在地の墓であることが知ら

表8 広田遺跡・鳥ノ峯遺跡の埋葬習俗と装身類型の相関 (数字は%)

遺跡・地区	装身類型(広田)・墓地グループ(鳥ノ峯)	装身グループ	対象墓数	埋葬習俗1			埋葬習俗2			装身具			時期	墓のタイプ		
				燻火	覆石墓	仰臥葬	土器供献	磨製石鏃	マクラガイイ珠	二次葬	側臥葬	土坑墓・配石墓			腕輪	貝符
広田	北区	下層VI類型	1 ^{*1}	100	100	100						100		200cal AD前後 ^{*2} 鳥ノ峯式(古) 鳥ノ峯式(新)	鳥ノ峯タイプ	
				27	100	87	60	7								
鳥ノ峯	南区	覆石墓(東)	15	100	100	40	40	10								
					100	40	40	10								
広田	北区	下層IV類型	2		100	50	50	50					100		混在タイプ	
					100	50	50	50	50				100	100		
					42	33	7		21			33		11		
鳥ノ峯	南区	混在(西)	12		50	9	17				8	64	33			
													25	17		
広田	南区	下層I類型	10			30	20					50	90		広田タイプ	
													40	100		60
					9	43	9			45	29	57	82	100		27
					17	33	8			33	44	78	100			
鳥ノ峯	南区	下層V類型	13		23	25					8	42	67			
												100		23		

*1:北区1号人骨 *2:図20参照 *3:広田式(新)と鳥ノ峯式(古)はほぼ同時期 凡例(%) 1~32 33~65 66~100

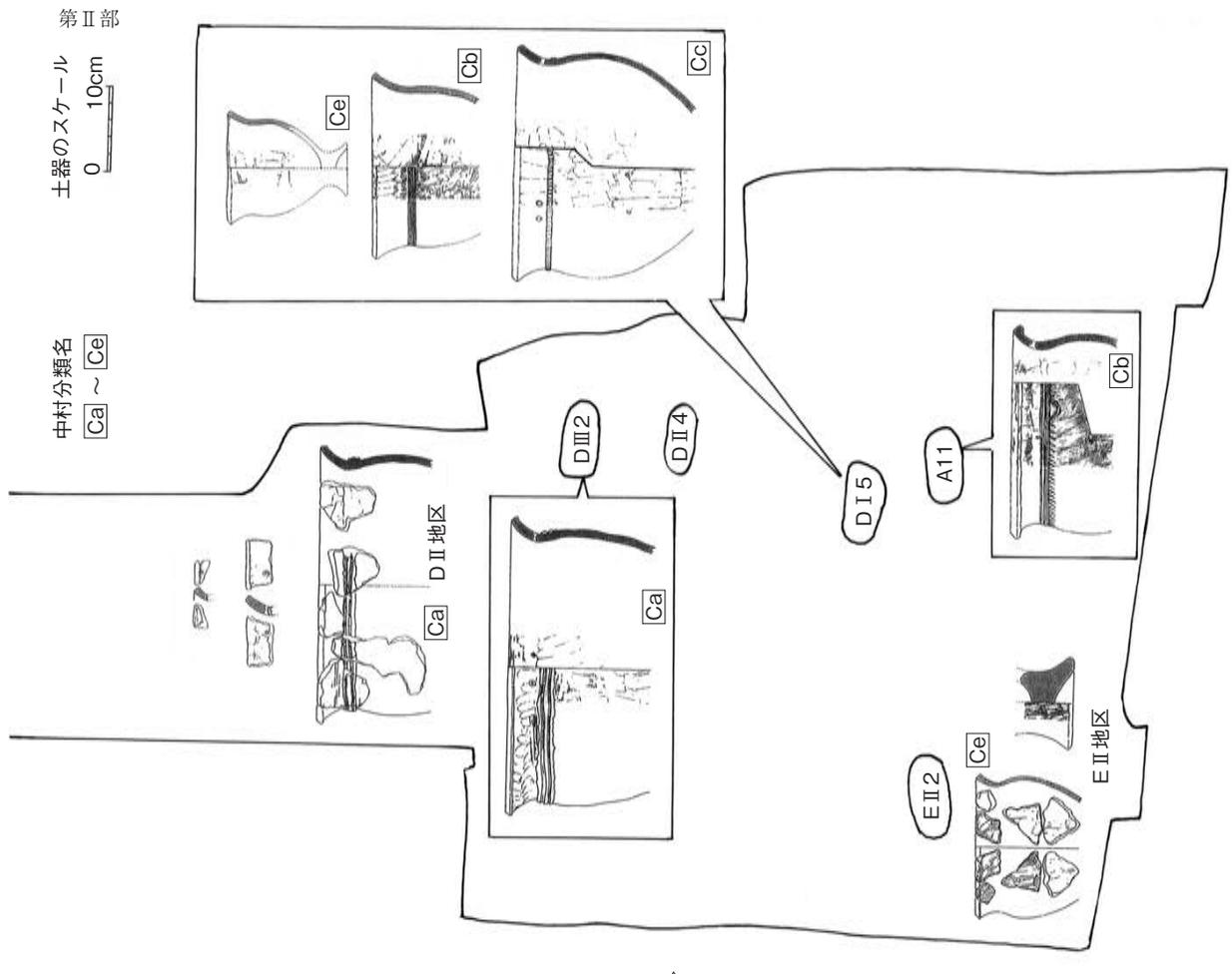
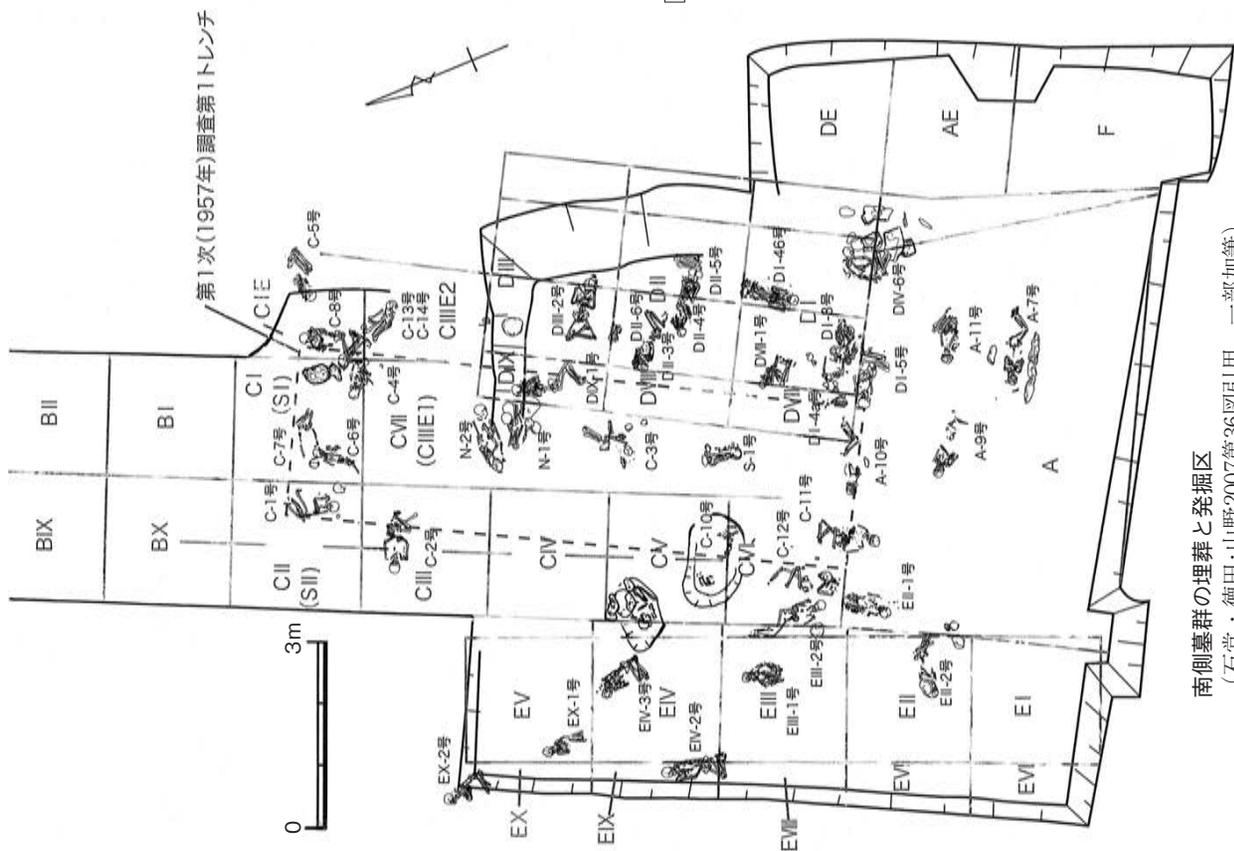


図6 南側墓群と土器を伴う埋葬

南側墓群の埋葬と発掘区
(石堂・徳田・山野2007第36図引用、一部加筆)

れる。これに対して広田タイプ墓は種子島内に類例がない。

広田タイプ墓の第一の特徴は装身具をもつ点である。この習俗はどのように登場したのだろうか。広田遺跡で、装身具をもつ墓の最古例は、広田式（古）期の北区2号墓である。この墓は鳥ノ峯タイプ墓との強い共通性もちながらも、腕輪をもっている。次の広田式（新）になると多彩な装身具が南区にわたって一斉に登場し、同時にその一部が鳥ノ峯人の中にも現れる。この段階の変化、すなわち広田式（古）期から広田式（新）期への変化には、それ以前の埋葬習俗の延長上では説明できない要素が複数存在する（側臥葬、貝符ほか装身具）。

以上から、広田タイプ墓には2段階の不連続面があるといえる。1段階目は在地的・伝統的な鳥ノ峯タイプ墓に腕輪が伴う広田式（古）期で、広田タイプ墓の登場期といえよう。2段階目は墓のスタイルや装身具に新たな要素が登場する広田式（新）期で、広田タイプ墓の展開期といえる。この時期に混在タイプ墓が生まれ、在来の墓と融合した習俗が生まれている。鳥ノ峯タイプ墓と深く関係しながら、これとは不連続な面をもって現れたのが広田タイプ墓といえるだろう。

3. 南側墓群の始まり

3.1. 土器を伴う埋葬

広田式（新）期は広田タイプ墓の展開期にあたり、その特徴は南側墓群に示されている。南側墓群では鳥ノ峯遺跡のように墓に完形の土器が伴う事例はないが、土器片の出土位置を報告書で追うことの可能な事例が6例あり、このうち4例は対応する埋葬が特定しやすくかつ破片から全体器形を復元できる。これらを表9にまとめ、墓の位置等を図6に示した（表9、図6）。土器を伴うこの4基の墓は広田式（新）期に南側墓群に確実に存在したとみてよい。

表9のCa～Ceは中村直子氏による土器の分類名で、Cは「弥生時代後期以降で在地のもの」を意味し、a～eは口縁部形態と施文によって細分された名称である。DⅢ地区2号人骨に伴うCa類は、中園編年、橋口編年、新里編年において、共通して形式的に先行する位置に置かれ、DⅠ地区5号人骨に伴うCc類は橋口編年、中園編年でともに新しくおかれている。これはくびれ部に刻目突帯を廻らす形状が南九州の成川様式内の東原式（古墳時代前期から中期前半）の甕と類似していることによるのであろう。中村氏もCc類が型式学的にはCa・Cb類より新しいことを認めつつも、出土状況でこれを検証できないことに加えて、「口縁部形態に他の類と明瞭な形態差は見出せないので、この遺跡内では同時期として捉えておく」としている⁽¹⁰⁾（中村2003：p.306）。以上から、DⅢ地区2号墓とDⅠ地区5号人骨は同時期か、前者がより早く作られたとみるのが可能である⁽¹¹⁾。なお、4例以外に明らかに土器を伴う墓としてDⅡ地区4号墓がある。この土器自体の情報は不明であるが、参考事例として併せて検討の対象にしたい。

以上をふまえて、広田式（新）期の土器を伴う墓について、具体的にみてゆこう。

3.1.1. DⅢ地区2号人骨・DⅡ地区4号人骨（図7）

サンゴ礫の石囲内にゆるやかな仰臥屈肢葬で埋葬されている成年男性である。頭部周辺と腕に貝符と竜佩が集まっており、頭蓋頂部に太いツノガイ（ニシキツノガイ）が俵のように積み重ねられ

表9 南側墓群の土器を伴う埋葬

墓	出土位置	中村2003分類
DⅢ地区2号	DⅢ地区2号人骨直上、DⅢ地区	Ca、Ca
DⅠ地区5号	DⅠ地区5号人骨、その周辺、DⅡ～DⅢ地区に散在	Cb、Cc、Ce
A地区11号	A地区11号直上からDⅣ地区6号人骨にかけて散在	Cb
EⅡ地区2号	EⅡ地区からA地区、底部はEⅡ地区	Ce

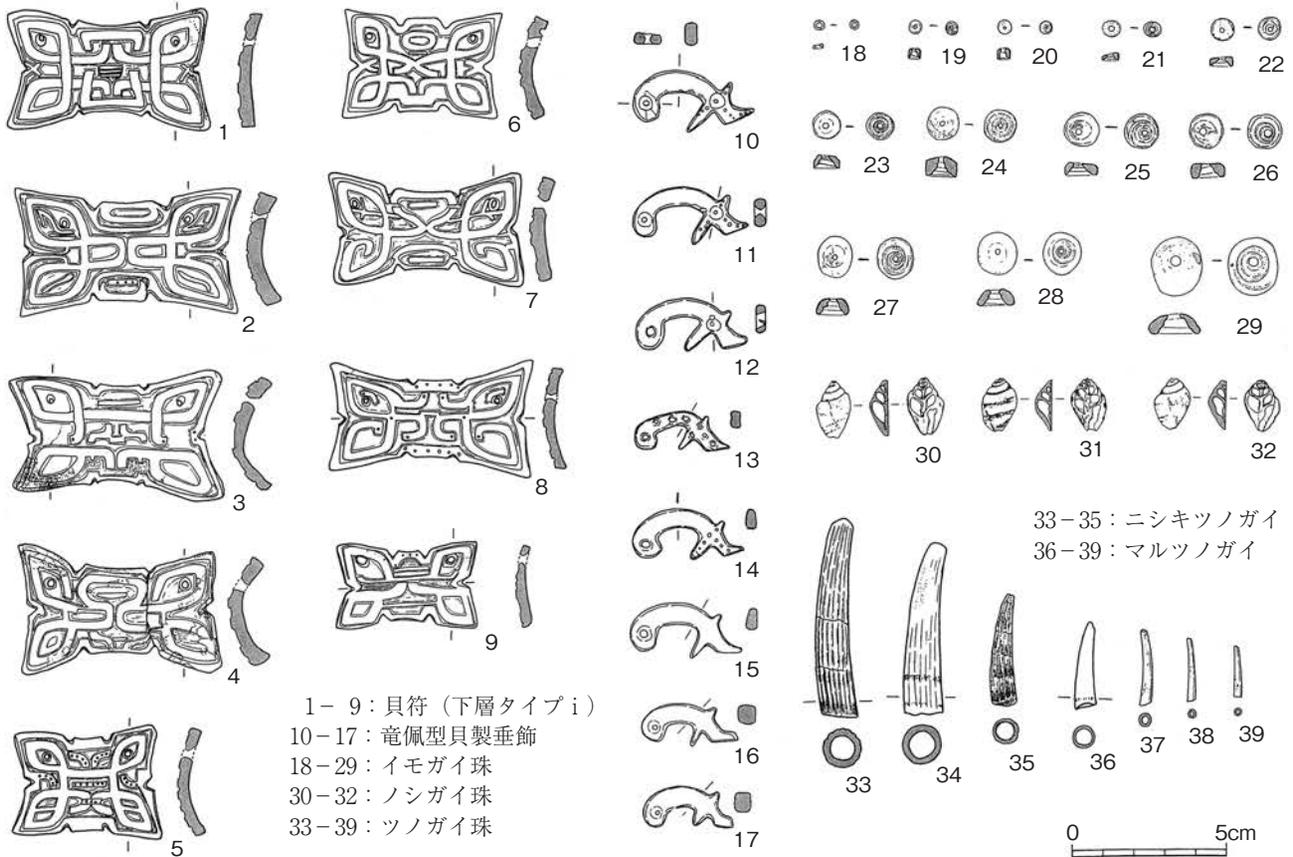
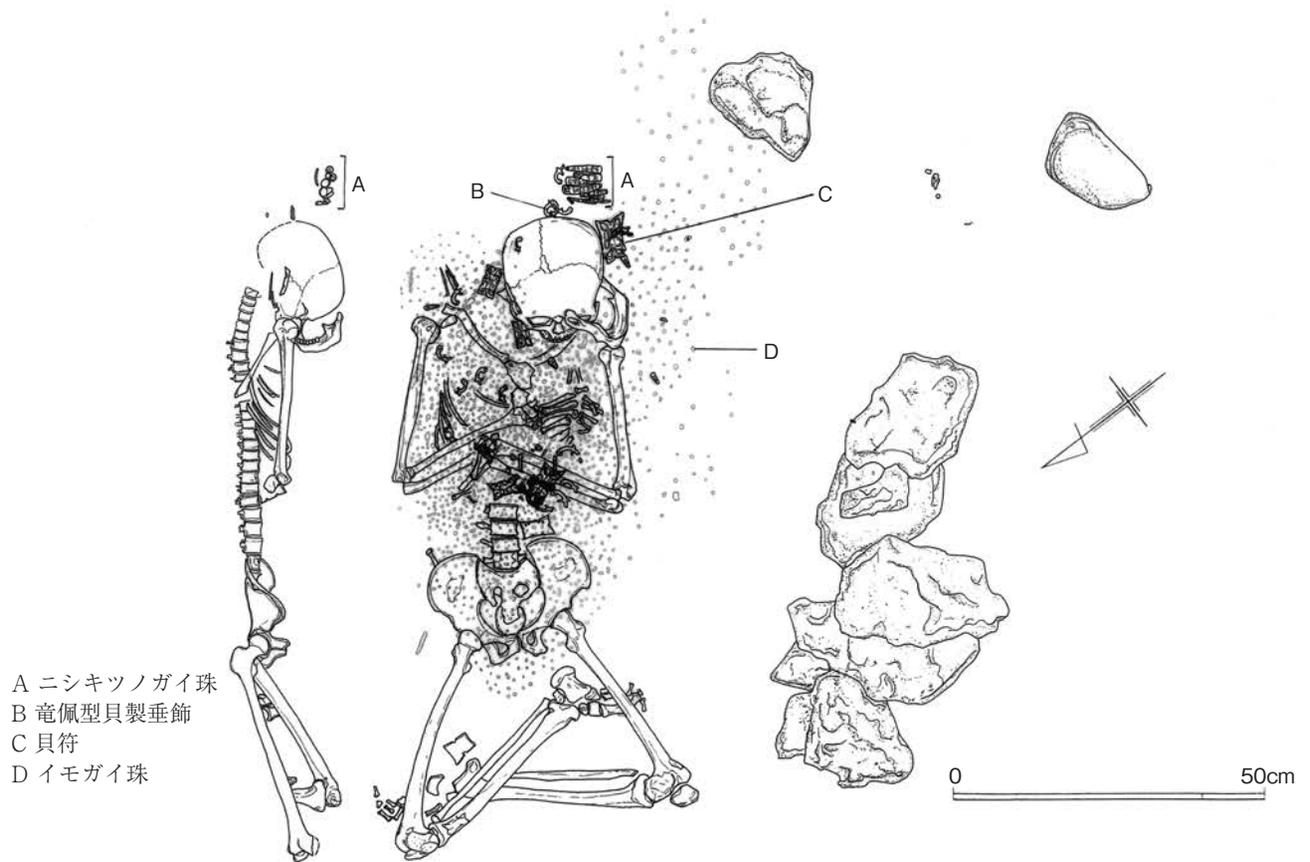


図7 DⅢ地区2号人骨と伴出装身具 (桑原編2003第108-109図引用、一部加筆)

ている。竜佩は2点が交互に組み合わせられて1組となる出土状態は使用状況を示しており貴重である。手首では「貝符2点の下側からイモガイ珠が数珠繋ぎになったままで出土し、さらに竜佩型貝製垂飾が手に装着していたような形で骨を中心に輪状に出土する」。頭部から胸部にかけて夥しい数の玉類が残り、「骨を取り上げた下側からも、イモガイ珠、ノシガイ珠、ツノガイ珠が一面に敷き並べたようにして出土した」（桑原編2003：p.180）。

参考事例としたDⅡ地区4号人骨は側臥屈葬の小児で、DⅢ地区2号人骨と同様にサンゴ礫の石組みに囲まれており、石組み脇で土器片が多数出土したとされる（図8）。「頭骨の周囲にはツノガイ珠が列をなして並び、間に青色のガラス玉1点、赤色不透明の鉄石英管玉が1点混じっている。左耳のあたり、頭部右側にそれぞれ1点ずつの竜佩型貝製垂飾」がみられた。顎の下で「竜佩型貝製垂飾が2点ずつ組み合わせさせて2対出土した。」（桑原編2003：p.173）。

3.1.2. A地区11号人骨（図9）

石組み構造下に埋葬された側臥姿勢の熟年男性で、石組み内で土器片と玉類がみついている。左右の腕にオオツタノハ腕輪をそれぞれ4個、5個はめ、「マクラガイ珠8点が下顎下の右周辺にまとまって出土」している（桑原編2003：p.155）。人骨近辺から土器片十数点が出土し、東側近辺でマガキガイ13点が出土している⁽¹²⁾。このマクラガイ珠には簡単な彫刻のあることが特徴である。

3.1.3. DⅠ地区5号人骨（図10）

積み石に覆われるようにして出土した側臥姿勢の成年男性で、積み石の間や直下に土器片38片、形状不明のヤコウガイ製品1点、玉類が出土している。左右の腕にオオツタノハ腕輪をそれぞれ16個と17個はめ、「両手を背の後ろで緊縛した姿勢を取っており、骨盤の下に手首があった。かなり無理な姿勢の屈葬である。膝を強く折り曲げて横向きに埋葬したものと考えられる」。胸部の玉類は「首飾りとはっきり確認できるほどのまとまりはしていない。〔中略〕頭骨付近、顎骨？付近に大型のマクラガイ珠多数および突起部をもたない勾玉状の竜佩型貝製垂飾2点がみられた。〔中略〕多種多様の貝製品を伴う中で、イモガイ珠の少なさが目立っている。」（桑原編2003：p.171）。

3.1.4. E地区2号人骨（図9）

頭の上に礫石が置かれた側臥姿勢の熟年男性である。土器との関係は明記されていないが、土器の出土地点であるEⅡ地区にはいる埋葬は本例だけなので、土器は本埋葬に伴ったとみてよいだろう。

3.2. 南側墓群の始まり

南側墓群において土器を明確に伴う墓は下層期前半の数例に限られ、続く時期（下層期・新段階）および上層期では土器を伴う現象自体が不明瞭になる。これに対して南側墓地群より古い北側墓群では墓に複数個の土器が伴う。埋葬に土器を用いる行為は時間とともに衰退したと考えられる。このようにみると、南側墓群で土器をもつ墓は、下層期前半の中でも初期の墓であるとみてよいだろう。

表10は述べてきた南側墓群の5墓を装身具、墓のタイプ、被葬者の姿勢等にかけて整理したものである。墓のタイプに注目すると、広田タイプ墓と混在タイプ墓が、南側墓群に揃って登場していることがわかる。広田遺跡全体で見ると、混在タイプ墓に続く時期に広田タイプ墓が登場するので、両者は先後の関係をもつが（表8）、南側墓群内においてはほぼ同時に登場していることは重要である。ここで導いた初期の埋葬事例が、貝製品の型式と遺構同士の先後関係を示す表6ならびに付図に矛盾しないことを確認しておこう（表6で腕輪グループの下層Ⅳ類型が少し先行しているのは、南側墓ではなく北側墓群の事例である）。

表10の広田タイプ墓では、貝符をもつものともたないものが組み、混在タイプ墓では腕輪をもつものと持たないものが組み合っている。装身具の内容では、DⅢ地区2号とDⅡ地区4号が近く、D

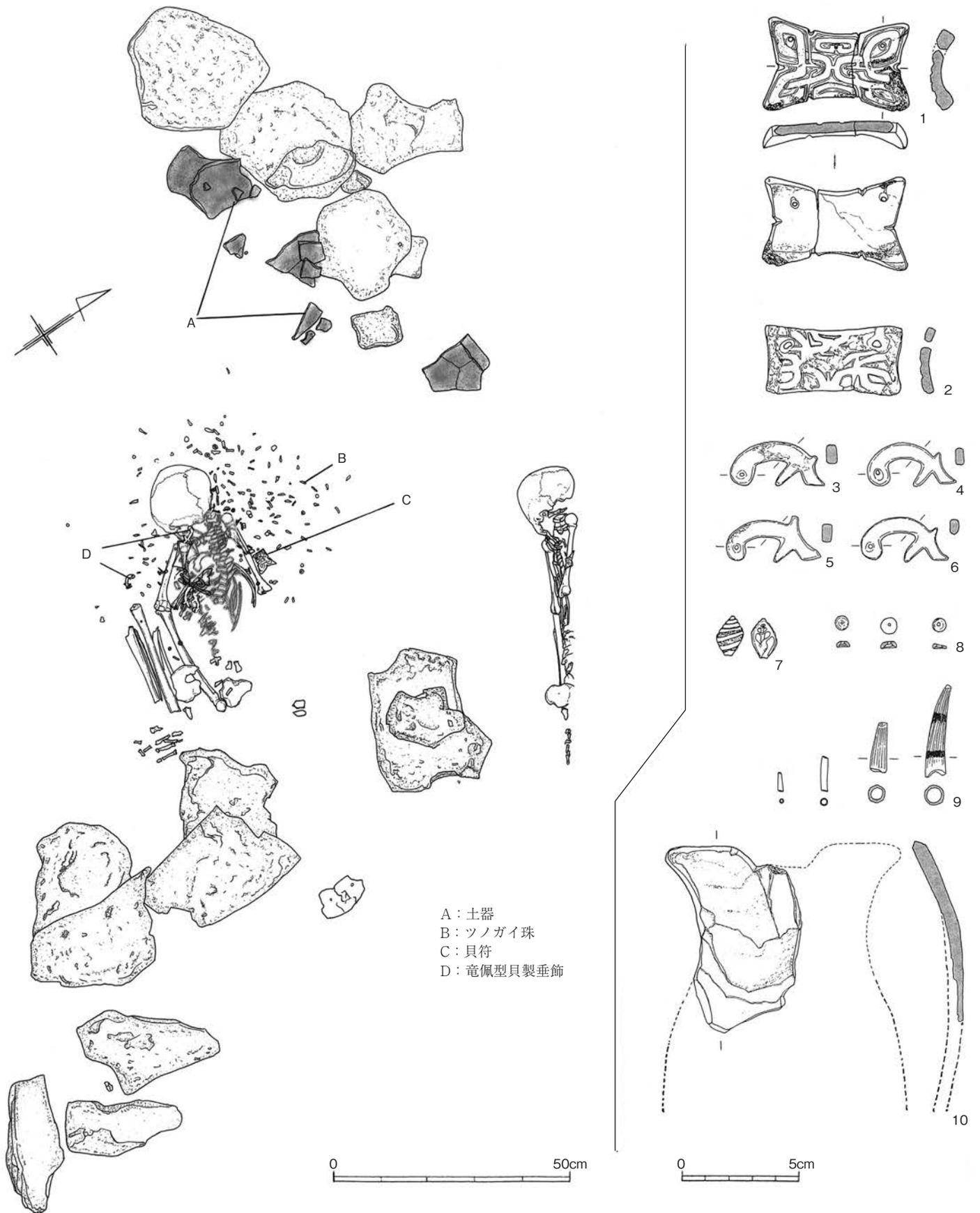


図8 DII地区4号人骨と伴出装身具 (桑原編2003第102-103図引用、一部加筆)

1-2: 貝符 (下層タイプ i) 3-6: 竜佩型貝製垂飾 7: ノシガイ珠 8: イモガイ珠 9: ツノガイ珠 10: ヤコウガイ容器

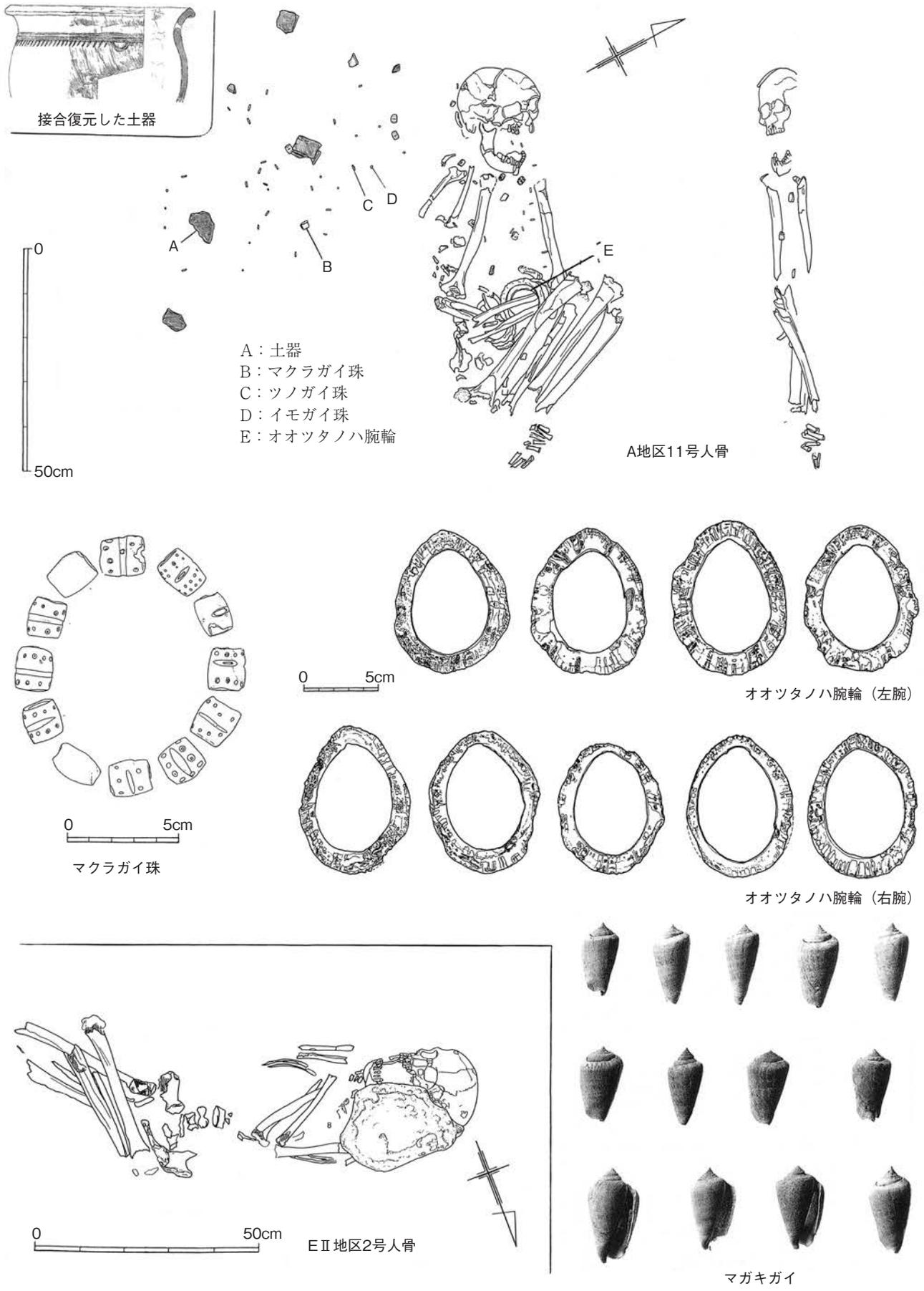


図9 A地区11号人骨と伴出装身具、E II地区2号人骨
 (桑原編2003第85-86図、第139-140図引用、一部改変、PLATE156下引用)

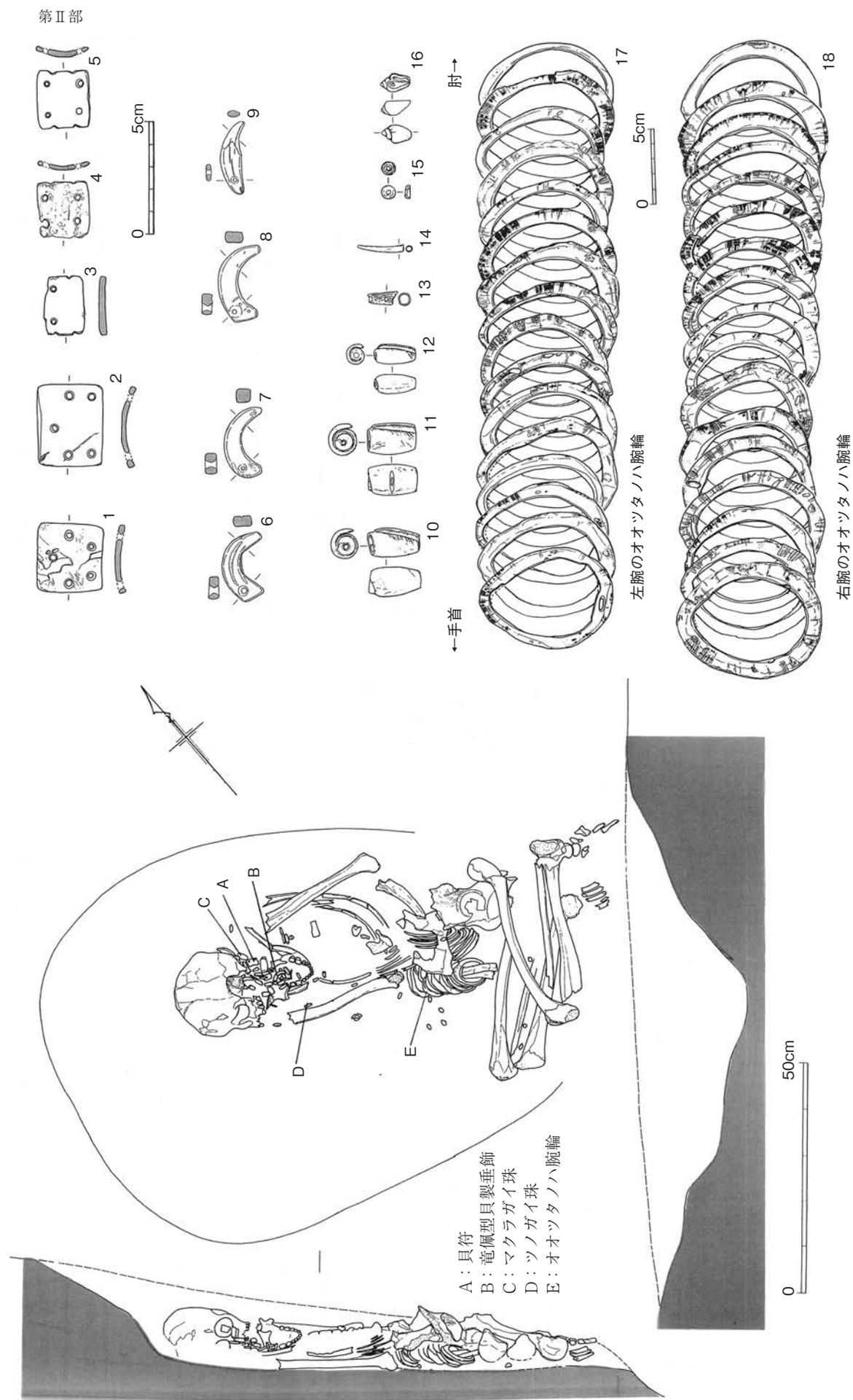


図10 DI地区5号人骨と伴出装身具 (桑原編2003第97-98図引用、一部加筆)

1-5: 貝符 (異形タイプ) 6-8: 竜佩型貝製垂飾 (異形タイプ) 9: 牙玉 10-12: マクラガイ珠 13-14: ツノガイ珠 15: イモガイ珠
 16: フトコロガイ珠 17-18: おオツタノハ腕輪

表10 広田遺跡南側墓群で土器を伴う墓一覧

墓の番号	装身具											装身類型等		礫石	墓のタイプ	被葬者の姿勢	備考		
	貝符		竜佩型垂飾		玉類*					オオツタノハ腕輪		その他	下層類型					装身グループ	
	下層タイプ	異形タイプ	下層タイプ	異形タイプ	イモガイ	ツノガイ大	ツノガイ小	ノシガイ	マクラガイ	ガラス	左								右
DⅢ地区2号	9		25		6272	1584	2185	16		1				I	貝符グループ	配石	広田タイプ墓	仰臥屈肢葬	ガラス小玉は破片
DⅡ地区4号	2		8		1950	6	40	28		12				I				側臥屈葬	実測図による土器の報告なし。ヤコウガイ容器。
A地区11号					58		59		13		4	5		IV	腕輪グループ	覆石		側臥屈葬	
DⅠ地区5号		5		3	2	1	179	55	101		16	17	イヌ牙玉1	Ⅲ	貝符グループ*	覆石	混在タイプ墓	側臥屈葬	*異形タイプの貝符・竜佩。ヤコウガイ破片。
EⅡ地区2号														Ⅵ		覆石		側臥屈葬	

*：イモガイはイモガイ類の玉、ツノガイはツノガイ類の玉、ノシガイはノシガイとフトコロガイの玉、マクラガイはマクラガイ類の玉、ガラスはガラス小玉の意味。

I地区5号とA地区11号が近い。これらは互いに1～1.5mの距離内にあり、主軸を併行させているので、被葬者は近い関係にあったとみてよいだろう（図6）。

広田タイプ墓と混在タイプ墓の装身具を、その製作技術に注目して比較しよう。前者では精緻な彫刻をもつ貝符、回転研磨技術による斉一的なイモガイ珠、大量に生産された夥しい数の玉類があるのに対して、後者では貝符も竜佩も素朴な形状に留まり、玉類では単純な造りのマクラガイ珠やオオツタノハの腕輪を用い、全体に素朴である。装身具における両者の差は歴然としている。混在タイプ墓は覆石墓を介して鳥ノ峯タイプ墓の系譜を引いているため、もとより装身具の伝統がない。このようにみると、混在タイプ墓人が装身具をもつのは広田タイプ墓人の影響といえよう。

DⅠ地区5号人骨に伴う貝符や竜佩、マクラガイ珠は、類似する貝製品が沖縄諸島の複数の遺跡で知られている（山野2013）。ことにマクラガイ珠では、彫刻をもつものがA地区11号にも見られ、これと同様の製品も沖縄で複数出土している。A地区11号人骨に伴ったマガキガイの集積は、同様のものが伊江島の具志原貝塚（沖縄県）にも見られる⁽¹³⁾。このことは腕輪グループの人々が沖縄と何らかの具体的な関係をもっていたことを示す。沖縄に関係をもつとみられる墓が、広田タイプ墓と混在タイプ墓にそれぞれ存在することに注意しておこう。

DⅢ地区2号とDⅡ地区4号はともによく揃った埋葬状況を示している。これらは他の初期の墓と異なって地上に覆石をもたず、人骨と同じレベルに石を配している。玉類を桁違いに消費している点、貝符と竜佩が揃って使用され、頭部と手首の装飾に集中している点は二つの墓に共通する特徴である。A地区6号人骨で二孔板状貝製品が頭頂部に一列に並んでみられる状況も頭飾りの存在を示しているので、頭飾りは広田タイプ墓人の装身の特徴であろう。竜佩は2個1セットで使用されており、耳飾りにもされたようである。

以上から、南側墓群は、異なる埋葬習俗をもつ2組の人々（広田タイプ墓と混在タイプ墓）によって始まり、そのうちの1組（混在タイプ墓）は在地の墓制を継承する人々、もう一組（広田タイプ墓）は頭飾りや腕飾り、耳飾りの装身習俗をもつ人々であり、それぞれの組には沖縄地域と関係をもつ人物がいた、と理解できる。

4. 広田遺跡と奄美・沖縄

4.1. 奄美・沖縄に向う必然性

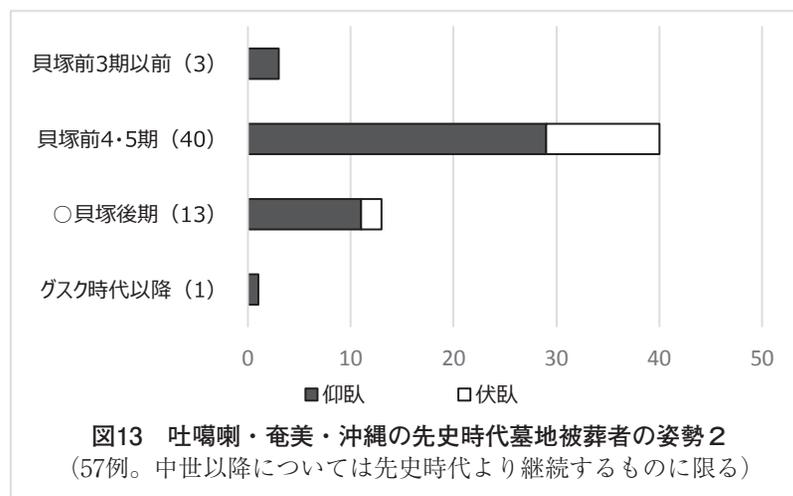
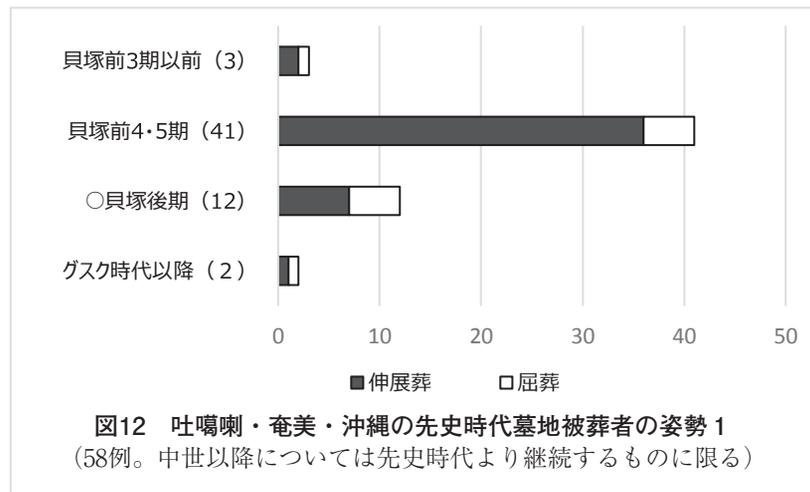
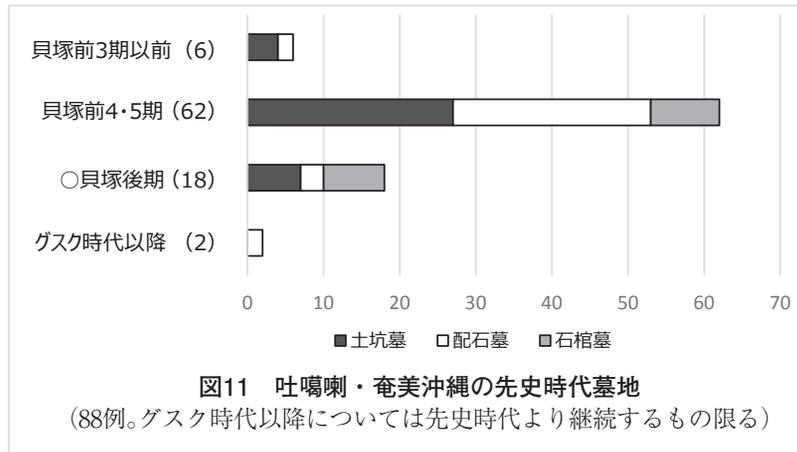
広田人が消費した貝殻の多くは種子島でも採取できるが、それらの棲息数はさらに南の吐噶喇列島、奄美群島、沖縄諸島により多く、これらの島々ではより効果的な採取が可能である。広田人の華やかな装身具は素材貝類が安定的に供給されてこそ成立するものなので、広田人がその確保のために奄美・沖縄地域に赴き、島人と交流するのは自然の成り行きである。広田タイプ墓の後半の不連続要素の登場と奄美・沖縄地域とがどのように関わっているのかは検討に値する。

以下、広田タイプ墓の特徴である覆石墓や配石墓、側臥葬、二次葬、夥しい数の玉類消費、頭飾り、腕飾り、耳飾り等に注意しながら、奄美・沖縄地域の習俗をみてゆこう。

4.2. 奄美・沖縄の埋葬習俗

図11～14は、吐噶喇列島・奄美群島・沖縄諸島の52墓地遺跡をもとに（文末の付表参照）、墓地の様式、被葬者の姿勢、二次葬の有無について時期的な変化を示したものである。グスク時代以降の墓については先史時代より継続するものに限って対象にしている。広田遺跡に対応する沖縄編年の時期は貝塚時代後期（図では「○貝塚後期」）である。

図11は墓地の様式である。奄美・沖縄では崖墓葬が卓



越するが、崖下においても土坑墓、配石等の区別が可能であるため、ここではこの区別を示している。南島の墓には覆石墓が不明で、遺体の周囲に石（サンゴ礫）を用いた墓が土坑墓とともに多いことがわかる。

図12と図13は被葬者の姿勢である。南島では伸展葬が圧倒的多数で屈葬が少ないこと、伸展葬が主体で伏臥葬が一定の割合でみられ

ることがわかる。現在知られる最古の被葬者は沖縄本島のサキタリ洞穴の例で、下肢は不明であるが「膝をやや折り曲げる程度」と推測されている。貝塚前4・5期の屈葬例は沖縄本島の安座間原第一遺跡の事例で、伸展葬21例中の4例である。南島に側臥葬が1例もないことに注意しておこう。

図14は二次葬の状況を示したものである。ここでいう「残存一次葬」とは改葬された後に残った墓を示すもので、二次葬の存在を間接的に示している。南島では新石器時代のきわめて早い時期から二次葬が存在し、グスク時代に継続することがわかる。

南島人は埋葬に臨んで、古い埋葬の上にはしばしば新しい埋葬を重ねながら同じ場所での造墓を継続する。古くは具志川島遺跡群（沖縄諸島、貝塚時代4期）でみられ、その後のトマチン遺跡（徳之島、貝塚5期）、木綿原遺跡（沖縄本島、後1期）に類例がある（遺跡の位置は図16参照）。

このほかの特徴的な習俗として、墓にシャコガイ類を添える風習がある（木下1992）。これは先の具志川島遺跡群、木綿原遺跡など南島の多くの先史時代墓地で認められ、近代に継続する極めて特徴的な習俗である。この習俗は沖縄諸島により顕著で、奄美群島では目立たない。

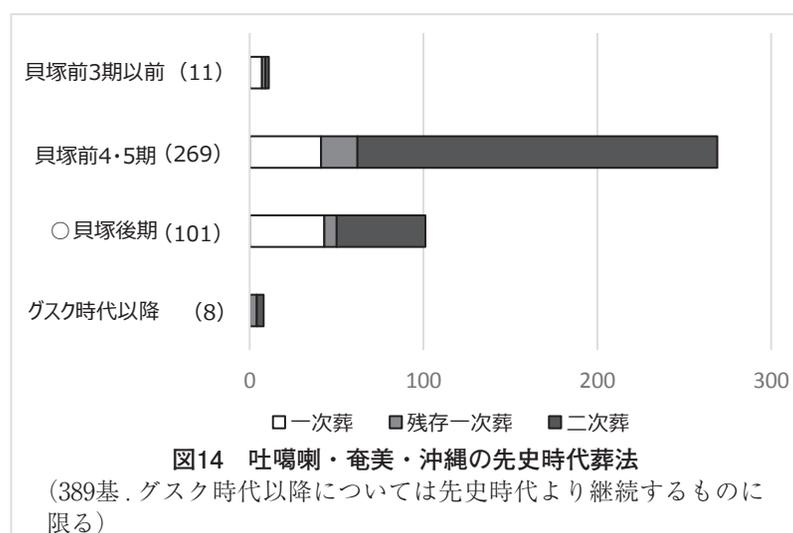
以上から南島の先史時代の埋葬習俗を以下のようにまとめることができる。

- ・土坑墓、礫石を使う墓が多く、覆石墓は稀⁽¹⁴⁾。
- ・仰臥伸展葬が主体で側臥葬はみられない。
- ・伏臥葬が一定の割合で存在する。
- ・二次葬が普遍的である。
- ・埋葬を垂直方向に重ねて墓を継続する傾向がある。
- ・墓にシャコガイ類を添える風習がある。

4.3. 広田遺跡と奄美・沖縄の埋葬習俗

以上の結果を広田タイプ墓のものと比較して気づくのは、奄美・沖縄地域に側臥葬が1例もないことである。さらにその多くが伸展葬であるため屈葬の多い広田遺跡とは明確に異なっている。奄美・沖縄に配石墓や積石を伴う石棺墓はあるがいわゆる覆石墓はない。奄美・沖縄において二次葬は強い伝統をもっており、早い時期（貝塚前4期）から骨を焼く行為がみられる。広田遺跡の最初の二次葬は下層Ⅳ類型にあり（C地区10号、南区4号）で、白骨化した頭骨を焼き、一次葬と同じ場所に埋めている。焼骨を伴うことは、この習俗が奄美・沖縄との接触で登場した可能性のあることを示唆する。

広田遺跡では広田式（新）期に上下に重なる埋葬が6例ある⁽¹⁵⁾。このうちDⅢ地区の例では、2



号人骨が頭位を東南にむけて埋葬され、その上に頭位を西北にとる1号人骨が重なり、その上に主軸を西北にもつ再葬骨が配されている。これらは明らかに下の人骨に重なることを意識した一連の埋葬行為とみられる。同様の事例は奄美・沖縄地域に頻繁にみられるものであり、広田遺跡の例は南島の埋葬習俗との関係を考えさせる。

シャコガイを墓に置く習俗については、鳥ノ峯遺跡の東の覆石グループの1墓（7号墓）にシャコガイ（水磨うけたヒレジャコ）が置かれている。この墓には広田式（新）期の土器が伴い、その土器は広田遺跡の混在タイプ墓（DI地区5号墓）に伴った土器とよく似ている。この墓では被葬者とは別に焼けた人骨が検出されている点も注意される。鳥ノ峯遺跡でシャコガイと焼骨が検出されたのはこの1基だけである。

広田式（新）期に登場する二次葬、焼骨、垂直方向の埋葬の重複、シャコガイの使用は広田人と奄美・沖縄地域との関係を示唆する。一方、この時期に特徴的な側臥屈肢葬については、南島に同様の事例が1例も確認できておらず、広田遺跡にも南島に一般的な仰臥伸展葬は全くない。南島の埋葬習俗が広田人に一定の影響を与えていることは確かであるが、習俗全体としてみるとその影響はごく一部に留まるようである。

4.4. 広田遺跡と奄美・沖縄の装身習俗

吐噶喇・奄美・沖縄の先史時代の墓地で、装身具を身に着けたまま葬られている事例をみることは稀である。これは頻繁に行われた二次葬によって、装身具をまとった本来の姿が墓に残されないという事情にもよるだろう。そこで墓に残された装身具から、その装飾習俗を推測してみたい。奄美・沖縄の墓には葬具用具殻や土器などいろいろの遺物が残されているが、この中から、作りが入念で着装用の装置（小孔など）のあるものを装身具、あるいは装身具の可能性の高いものとして選び出し、以下に示した。分類名のあとに素材名を示し、広田遺跡と共通する製品には下線をひいている。

- ・腕輪：オオベッコウガサ、オオツタノハ、ウミギクガイ類、イモガイ類、ゴホウラ、サラサバテイラ、ジュゴン骨
- ・腕飾り：マガキガイ口縁部の加工品
- ・玉類：小型イモガイ、ツノガイ類、ノシガイ類、マクラガイ類、フデガイ類
- ・サメ歯垂飾、サメ歯垂飾模造品
- ・研磨穿孔による貝製品：タケノコガイ、リスガイ、ウミウサギ
- ・有孔製品：小型タカラガイ、イモガイ類、シャコガイ（彫刻のある製品）

奄美・沖縄の装身具では、サメ歯垂飾およびその貝製模造品が特徴的で、研磨穿孔による様々の小型巻貝製品やイモガイ珠（玉）が多い。これらは、出土状況や数からみる限り、着装時には単独で用いられた可能性が高く、同型多数をひと繋ぎにして使用するものではなかったようである。イモガイ珠はその形状かからみて繋がれていた可能性が高いものの、そうした使用状況を留める事例は武芸洞（付表 no.24）を除いてまだ確認されていない。総じて奄美・沖縄人の装身具は基本的に単独での使用であり、小型同型玉の大量使用を好む広田人のそれとは異なるものであったと判断される。広田人が執着したオオツタノハ腕輪は、奄美・沖縄でも古くから好まれたが、南島の貝製腕輪の種類は他にも多く、オオツタノハを特別な腕輪として使用した状況はみられない。こうした貝製装身具の使用は広田遺跡以前の種子島の在地文化においてもみられ、オオツタノハ腕輪、イモガイ珠、ツノガイ珠、ノシガイ珠の出土が縄文晩期に知られる（石堂ほか2011）。しかし、これらを大量かつ一挙に消費した様子はない。

ところで、不思議なことに広田遺跡に併行する時期（貝塚時代後期）になると、奄美・沖縄では伝

統的装身具の多くがほとんど作られなくなってしまう。やや普遍的にみられるイモガイ珠も、連珠で使用された痕跡を残すものはなく、簡単な造りのものが大半を占めるようになる。

広田人の装身習俗を特徴づける要素－頭飾り・腕飾り・耳飾り、玉類を連珠にした大量消費を、奄美・沖縄の装身習俗に見出すことは困難である。広田人の装身習俗は、その素材を南島に大きく依存していたが、装身習俗自体は独自のものであったといえるだろう。広田人の埋葬習俗も装身習俗も、奄美・沖縄のそれとは不連続面が大きい。広田人にとって奄美・沖縄は基本的には素材採取地であった。

5. 広田人の貝殻採取－南下する広田人

奄美・沖縄の一次葬の墓では伸展葬が基本であるという特徴は、屈肢葬を原則とする種子島の埋葬習俗と大きく異なる点である。以下にのべるのは、広田遺跡とほぼ同じ時期に、屈肢の姿勢で埋葬され、遺物などから種子島人との共通点のみられる事例である。

5.1. 宇宿港遺跡人 (図15：上)

本遺跡は奄美大島笠利半島の東海岸に面した砂丘上の遺跡である (西住1981)。ここで2基の土坑墓が相互に7m離れた位置で発見されている。1号墓は弥生後期あるいはやや下の時期のものとして、仰臥屈葬の成年男性である。2号墓は弥生後期から終末期の土坑墓で、強く折り曲げられた仰臥屈葬の成年女性である。いずれの墓も採砂により大きく破壊されているが、1号墓は頭骨以外の部分が残存していた。二つの墓の被葬者の姿勢は、奄美群島には稀な屈葬であり、仰向けで膝を強く曲げる1号人骨の姿勢は種子島の覆石墓等に共通する。2号人骨の強い仰臥屈葬例は広田遺跡にみることができ、墓の付近の包含層では在地の土器 (図15の1) とともに中津野式の壺が出土し (同図2)、磨製石鎌が採集されている (同図3)。

中津野式の壺と磨製石鎌は、広田遺跡北側墓群、鳥ノ峯遺跡に特徴的にみられる遺物である。本例は広田式 (古) 期・鳥ノ峯式 (新) 期の種子島との関係を示唆する。

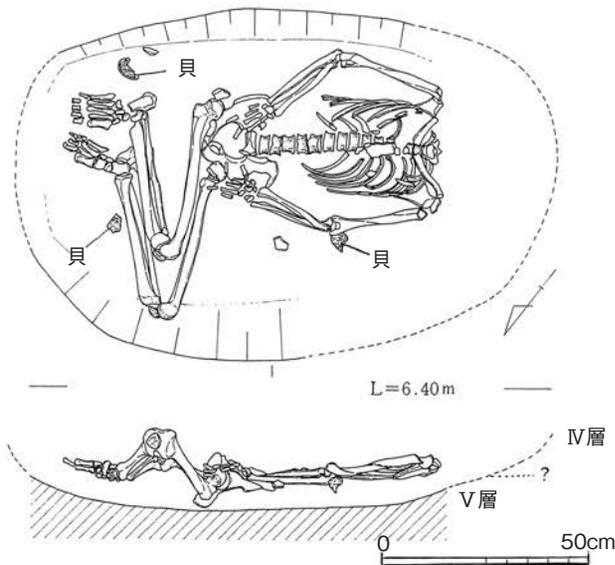
5.2. 長浜金久Ⅱ遺跡人 (図17：上)

本遺跡は奄美大島笠利半島の東海岸に面し、宇宿港遺跡から南に2.3kmの砂丘上にある (弥栄1985)。この砂丘の新砂丘層で仰臥屈肢葬の人骨 (15歳前後) が発見されている。膝を折り曲げた姿勢は広田遺跡・鳥ノ峯遺跡の被葬者の姿勢と共通する。新砂丘層で出土した図17の1の外耳をもつ土器は浜金久第Ⅰ遺跡の甕Ⅳ類のスセン當式土器に類似し (弥栄1985：p.32)、同図2の小型土器は、沖縄の大堂原式や南九州の成川式土器に伴うミニチュア土器に類似しているので、4～5世紀に対応するとみられる。注目したいのは本調査区 (調査面積約250m²) においてオオツタノハ腕輪が113点出土していることで、これは奄美・沖縄の遺跡で屈指の出土数である⁽¹⁶⁾。遺跡では大型イモガイを短冊状に打ち割った貝符用の素材もみられ、広田遺跡との関係を示唆する。被葬者の足首からタケノコガイを研磨した製品が1点出土している。類例が縄文時代併行期に多い製品なので時期の決定に迷うところであるが、墓が新砂丘内にあることから、この時期に作られた製品とみておきたい。

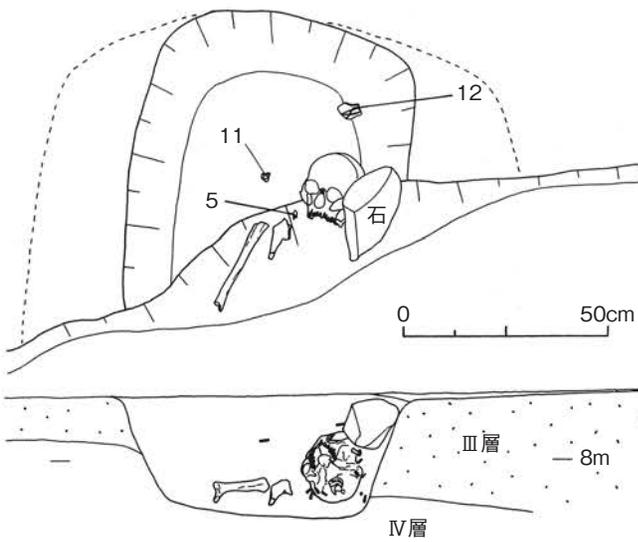
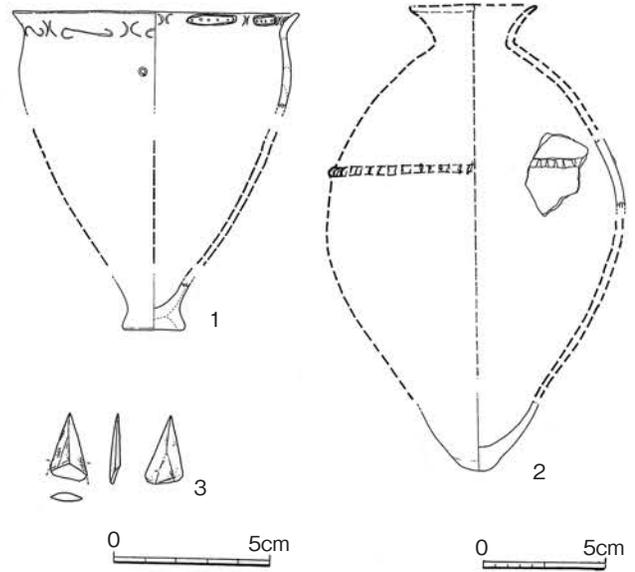
被葬者の姿勢、遺跡でのオオツタノハの出土数、その他の遺物多さからみて、本例は広田遺跡下層期との関係を反映した墓とみられる。

5.3. 小湊フワガネク遺跡人 (図17：下)

本遺跡は奄美大島中央部の東南海岸に面した砂丘に広がる集落遺跡である (高梨編2003)。この調査区17で周囲に石を立て廻らした土坑墓が調査されている。墓坑内は著しく攪乱され、周囲の石も多くが二次的に動かされており、改葬された後の状況とみられる。墓坑内に人骨と歯がわずかにのこっ



宇宿港1号土坑墓と遺物（西住編1981をもとに作成）



椎ノ木遺跡土坑墓と遺物（白木原編1980をもとに作成）

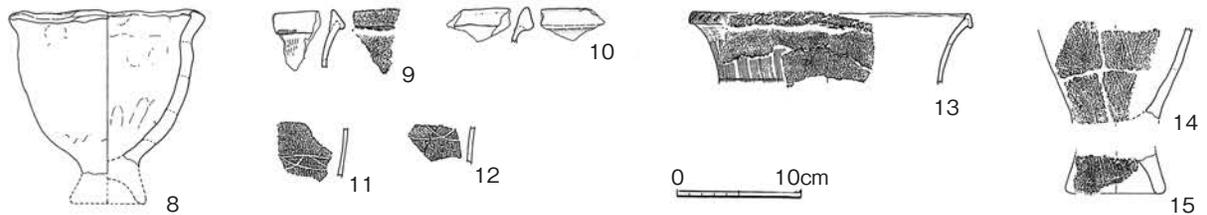
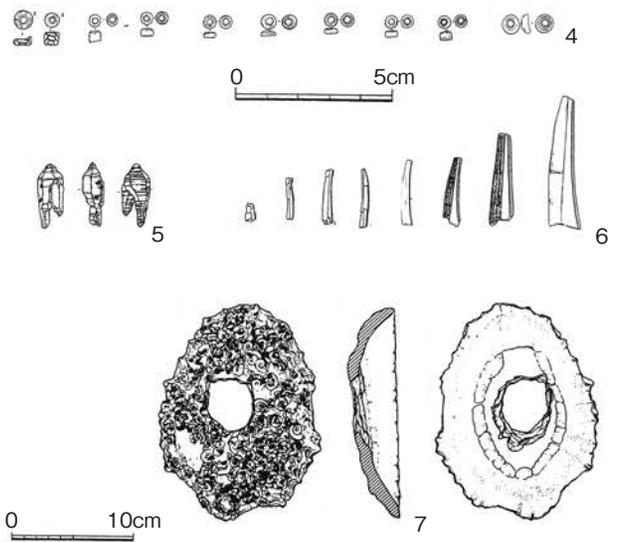


図15 宇宿港遺跡・椎ノ木遺跡土坑墓と出土遺物

1-2：IV層出土土器（1は在地土器、2は搬入土器） 3：磨製石鏃（採集品） 4：イモガイ珠 5：水晶製品
6：ツノガイ珠 7：オオツタノハ腕輪素材 8-15：III層出土土器

ていた。重要なのはこの墓坑底にイモガイ珠220個とガラス小玉12個が残されていた点である。イモガイ珠は広田遺跡を特徴づける丁寧な造りのものである。ガラス小玉の成分は未分析であるが、色と形状でみる限り広田遺跡のガラス小玉によく似ている。二次葬や被葬者のまわりを石で囲う墓は広田遺跡ではやや後の墓に多いので、この墓は広田遺跡の下層期後半の時期に対応するだろう。本遺跡においてオオツタノハはほとんどみられないので、この時期はすでにオオツタノハ腕輪の流行が去り、腕輪の主流がゴホウラ腕輪に移行している段階（貝符の下層タイプ ii の時期）であったとみられる。これに続く兼久式期（6～7世紀）になると、ここで広田遺跡上層タイプの貝符などの生産が行われたことがわかっている。広田遺跡下層期から上層期にいたる期間、広田人が継続的にこの地とかかわっていたとみられることは重要である。小湊フワガネク遺跡が広田式（新）期以降の広田人の根拠地の一つであった可能性は極めて高い（木下2019）。

5.4. 椎ノ木遺跡人（図15：下）

本遺跡は奄美・沖縄の事例ではないが、広田人の移動の痕跡を示す事例として挙げておきたい。椎ノ木遺跡は種子島の西12kmにある馬毛島の西南端にある遺跡で、海岸砂丘で単独に検出された墓である（白木原1980）。墓は採砂によってほとんどを失っていたが、頭骨を含む土坑の一部とその上の塊石1個が残り、覆石をもつ墓であったことを示している。頭骨と頸椎間にイモガイ珠85個・ツノガイ珠268個が、また頭骨近くで水晶が1個検出された。イモガイ珠は広田遺跡に特有の形状のもので、ツノガイ珠とともに使われているこ

とから、被葬者は広田遺跡にかかわる人物であったことがわかる。被葬者は比較的若い成年の男性で、形質的に広田人と強い類似性をもつという（中橋・永井1985）。

墓の周辺では広田式（新）の底部を欠く小型の甕と、上能野式土器の破片が得られている。墓はⅢ層に掘り込まれており2型式の土器はそれぞれこの層の上部と下部で出土している。墓の掘り込み面は不明であるが、隣接する調査区で上能野式の生活面が確認されていることからみると、墓は下部の広田式（新）に対応するものであろう。土器と同じⅢ層下部で大型のオオツタノハ製品が出土している。

注目されるのは人骨にともなった水晶製品と、オオツタノハ製品である。前者は両錐水晶とよばれる稀な形状をなし、屋久島産の可能性があると⁽¹⁷⁾。実体顕微鏡で観察すると、どの稜も細かく摩耗しており、

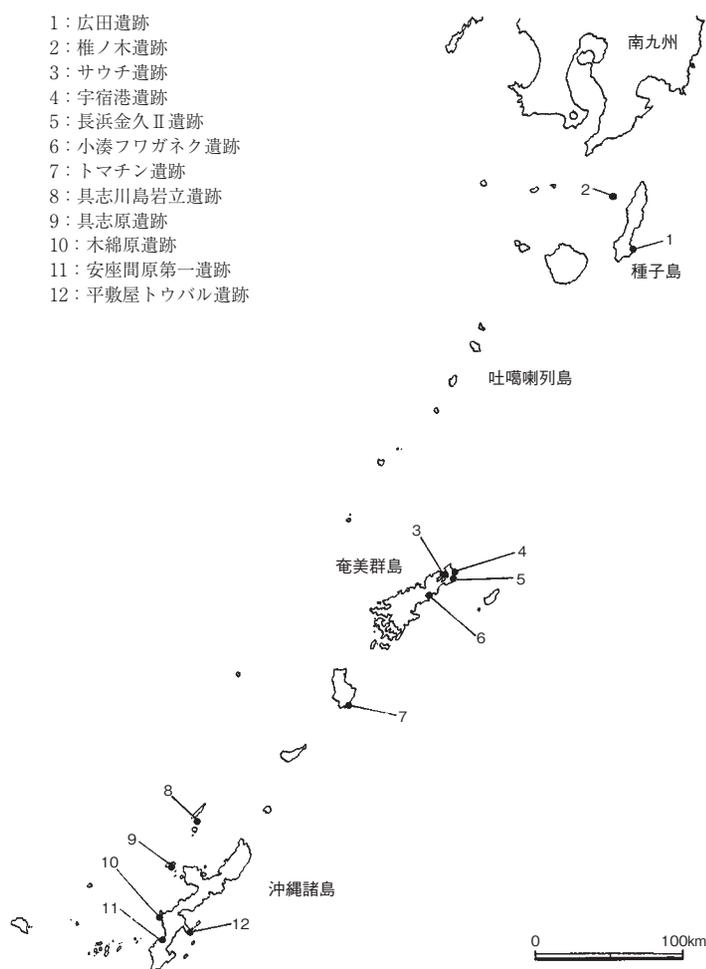
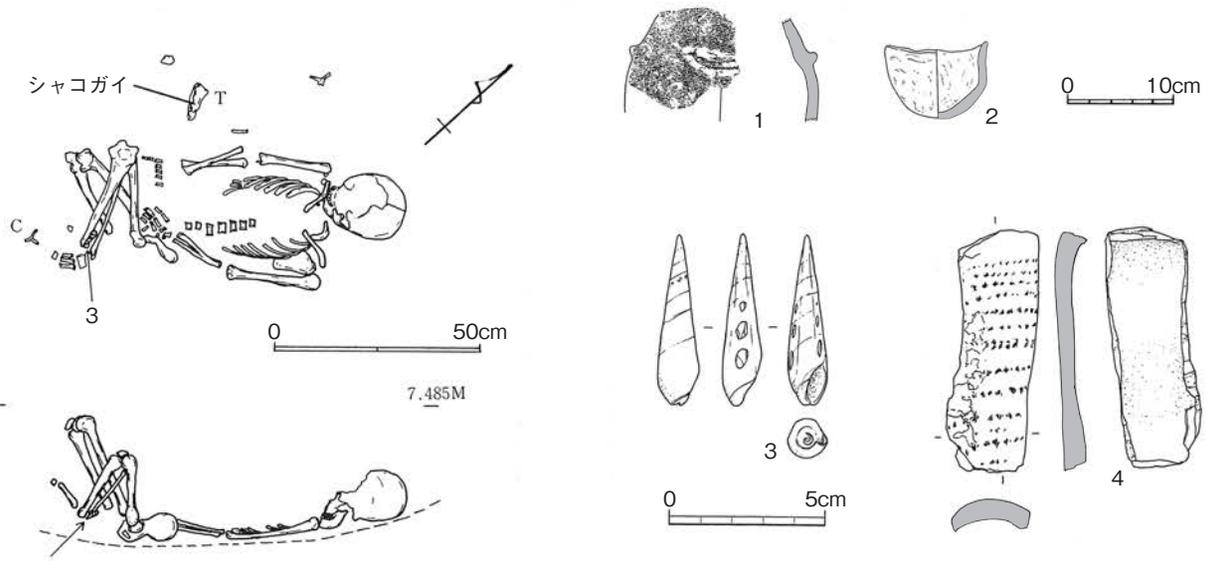
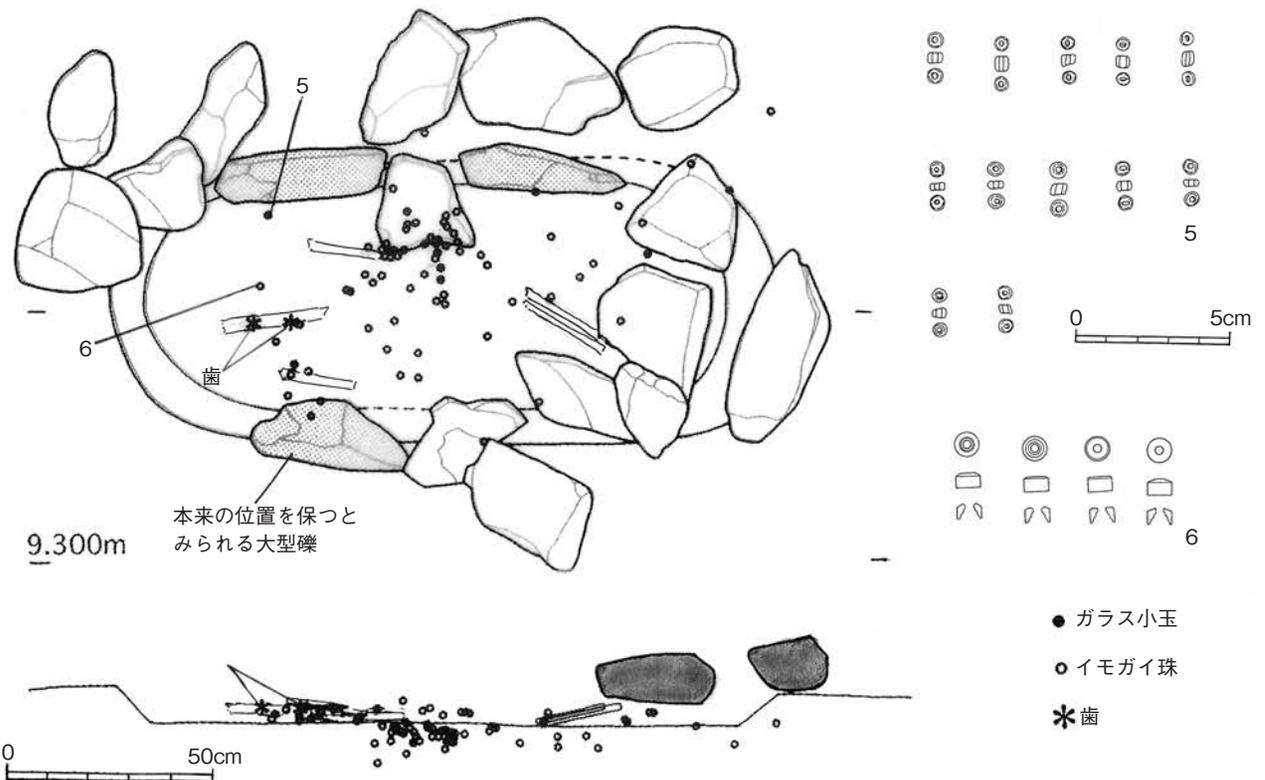


図16 本論に関わる遺跡の位置

第II部



長浜金久II遺跡土坑墓と遺物 (弥栄編1985より作成)



小湊フワガネク遺跡石囲墓と遺物 (高梨2003より作成)

図17 長浜金久遺跡土坑墓・小湊フワガネク遺跡石囲墓と出土遺物

1-2: 土坑墓と同じ層で出土した土器 3: タケノコガイ製品 4: 貝符未成品 5: ガラス小玉 6: イモガイ珠模式図

表11 広田人の移動にかかわる遺跡一覧

遺跡	墓	被葬者	被葬者の姿勢	時期	備考
宇宿港	土坑墓	成人女性	仰臥屈葬	北側墓群段階	包含層等で中津野式壺、磨製石鏃。
長浜金久Ⅱ	土坑墓	15歳前後	仰臥屈肢葬	広田下層期・新段階か	包含層で貝符素材。
小湊フワガネク	石囲墓	女性か	二次葬	広田下層期・新段階か	墓内遺物：イモガイ珠220個、ガラス小玉12個
椎ノ木	覆石墓*	成年男性	不明	広田下層期・古段階か	墓内遺物：イモガイ珠85個、ツノガイ珠268個、水晶製品1。 包含層で広田式（新）土器、オオツタノハ腕輪未成品。*覆石は人骨上に1個。

2箇所に人工的な加工痕跡が認められる。着装用の加工等はないが、被葬者が携帯していたものであろう。オオツタノハ製品は背面に付着物をつけたままではあるが、中央に穿孔があり、腕輪の素材であったことを思わせる。本例は広田人が屋久島の石材やオオツタノハの入手にかかわって移動していたことを示唆する事例である。

以上の4遺跡を表11にまとめた。時期は表2の時期区分に従って表記した。

5.5. 広田人の南下と移動

以上4例をもとに、広田人の南下の痕跡の跡づけてみよう。広田人の奄美への登場を示すのは宇宿港遺跡である。屈葬姿勢の人骨、中津野式の壺と磨製石鏃が出土している状況は、広田遺跡の北側墓群に共通し、広田式（古）期に対応する。近くの長浜金久は古くからオオツタノハが多く生息する海岸であり、この海岸砂丘に仰臥屈肢の姿勢で葬られている長浜金久Ⅱ貝塚人は、この地にオオツタノハや大小のイモガイを採取しにきていた広田遺跡北側墓群人であった可能性がある。笠利半島東海岸は奄美大島の中でもとくにサンゴ礁の発達する地域なので、この一帯に広田人の貝殻採取拠点があったのではないだろうか。

ここで想起されるのが、笠利半島西海岸のサウチ遺跡で発見された広田遺跡の下層タイプの貝符である（図18の1）。この貝符と同地点の同じ層（南区9層）で磨製石鏃が1点出土している⁽¹⁸⁾。この層では南九州の高付式の壺に類似する土器片や種子島の鳥ノ峯式の特徴をもつ甕の底部が出ており、種子島との関係が示唆される（河口ほか1978：第25図、第37図）。この貝符は広田遺跡のもの（下層タイプi）に大変よく似ているが、長辺の中央が突出し、短辺に「コ」字状の抉りをもつ形状や、太めの帯による彫刻文様では広田遺跡の貝符と異なっているため、広田遺跡の製品とは区別される。仮にこれをサウチタイプの貝符とよぶと、これに類似した無文の貝符が沖縄本島の平敷屋トウバル遺跡で知られ（図18の4）、この無文貝符に類似する貝符が広田遺跡の採集品にある（同図2）。鳥ノ峯遺跡の貝符もこれに近い形状とみてよいであろう（同図3）。これらのことから、下層期・古段階の時期には種子島・奄美・沖縄間に人的交流の始まっていたことが推測される。一方、

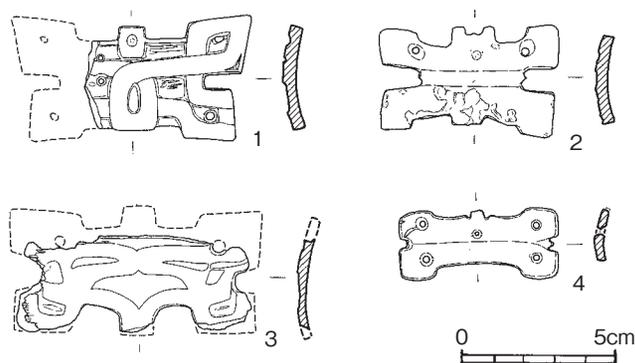


図18 サウチタイプの貝符（山野2013図6引用）

1：サウチ遺跡（南区9層） 2：広田遺跡（採集） 3：鳥ノ峯遺跡3次A人骨 4：平敷屋トウバル（6地区IV層）

南下の動きとは別に、この時期の広田人は馬毛島、屋久島へも移動していたようである。馬毛島へはオオツタノハを採りに、屋久島へは彫刻工具用の石英を探しに行っていたのだろうか。

広田遺跡における貝殻消費は、下層期・新段階に大きく変化し、腕輪素材がオオツタノハからゴホウラに変わるが、貝符等の製作のために大型イモガイの需要は続く。長浜金久Ⅱ遺跡は、オオツタノハの消費が衰退した後も笠利半島で継続してイモガイの採取を続けたことを示す遺跡であろう。小湊フワガネク遺跡は、この時期に、おそらくそれまでとは別の要因で選ばれた貝類採取の新たな拠点であった。上層期になるとここで貝符等の粗加工が行われるようになる。この地は広田人にとって重要な役割を果たし続けた。

5.6. 南側墓群の構造

広田遺跡特有の大型巻貝の消費は、広田式（古）期の北側墓群人のオオツタノハ腕輪とヤコウガイ容器の使用で始まっている。オオツタノハとヤコウガイはともに種子島に棲息する一方で、吐噶喇列島から奄美大島にも多い貝である。これらの需要が継続する中で、広田人が南下する動機は自然に生まれただろう⁽¹⁹⁾。広田式（新）期にはこの行為が南側墓群人に継承され、広田人は奄美群島をさらに南下して沖縄諸島に至り、大型イモガイを中心とする多種類の貝殻採取が始まる。

A地区11号人骨とDⅠ地区5号人骨は南側墓群の最初の造墓グループの墓である（表10）。彼等が南島と近い関係にあったとみられることは先述した通りである。

A地区11号人骨（熟年男性）の墓は1個の覆石をもつ墓である。墓にマガキガイの集積が伴うことからみると、彼は同じ頃に同様の集積をもつ遺跡（具志原貝塚）のある伊江島を訪れていたのかもしれない。伊江島具志原貝塚では、複数の層にわたって大型イモガイの集積が残され、南九州の免田式後半期の壺、オオツタノハ腕輪、ヤコウガイ匙等、鳥ノ峯遺跡や広田遺跡に共通する遺物が出土している。伊江島ではこの他に、広田下層タイプに似た貝符や上層タイプの貝符、貝符未成品など合計18点が出土している。伊江島は広田人たちが当初より頻繁に訪れる島であった。

DⅠ地区5号人骨（成年男性）の墓ははっきりとした覆石墓なので、被葬者は種子島在地の系譜をひく人物であったとみてよい。彼は無文の貝符と竜佩に類似した貝製品のセットを伴っている（図19の1-3）。これと軌を一にする貝符と竜佩のセットはオオツタノハ腕輪を伴うA地区10号人骨にもみられる（同図4-5）。類似の貝製品は、さらに沖縄本島の複数の遺跡でも知られる。私はこれらを広田人と接触した沖縄の貝塚人がその貝符や竜佩を真似て作った模造品であろうと判断して異形タイプとよび、広田遺跡にのこる異形タイプは南下した広田人が沖縄で入手したものと理解した（木下2003）。これについては、その後山野氏が、これとは逆の影響関係が成立する可能性を指摘し、玉類等を含め広田遺

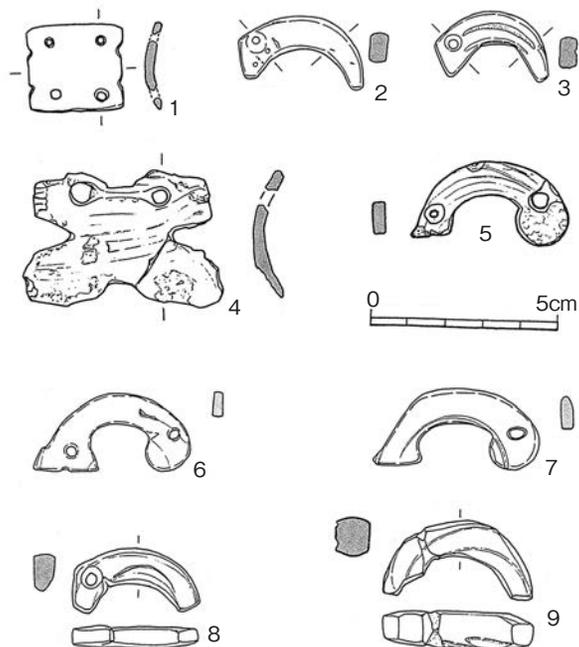


図19 異形タイプの貝符と竜佩型貝製垂飾

1-3：DⅠ地区5号人骨 4-5：A地区10号人骨 6-7：南区2号墓（C地区9号人骨） 8：安座間原第一遺跡 9：二重兼久遺跡

跡の貝製装身具全体について南島からの影響を追う一連の論考を発表している（山野2010、2011、2012、2014）。今後私見に見直しが必要となる可能性もあるが、ここでは旧来の認識のまま議論を進めたい。

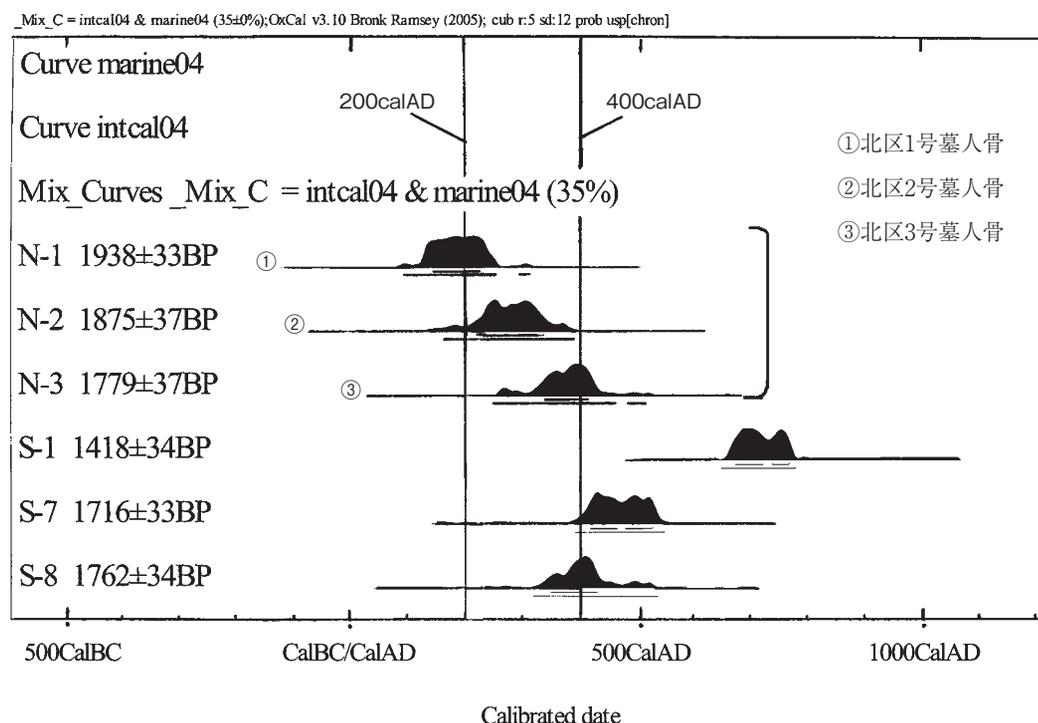
さて、南側墓群の中で貝殻入手のために南下した可能性の高いのは、覆石墓の墓制をもつ種子島在地系の人々である。同様の墓制と装身具をもつ鳥ノ峯遺跡の西の混在グループも、これらの広田人と繋がった一連の人々とみてよいであろう。これらの墓（広田南側墓群の覆石墓人と鳥ノ峯遺跡の西の混在グループ人）の時期は広田式（新）期・鳥ノ峯式（新）でほぼ同時期である。つまり、南側墓群人が消費した貝製品の素材は、種子島在地の墓制をもつ人々が連携し、自ら南下して入手していたとみられるのである。

ここで注意されるのはこうした動きにほとんど関わらない人々－彫刻された貝符と竜佩、大量の玉類をもつ人々の存在である。彼等は埋葬習俗においても装身習俗においても在地的な腕輪グループとは不連続な面をもち、貝製装身具については専ら消費者であった。表9、図6右図に示したように南側墓群に最初に作られた墓に、貝符グループと腕輪グループが併存しているのは、彼等が両輪となって広田遺跡の習俗を形成していたことを物語る。

6. 広田人の埋葬習俗と装身習俗の始まりと展開、課題

6.1. 始まり－広田式（古）期

広田遺跡の始まりを示す北側墓群の3基の覆石墓（北区1号、同2号、3号）では、人骨の炭素14年代が測定されている。これによると、この3基はAD200年前後からAD400前後にかけて順次つくられている（図20）。中津野式土器が伴う北区2号墓は、AD300年前後の時期に対応し、これまで予



IntCal04 寄与率 65%と Marine04 寄与率 35%で計算した較正曲線による暦年較正年代
（タンパク質に含まれる炭素の35%が海産物に由来した場合を想定している。）

図20 北側墓群の炭素14年代（米田2007図3引用、部加筆）

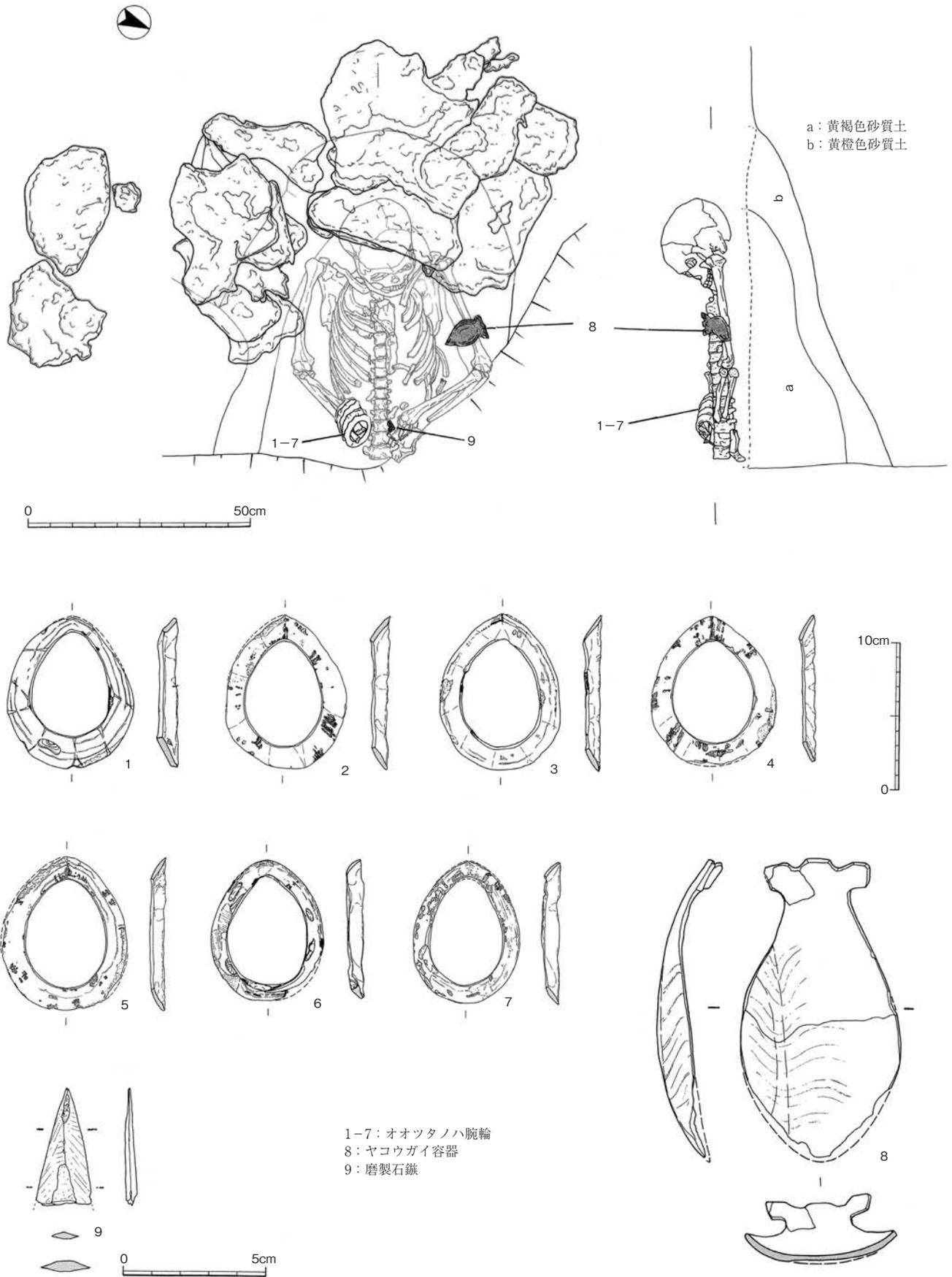


図21 北区1号人骨と伴出遺物 (石堂・徳田・山野2007引用、一部加筆)

想された年代と整合的である。AD200年前後に位置する北区1号墓はもっとも早く作られているので、この墓に伴うオオツタノハ腕輪とヤコウガイ容器は広田遺跡最古の貝製品ということになる。弥生時代終末期に対応する。

北区1号墓のオオツタノハ腕輪で注目されるのは、表面をゆるやかに面とりして研磨する製品が存在する点である（図21の1-4）。こうした加工は、弥生時代後期中頃から終末期の、九州の複数の遺跡のオオツタノハ腕輪にも認めることができる（木下2019）。この類似を評価すれば、種子島の覆石墓人が九州人のオオツタノハ消費に接触して自らもオオツタノハ腕輪の使用を開始したという説明が可能である。

北区1号墓の人骨は壮年の男性であり、寛骨と腰部の脊椎骨の間の位置で磨製石鏃の切っ先が検出されている。ここで想起されるのが、同様の磨製石鏃が人骨の胸部にささった状態で出土した鳥ノ峯遺跡の事例である（第3次調査9号人骨）。報告者の橋口氏は、「弥生終末期の種子島においても戦闘行為が生じていた」ことの現れだとしている（橋口1996：p.60）⁽²⁰⁾。一方、広田遺跡の調査を行った徳田有希乃氏は、石鏃が骨に刺さってはいないことから伴出遺物であった可能性も残し、殺傷行為の可否判断を保留している。

広田遺跡の造墓行為が、在地の動向や九州の貝殻消費に連動して始まっていることに注意しておきたい。

6.2. 展開—広田式（新）期

続く広田式（新）に登場するのが、南側墓群の埋葬習俗と装身習俗で、述べてきたようにここで広田式（古）期の在地的な習俗と不連続な要素が多く登場している。それは覆石墓以外の葬法、側臥葬、二次葬、同一地点における墓の重複であり、小型同型の玉類の大量消費、頭飾り・耳飾り、貝符・竜佩セットの使用である。さらに貝符に施された精緻な彫刻デザインと彫刻技法を加えてよいだろう。これらの要素には、広田人が継続的に交流したとみられる奄美・沖縄地域との共通性を一部に認めることができるものの、習俗自体の淵源を南に求めるにはなお距離がある。個々の不整合要素を包括する埋葬習俗・装身習俗がどのように登場したのか、が問題となる。

6.3. 最近の研究、課題

広田式（新）期の装身習俗の由来については、新里貴之氏と山野氏による近年の検討がある。新里氏は、弥生時代から古墳時代に続く南島と本土との貝交易をふまえて、広田人が「西日本の首長層の装身具情報を得、その材を貝に転化し膨大な量を消費」して、独自の貝製装身具の文化を生み出したと述べている（新里2009：pp.162～163）⁽²¹⁾。山野氏は広田遺跡の装身具および埋葬方式の型式学的検討を行い、新里氏と同様の結論を導いているが、奄美・沖縄との関係により留意した考えを提示している（山野2012）⁽²²⁾。山野氏は、広田遺跡の装身具が「本土や奄美・沖縄諸島との交流を経て、漸移的かつ段階的に変化」（山野2012：pp.491～492）したものとし、その具体的内容を、埋葬方式を組み合わせた一覧表で提示している（山野2012：第4図）。氏は「広田遺跡に埋葬された人々は古墳時代の貝交易への積極的参入により、奄美・沖縄諸島、本土間の中継者となったことで、南方から貝素材を、北方より鉄製利器を入手し、両文化圏の装身文化に影響をうけた多彩な貝製装身具を誕生させた」とし、装飾文化の種子島での自生を説く（山野2012：p.492）。両論ともに、広田人が弥生時代終末期から古墳時代に至る貝交易にその中継地として係わったという経済的背景を重視するもので、その文化交流の中で独自の装身文化が生まれたという認識で共通している。

本稿で導いた広田式（新）の不連続要素は、以上の研究においてどのように位置づけられるだろうか。弥生終末期の首長層の装身情報が広田人に影響を与えたとする点では、福岡県平原遺跡や京都府

赤坂今井墳丘墓などに小型同型の玉類の大量消費、頭飾りの類例がある。しかし、その習俗が広田人に伝わりガラスなどの装身具素材が貝製品に転化したことを言うには、情報伝播の過程や変化の必然性を具体的に追う必要があるだろう。配石墓等の葬法、二次葬、同一地点における墓の重複については、奄美・沖縄地域に類例が求められる面もあるが、今のところ部分的な類似に留まっている。

近隣に類例を見だし難い竜佩デザインについては、山野氏によって南島の貝製品からの型式変化を追う意欲的な試みがなされている（山野2010）。立論で使用されている沖縄の事例に砂丘遺跡の出土例が多く、時期比定に幅をとらざるを得ない状況があるため、時期幅を狭めてゆく作業が残されているように思う。貝符の起源を南島に求め、これが広田人によって彫刻をもつ貝符に変化したとする説については、無文の製品から彫刻を施す貝符が生まれる過程の説明も必要であろう。埋葬習俗においても装身習俗においても、不連続要素と九州・西日本・南島との関係の説明には、結論までに今少しの検討が必要ではないだろうか。

広田式（新）期の習俗の登場については、上記で指摘されている広田人による創造のほかに、筆者はなお島外からの伝来の可能性を残しておきたいと思うのである。

7. 結語

広田遺跡開始期の埋葬習俗と装身習俗、これを支えた広田人の海上移動について以下をのべた。

1. 広田遺跡の始まり

広田遺跡は、広田式（古）期（弥生時代終末期から古墳時代初頭並行期）に、オオツタノハ腕輪をはめヤコウガイ匙を副葬し在地墓制（覆石墓）を継承する人々が、砂丘北側に埋葬されることで始まった墓他である。腕輪の着装は、九州人のオオツタノハ需要に対応して導入された可能性がある。筆者は装身具によって広田人を分類し、彼等を腕輪グループの人々と呼んだ。

2. 広田人の装身文化

広田式（新）期（古墳前期～中期初頭並行期）になると、腕輪グループの人々に加えて、それまでにみられなかった、彫刻をもつ貝符、竜佩型貝製垂飾、大量の貝製玉類で飾られる人々（貝符グループの人々）が、配石墓・土坑墓、側臥葬、二次葬、墓の上に重ねる埋葬習俗を伴って加わり、砂丘南側に二つの異なる習俗をもつ人々の共同の墓地が形成され始める。二つのグループは対峙していたが排他的ではなく、相互の装身習俗・埋葬習俗はすみやかに融合し始める。

3. 広田人の貝殻採取と南下

広田人を飾った貝製装身具の製作には、種子島近海および奄美・沖縄の貝殻が大量に消費された。オオツタノハ、ツノガイ類、ノシガイ類は種子島からトカラ列島一帯、大型イモガイ、マクラガイ類、小型イモガイは奄美・沖縄のサンゴ礁に多い貝類である。種子島の覆石墓と奄美・沖縄にのこる墓地をみる限り、貝類採取に動いたのは、腕輪グループの人々であった。初期の採取行為は種子島近海が中心で、西北の離島である馬毛島にも及んだ。広田式（新）期、彼等は奄美群島や沖縄諸島に出向いて貝殻を採取した。沖縄本島西北の伊江島は、広田人が継続して出向いた大型イモガイ採取地の一つであった。広田遺跡近隣の鳥ノ峯遺跡には、その後半期に、広田人の南下に関わったとみられる人々の墓地が残されている。

4. 広田人と南島との関係

広田人の頻繁な南下によって広田人と沖縄の貝塚人との交流が生まれ、沖縄に広田人特有の貝符や竜佩を模倣した貝製品が登場した。一方広田人の装身具にも沖縄の伝統的な貝製玉類（マクラガイ珠）が普及し、さらに腕輪グループの中には沖縄的な貝符や竜佩の模倣品をもつ人々も現れ

た。種子島人の埋葬習俗にも、沖縄に多い二次葬や墓を上重ねる習俗、シャコガイを添える行為が見られるようになる。こうした中で、奄美大島に貝類採取の継続的な中継地ができる。小湊フワガネク遺跡はそうした拠点とみられ、続く広田上層期にはここで貝符の製作も始まる。

5. 文化の系譜について

広田式（新）期に登場した貝符グループに特徴的な装身習俗（彫刻をもつ貝符・竜佩型貝製垂飾の使用、頭飾り、耳飾り、玉類の大量消費）と埋葬習俗（側臥葬、配石墓等、二次葬）は、それ以前の種子島の習俗との連続性を欠いている。これらの登場については、金岡丈夫氏以来の「外からの文化移入」に原因を求める考えがある一方で、近年は広田人と九州・奄美・沖縄地域との交流を背景に種子島で生み出されたとみる考えが複数提示されている。述べてきた在地文化との不整合を踏まえると、筆者は、前者の可能性もなお検討してゆく必要があるように思う。

小稿をまとめるにあたり、石堂和博、小脇有希乃、新里貴之、中村直子、山野ケン陽次郎の各氏に教示をいただきました。また鹿児島県立歴史資料センター黎明館ならびに上村俊洋氏には遺物の調査でご配慮を賜りました。記して感謝いたします。

注

(1) 「南島」は琉球列島と同義の歴史用語で、文化的概念で使用されることが多い。

(2) 南側墓群では、墓のタイプを広田遺跡の2007年報告書の基準に従って以下のように判別する（石堂ほか2007、pp.126～127の注3による）。

覆石墓：土壇内に遺体を置き、土壇を埋め、地表面を数個～数十個の石で覆ったもの

配石墓：土壇内に遺体を置き、遺体の下あるいは周りに石を配し、土壇を埋めるもの

人骨の1側から3側に石が一行に並ぶもの（列石墓）、人骨の周囲に石を廻らすもの（石囲墓）も、その出土状況から配石墓に近い墓と判断される。これらについては、桑原論文（2003）で「馬蹄状配石タイプ」、「箱式石槨タイプ」、山野論文（2012）の「周囲配石タイプ」、「石棺タイプ」が提示されているが、ここでは石と人骨の上下関係を優先して分け、単純化をはかった。

(3) 表2は、石堂和博氏との意見交換に基づいて作成したものである。

(4) 桑原久男は墓の構造に注目して、これらを以下のように4タイプに分類した（桑原2003）。

- ・覆石タイプ：墓坑の中に遺体を埋葬した後に、墓坑上面を覆うようにして、石やサンゴ礫を積み重ねて地上標識とした型式。

- ・馬蹄状配石タイプ：横倒しにした板状のサンゴ礫を、墓坑を取り囲むようにして並べる型式。

- ・箱式石槨タイプ：箱式石槨のように、板状のサンゴ礫を墓坑の周囲に立てて配置した型式。

- ・土坑タイプ：覆石や配石、石槨などを持たない単純な土坑墓の型式。

桑原はこれらについて、墓の切り合い、伴う貝符の型式の新旧、層の堆積状況を根拠に、覆石タイプ⇒馬蹄状配石タイプ⇒箱式石槨タイプと変遷すること、土坑タイプはもっとも数が多く各時期を通して存在したとみられること、箱式石槨タイプは広田上層に継承されることを指摘した。

山野ケン陽次郎は桑原による墓の変遷案を継承し、下層期の墓について、北側墓群をいれたより詳細なタイプ分類（土壇タイプ、覆石タイプ、単純配石タイプ、周囲配石タイプ、石棺タイプ）を行い、鳥ノ峯遺跡における墓の先後関係と自身の貝製品研究成果を踏まえて新たな変遷案を提示した（山野2012）。すなわち、単純配石タイプ⇒単純配石タイプ・覆石タイプ⇒単純配石・周囲配石タイプ⇒単純配石・石棺タイプの変遷である。山野はこれに貝製品を併せて全体を7群に整理し、広田遺跡の墓が第1群から第7群へと1系列的に変遷したとする案を

提示した。

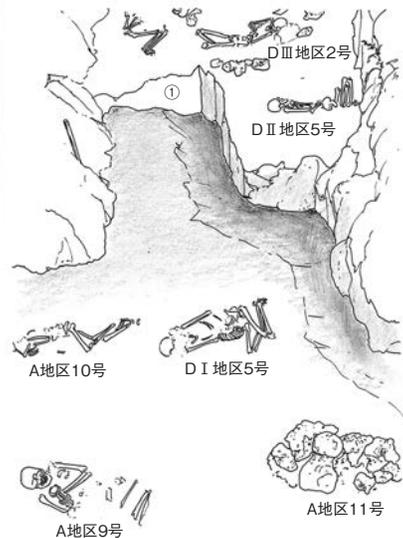
石堂和博は、墓に伴う土器を基準に、山野が示した墓の変遷案に鳥ノ峯遺跡を含めて、覆石墓（覆石タイプ）から周囲配石タイプ、さらに石棺タイプに変遷する図式を、墓のタイプをより単純化して示した（石堂2012）。

- (5) 現在認められる最古の二次葬は、C地区10号人骨（南区4号墓に対応）である。地山の赤土に掘り込まれた墓坑に埋葬された遺体が白骨化した後、これらと同じ地点に改めて掘った土坑内に納めて焼いたものである。オオツタノハ腕輪13個等を伴い、木下分類（後出）Ⅳ類に対応する。
- (6) 具体的には、C地区7号人骨とC地区6号人骨、C地区14号人骨とC地区13号人骨、A地区11号人骨とA地区8号人骨、DⅠ地区5号人骨とDⅠ地区3号人骨・DⅠ地区4a号人骨、DⅡ地区4号人骨とDⅡ地区3号直上人骨、DⅢ地区2号人骨とDⅢ地区2号直上人骨とDⅢ地区1号人骨、C地区9号（南区2号）人骨と南区1号人骨。
- (7) 筆者は以前同様な分類で貝符グループを【貝符・小玉】装身型、腕輪グループを【貝輪・大貝玉】装身型と呼び分けた（木下2003、2004）。今回、これに貝符も貝輪ももたない人々を加え、議論を単純にするために玉類の条件を除外した。
- (8) A地区10号人骨を覆石タイプとしているのは、人骨の上のレベルにサンゴ礫があることによる。
- (9) 表内の表示を読み取りやすくするために、本文中で示した鳥ノ峯遺跡の「東のグループ」を「東：覆石グループ」に、「西の覆石墓グループ」を「西：覆石墓グループ」に、「西の混在グループ」を「西：混在グループ」としている。

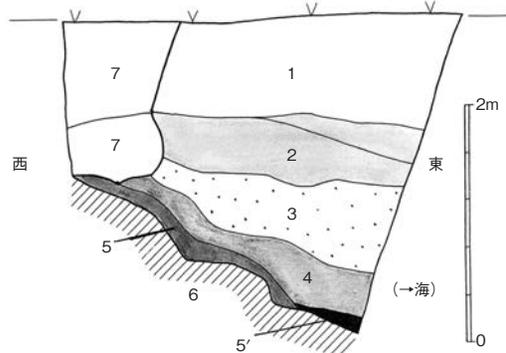
(10) Ceは小型で無文のものとして分けられたもので、編年的位置づけについてはとくに触れていない。ただCeはDⅠ地区5号人骨に伴うCb、Ccとともに出土しているため、これらと近い時期に存在した可能性が高い。器形からみてもCeはCa、Cb、Ccと近い時期であると判断できる。またCc類について中村氏は「大隅諸島全体でみてもCc類は少なく、1条刻み目突帯を在出土器の系譜から引くことは困難であるため、南九州の後期以降の甕や壺にみられる1条刻み目突帯の属性を取り入れたということも推定しておきたい」としている（中



D地区を西南から撮影した下層人骨出土状況



左写真をトレースした図



D地区東北壁面土層断面図
(第90図p.160)

- 1 細白砂層
- 2 黒みを帯びた砂層
- 3 細白砂層（下層の一次埋葬層）
- 4 やや赤みを帯びた砂層
- 5 赤みの強い砂層
- 5' 赤土混じりの黒みを帯びた砂層
- 6 赤土
- 7 トレンチ埋土

図22 D地区の堆積と墓の関係（桑原編2003より作成）

村2003：p.306)。

- (11) 報告書(桑原編2003)に掲載された調査等時の写真(PLATE57、図22上左写真)では、DⅢ区2号人骨がDⅠ地区5号人骨より明らかに高いレベルで検出された状況が示されているため、読者は当然DⅠ地区5号人骨が古くDⅢ地区2号人骨が新しいとする理解に導かれる。また1～3次調査では墓坑の掘り込み面が確認されず墓坑底が砂層下にある赤土層に達するものを古手のものと解してきたため、墓坑底が赤土に達するDⅠ地区5号人骨がより古く、達しないDⅢ地区2号人骨はより新しくみられてきた。一方、これらの墓が検出されたD地区では赤土層が海側に向かって階段状に急傾斜で低くなっている(図22下図)。報告書の層位図(桑原編2003：第90図)によると赤土面は西から東に水平距離2mで1.2m下がっている。DⅢ地区2号墓はDⅠ地区5号墓より1.2m海側にあるので単純に計算すると赤土面はDⅠ地区5号墓より約70cm低くなる。しかし砂層の堆積は必ずしも赤土の傾斜に水平ではないため、この場合低いところに分厚く堆積する。下層埋葬が検出された「細白砂層」は、層位図では東側で厚さ約70cm、西側で20cmである。その結果「細白砂層」の上面は水平に近くなり、ここから同じ深さに墓坑を掘ると、例えば30cmの墓坑を掘れば赤土レベルの高い西側では墓坑底は赤土に達するが、東側では砂層内に留まる。写真はこの状況を示すとみてよい。このようにみると、DⅢ地区2号墓とDⅠ地区5号墓がほぼ同時期であること、あるいは前者がやや先行するという伴出土器による関係は理解しやすくなる。なお、図22下の土層断面図は、同図上右の①に続く壁面に対応するとみられる。
- (12) 報告書では「イモガイ」と表記されるが、正しい分類名はマガキガイである。
- (13) 具志原貝塚西区Ⅶ層でマガキガイの集積が2基検出されている。報告書の図面では8号集積で37個、9号集積で15個が確認できる(安里ほか1985)。
- (14) 木綿原遺跡では7基の石棺墓のうち5基の蓋石上に石灰岩礫や板状サンゴによる石積みが確認されている。これらは石棺と一体となった積石であり、覆石墓とは区別される。沖縄で本例以外に類似例は知られていない。石棺上に石積みや配石を行う状況は、梶栗浜遺跡や中ノ浜遺跡(山口県)等、響灘沿岸地域との関係が考えられる。
- (15) 表6の切り合い関係の事例からC地区9号(南区2号)人骨と南区1号人骨を除いた数。
- (16) オオツタノハの全てが人骨の時期に対応するものではなく、貝塚時代前期に所属するものも含まれるが、この一帯が先史時代以来オオツタノハの産地であったことは確かである。
- (17) 中川正二郎氏(鹿児島県地学会)ならびに武内浩一氏の教示による。
- (18) 貝符は、サウチ遺跡「南地区9層該当の層より、里山勇広によって採取された」(河口ほか1978：p.56)。磨製石鏃は「南地区9層該当の層より、中山清美によって採取されたものである。」(同：p.52)。採集品であるが、出土層位は明らかである。
- (19) 現生オオツタノハは屋久島から吐噶喇列島全域に大型のものが多い(黒住1994)。石堂和博氏、小脇有希乃氏、忍澤成視氏による調査で、現在種子島においても大型品が採取できることが確認されている。遺跡では吐噶喇列島の宝島大池遺跡、奄美大島の長浜金久Ⅱ遺跡で大量に出土している。先史時代には奄美大島北部も大型品の産地であったとみてよいだろう。
- (20) 橋口氏は、「研ぎ直しを受けたもの、あるいは本来は人体に刺突されていたもの、もしくは刺突されたものを抜き取る際の折損ではないかと推測されるもの等があり」、「かなり頻繁に戦われていたことが考えられる」としている(橋口1996：p.60)。
- (21) 「大隅諸島が新たな貝交易の仲介的窓口として機能しただけでなく、その地理的位置から西日本の首長層の装身具情報を得、その材を貝に転化し膨大な量を消費することで、南西諸島のどの地域とも異なった壮麗な貝製装身具文化を生み出すことで顕在化している。」(新里2009：pp.162～163)。氏は同時に、南側墓群において著しく厚葬であるDⅢ地区2号人骨を囲むように墓が配置されていること、厚葬の小児(DⅡ地区4号人骨)が存在することに注目し、この時期の広田人社会が特権の人々を生むほどに複雑化していたこと、ならびにこの変化が本土

第Ⅱ部

社会と同様な傾向であることを指摘した。

- (22) 山野氏が注目したのは、広田遺跡にみられる小型装身具の多くが縄文時代並行期から奄美・沖縄地域に存在していた点である。広田人の装身具の特徴である竜佩形貝製垂飾（山野氏の用語では竜佩状貝製品）については、奄美・沖縄の獣牙状貝製品からの形態変遷を型式学的に示して、その淵源が奄美・沖縄にあることを次のようにのべた。「縄文時代並行期から存在する奄美・沖縄諸島の獣牙状貝製品が広田遺跡に伝播し、着装方法の多様化と装飾化によって竜佩状貝製品が広田遺跡内で登場したと結論づけた。」（山野2012：p.492）。

文献

- 安里嗣淳・岸本義彦・盛本勲 1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集、沖縄県教育委員会。
- 石堂和博 2005「古墳時代並行期～奈良時代における九州本土と大隅諸島の交流～古墳時代後期行期から奈良時代における大隅諸島の様相を中心に～」『平成27年度第6回奄美考古学会（種子島大会）研究発表資料』、pp.1～28。
- 石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎 2007『廣田遺跡－平成16年度～平成18年度町内遺跡発掘調査事業』南種子町埋蔵文化財調査報告書（15）、南種子町教育委員会。
- 石堂和博・松原信行編 2011『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財調査報告書（17）、南種子町教育委員会。
- 石堂和博 2012「種子島における葬制」『沖縄考古学 2012年度研究発表会 先史時代の墓と葬制』、pp.15～24、沖縄考古学会。
- 石堂和博 2019「古墳時代並行期から8世紀における大隅諸島と九州本土および奄美、大隅諸島との交流」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論文集』、pp.99～110、奄美考古学会。
- 金関丈夫 1966「種子島広田遺跡の文化」『Fukuoka Unesco』第3号、福岡ユネスコ協会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008「発掘調査紹介（13）良好な保存状態の種子島弥生人」『埋文だより』第15号、pp.3～4、鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 河口貞徳・出口浩・本田道輝 1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』第12号、pp.1～159、鹿児島県考古学会。
- 川口雅之 2019「大隅諸島上能野式土器の年代及び兼久式土器成立の背景について」『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論文集』、pp.83～98、奄美考古学会。
- 木下尚子 1992「辟邪の貝一しゃこがい考」『比較民俗研究第』6号、pp.5～39、筑波大学比較民俗研究会。
- 木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』、pp.329～366、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館。
- 木下尚子 2004「種子島の貝製品・貝文化」『考古学資料大観12 貝塚後期文化』、pp.242～249、小学館。
- 木下尚子 2018「オオツタノハ腕輪の再登場－弥生時代終末期の新しい祭祀－」『先史学・考古学論究Ⅶ』、pp.85～101、龍田考古会
- 木下尚子 2019「小湊フワガネク遺跡と広田遺跡－奄美大島の鉄器導入期の考察－」、『中山清美と奄美学－中山清美氏追悼論文集』、奄美考古学会、pp.149～167。
- 黒住耐二 1994「オオツタノハの供給地」『南島考古』No.14、pp.57～64、沖縄考古学会。
- 國分直一 1992「種子島広田遺跡上層の貝符の彫文をめぐる問題－新田栄治教授の批判に答えて－」『古代文化』vo.44-4、pp.189～207、古代学協会
- 國分直一 1993「種子島広田遺跡出土貝符の『山』字彫刻をめぐる問題－中園聡氏の批判に答えて－」『古代文化』vo.45-12、pp.1～13、古代学協会
- 久保田昭二・辻昭啓 2009『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第144集。
- 桑原久男編 2003『種子島広田遺跡』、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館。
- 桑原久男 2003「広田遺跡埋葬遺構の考古学的所見」『種子島広田遺跡』、pp.273～280、広田遺跡学術調査研究会・鹿

児島県歴史資料センター黎明館。

白木原和美編 1980『馬毛島埋葬址一西之表市椎ノ木遺跡』研究室活動報告6、熊本大学文学部考古学研究室

新里貴之 2009「貝塚時代後期文化と弥生文化」『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』、pp.148～164、同成社。

新里貴之 2005「南西諸島の葬墓制（Ⅰ）大隅諸島」『地域政策科学研究』第2号、pp.53～86、鹿児島大学人文社会科学
研究科地域政策科学専攻。

新里貴之 2010「南西諸島における先史時代の葬墓制（Ⅱ）トカラ列島・奄美諸島」『地域政策科学研究』第7号、
pp.139～158、鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻。

新里貴之 2011a「南西諸島における先史時代の葬墓制（Ⅲ）沖縄諸島」『地域政策科学研究』第8号、pp.101～127、
鹿児島大学人文社会科学研究科地域政策科学専攻。

新里貴之 2011b「琉球列島における埋葬遺跡の文化的景観」『先史・原史時代の琉球列島 ヒトと景観』、pp.243～266、
六一書房

新里貴之 2012「琉球列島先史時代の葬墓制」『沖縄考古学 2012年度研究発表会 先史時代の墓と葬制』、pp.3～14、
沖縄考古学会。

新里貴之 2014「南西諸島の先史時代葬墓制の展開と石棺導入の背景」『徳之島トマチン遺跡の研究』、文部科学省科学
研究費（若手A）「島嶼地域における先史時代墓制の系譜」成果報告書、pp.205～224、鹿児島大学。

新里貴之 2012b「貝塚時代後期文化と古墳文化」『古墳時代の考古学7 内外の交流と時代の潮流』、pp.146～158、同
成社。

高梨修編 2003『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群 遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書4、名瀬市
教育委員会

徳田有希乃 2003「地中レーダー調査の解析ほか」『廣田遺跡』、南種子町埋蔵文化財調査報告書（15）、pp.120～125、
南種子町教育委員会

中園聡 1992「これは山の字ではない—考古学的解釈の性質に関して—」『人類史研究』第8号、pp.17～36、人類史研
究会

中橋孝博・永井昌文 1980「椎ノ木遺跡出土人骨について」『馬毛島埋葬址一西之表市椎ノ木遺跡』研究室活動報告6、
熊本大学文学部考古学研究室

中村直子 2004「貝符に類似する土器文様の検討」『東南アジア考古学会報告 島嶼地域様相』、pp.19～30、東南アジ
ア考古学会。

中村直子 2015「成川式の時代」『成川式ってなんだ？—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—』、pp.25～30、鹿
児島大学総合研究博物館。

中村直子 2015「祭祀と成川式土器」『成川式ってなんだ？—鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器—』、pp.59～64、
鹿児島大学総合研究博物館。

中橋孝博・永井昌文 1989「弥生人 形質」『弥生文化の研究1』、pp.23～51、雄山閣。

中橋孝博 1989「弥生人 男女差」『弥生文化の研究1』、pp.52～64、雄山閣。

西住欣一郎編 1981『宇宿港遺跡』研究室活動報告10、熊本大学文学部考古学研究室

新田栄治 1991「貝符紋様の型式学」『交流の考古学』、pp.331～345、肥後考古学会。

橋口達也 1996『種子島島ノ峯遺跡』中種子町埋蔵文化財調査報告書（2）、中種子町教育委員会

松下孝幸・内藤芳篤 1989「弥生人 地域差」『弥生文化の研究1』、pp.65～74、雄山閣。

弥栄久志編 1985『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（32）、鹿児島県教育委員会

盛園尚孝 1961「種子島中種子町に発見された覆石墓について」『種子島民俗』第13号、鹿児島県立中種子高等学校地
歴部、pp.25～30。

第Ⅱ部

- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『種子島広田遺跡』、pp.311～328、広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館。
- 山野ケン陽次郎 2010「竜佩状貝製品再考」『先史学・考古学論究V』、pp. 861～880
- 山野ケン陽次郎 2011「先史琉球列島におけるノシガイ製玉類の研究」『奄美考古』第6号、pp.49～58、奄美考古学会。
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』第63巻第4号、pp6～26、古代学協会。
- 山野ケン陽次郎 2013「先史琉球列島におけるマクラガイ科製玉類の研究」『奄美考古』第7号、pp.1～17、奄美考古学会。
- 山野ケン陽次郎 2014a「先史琉球列島における円盤状貝製品の研究」『Archaeology from the South II 新田栄治先生退職記念論文集』、pp. 265～278
- 山野ケン陽次郎 2014b「先史琉球列島における貝製品の変化と画期－貝製装飾品を中心に－」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集、pp.277～291
- 米田穰 2007「広田遺跡から出土した人骨の同位体分析」『廣田遺跡』、南種子町埋蔵文化財調査報告書（15）、pp.192～198。南種子町教育委員会。

第Ⅱ部

時期 年代	通称名	地形	地点・遺構	埋蔵状況		骨製品	副製品	器具	備考	文献
				一次群	二次群					
5							土器 (底部)	1		
6	前4期 摩文仁/シタ原	岩陰	集骨1				イモイ珠 (皿型) (直径6~9mm)	15		[原器の取柄は認められない。摩文仁/シタ原縄文後期 人集団には被服器具はなかったと思われる。] (2011, p.37) 松下山幸・湖越清ほか2011「沖繩県糸満市摩文仁/シタ原遺跡発 掘調査報告 (2)」『土佐学芸雑誌』人研学芸部 第6号
							イモイ珠 (皿型) (直径6~8mm)	5	集骨3 中層人骨 : 2460~2140calBP (2σ) 2009. p.30. (資料1 : 3820±30 calBP) 下層人骨 : 資料2 : 3720±40 calBP	
							イモイ珠 (皿型) (直径5mm)	1	下層人骨 : 資料3 : 3610±40 calBP	
							タカガキ骨面除去 (水平研磨? 2)	8	下層人骨 : 資料4 : 3940±40 calBP	
			集骨2			ツリガイ珠	2			
						腕輪 (ウミギ)	1			
						イモイ珠 (皿型) (直径5~6mm)	3		大山式等土器片2	
						イモイ珠 (皿型) (直径5~6mm)	1		水カガイ1 : 報告書 (2) p.23. 24写真及び説明。集骨 3に伴う。	
						タカガキ骨面除去 (水平研磨1)	1			
						ツリガイ珠	1			
						ノシガイ珠 (研磨穿孔)	2			
						タケノガイ骨孔製品	1			
						サメ歯形貝製品	1			
						腕輪破片 (オオツタノ)	2			
						腕輪破片 (オオツタノ)	2			
						骨孔型貝製品 (イモイ珠、ツリガイ、 ノシガイ)	3			
						骨形板状遺物	1			
						ツリガイ骨製品	1			
						イモイ珠 (皿型) (直径8~9mm)	3			
						穿孔リウカワガイ (イモイ珠)	1			
						研磨穿孔品 (イモイ珠)	1			
						骨刃 (シレナシ)	1			
						穿孔オオベッコウガイ	1			
						穿孔リウカワガイ	4			
						リウカワガイ	4			
						スズガイ	5			
						リウカワガイ	2			
						穿孔ウミギ	1			
						穿孔オオベッコウガイ	1			
7	前4期後 中	安座間原第一 砂丘	52号人骨 (第6 号列石籠)	成人男性						重野湾市教育委員会1990-1991「シタ原」(図説編) 木下尚子 1996「第3章 貝と埋蔵器類」『南島文化の考古学』法政 大学出版局
			42号人骨 (第7 号列石籠)	成人女性						

番号	時期 員塚時代	遺跡名	地形	地点・層・遺構	埋葬状況		副葬品	葬具	備考	文献	
					一次葬	二次葬					
26	後1期 初頭	木郷原	砂丘	第2号箱式石棺墓	1	イモガイ(1類)	サゴ砂利破片	5号人骨(成人男性)：骨は完全に近い。仰臥伸張葬	4号人骨(成人女性)：遺骨の一部は下顎の一部のみ、5号人骨の足にある		
							イモガイ	有孔オボコゴガイ(自然穿孔)、ウミギク破片(自然形状)			
							イモガイ	サゴ砂利破片			
							イモガイ	有孔オボコゴガイ6(巨、関節上等に配置)、自然半数のイモガイ1			
							イモガイ	成人男性1(8号人骨)、仰臥伸張葬			
27	後1期 後半	中川原貝塚	砂丘	1号石棺墓	小児(12歳前後)	イモガイ(1類)	イモガイ	成人男性(9号人骨)、仰臥伸張葬	成人女性(12号人骨)、石棺は一部残存。仰臥葬	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。
							イモガイ	成人女性(12号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
28	後1期 後半	具志川グスク下	岩陰	血層	乾燥層：33 火葬層：4 焼層：10	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
29	後2期	安原原第2	砂丘	1号(土坑墓)	小児	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
30	後2期	藤原貝塚B	砂丘	土坑墓	1?	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
31	後2期	具志原貝塚1985	砂丘	南区1トノチ5層：土坑墓か	1?	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
32	後2期 後半	西原原	砂丘	D地点	8	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
33	後2期 後半	大当原貝塚	岩陰	A地点	2+0	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
34	後2期 末	摩文仁ハタ原	岩陰	ST-1(石田層最上層人骨)	1	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
35	後2期 末	大室原貝塚	砂丘	血層1号人骨	成人男性	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
36	後2期 末	八ツ刈原遺跡	洞穴	最上層人骨(ST-1)	幼児	イモガイ(1類)	イモガイ	成人女性(12号人骨)	成人女性(1号人骨)、仰臥伸張、ゴボウラシ人骨上部で出土。仰臥伸張葬。	成人女性(2号人骨)：足の上にあたる位置に有孔サゴガイ10個ほどある。	成人女性(1号人骨)
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			
							イモガイ	成人女性(1号人骨)			

番号	時期 貝塚時代	遺跡名	地形	階・遺構	埋葬状況		着装品	副葬品	葬具	備考	文献
					一次葬	二次葬					
47		豊念原姉墓	岩陰	崖葬墓	3+ (抜歯 人骨数)	不明		ウミワラキ穿孔製品1 12、股杖製品8、頭杖製品15、骨杖タケノコ ¹ 製品3、板杖骨イモガキ製品2、 ウミワラキ穿孔製品1			三宅宗悦1943「本國國境之島嶼多量出土品及出土人骨の散在に就て」『考古学雑誌』33-10 新里島之2010「南西諸島における史前時代の墓制(Ⅱ)-トカラ- 奄美諸島-」『地域政策科学研究』第7号
48		宇留目塚	砂丘	土坑墓	壮年女性 新生児	ガラス丸玉2、ガラス小玉40、骨 製玉4個(埋土に付まじり、鉛 ハロウムガラス(肥後県保 2003))。			人骨上に4個の環が配される。 2枚貝、巻貝1 巻貝1配置		新里島之2010「南西諸島における史前時代の墓制(Ⅱ)-トカラ- 奄美諸島-」『地域政策科学研究』第7号 河口尚徳・出口浩・本田道博1979「宇留目塚」『鹿児島考古』第13 号、pp.1~220、鹿児島県考古学会 女性の前脚の間に埋葬される。 [第4期形成の途中に構築された] (p.49)。「磨礫性突 頭、風習的特徴なし。」「種子嶋(田原生人骨の形質に 類似点が高い。)(216)」。仰臥葬、両腕を強く曲げる。 土器の両脚の間に埋葬される。
49	後1期	宇留目塚	砂丘	土坑墓 土坑墓	成年男性 成年女性						白木原和孝・甲元真之助が1981「宇留目塚」研究活動報告 10、熊本大学文学部考古学研究室
50		長浜金久第Ⅱ	砂丘	1トレンチ 土坑墓	1 女性?			研削穿孔されたタケノコ製品(即製品で は多く部品の埋土に所蔵する可能性あり)	1 シヤコガイ1		初栄久志・青島和憲ほか1985「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化 財調査報告書(32)、鹿児島県教育委員会 高梨修編2003「奄美大島名瀬市小塚アワガネク遺跡、遺跡範囲確 認発掘調査報告書」名瀬市文化財部報告4、名瀬市教育委員会
51	後1期後 半	小塚アワガネク	砂丘	調査区17墓場							高梨修編2003「奄美大島名瀬市小塚アワガネク遺跡、遺跡範囲確 認発掘調査報告書」名瀬市文化財部報告4、名瀬市教育委員会
52	近世	面構第一貝塚	岩陰	崖下Dトレンチ 崖下AトレンチB 層	成人男性 成人男性						伊山町教育委員会2016「面構貝塚発掘報告書」伊山町埋蔵文化 財調査報告書(16)
53	近現代								石灰岩が埋つ		